

5.6cm。

5. F・F-3 トレンチ (第177図)

C・C-10・1・2・13 トレンチと比べると出土量は少なく、また、複数土器群の集合は見られなかった。その中でもF-3 トレンチで多く出土した。

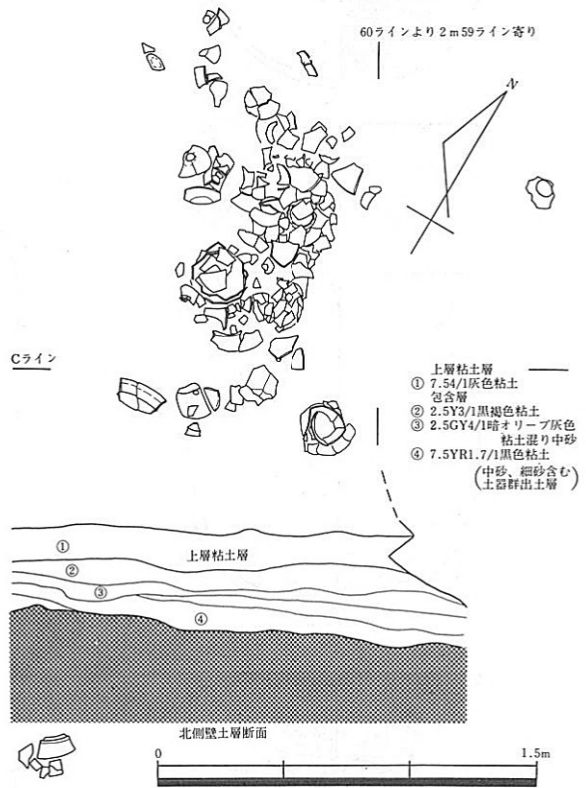
広口壺 (32) A₂類である。口縁部の約5分の1の破片で体部を欠く。口縁端部付近ではヨコナデ調整によって僅かに外反し、端部は丸くおさめる。外面ヘラナデ調整が施され、口縁端部直下には指頭圧痕が認められる。灰白色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径21.2cm、残存高8.4cm。

甕 (33) B₂類である。口縁部は「く」の字に外傾して開き、肩部はやや下がる。口縁端部は丸くおさめられる。口縁部と体部外面は細かなハケメの後ナデ調整が施され、体部内面ヘラケズリは頸部に及ぶ。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.2cm、残存高6.6cm。

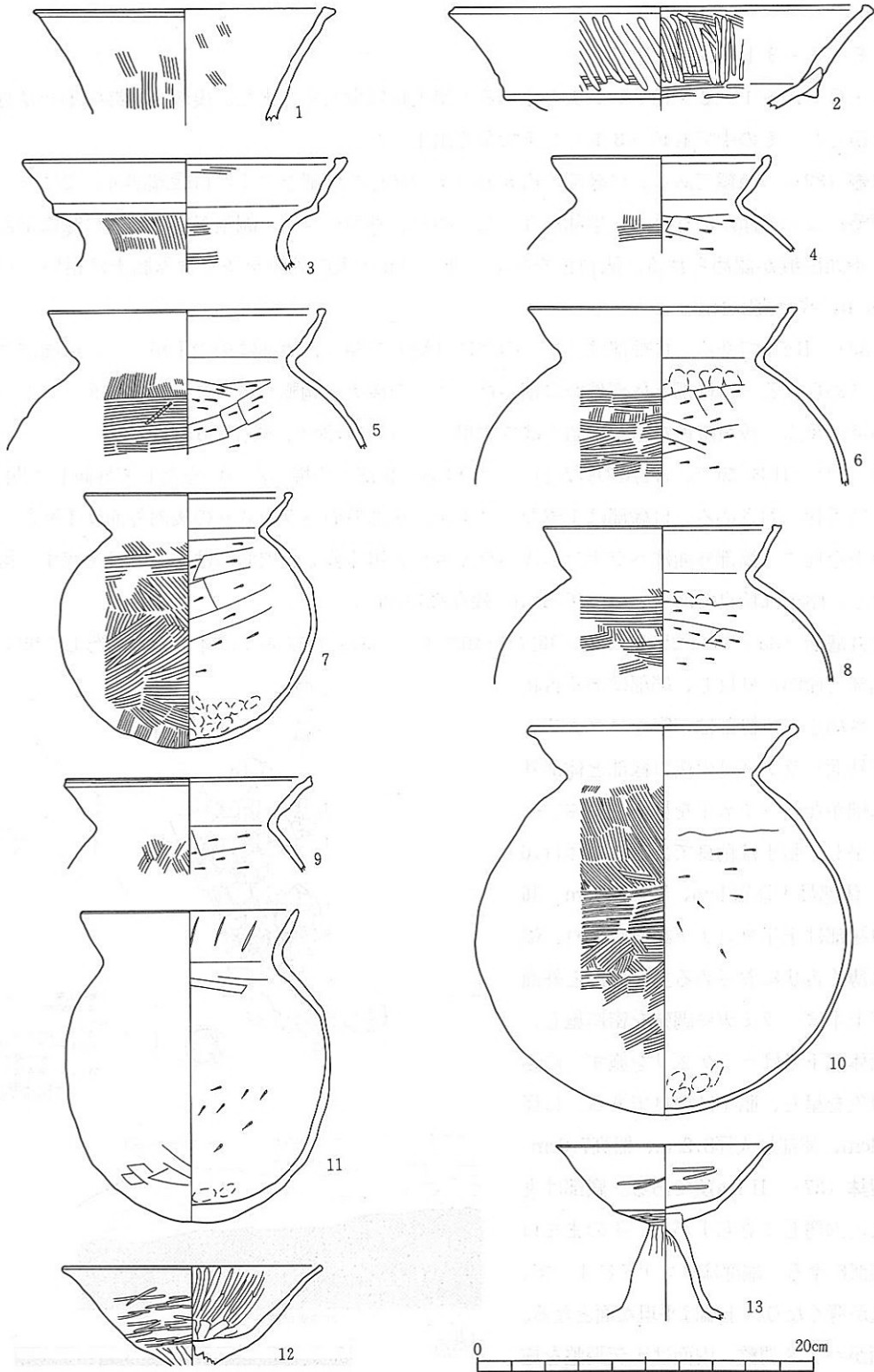
高坏 (34) II B₁類で、A₂類の脚が付く。口縁部は底部との境に浅い段をなして外傾して開き、端部は舌状におさめる。口縁部は丁寧なヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後内外面に丁寧なヘラミガキを施す。筒部外面はヘラナデの後ヘラミガキを粗く施し、内面にはしぼり目を残す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径16.3cm、残存高14.3cm。

小型丸底壺 (35・36) 35はB₁類、36はA₁類である。35の口縁部は、外上方へ内弯して開いた後端部で僅かに外反し、端部は薄く舌状におさめる。口縁部は丁寧なヨコナデ、体部外面ヘラケズリの後口縁部と体部外面に細かなヘラミガキを施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径11.6cm、体部最大径7.4cm、器高8.4cm。36の口縁部は上半ヨコナデ調整により、端部は薄く舌状におさめる。口縁部と外面体部上半はヘラミガキ調整を密に施し、外面体部下半はヘラケズリを施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.4cm、体部最大径8.2cm、器高7.6cm。

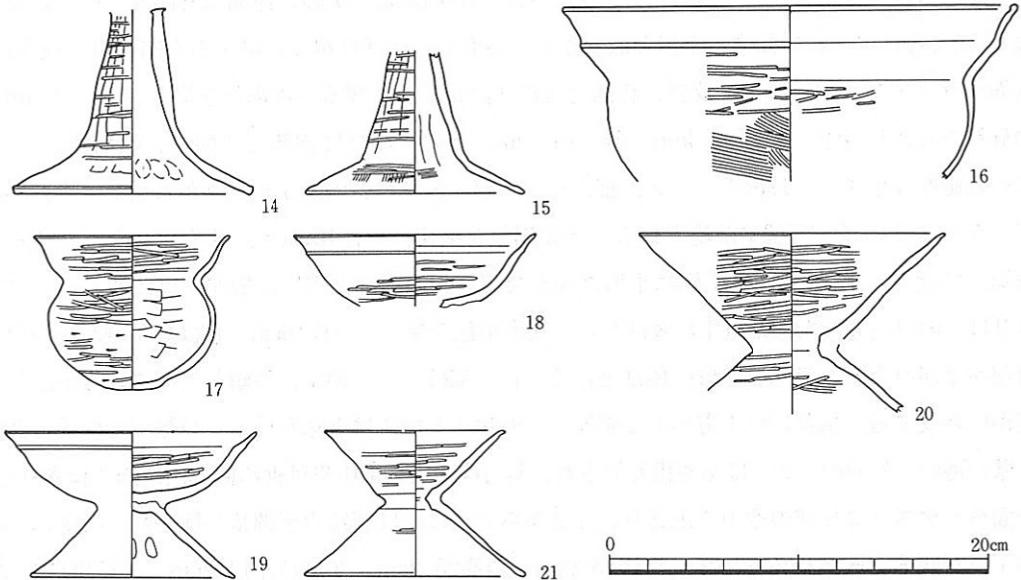
小型鉢 (37) II B₂類である。底部は丸底で、内弯して立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。端部はヨコナデによって、器壁が薄くなり、上端は平坦な面となる。外面がハケメ調整、内面はナデ調整を施す。



第178図 S Q 4001出土状況図



第179图 S Q4001出土遺物実測図(1)



第180図 S Q 4001出土遺物実測図(2)

(3) 包含層中出土遺物

包含層中から出土する遺物の量は、層上面程多くはない。また、細片で出土する 경우가多く、完形に復元されるものも少なかった。その中において、C-10・1・4トレンチでは、複数の土器が一括で出土した。まず、これら土器群から説明する事とする。

1. S Q 4001 (第178図、図版21・125~127)

C-1トレンチ、S D 4002の西側約0.6m目の地点で出土した。出土土器は比較的遺存状態が良好で、広口壺B類1点、二重口縁壺C類1点、D類1点、甕B類1点、C類6点、D類1点、高坏Ⅲ類2点、脚2点、大型鉢I B₁類1点、器台1点、小型丸底壺類1点、小型有段鉢B類2点、小型器台B類1点の計21点が図化できた。これらの土器は、11×18mの範囲に、若干の炭を伴って出土した。

二重口縁壺(2・3) 2はC類、3はD類である。2は、土器群よりやや離れた地点で、口縁部のみが出土した。外面に粘土を貼りつけ三角形の突帯をなし、端部は外傾する面をなし、上方へ小さく肥厚する。内面は丁寧なヘラミガキを縦方向に施し、内面にはハケメが僅かに認められる。淡褐色を呈し、胎土は精良である。口径24.6cm、残存高6.3cm。3の口縁端部は内方へ丸く肥厚する。内外面ハケメの後丁寧なナデ調整を施す。淡灰褐色を呈す。口径19.2cm、残存高6.4cm。

広口壺(1) A₁類である。口縁部のみ約5分の4の破片で、体部の出土は見られなかった。口縁端部は外方へ肥厚し、上端は僅かに外傾する。内外面ハケメの後ヨコナデ調整を施す。黄褐色を呈し、3mm大の砂粒を多く含む。口径18cm、残存高6.6cm。

甕(4~11) 9はB₁類、11はD₂類、4・7はCⅣ類、5・6・10はCⅡ類、8はCⅢ類であ

る。4の口縁端部はa₁で、上端は丸くおさめる。口径13cm。7の口縁部は外傾して開き、端部はa₁で上端は僅かに内傾する平坦な面をなす。外面のハケメは粗く、縦・斜方向に粗く施され、内面ヘラケズリは頸部直下に及び、底部内面には指頭圧痕が残る。赤褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を僅かに含む。口径12.4cm、器高15.2cm。5の口縁部は内弯して開き、端部はa₁で内方への肥厚は小さい。外面のハケメは細かく、丁寧に施され、内面頸部直下から肩部上半にかけてヘラケズリの後ナデ調整が施される。淡赤褐色を呈す。口径16.5cm。6の口縁部はやや長く外傾して開き、端部はa₂で上端は平坦な面をなす。内面肩部上端には指頭圧痕が残り、ヘラケズリはこの付近までで頸部直下に及ばない。淡赤褐色を呈す。口径16cm。10はC II₁類であるが、肩部が下がり下膨れ気味の球形の体部となる。口縁部は「く」の字に外傾して開き、端部近くで僅かに外反する。端部は内上方へ丸く肥厚し、外傾する面には丸味を持つ。口縁部との接合部は器壁が薄い。外面のハケメはやや粗く施され、斜方向の後体部中央付近に横方向に強く施される。内面ヘラケズリは肩部の途中で止まり、頸部から肩部にかけてはナデ調整が施され、底部には指頭圧痕が残る。灰黄褐色を呈す。口径15.8cm、器高23.3cm。8は口径14.2cmで、C III₁類と思われる。口縁端部はa₂で、上端は僅かに窪む。9の口縁部は長く外傾して開き、口縁部の屈曲度は鋭い。内面ヘラケズリは頸部に及ぶが、頸部はナデ調整によって丸味を持つ。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径14.5cm。11は、卵形の体部とゆるく外傾して開く口縁部とからなり、端部は舌状におさめる。底部は器壁が厚く、内面には指頭圧痕を残す。外面は底部にヘラケズリ、体部にヘラナデを施すが、体部にはかすかに指頭圧痕が認められる。黄灰褐色を呈す。口径14.1cm、器高18.6cm。

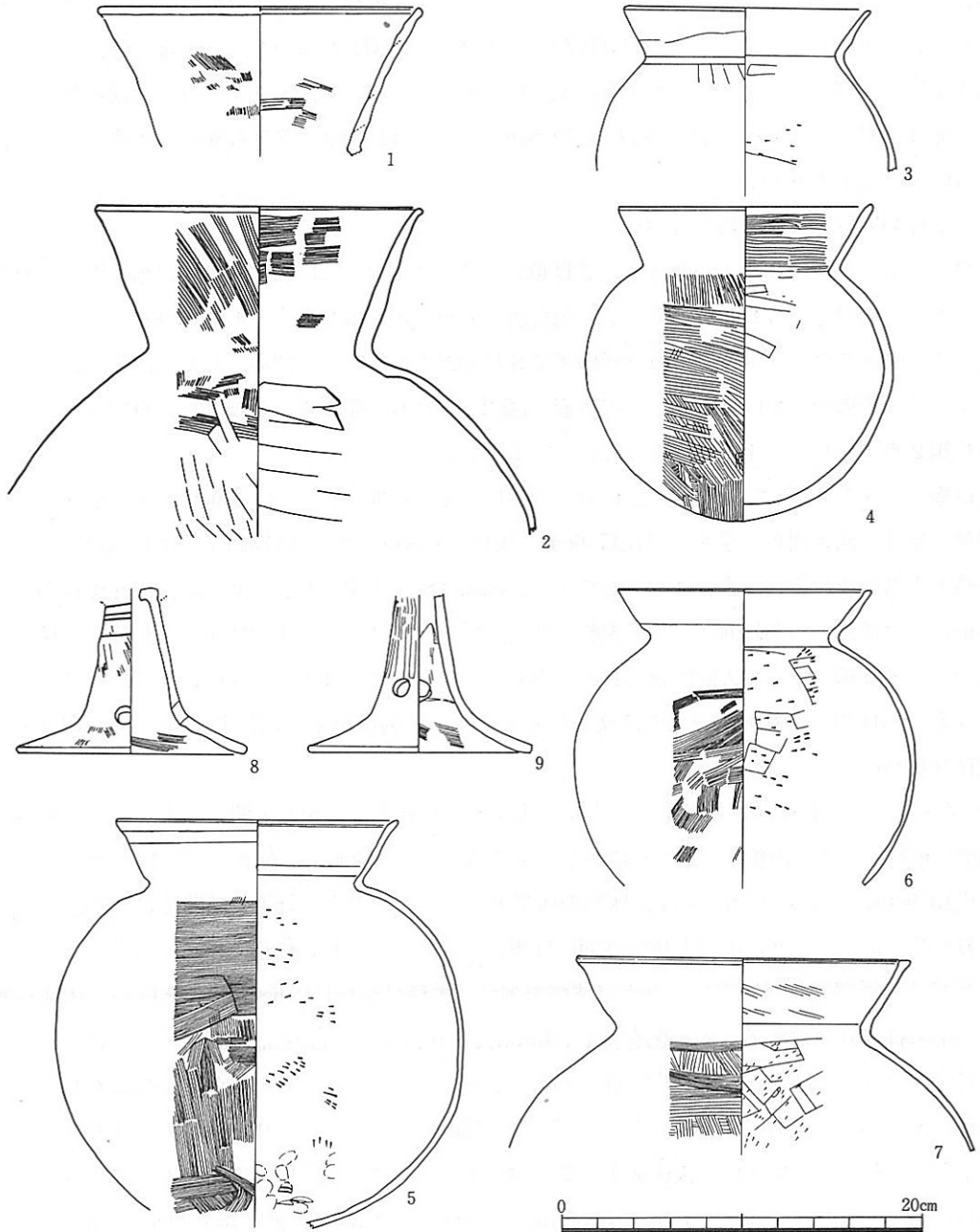
高坏 (12~15) 12はII B₂類で、脚部を欠損する。口縁部は内外面ヘラミガキ調整。底部は内外面ヘラナデ調整を施し、口縁部外面のヘラミガキは細く、強く施される。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.3cm、残存高5.9cm。13はIII B₁類で、B₃類の脚部が付く。坏部外面の稜は、ヘラミガキ調整によって鋭さを欠き、口縁部は、端部付近で僅かに外傾し、薄く舌状におさめる。口縁部は、器壁の磨滅によって詳細な調整は明らかでないが、内外面に細かなヘラミガキが認められる。筒部は、外面ヘラケズリの後内外面ナデが施される。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径12.8cm、残存高10.1cm。15の脚は、茶褐色を呈し、胎土が精良で、外面にはヘラミガキが施され、裾部外面には細かなハケメが残る。裾部径11.5cm、残存高7.5cm。14は、15に比べて胎土はやや粗く、1mm大の砂粒を多く含む。内面裾部との境には指頭圧痕が認められる。淡赤褐色を呈する。裾部計12.5cm、残存高9.8cm。

鉢 (16) 口径23.9cm、残存高9.2cmの大型の鉢I B₁類である。口縁部は長く屈曲して開き、端部は上方へ丸く肥厚しておさめる。内外面の段には丸味を持つ。口縁部と体部上半の内外面には丁寧なヘラミガキ調整、体部外面下半には細かなハケメ調整外面施される。赤褐色を呈し、胎土中には2mm大の砂粒が多く含まれる。口径23.9cm、残存高9.2cm。

小型丸底壺 (17) D類である。口縁部は内弯した後外反して開き、端部は薄く舌状におさめる。

体部外面下半をヘラケズリの後、口縁部と外面に細かなヘラミガキを施す。口縁部内面と体部外面下半のヘラミガキはやや粗く施される。淡茶褐色を呈し、胎土は精良である。口径10.2cm、体部最大径8.8cm、器高8.2cm。

小型有段鉢 (18・19) いずれも「ハ」の字に開く脚部の付く鉢B₂類で、18は脚部を欠損する。口縁部は内面に浅い段をなして僅かに外反し、端部は薄く舌状におさまられる。口縁部はヨコナ



第181図 S Q4002出土遺物実測図

デ調整、体部は丁寧なヨコナデの後細かなヘラミガキが粗く施され、19の体部外面には指頭圧痕がかすかに認められる。脚部の器面調整は、器壁の磨滅によって詳細は明らかでない。内面には指頭圧痕が認められる。脚部との接合部両面には、ヘラ状工具による刻み目が見られる。(図版179) 灰褐色を呈し、胎土は精良である。18は口径12.8cm、残存高3.5cm。19は口径13.2cm、脚部計10.8cm、器高7.75cm。

器台(20・21) 21は小型器台B類で、20はその大型品である。受部と台部の間は、貫通し、貫通孔は、両方向よりヘラによって切り抜かれ、丁寧にナデ調整が施される。受部内外面と台部外面上半には、細かなヘラミガキが丁寧に施され、台部内面はナデ調整が施される。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。21は、受け部径9.5cm、台部径11.7cm、器高7.8cm。20は、受け部径16.1cm、残存高8.6cm。

2. S Q 4002 (図版26・127・128)

C-4 トレンチ、S D 4025の直上、S D 4025の最終埋土の上に堆積する暗灰色粘土層中より出土した。この付近はN R 4001に隣接し、包含層の堆積も薄く遺物の出土もあまり見られなかった地区で、暗灰色粘土の堆積は、包含層の下でS D 4025の周辺にのみ認められた。出土した器の量は少なく、その全てを図化できた。広口壺A₁類2点、甕B₄類1点、C類3点、D類1点、高坏脚C類2点でこれらは1箇所に重なり合って出土した。

広口壺(1・2) 1は口縁部の約4分の1の破片で、体部を欠く。内外面ハケメの後ヨコナデ調整を施す。淡黄褐色を呈す。口径17.6cm、残存高7.9cm。2の口縁端部は外傾する面をなし、上端と下端をそれぞれつまむようにしてナデ、端部は小さく突出し、内面には浅い沈線状の窪みが巡る。口縁部と肩部外面はハケメ調整、外面肩部以下にはヘラナデ調整が施される。口縁部内面のハケメは細かく、横方向に施される。内面ヘラケズリは肩部上半に及び、深く削られて段ができる。口縁端部内外面の一部には煤が付着する。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径18cm、残存高18cm。

甕(3~7) 3はD類で、体部下半以下を欠損する。口縁部は外傾して開き、舌状におさめる。体部内面はヘラナデ調整で、かすかにハケメが認められる。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径13.6cm、残存高9cm。4は、球形の体部と鋭く「く」の字に外傾して開く口縁部とからなるB₄類である。口縁部内面と体部外面には粗いハケメが施され、体部内面は、頸部直下までヘラケズリの後肩部付近以下をヘラナデ調整を施す。器壁は全体に0.6~1.0cmと厚い。体部外面の一部には煤が付着する。灰褐色を呈し、3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14cm、器高17.6cm。5はC II類、6はC III₁類、7はC I類である。5は、最大径が体部高よりも大きく体部はやや偏球形となる。口縁部は長く外傾して開き、端部はa₃で内方への肥厚は小さい。外面ハケメは細かく、縦方向の後体部上半横方向に丁寧に施される。内面底部付近には指頭圧痕が顕著に残る。淡灰褐色を呈す。口径15.6cm、体部最大径22.5cm、推定器高23cm、推定体部高19.5cm。6の口縁部は内弯して開き、端部はa₁で内方への肥厚は小さい。ナデ調整は肩部に及

びハケメを消している。外面ハケメは5と同様に細かく、やや雑に施される。外面には煤が付着し、内面赤褐色を呈す。口径14cm、残存高16.5cm。7の口縁部は完形で、長く外傾して開き、端部はa2で僅かに内傾する面をなす。外面のハケメは粗く、内面ヘラケズリは頸部直下におよび、器壁は平滑となる。口縁部はヨコナデ調整によるが、内面にはハケメが認められる。淡灰褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を多量に含む。口径18.4cm、残存高10.6cm。

高坏(8・9) 筒部と裾部の境には、円形の透し穴が3方に穿孔される。8は、外面と裾部内面ハケメの後ナデ調整が施され、筒部上端外面には、条痕状にヘラミガキが粗く加えられる。筒部内面はナデ調整である。黄褐色を呈す。裾部径12.5cm、残存高9.1cm。9は、筒部外面ヘラナデ、裾部外面ナデ調整で、外面筒部上半と裾部内面にはハケメ、筒部内面にはしぼり目が残る。赤褐色を呈す。裾部径12.3cm、残存高8.8cm。

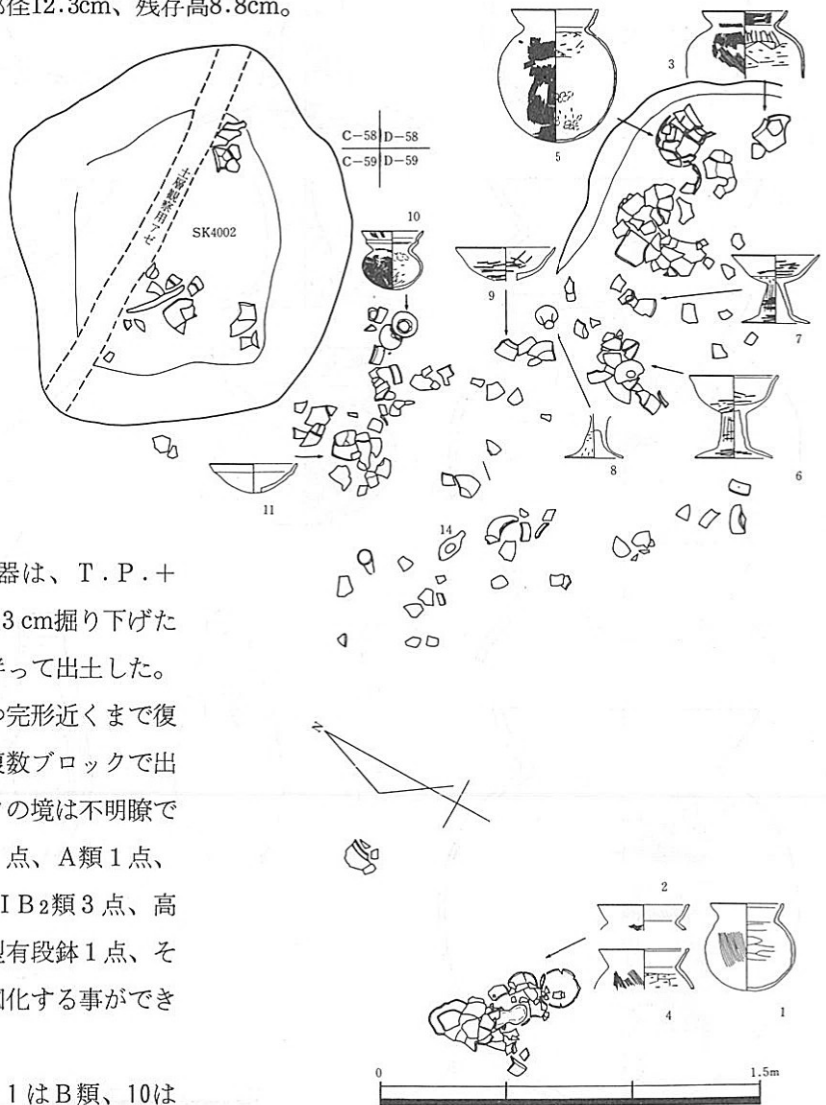
3. S Q 4003 (第182・183図、図版21・128・129)

C-1トレンチ、SK4002の南側に位置する。S Q 4001・4002と比較すると、土器の出土する範囲は2.1×3.7mと広く、集合の状態もS Q 4001・4002

ほど密でない。土器は、T.P.+5.0m、包含層を約3cm掘り下げた地点で、炭、灰を伴って出土した。

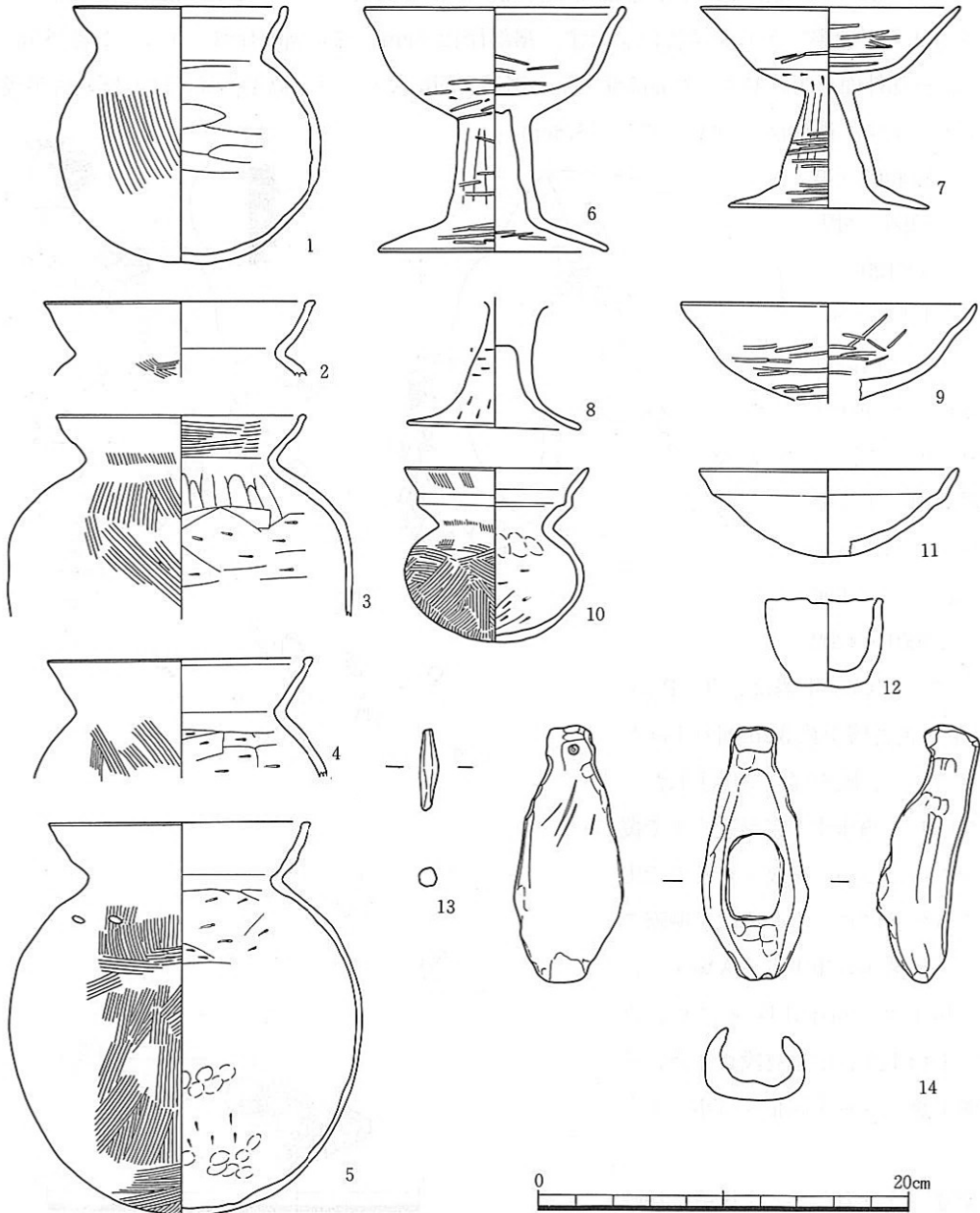
2ないし3個体ずつ完形近くまで復元されるものが、複数ブロックで出土するが各ブロックの境は不明瞭である。小型壺B類1点、A類1点、甕C類4点、高坏II B2類3点、高坏脚I類1点、小型有段鉢1点、その他土製品3点を図化する事ができた。

小型壺(1・10) 1はB類、10はA1類である。1は、球形の体部と



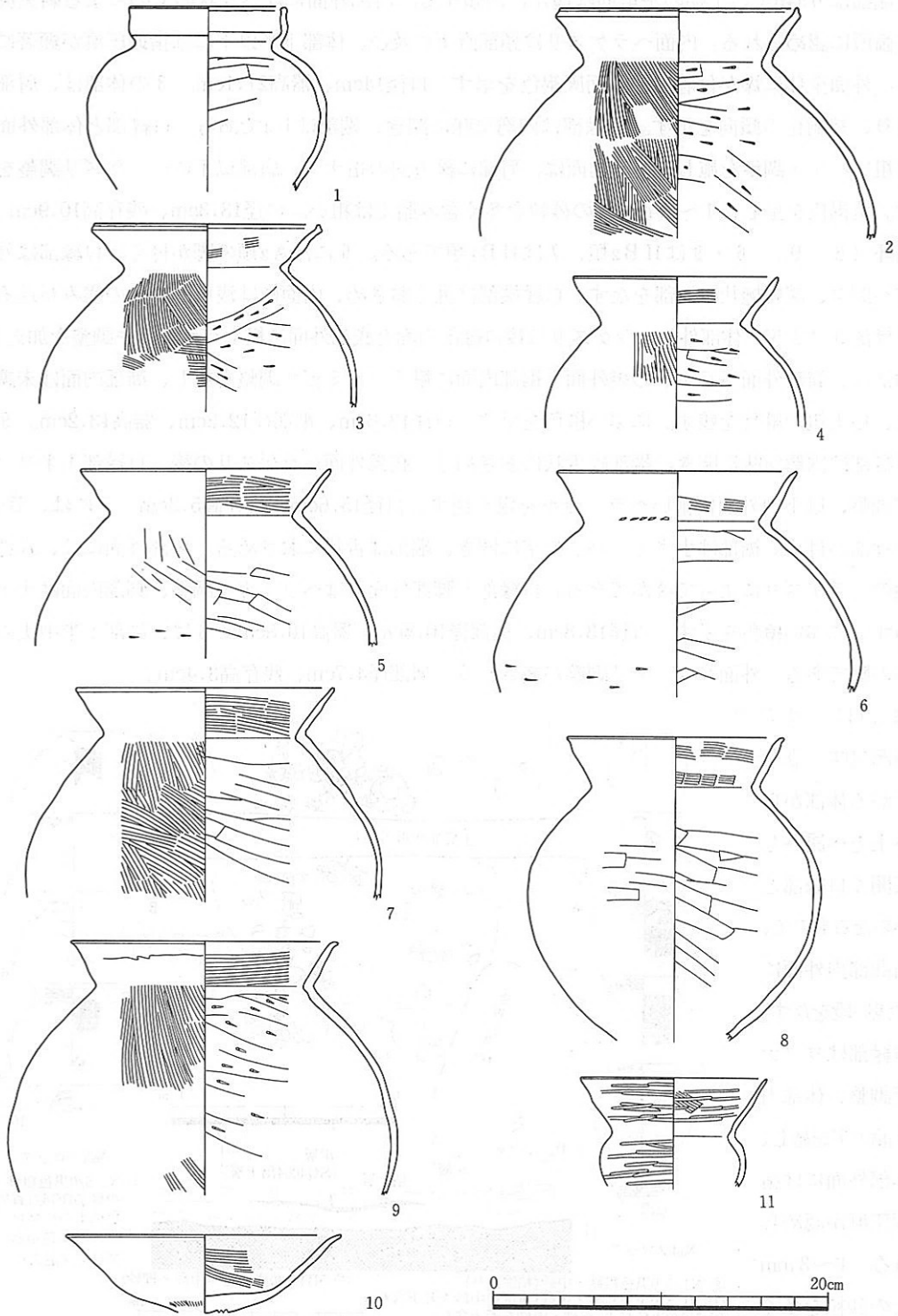
第182図 S Q 4003出土状況図

外傾した後端部近くで上方へやや内弯して開く口縁部とからなる。口縁端部は丸くおさまられる。外面の詳細な調整は、器壁の磨滅によって明らかでないが、粗いハケメが認められる。内面はナデ調整による。灰黄色を呈す。口径11.4cm、器高13.8cm。10の口縁部内外面の段は明瞭で、端部は舌状におさまる。体部はやや偏球形をなす。口縁部と体部外面ハケメの後、口縁部と肩部にヨコナデ調整を施す。体部内面は、肩部に指頭圧痕を残し、肩部以下にヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を多く含む。口径9.8cm、体部最大径9.5cm、器高9.5cm。



第183図 S Q4003出土遺物実測図

cm、推定器高4.8cm。



第185图 S Q 4004出土遺物実測図

ミニチュア土器 (12) 内外面に指頭圧痕を残し、口縁部稜線が波打つ手捏ねの土器である。底部は平底で、体部はまっすぐ立ち上がりそのまま端部に至る。口径6.2cm、器高4.5cm。

その他の土製品

土錘 (13) 全長4.3cm、最大径1.0cmの小さな土錘である。径0.3cmの穴が貫通する。

鳥形土製品 (14) かなり抽象化されているが、纏向遺跡辻地区土壘4出土木製品と比較して、鳥形土製品と判断した。嘴の部分は欠損する。外面胴部から尾の部分にかけては羽を表現した様なヘラナデが施される。胴部は楕円形をなし、底面より楕円形の彫り込みがなされ、更に尾部にかけては、径0.4cmの穴が貫通する。

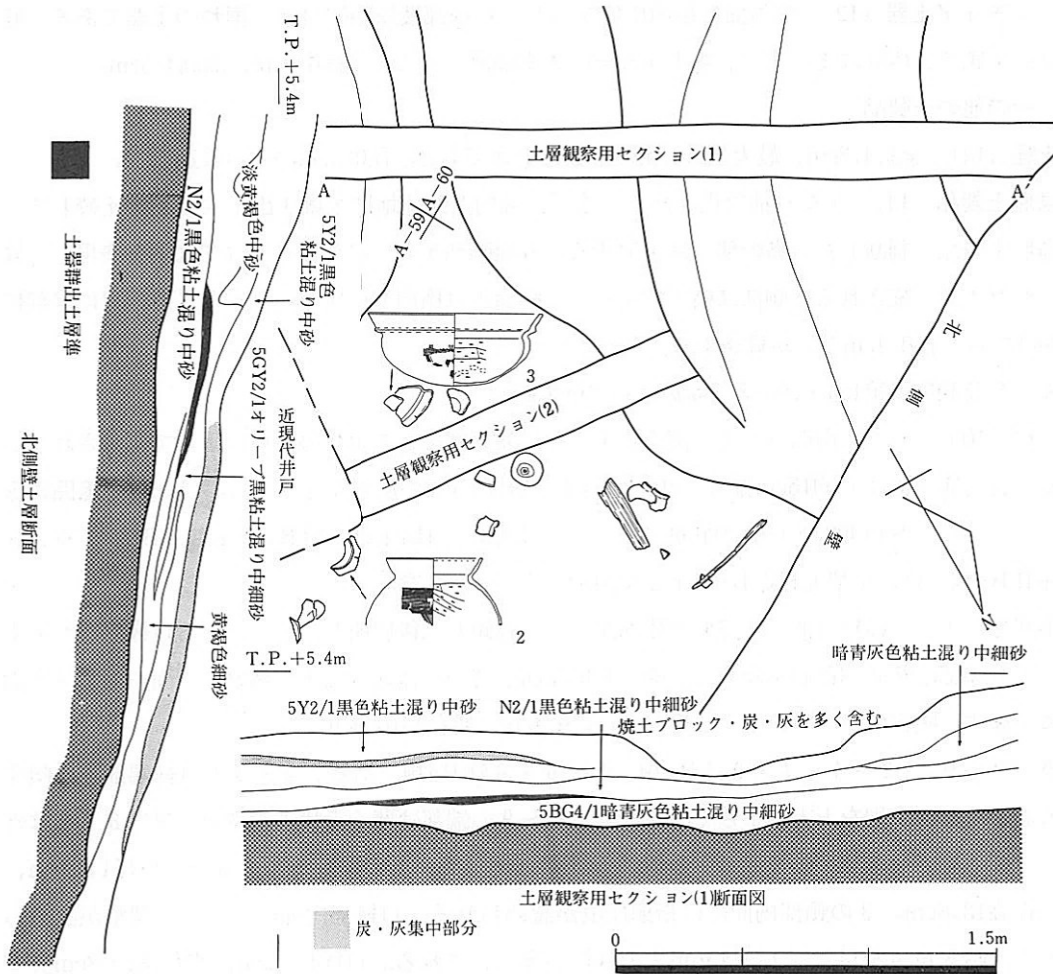
4. S Q 4004 (第184・185図、図版22・129・130)

C-10トレンチ、南西コーナー部で出土した。北東部は、近現代の井戸によって削平されている。包含層上面より約15cm掘り下げた地点で、層厚5cmの炭層を伴って1.4×1.6mの範囲に広がっていた。S Q 4004と同様の状態であった。小型壺A₃類1点、甕B₂類5点、B₃類3点、高坏II B₂類1点、小型丸底壺B₁類1点を図示することができた。

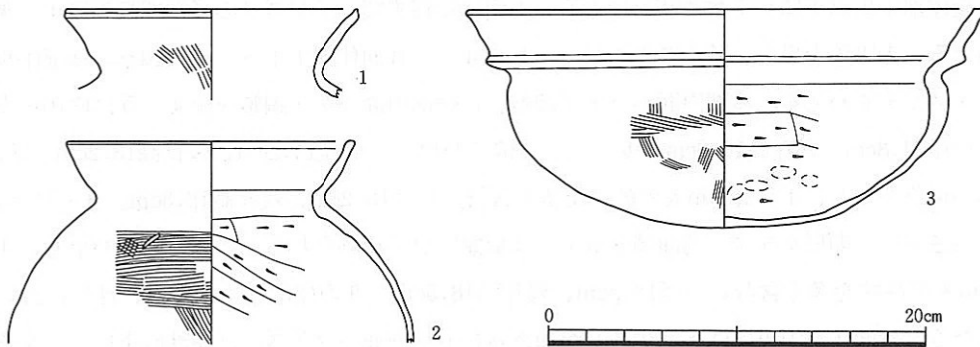
小型壺 (1) A₃類である。球形の体部から短く外傾した後屈曲して立ち上がる口縁部がつくもので、端部は断面四角形をなし、上端に平坦な面を持つ。体部外面ナデ調整、内面ヘラケズリ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.4cm、残存高10.9cm。

甕 (2~9) 2~4・7・9はB₂類、5・6・8はB₃類である。2・3の口縁端部は外傾する面をなし、上端を上方へ小さくひきだす。4~9の端部は薄く舌状におさめ、更に8・9は外方へ小さくつまみだす。2は暗灰黄色を呈し、1~4mm大の砂粒を多く含む。口径14.2cm、残存高13.8cm。3の頸部内面には指頭圧痕が認められる。口縁部内面にはハケメ調整が認められる。暗灰黄色を呈し、1~4mm大の砂粒が多く含まれる。口径13.2cm、残存高10.8cm。4は、口径12cm、残存高9.1cmの小型の甕である。口縁部内面と体部外面にやや粗いハケメを施した後体部中央以下にヘラケズリを加える。内面は頸部までヘラケズリの後頸部直下にナデ調整を加える。赤灰色を呈し、胎土はやや粗い。5・6は、外面体部上半ヘラナデ調整、体部中央にヘラケズリをくわえる。体部内面ヘラナデ調整、口縁部内面ハケメ調整を施す。5は灰褐色を呈す。口径14.8cm、残存高10.6cm。6は、淡赤橙色を呈す。口径14.2cm、残存高13.2cm。7は、にぶい褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を多く含む。口径15.2cm、残存高12.3cm。8の体部は、肩部がさがり、卵形をなす。内面頸部直下には指頭圧痕が認められる。にぶい橙色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む。口径12.8cm、残存高18.5cm。9の体部はやや張り、球形に近いものとなる。外面体部中央にはヘラケズリが加えられる。内面ヘラケズリは頸部直下にとどまる。灰黄褐色を呈す。口径14.6cm、残存高15cm。

高坏 (10) II B₂類である。口径に比して浅い坏部となす。口縁端部は僅かに外反し、薄く舌状におさめる。内外面ハケメ調整の後ナデ調整を施す。灰黄褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を多く含む。口径16.2cm、残存高4.6cm。



第186図 S Q 4005出土状況図



第187図 S Q 4005出土遺物実測図

小型丸底壺 (11) B₁類である。口縁部は内弯して大きく端部は僅かに外反し薄く舌状におさめる。口縁部と体部外面には細かなヘラミガキを丁寧に施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径11.1cm、体部最大径8.7cm、残存高6.5cm。

5. S Q 4005 (第186・187図、図版22・130)

C-10トレンチ、S D 4001の西側A-60地区の炭層中より出土した。出土した土器も少なく、甕C III₁類1点と甕の口縁部1点、大型鉢I B₁類1点を図示する事ができた。

甕(1・2) 1は口縁部の約4分の1の破片である。口縁部はゆるく外傾して開き、端部は上部は上方へ小さくつまむ。外面下半にはハケメが認められる。灰黄褐色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む。口径15.4cm。2はC III₁類である。口縁部は内弯して開き、端部はa₁で内方径の肥厚は小さい。外面ハケメは細かく丁寧に施される。内面ヘラケズリは、頸部直下より強く施される。口径15cm、残存高10.8cm。

鉢(3) 口径27.3cm、器高11.6cmの大型の鉢I B₁類である。体部上半から口縁部にかけては器壁を増す。内外面の段は明瞭で、口縁端部は断面四角形をなし、上端は平坦な面をなす。体部外面は細かなハケメ調整を施し、内面上半はヘラケズリを施す。底部から体部下半には指頭圧痕が顕著に残る。にぶい橙色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む。

6. 各地区包含層中出土遺物(第188~190図 図版130~132)

S Q 4001~4005を除くと、各地区包含層からの遺物の出土は破片の場合が多く完形近くに復元されるものは僅かであった。また、出土量も層上面に比べると少ない。この他、僅かではあるが弥生式土器数点も出土した。比較的遺存状態の良好なものを抽出する。

二重口縁部(1) D類である。口縁部の約3分の2の破片で、体部下半を欠損する。球形の体部は、肩部がやや下がる。口縁部は外損する面を持ち、下端を外下方へ小さくひきだす。体部外面のハケメは細かく、内面ヘラケズリは頸部直下まで及ぶ。体部外面の一部には煤が付着する。褐灰色を呈し、胎土はやや粗い。口径13.2cm。残存高11.7cm。

広口壺(2) B類である。やや偏球形の体部と「く」の字に外傾して開く口縁部とからなる。口縁部は器壁が薄く、端部は舌状におさめる。体部外面ヘラナデ、内面ヘラケズリの後ヘラナデ調整を施す。橙色を呈し、1~3mm大の砂粒が僅かに含まれる。口径13cm。推定器高13.8cm。

小型壺(3・4) 3はB類、4はA類である。3は球形の体部と短かく外傾する口縁部とからなるもので、体部の器壁は厚く、口縁端部は薄く舌状におさめる。口縁部と体部外面のハケメは細かく、粗雑に施される。更に口縁部外面と肩部外面にはナデ調整が加えられる。体部内面はナデ調整。外面肩部と内面には指頭厚痕が認められる。外面黒色、内面灰色を呈す。口径8cm。器高9.6cm。4は、球形の体部と内外面に段をなして開く口縁部とからなる。口縁端部近くで僅かに外反し、端部は外傾する面をなす。体部外面ハケメノ後ナデ調整、内面ナデ調整を施す。淡黄赤褐色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む。口径9.2cm、器高8.8cm。

壺(5) 口縁部の約5分の1の破片で、体部下半を欠く。倒卵形の体部と外上方へ長く外傾して開く口縁部とからなる。口縁端部付近で僅かに内弯し、端部は丸くおわる。体部の器壁は厚く、0.8~1.0cmを測る。口縁端部付近はヨコナデ、外面は細かなハケメを粗雑に施した後ナデ調整を加える。口縁部内面は縦方向のヘラナデ、体部内面は指ナデとヘラナデ調整を施す。外面肩部に

はヘラによる刺突痕が3個見られる。口径14.4cm。残存高16.3cm。

甕（6～19） 19はB₁類、16はD₄類、6～18・10～14はCⅢ類、9・15・18はCⅣ類、17はCⅡ類である。11CⅢ₁類である。口縁部は外傾して開く。端部はa₂で、内外面の肥厚は小さく上端は僅かに窪む平坦面をなす。外面ハケメは細かく、粗く施される。底部内面には指頭圧痕が顕著に残る。外面肩部以下には煤が付着し、内面赤褐色を呈す。口径14.3cm。推定器高21.5cm。

13の体部はやや長めで、口縁部は器壁が厚く、外傾して開く。端部はa₂で内外面の肥厚は小さく、上端は僅かに窪み内傾する。外面には煤が厚く付着し、内面体部下半から底部にかけて指頭厚痕が認められる。にぶい褐色を呈す。口径14.4cm。推定器高17.5cm。

9・15はCⅣ₁類である。9の口縁部は外傾し、端部はa₁で上端は丸くおさまる。頸部内面は丸い稜をなす。内面ヘラケズリは頸部より下肩部上端付近にとどまる。外面肩部には、ヘラによる刺突痕が認められる。淡橙色を呈す。口径12.8cm。残存高8.0cm。

15の口縁部はやや上方へ開く。端部はa₃で内方への肥厚は丸く小さい。内面ヘラケズリは18と同様肩部上端付近にとどまり、頸部より下には指頭圧痕が認められる。にぶい橙色を呈す。口径12.6cm。残存高7.5cm。

14はCⅢ₂類である。口縁部は外方へ強く外傾して開き、肩部は、下がる。口縁端部はa₃である。外面ヨコナデは肩部にまで及びハケメを消す。外面には厚く煤が付着し、内面橙色を呈す。口径14.5cm。残存高9.4cm。

17の口縁部は器壁が厚く、端部はbで、上端はやや内傾する。口径15.4cm。

16の口縁部は「く」の字に外傾し、端部は薄く舌状におさまる。頸部内面は鋭い稜をなす。体部外面はナデ調整、内面は肩部をナデ調整、肩部以下ヘラケズリを施す。赤褐色を呈す。口径14.5cm。

16は口縁部の約5分の1の破片である。頸部内面の稜は鋭さを欠く。口縁端部は外傾する面を持ち、上端を内上方へ丸くひきだす。口縁部内面と体部外面にはハケメが施される。にぶい橙色を呈す。口径12.8cm。残存高3.3cm。

高坏（20～37） 20～23・28～30・34はII B₂類、24・26はII B₁類、25・27はII C₁類、31はII C₂類、32・33は脚A₁類である。20はA₃類の脚が付く。坏部は口径に比して浅い。坏部と脚部外面の詳細な調整については器壁の摩滅の為明らかでない。底部外面にはヘラミガキ、筒部外面にはヘラナデとハケメ痕が認められる。脚部上端外面にはヘラ状の工具を強く押しつけた痕跡が認められる。筒部内面下半はヘラケズリ、裾部内面はヘラナデ調整を施す。外面橙色、内面灰白色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径17.4cm。裾部径11.6cm。器高12.9cm。

21・22にはC₃類の脚が付く。22は内外面ナデ調整により、脚部内面にはしぼり目が残る。筒部下端には2方向に円形の透し穴が穿孔される。口径14.7cm。裾部径11.7cm。器高13.3cm。

22は、坏部ハケメの後ヨコナデ調整を施し、筒部内面ヘラケズリを施す。口径15.3cm。裾部径11.7cm。器高13.9cm。

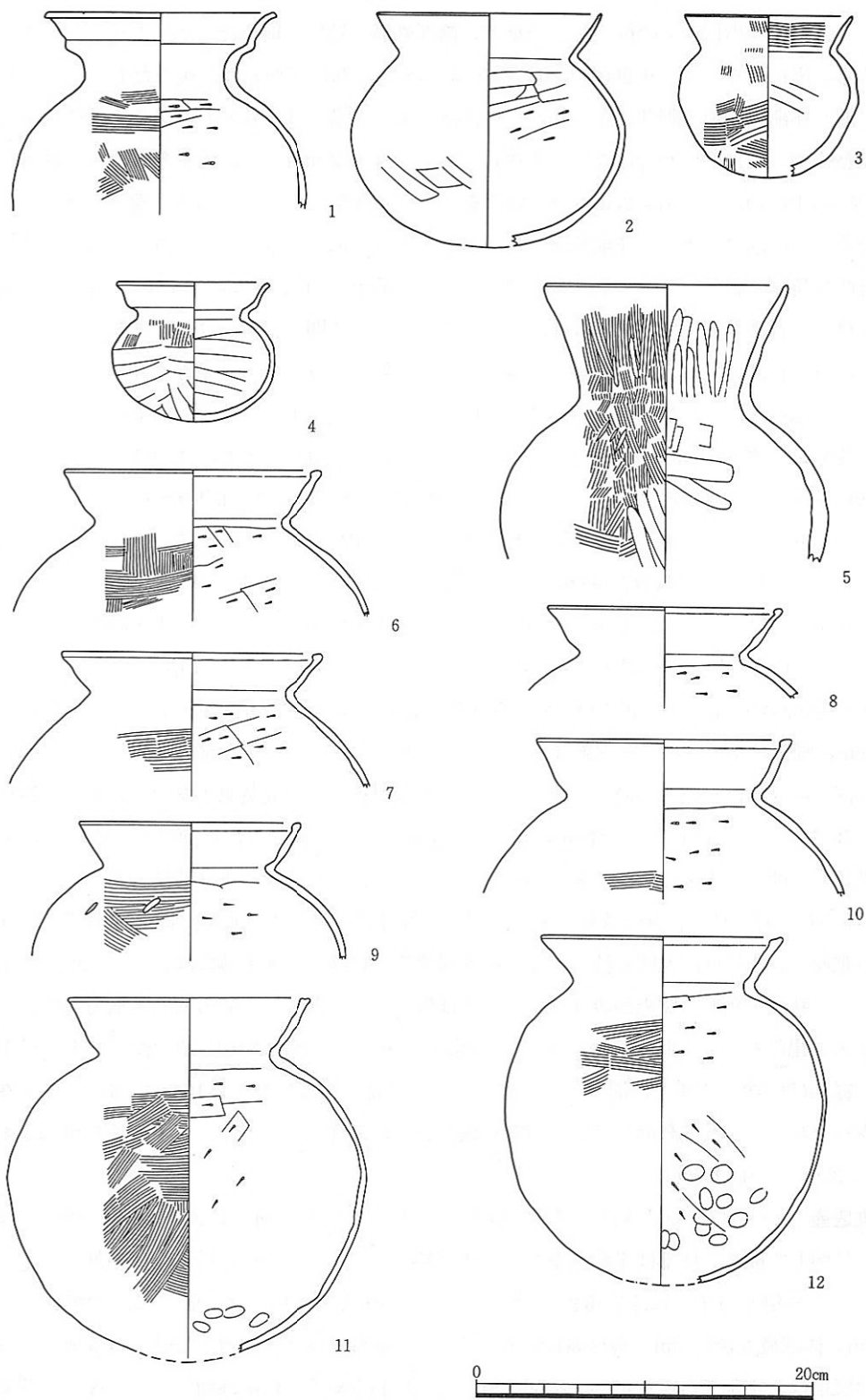
23は、坏部ハケメの後丁寧なヨコナデ調整で、外面口縁部上端にハケメが残る。脚部は、外面ヘラナデ・ナデ調整、内面筒部はヘラケズリ、裾部はナデ調整で指圧痕を残す。黄灰色を呈し、胎土は精良である。口径15.8cm。裾部径13cm。器高13.5cm。

34はC₃類の脚が付く。口縁部を欠損する。坏部内外面はヘラミガキを粗く施す。脚部外面はナデ調整、内面は筒部をへ

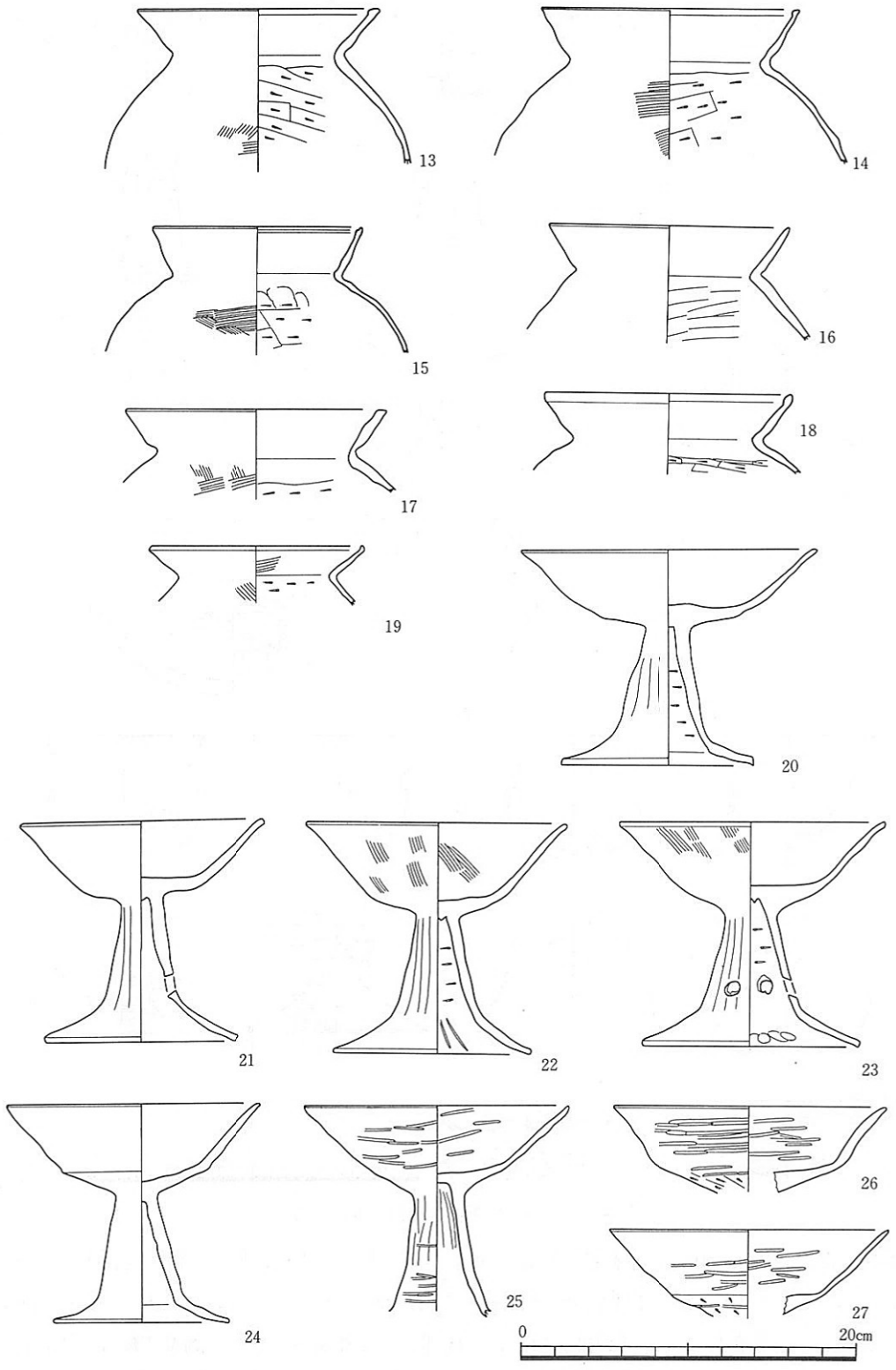
ラケズリ、裾部を指押さえの後ハケメ調整で、筒部外面上端には細かなハケメとヘラによる刺突痕が残る。灰白色を呈す。裾部径11cm。残存高10.8cm。24は坏部外面に稜をなし、口縁部が外傾して開く坏部とA類の脚部とからなる。口縁部と裾部の端部は舌状におさめる。器壁の摩滅の為、調整については明らかではない。赤褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。口径15.5cm。裾部径10.5cm。器高13.2cm。26は脚部を欠く。口縁部は外反して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後内外面に丁寧なヘラミガキを施し、外面の稜は丸味を持つ。橙色を呈し、胎土は精良である。口径16.2cm。残存高5.5cm。25にはA₂類の脚部が付き、裾部を欠損する。口縁部はやや外方へ外傾して開き、端部は舌状におさめる。外面底部との境の稜は、ヘラミガキによって鋭さを欠く。坏部内外面のヘラミガキは細かく、粗く施される。筒部外面はヘラケズリの後坏部と同様のヘラミガキを下端に施し、筒部内面上半にはしぼり目を残す。外面にぶい橙色、内面灰白色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.8cm。残存高12.7cm。31は、坏部口縁の約5分の1の破片である。口縁端部は断面四角形をなし外傾する面を持つ。内外面はヘラミガキを雑に施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土・色調は34と酷似する。口径16.9cm。残存高40cm。32の裾端部は、舌状におさめ更に下方へ小さくひきだす。筒部内面上半にはしぼり目、下端には指圧痕を残す。裾部内面はハケメの後ナデ調整で、筒部との境付近には布目の圧痕が認められる。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。裾部径1.6cm。残存高7.8cm。35・36は小型の高坏Ⅲ類である。35は、口径11.9cm、裾部径7.7cm、器高8.2cm。脚部は中実で、口縁端部は薄舌状におさめる。内外面ナデ調整により、脚部内面、裾部と筒部との境にはハケメが僅かに認められる。外面黒褐色、内面黄褐色を呈し、胎土は精良である。36は脚部を欠損する。口径10.3cm。残存高3.2cm。口縁部は、外面底部との境に段をなして外傾して開き、端部は舌状におさめる。にぶい赤褐色を呈し、胎土は精良である。

鉢 (37・38) 37はC類、38はA類である。37の口縁部は、外上方へ長く外傾して開く。端部は外方へ肥厚し、上端面は丸味を持って僅かに内傾する。口縁部外面下端には、深い沈線線を施すことによって断面三角形の突線が設けられる。体部外面ハケメは荒く、縦方向の後横方向に施される。淡灰茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径22.5cm。残存高10.3cm。38の体部は半球形をなし、口縁部は内弯して開き、端部は丸くおさめる。底部の器壁は厚く、10cmを測る。体部外面下半をヘラケズリの後内外面ヘラナデ調整を施し、更に体部内面下半にヘラミガキを粗く施す。口径23.2cm。器高10.7cm。

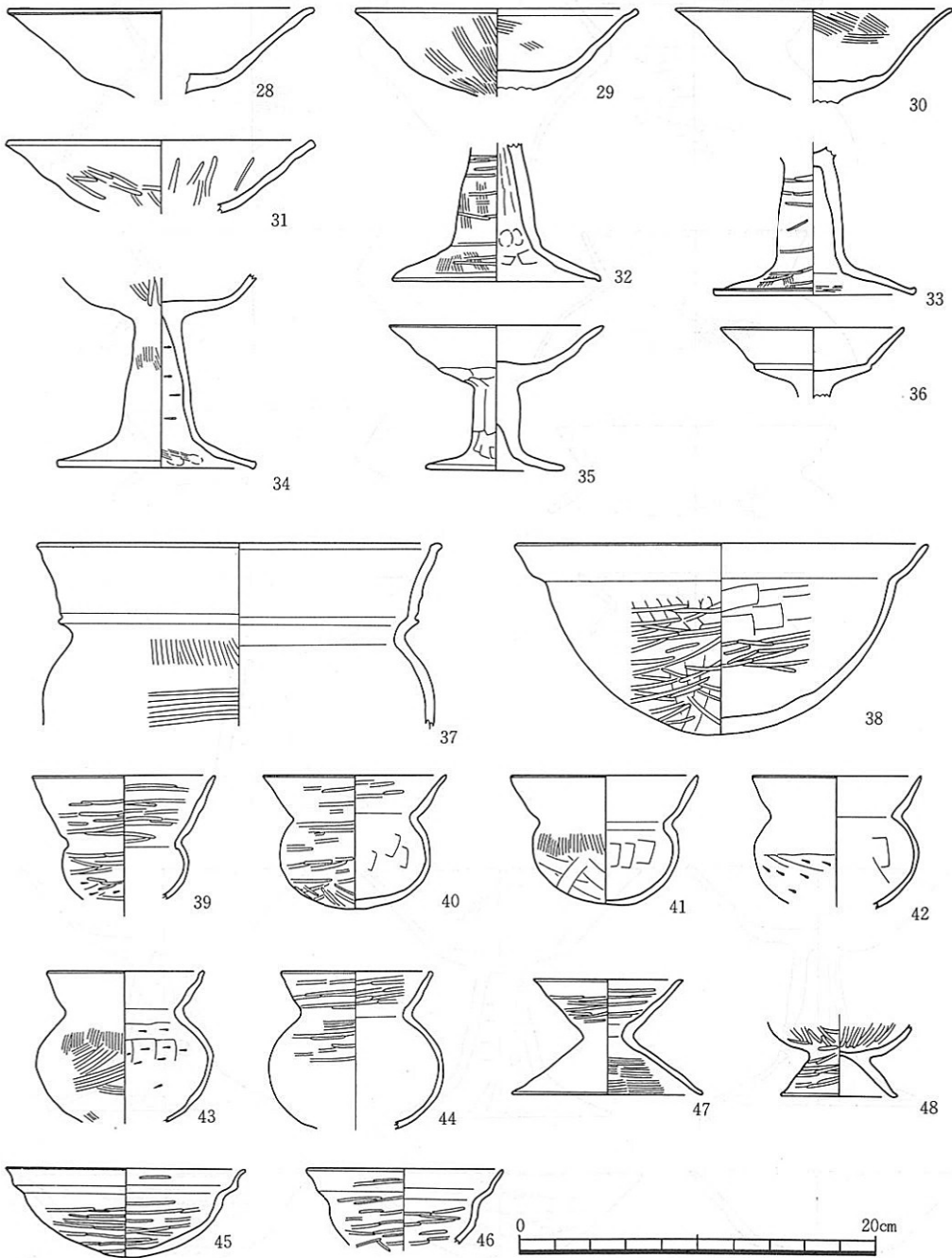
小型丸底壺 (39～44) 39はA₁類、42はB₂類、41はC₁類、42～44はC₂類である。39の口縁部上方へ外傾して開き、体部は半球形をなす。体部外面ヘラケズリの後口縁部と体部外面にはヘラミガキをやや粗く施す。にぶい橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を含み胎土はやや粗い。口径10.2cm。体部最大径7.1cm。残存高7.0cm。41は、半球形の体部と内弯して開く口縁部とからなる。口縁部は、端部で器壁を増し、端部は薄く舌状におさめる。体部外面ハケメの後ナデ調整、内面ヘラケズリを施す。茶褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を含む。口径10.5cm。体部最大径



第188图 各地区包含层出土遗物实测图(1)



第189図 各地区包含層出土遺物実測図(2)



第190図 各地区包含層出土遺物実測図(3)

8.1cm。器高7.2cm。40は、口縁部と体部外面にヘラミガキを丁寧に施す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.2cm。体部最大径8.3cm。器高7.5cm。42は底部外面へラケズリの後内外面ナデ調整、43は体部外面ハケメ調整、44は、口縁部と体部外面ヘラミガキ調整で体部下半には煤が付着する。42は灰白色を呈す。口径9.5cm。体部最大径9.2cm。残存高7.2cm。43は口径

8.8cm、体部最大径9.8cm、推定器高8.9cm。44は、にぶい橙色を呈し、1～2mm大の砂粒を含み胎土はやや粗い。口径8.4cm。体部最大径9.7cm、推定器高9.1cm。

小型器台(46) A類である。受部と台部の貫通孔内面はヘラケズリが施される。受部は内外面丁寧なヘラミガキ、台部外面ナデ、内面ハケメ調整が施される。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。受径8.4cm。台部径10.7cm。器高6.5cm。

小型有段鉢(47・48) いずれもA1類である。にぶい橙色を呈し、胎土は精良で、内外面ヘラミガキも丁寧に施される。47は口径13.4cm、器高5.0cm。48は口径13.1cm、残存高4.4cm。

ミナチュあ土器(49) 「ハ」の字に開く脚部が付くもので、体部上半は欠損する。内外面にヘラミガキを粗く施し、体部外面には指頭圧痕が認められる。明黄褐色を呈し、1～3mm大の砂粒が含まれる。脚部径6.6cm。残存高4.2cm。

(4) Cトレンチ部包含層出土遺物(第191～194図、図版133・134)

Cトレンチ D・E-58～65地区でも層上面及び層中から多くの土器が出土したが、遺物取り上げ後整理作業段階の不手際によって層上面出土のものと層中出土のものと区別が判別できないものが生じた為、ここではCトレンチ部包含層出土の遺物として扱い、層上面出土土器として記録できたものについて明記する事とした。層上面での出土は、SD4001の西側D・E-60地区において認められた。これはC-1・2トレンチ層上面での出土状況と同様であった。層中では、SQ4001～4005の様に複数の土器が集合するものはなかった。

二重口縁壺(1・2) 1はC類、2はD類でいずれも層上面からの出土である。1の頸部は上方へ真っすぐ立ち上り、口縁部は内外面に明瞭な段をなして外反して開く。端部は外方へ小さくひきだし、内傾する面をなす。頸部外面はハケメの後ナデ調整を施す。2次的に火を受けて赤変する箇所が見られる。灰黄色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。口径21.5cm。残存高7.2cm。2は、ほぼ完形に復元される。口径19.8cm。器高23.9cm。底部は平底気味で、体部は最大径がやや上位にある球形をなす。体部外面はハケメの後ヘラナデを加え、内面ヘラケズリを施す。淡灰褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。

広口壺(3・4) いずれもA2類で、層上面からの出土である。3は、ややなで肩で卵形の体部をなし、体部下半を欠損する。口縁端部は内傾する面をなして肥厚するa2である。内面は、肩部上半に指押えの後ヘラケズリを施す。口径16.5cm。残存高18.0cm。4は、最大径が体部上半肩部付近にあって倒卵形の体部をなす。口縁端部は平坦な面をなす。外面ハケメは荒く、肩部以下は斜・横方向に粗雑に施す。内面頸部直下から肩部上半には指頭圧痕が顕著に残る。にぶい赤褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径18.6cm。残存高24.4cm。

小型壺(5～7) 5・6はB類、7はC類である。いずれも層上面からの出土である。5は口縁部上半を欠損する。体部外面ヘラケズリの後ナデ調整で、体部下半にはかすかにハケメが認められる。内面はナデ・指ナデ調整による。体部最大径12.7cm。残存高11.6cm。6は偏球形の体

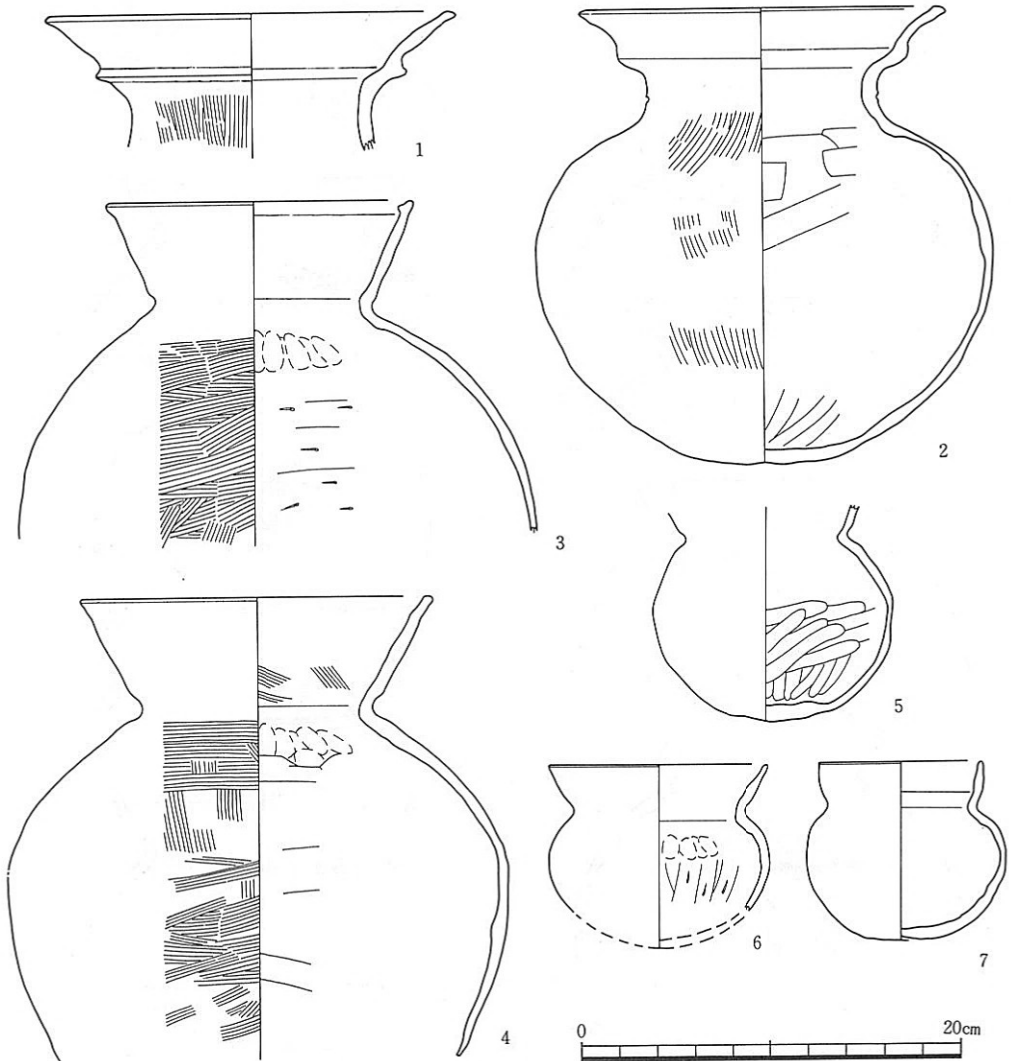
部と短かく外反して開く口縁部とからなる。外面はナデ調整、内面は上半を指押え、下半をヘラケズリを施す。にぶい橙色を呈し、外面には煤が付着する。口径11.5cm。残存高7.8cm。7は最大径を肩部に持ち球形の体部で、底部中央は僅かに窪む。口縁部はやや器壁を増して外面上に丸味を持ち、端部は舌状におさめる。外面はハケメの後ナデ調整を施し、頸部内面には、指頭圧痕が認められる。黄茶褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。口径8.5cm。器高9.4cm。

甕（8～27） 12・26・27は層上面で出土したものである。17・27はCⅠ類、9・16・19はCⅡ類、8・11・12～14・18・20はCⅢ類、10・15・21・24～26はCⅣ類である。27の体部は、体部最大径が体部中央よりやや上位にあって倒卵形をなす。頸部は大きく、口縁部は「く」の字に外傾して開く。端部は外方へ肥厚し、上端は平坦な面をなす。体部外面のハケメは荒い。内面は、肩部に指押え、肩部以下にヘラケズリを施す。灰黄色を呈し、体部内外面には僅かに煤が付着する。1～3mm大の砂粒を多く含む。口径18cm。器高28cm。19の口縁部は器壁が薄く内弯して開き、端部はa₃で、内傾する面は中央が窪む。肩部内面には指頭圧痕が顕著に残る。にぶい橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径15.6cm。22はC(1)₂類である。口縁部は短かく内弯して開き、端部はb₄である。肩部外面には1条の沈線が巡る。口径16.8cm。20の肩部外面にも1条の沈線が巡る。淡赤褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。14はCⅢ₃類で、肩部は小さく張り体部は長胴化の傾向を示す。白褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径14.5cm。15はCⅣ₁類で、口縁部は内弯して開く。外面ハケメは丁寧で、ナデ調整は肩部に及びハケメを消す。内面は、肩部中位に指頭圧痕を顕著に残し、頸部直下と肩部以下にナデ調整を施す。黄灰色を呈す。口径12.6cm。21はCⅣ₁で、口縁部は外上方へ僅かに内弯して開く。口縁部との接合面は狭い。外面ハケメは荒く施される。にぶい赤褐色を呈し、外面には煤が付着する。口径12.4cm。25の口縁部は「く」の字に外傾して開き、頸部は細い。口縁端部は外傾する面をなし、上方へひきだされる。外面ハケメは粗い。体面は、肩部以下ヘラケズリの後ナデ調整で、肩部上端には指圧痕が認められる。灰赤色を呈し、外面には煤が付着する。口径12.9cm。

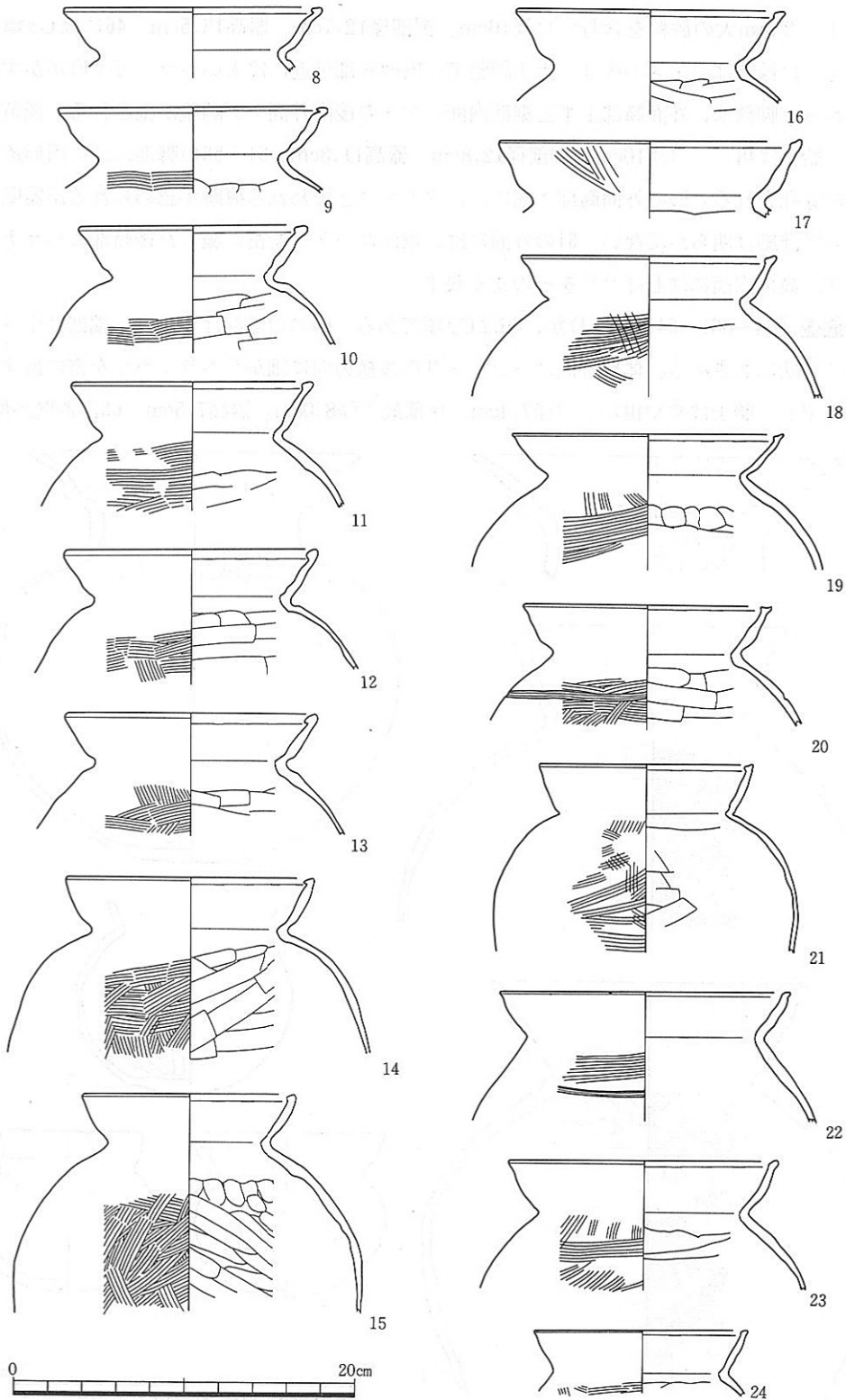
高坏（28～62） 28・35・38・43・47・49・50は層上面から出土したものである。29・35・37はⅡB₁類、39はⅢB₁類、28・40・46～50・53・54・58はⅡB₂類、31・36はⅡC₁類、30・32・34・38・45・51・52はⅡC₂類である。61・62は脚B₂類、59・60は脚D₂類である。ⅡB₁・ⅢB₁・ⅡC₁類には、内外面ヘラミガキ調整が施され、ⅡB₂類、ⅡC₂類は、内外面ハケメの後ナデ調整もしくはナデ調整による。29・31のヘラミガキは丁寧で、胎土も精良である。29の内面には細かなハケメがかすかに認められる。37の口縁端部は、内上方へ小さくひきだされ内傾する面を持つ。内外面ヘラミガキ放射状に施される。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。31のヘラミガキは、底部外面に密に施され、口縁部との境にはかすかな稜をなす。34にはD₂類の脚部が付く。口縁端部は薄く舌状におさめ、外面にはヨコナデ調整によって浅い段ができる。口縁部ヨコナデ、底部外面ナデ調整の後内面には、底部に放射状、口縁部に横方向の細かなヘラミガキがやや粗く施される。脚部外面は丁寧なナデ調整を施し、筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。灰黄色を

呈し、1～2mm大の砂粒を含む。口径16cm。裾部径12.7cm。器高13.5cm。46にはC₂類の脚部が付く。口縁部はハケメの後ヨコナデ調整で、内面底部付近には太いヘラミガキ痕がかすかに認められる。脚部は、外面筒部上半と裾部内面ハケメの後内外面ナデ調整が施される。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径16cm。裾部径12.8cm。器高11.3cm。51・58の脚部には、円形透し穴が3方に穿孔される。59の外面筒部下端には、タタキメと思われる痕跡が認められるが器壁り摩擦によって詳細は明らかでない。61の外面には、細かなハケメを密に施した後筒部にヘラナデを軽く施す。筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。

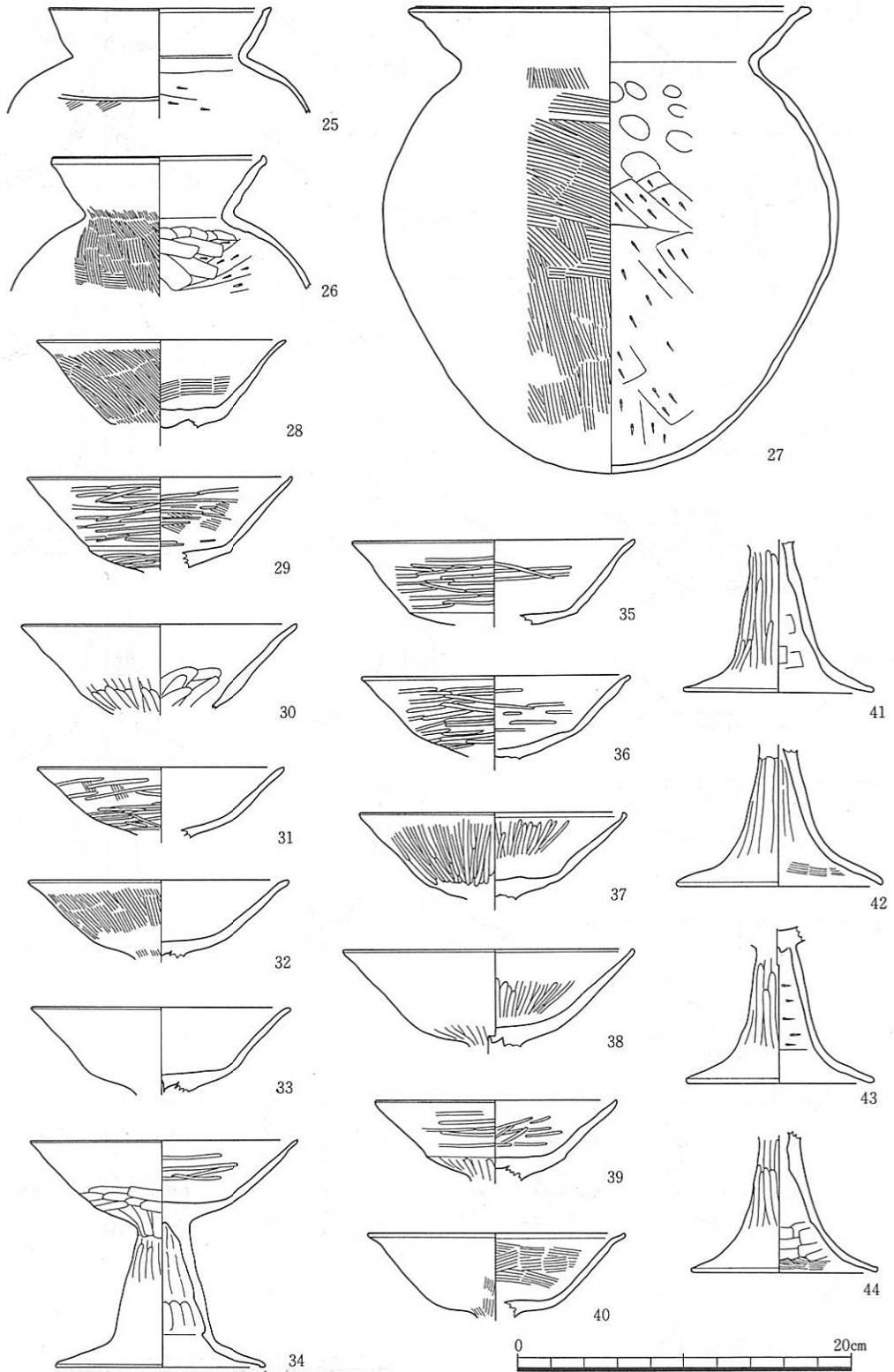
小型丸底壺 (64～66) 64・65はD類、66はC₂類である。64の口縁部は短かく、端部は小さく外反し薄く舌状におさめる。体部外面はヘラケズリの後横方向に細かなヘラミガキを密に施す。明赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径7.4cm。体部最大径8.0cm。器高7.5cm。65は器壁が厚く、



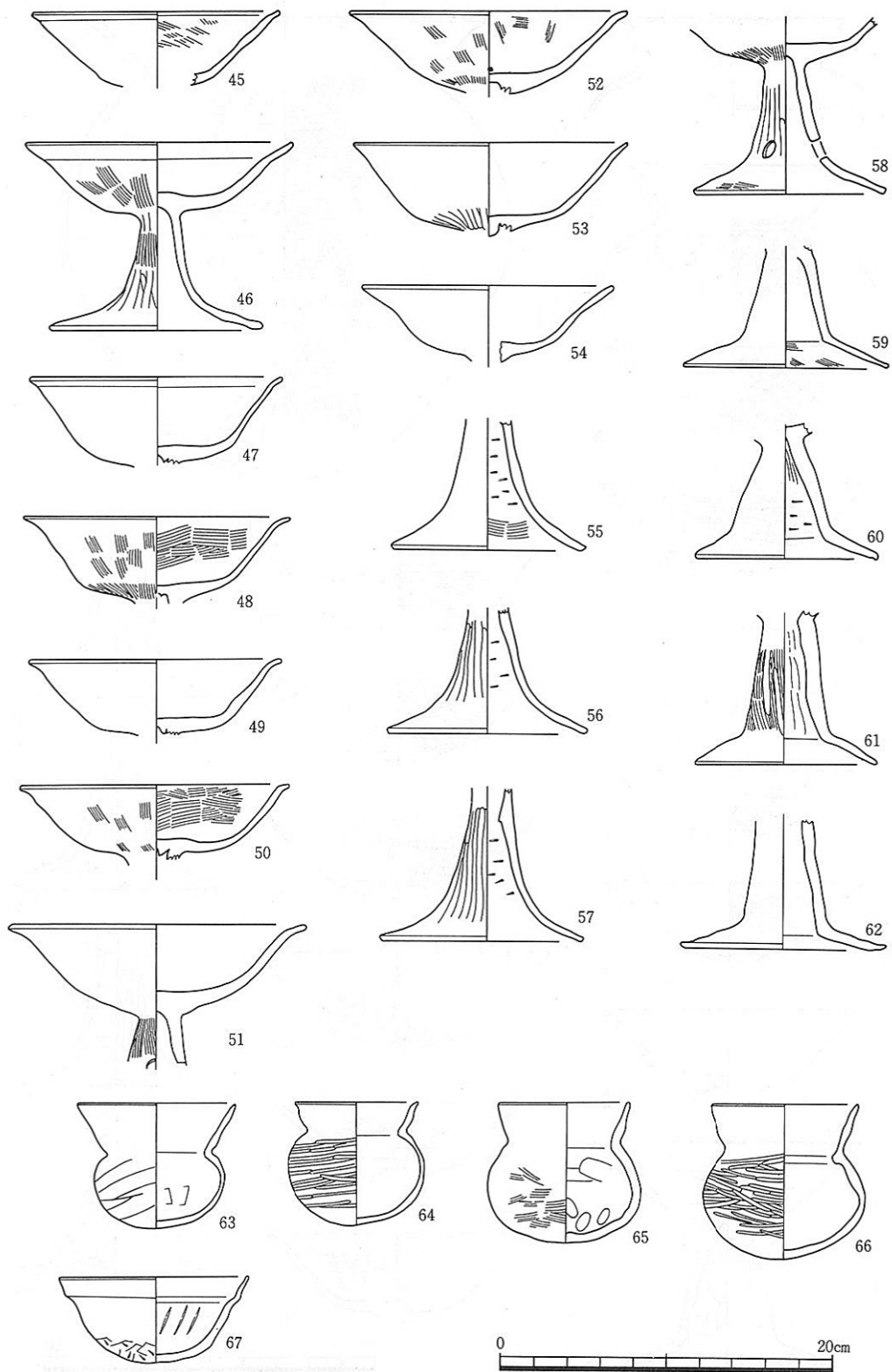
第191図 トレンチ部包含層出土遺物実測図



第192図 トレンチ部包含層出土遺物実測図(2)



第193図 トレンチ部包含層出土遺物実測図(3)



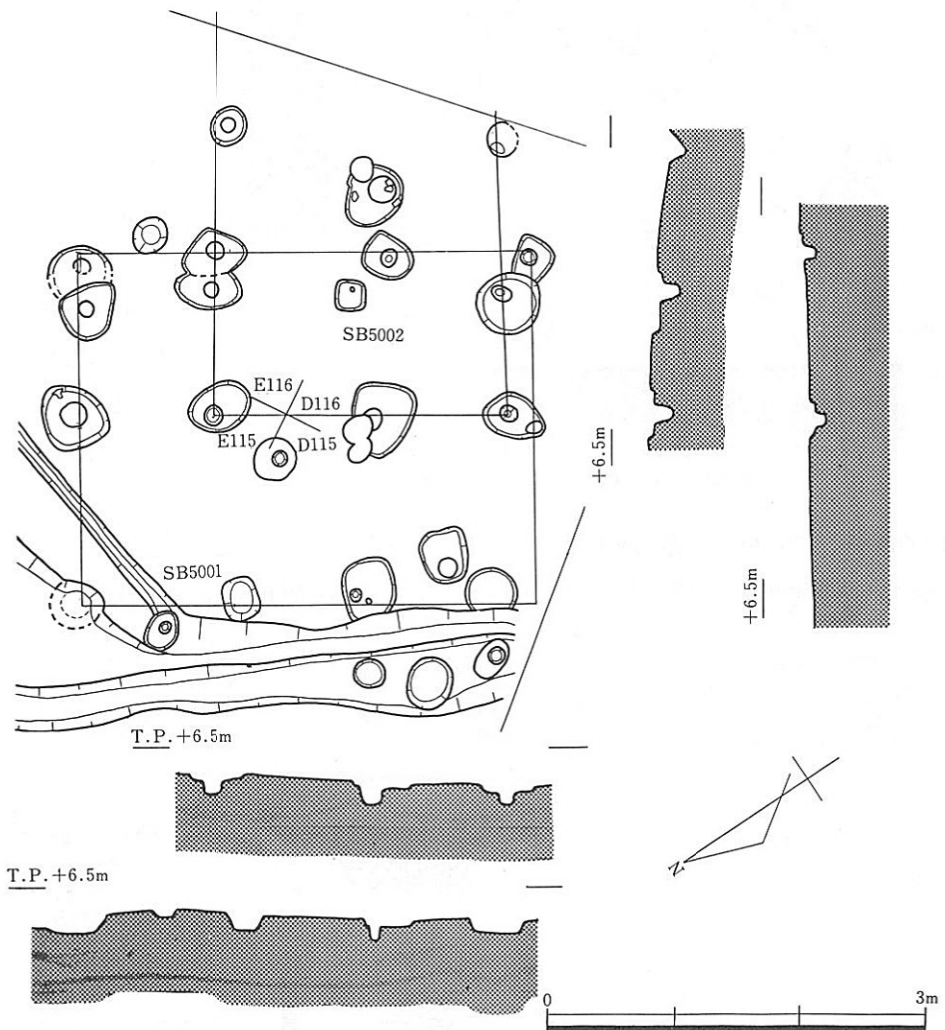
第194図 トレンチ部包含層出土遺物実測図(4)

胎土調整ともに粗雑である。外面体部下半にはハケメ、内面体部下半以下には指頭圧痕が認められる。口径7.8cm。体部最大径9.2cm。器高8.5cm。66の口縁部はやや上方へ外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。体部外面にはヘラミガキを密に施す。外面には二次的な火を受けて赤変する箇所が見られる。にぶい黄橙色を呈す。口径8.7cm。体部最大径9.8cm。器高9.4cm。

小型有段鉢 (67) 口縁部内外面の段には丸味を持ち、段は浅い。底部外面へラケズリ調整を施す。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラ痕が認められる。灰黄褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。口径11.4cm。器高5.3cm。層上面からの出土である。

2. 古墳時代中期

遺構が集中するのは、Fトレンチ、D～H-115～126地区の中期自然河川N R5001の左岸で、右岸では、C-4トレンチ南西コーナーで木枠組みの井戸が一基検出されたのみである。左岸部遺



第195図 S B5001・5002遺構平面図・断面図

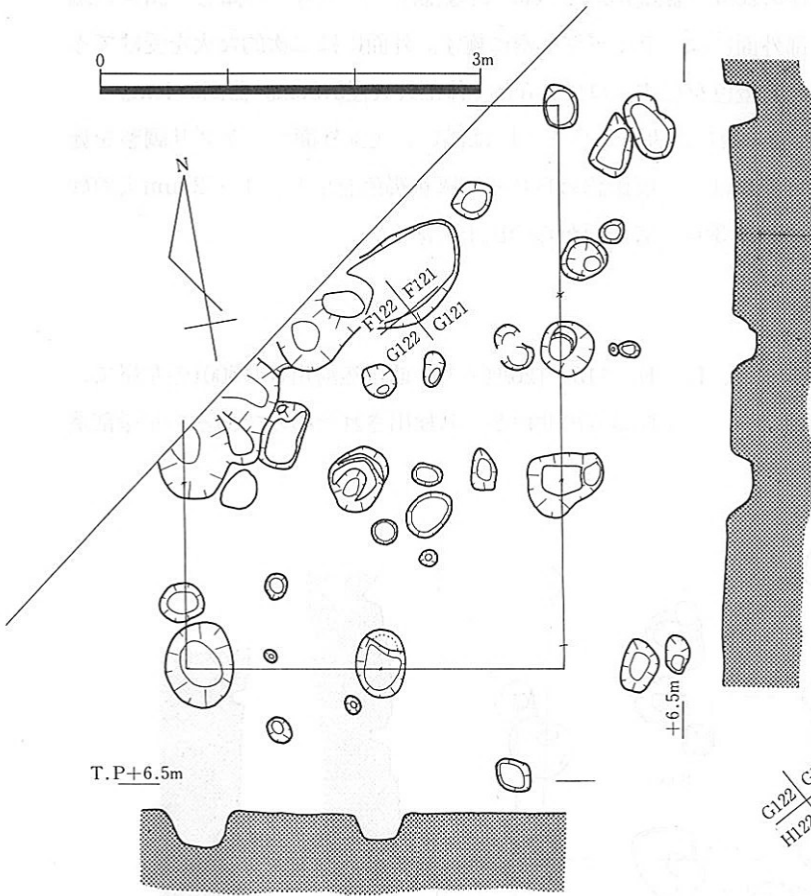
構面は、第7層一砂礫層をベースとし、T.P.+6.2~6.6mの間に位置する。右岸遺構面はT.

P.+6.0mにあり、北に向かって徐々に低くなっている。

S B 5001 (第195図、図版44)

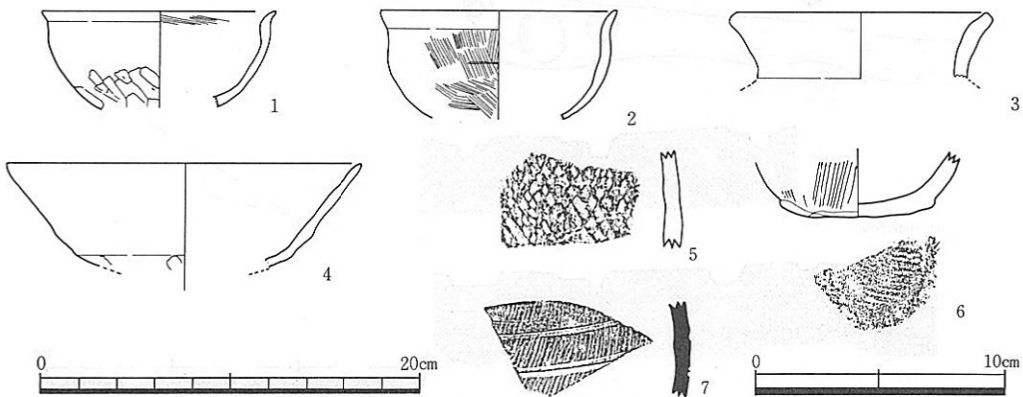
F-3 トレンチ、D・E-115・116地区に位置する。3間(3.6m)×2間(2.8m)の建物で、S B 5002と重複する。棟方向は、N-69°-Wを示す。各柱間は不揃いで、桁行き110~140cm・梁行130~150cmを測る。柱堀形は、一辺40~50cm・深さ20cmの方形を呈し、柱穴は、径8cm・深さ20cmを測る。

S B 5002 (195図、図版44)



第196図 S B 5003遺構平面図・断面図

S B 5001の南東で重複し、更に調査区外に延びる。2間(2.3m)×2間(2.3m)を検出した。棟方向は、S B 5001とほぼ直交し、N-21°-Eを示す。各柱間是不揃いで、桁行き100~115cm・



第197図 S B 5003出土遺物実測図

梁行110~113cmを測る。柱掘形は、一辺30~40cmの方形を呈するものと、径25~50cmの不整形円形を呈するものがある。柱穴は、径13cm・深さ20cmを測る。

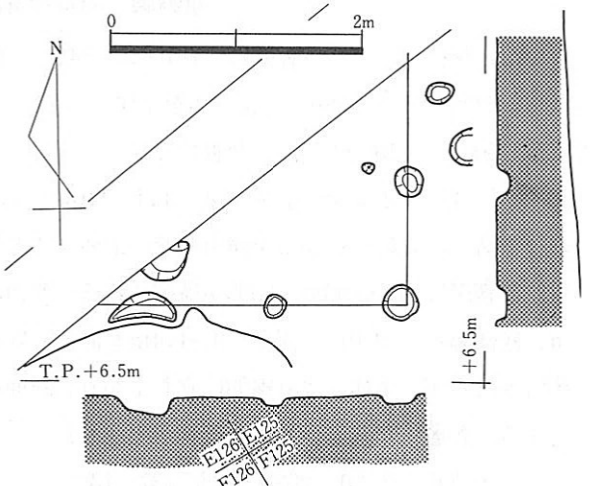
S B 5003 (第196図、図版44)

Fトレンチ、F・G-121・122地区に位置する。3間(4.5m)×2間(3.0m)の建物で、北西コーナー部は調査区外にある。棟方向は、N-5°-Eを示す。各柱間には不揃いで、桁行き105~190cm・梁行145~155cmを測る。柱掘形は、一辺40~50cm・深さ30cmの方形を呈する。柱掘形からは、土師器・韓式系土器・縄蓆文土器の破片が出土した。

出土遺物 (第197図、図版135)

1・2は、内弯して立ち上がる体部と外方へ小さくひきだす口縁部とからなる土師器坏で、底部を欠損する。1は、体部下半にヘラケズリ調整、2は、体部外面にハケメ調整を施し、体部内面には丁寧なナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径12.3cm。残存高5.5~6.5cm。船橋遺跡H-II坏A類に類似する。⁽³⁾3は、土師器壺の口縁部片である。口縁端部は断面四角形におさめる。口径14.0cm。4は、土師器高坏の坏部である。外面底部との境には稜をなす。口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。底部外面にヘラケズリ調整、口縁部に丁寧なヨコナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土は精良である。口径18.6cm。残存高5.3cm。

5・6は、軟質の韓式系土器で、6は、鉢の底部である。橙色を呈し、2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。底部周辺にヘラケズリ調整、体部外面に粗いハケメ調整、内面にナデ調整を施す。残存高2.5cm。7は、縄蓆文である。

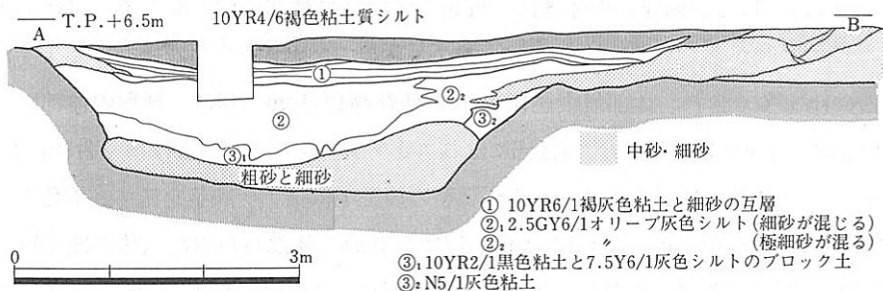


第198図 S B 5004平面図・断面図

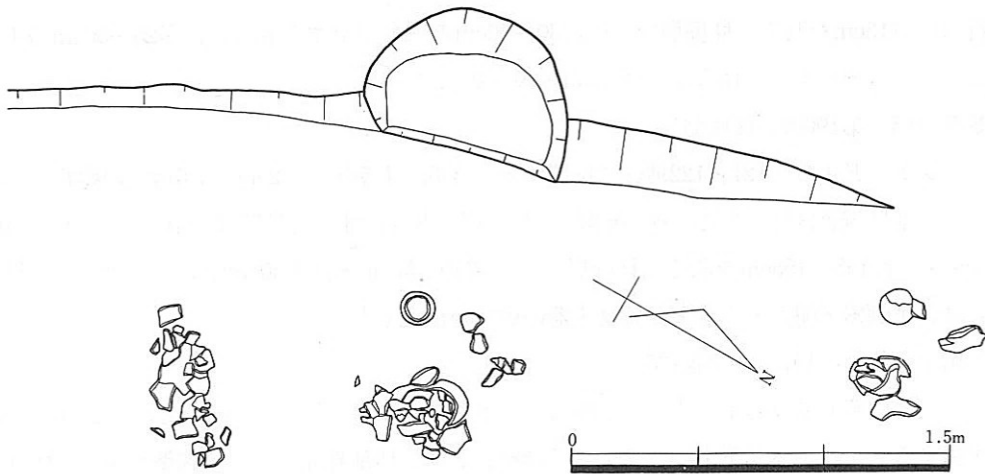
5・6は、軟質の韓式系土器で、6は、鉢の底部である。橙色を呈し、2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。底部周辺にヘラケズリ調整、体部外面に粗いハケメ調整、内面にナデ調整を施す。残存高2.5cm。7は、縄蓆文である。

S B 5004 (第198図、図版45)

Fトレンチ、H-126地区に位置し、その大半が調査区外にある。東南部の2間(2m)×1間



第199図 S D 5001土層断面図



第200図 S D 5001遺物出土状況図

(1 m) を検出した。各柱間は、約100cmを測る。東側柱列でN-8.5°-Eを示す。柱掘形は、径18~28cm、深さ10cmの不整円形を呈する。

S D 5001 (第199・200図、図版45)

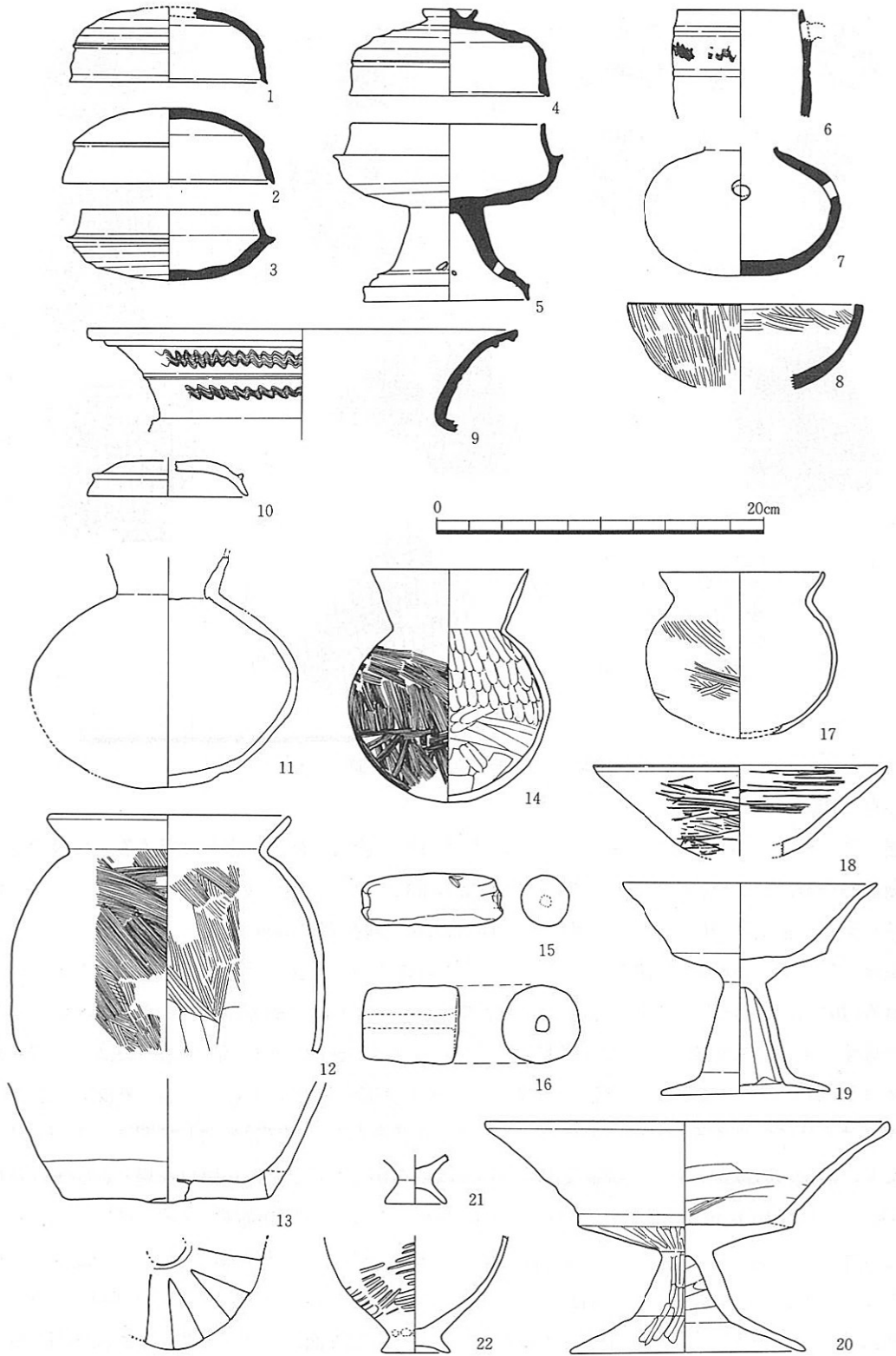
F・F-3・4 トレンチ、F~J-114~116地区に位置する。N-50°-W方向にほぼ直線的にのびる溝で、総延長約25mを検出した。南西部にあたるF-4 トレンチでは、NR5001に続き、肩部に護岸杭列S・S 5004・5005が構築される。北西部は調査区外へ更に延びる。肩部幅3.2~5.6 m、底部幅1.1~3.0m、深さ1.0~1.4mを測る。底面は比較的平坦で、壁は、一部で2段になる箇所もあるが、全体には直線的に立ち上がり、断面逆台形を呈する。埋土は、粗砂、細砂を主体とする。各層中からは、多数の遺物が出土した。

出土遺物 (第201~202図、図版137~139)

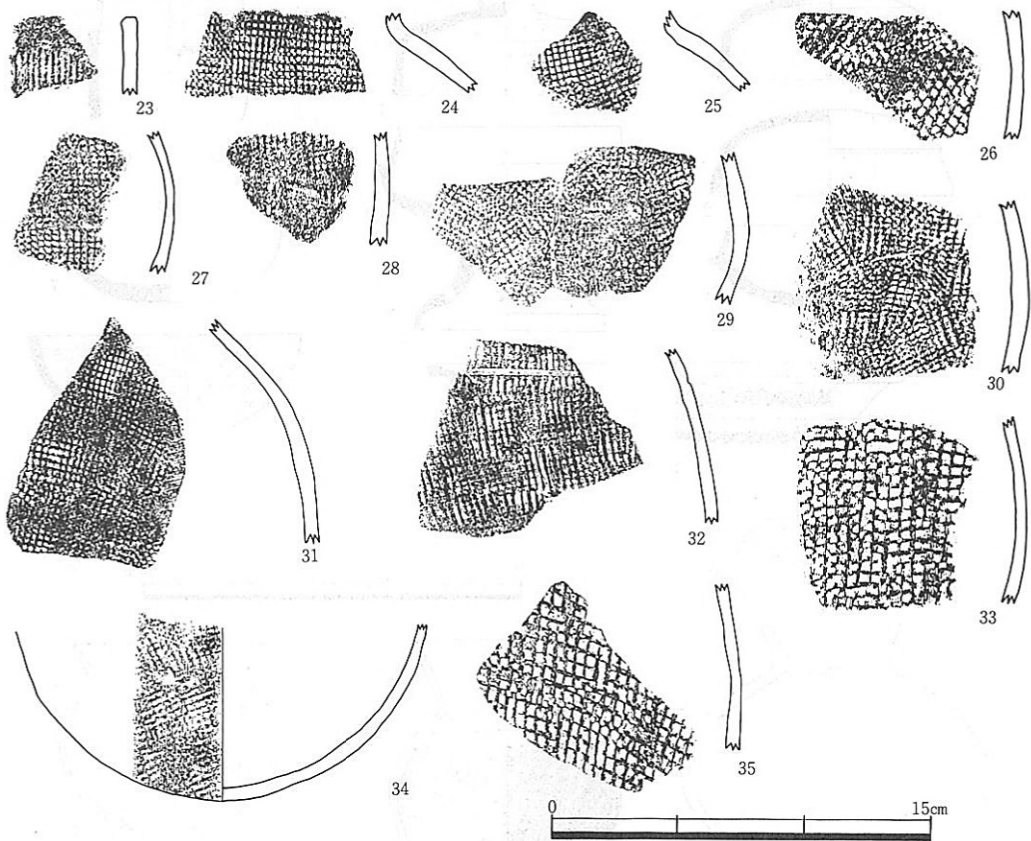
須恵器一坏・蓋・高坏・把手付鉢・甕・甌・甗、土師器一蓋・壺・甕・高坏・甌、韓式系土器一甌・甕、黒色研磨土器一蓋など多種におよぶ。須恵器は、いずれも中村 浩 氏の編年によるI型式2~3段階に相当するものである⁽⁴⁾。なお、須恵器(1~9)と黒色研磨土器(10)については、韓式系土器の検討と合わせて、第VI章第2節で触れる事とする。

土師器

壺(11・14・17) 11は、偏球形の体部に、外傾して開く口縁部の付くもので、口縁部上半を欠損する。器壁の磨滅が著しく調整技法については明らかでない。灰白色を呈し、胎土中には1~2mm大の砂粒を多く含む。体部最大径16.4cm。残存高14.1cm。14は、球形の体部に、外傾して開く口縁部の付く直口壺である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、端部は薄く舌状におさめる。体部外面はハケメ調整、体部内面はヘラナデ調整の後上半に指ナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径9.5cm。器高14.2cm。17は、球形の体部から内弯気味に開く短い口縁部の付く広口壺である。底部は欠損しているが、その割れ口には煤の付着が認められる。体部外面にハケメ調整、体部内面にナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径9.9cm。



第201図 S D5001出土遺物実測図(1)



第202図 S D5001出土遺物実測図(2)

残存高10cm。

甕(12) 「く」の字形に屈曲する口縁部が付く長胴の甕で、体部下半を欠損する。口縁端部は断面四角形におさめ、内傾する面を持つ。体部外面はハケメ調整の後ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。口径14.2cm。残存高14.5cm。

高坏(18~20) 18は、脚部を欠損する。小さめの底部から大きく開く口縁部の付く布留式高坏II A₂類で、底部との境は丸味を持ち不明瞭である。内外面は、横方向のヘラミガキ調整を丁寧に施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径17.8cm。残存高5.5cm。19は、布留式高坏II B₁類である。坏部外面、底部と口縁部との境に明瞭な稜をなし、口縁部は外反して開き、端部は舌状におさめる。脚部は中空の、エンタシス状をなし、裾部は屈曲して開き、内面に稜をなす。器壁の磨滅が著しく、調整技法については明らかでない。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径15.6cm。裾部径10.2cm。器高12.8cm。20は、大型の高坏である。坏部外面、底部と口縁部との境には段をなし、口縁部は外反して大きく開く。端部は僅かに肥厚し、断面四角形をなす。大きな坏部に対して、脚部は低くて小さい。中空の筒部から裾部へは、屈曲して移行し、裾部は「ハ」の字に開き、端部は舌状におさめる。口縁部外面はヨコナデ調整、底部外面と脚部外面に縦方向のヘラミガキ調整、坏部内面にハケメ調整の後ヘラナデ調整、脚部内面にヘラケズ

り調整を施す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径24.3cm。裾部径14.2cm。器高13.9cm。

甗 (13) 体部下半のみで、上半部を欠損する。。中央に円形、その周辺に三角形の孔を穿孔する多孔式の甗である。底部は平底で、体部は外上方へまっすぐ立ち上がる。底部周辺をヘラケズリ調整、体部内外面にナデ調整を施す。胎土はやや粗い。底径12.5cm。残存高7.5cm。

その他の土製品

製塩土器 (21・22) 21は、脚台部のみの破片である。内外面にナデ調整を施す。脚部径3.8cm。22は、脚台部と内湾する体部とからなり、体部上半を欠損する。外面に粗いタタキメ、内面に丁寧なナデ調整を施す。脚部径4.2cm。残存高7.0cm。いずれも火を受けて赤変している。

土錘 (15・16) 丁寧なつくりのもの16と、外面に指頭圧痕を残したままで粗雑なつくりのもの15がある。15は、径3.0cm・長さ8.5cm。16は、径4.7cm・長さ6.0cm。

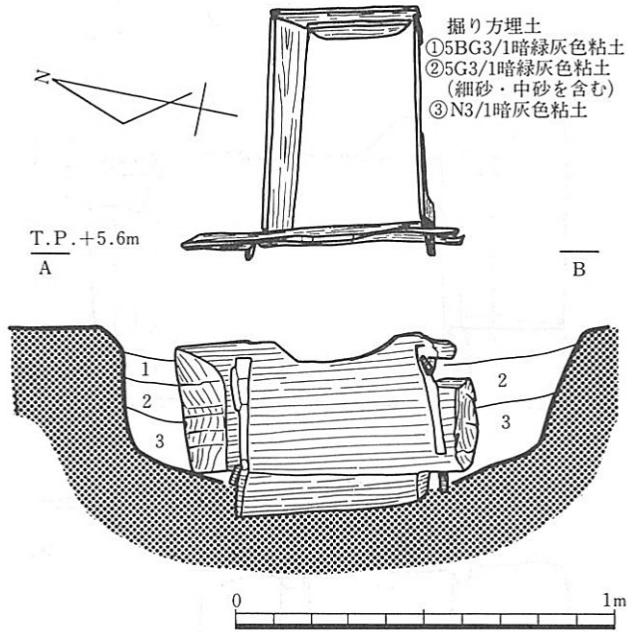
S E 5001 (第203図、図版46)

C-4 トレンチの南東コーナーに位置する木枠組みの井戸である。遺構は、古墳時代前期包含層の直上に堆積する第7層-青灰色粘土層を掘削中に、木枠の上面とその直上からの土器片の出土によって検出された。井戸枠掘り方の検出に努めたが、平面では確認する事が出来ず、土層断面の観察によってようやく確認された。従って、その平面形態や規模などについては明らかでない。井戸掘り方底面は、前期自然河川NR4001の砂層に達する。井戸枠は、最下段の1段のみが検出された。井戸枠は、4枚の板材を使用して「柄差組⁽⁵⁾」の技法を応用したものと考えられる。内寸法は、鋼矢板の打設の際の振動や土圧の影響を受けて若干変形しているが、0.45×0.6m・深さ0.35mを測る。井戸枠内の内度は、砂粒を多く含む暗緑灰色粘質シルトである。井戸枠内からは、部材の一部と思われる木製品や土器片が少量出土したのみであった。

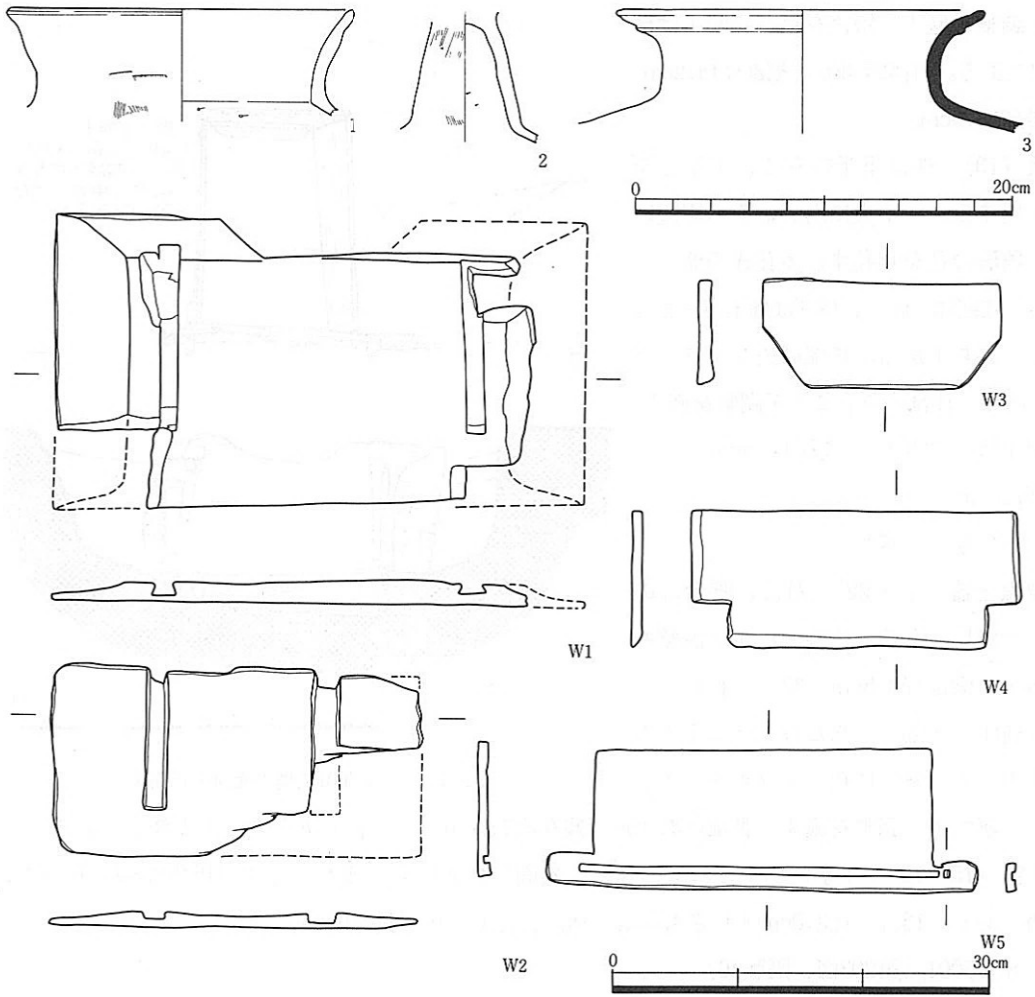
出土遺物 (第204図、図版135・136)

土師器

高坏 (2) エンタシス状の中空の脚部片である。井戸枠上面で出土した。坏部と脚裾部を欠損する。外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。灰黄白色を呈し、胎土はやや粗い。残存高



第203図 S E 5001遺構平面図・断面図



第204図 S E 5001出土遺物実測図

7.1cm。

甕（1） 口縁部の約5分の1の破片である。頸部より、外上方へゆるく外反して開き、端部は丸くおさめる。外面下半にはハケメが認められ、頸部内面はヘラケズリ調整を施す。灰白色を呈し、胎土は粗い。口径18.4cm。残存高5.6cm。

須恵器

甕（3） 口縁部の約5分の1、肩部から口縁部にかけての破片である。肩部との境は丸味を持って、上方へ立ち上がった後上半でゆるやかに外反し、端部に至る。端部は丸くおさめられ、外面端部直下には、1条の突帯が巡る。全体にシャープさに欠ける。内外面は丁寧にナデ調整を施す。I型式2～3段階に相当するものと思われる。

木製品

W1 征目取りの板材を加工した、木枠の部材である。長さ82.8cm。幅45cm。最大厚4cm。短辺側の両端を22cm、長辺側一边を約7cmの所より、断面台形に削り落とし、更に長辺側の中央

に、20×30cm、深さ3.2cmに台形に切り落としている。短辺側より約10cmの所には、断面台形をなす、幅3～4cm、深さ2cm、長さ13.5cmの溝2本を彫り、溝の両端には、3.0×3.7cmの柄穴を彫り抜いている。井戸枠の西側の板材として用いられていたものである。

W2 征目取りの板材を加工したものである。長さ59cm。幅30cm。最大厚2.5cmを測るが、かなり腐朽している。W1と同様に、短辺側の両端約12cmを斜めに削り落とし、片面に、幅3.5cm、深さ1.0～1.5cmの溝2本を、端から9.5cmの所に彫っている。溝の一端は、長辺側まで達している。

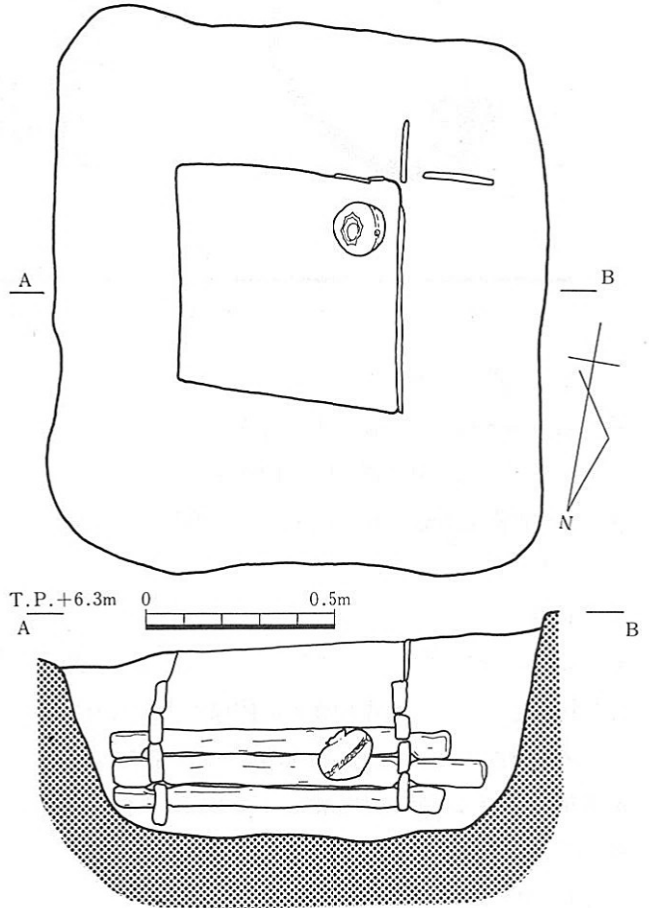
W3 征目取りの板材加工したもので、井戸枠の部材の一部と思われる。長さ38cm。幅12cm。厚さ2.5cm。長辺側の2隅を三角形に切り落として、台形に造り出している。W1の逆台形の切り込みとはほぼ一致する。

W4 井戸枠内から出土した板材である。長さ25cm。幅12cm。厚さ1.5cm。長辺側の2隅を、方3cmに切り落とし、凸形に造り出している。

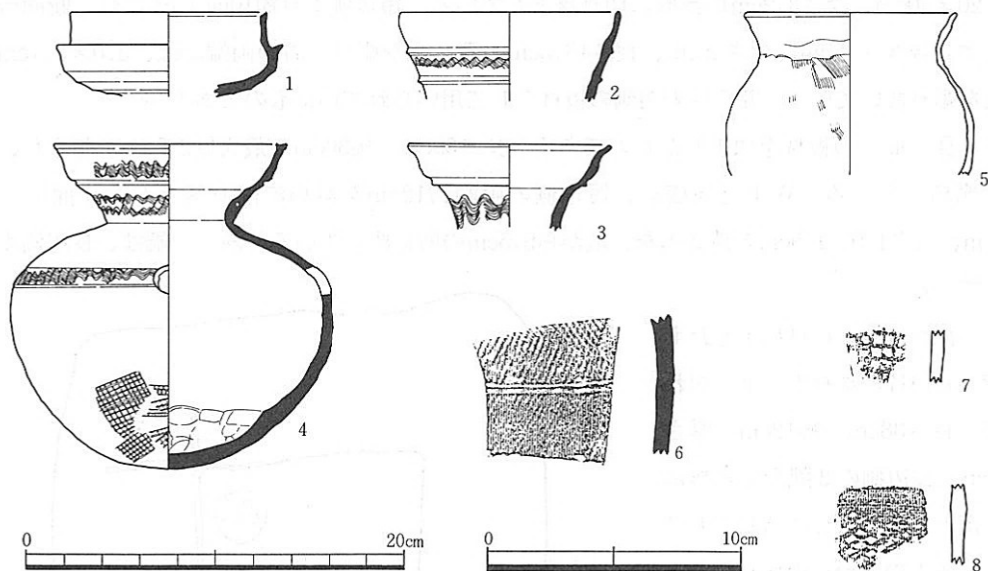
W5 征目取りの板材を加工したもので、井戸枠の部材である。長さ53～69cm。幅22cm。厚さ1.3cm。長辺側の一边には、長さ16cmの柄が設けられ、長さ57cm、幅1.0cm、深さ0.8cmの溝が彫られ、その一端には、1.0cm四方の穴が彫られている。穴は、柄の基部寄り2.0cmの所にあり、深さ0.5cmで貫通しない。

S E 5002 (第205図、図版46)

Fトレンチ、I-123地区で検出された木枠組みの井戸である。井戸枠掘り方は、1.3×1.4m、深さ0.6mの方形を呈する。木枠は、「平組」によるもので、内寸法は、一辺0.6m、深さ0.4mを測る。枠材は、長さ90～100cm、幅10cm、厚さ3cmの板材で、両端より約10cmの所の両面を、凹状に切り込んでいる。井戸枠は、調査後発泡ウレタンにより取り上げ、保存処理を行なった。井戸枠内からは、ほぼ完形の須恵器甕が出土した。



第205図 S E 5002遺構平面図・断面図



第206図 S E 5002出土遺物実測図

出土遺物 (第206図)

須恵器一坏・甕、土師器一甕、韓式系土器、縄蓆文土器が出土した。須恵器(1~4)・韓式系土器(7・8)・縄蓆文土器(6)の説明は、第VI章第2節で行なう。

土師器

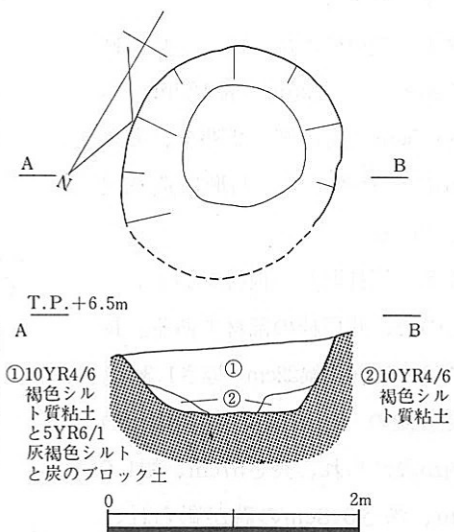
甕(5) やや下膨らみの体部とゆるく外反して開く口縁部とからなる小型の甕で、体部下半を欠損する。体部外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。灰黄褐色を呈し、胎土中には、1~2mm大の砂粒が多く含まれる。口径11cm。残存高8.6cm。

S E 5003 (第207図)

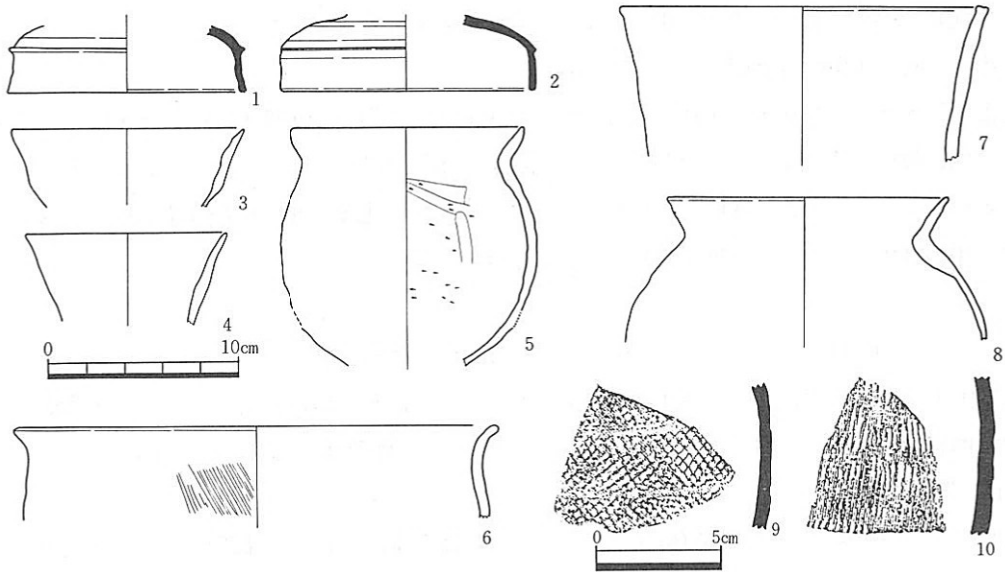
S E 5002の西側に隣接した位置で検出された、径約1.7mの円形を呈する素掘りの井戸である。深さ0.6mが残存する。底面は、径約0.9mの平坦な円形を呈し、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。

出土遺物 (第208図)

須恵器一坏蓋、韓式系土器、土師器一壺・甕・甗が出土した。須恵器は、S E 5002出土のものと同時期のものである。須恵器(1・2)・韓式系土器(9・10)の説明は、第IV章第2節で行なう。



第207図 S E 5003遺構平面図・断面図



第208図 S E 5003出土遺物実測図

土師器

壺（3・4） いずれも口縁部のみで、全体の形態については明確にし得ないが、船橋O-IV壺C1・C2⁽⁷⁾類に類似するものと推察される。淡黄色を呈し、胎土は粗い。3は、口径12cm。4は、口径10.5cm。

甕（5・8） 5は、短く外傾する口縁部のつく小型の甕で、底部を欠損する。口縁部外面は、丸く膨らみ端部は舌状におさめる。体部外面にナデ調整、内面にヘラズリの後軽くナデ調整を施す。体部外面と体部内面下半には煤が付着する。にぶい黄橙色を呈し、1～2mm大の砂粒を多量に含み胎土は粗い。口径12.3cm。残存高13.3cm。8は、球形の体部に、短く外反する口縁部のつく甕で、体部下半を欠損する。頸部は、器壁が厚く、口縁端部は、僅かに外方へつまみだして舌状におさめる。器壁の磨滅が著しく、調整については明らかでなく、頸部内面に指頭圧痕が観察されただけである。口径14.6cm。残存高7.7cm。

甗（6・7） 体部が外上方へ直線的に開き、若干内方へ肥厚し、上端に平坦な面を持つ口縁端部に至るもの7と、口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめるもの6がある。口縁部はヨコナデ調整で、6は、体部外面にハケメ調整を施す。7は、口径19.4cm。残存高7.9cm。6は、口径25.5cm。残存高5.0cm。

S Q 5001（第209図、図版47）

Fトレンチ G・H-117～120地区に位置する。古墳時代前期自然河川NR4003が活動を停止した後でできた、推定長径11m。短径5m。深さ0.3～0.5mの窪地に堆積する土器群である。土器群は、主にF・G-117・118地区、4.0×11.5mの範囲に集中し、調査区外にも広がっているものと推察される。埋土内には、層厚10cm前後の焼土を伴う炭層が挟在する。土器群は、この炭層上面を中心として出土し、そのなかには2次的な火を受けているものもあったが、埋土の層理

面、窪地底面のいずれにも火を使用したような痕跡は認められなかった。

出土遺物（第210～215図、図版140～146）

須恵器一坏・坏蓋・高坏・椀・鉢・器台・甕・壺・甃、土師器一壺・甕・高坏・鉢・甃、韓式系土器一甕、製塩土器、土錘を抽出した。この他にも、細片ではあるが、埴輪片も数点出土している。須恵器は、I型式2～3段階に相当するものである。須恵器（46～107・120～122）、韓式系土器（108～119）の説明は第VI章第2節でおこなう。

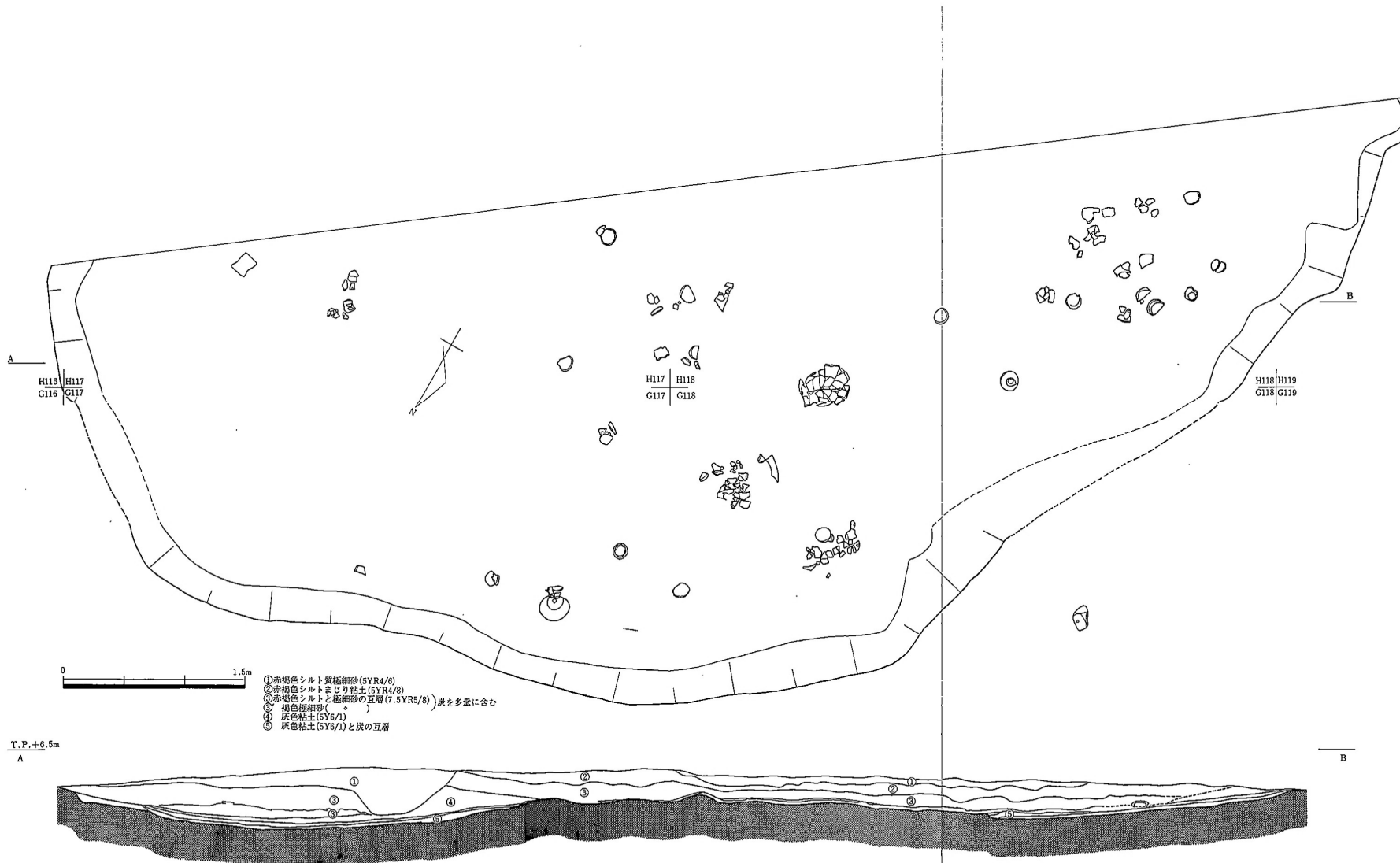
土師器

壺（1） やや偏球形の体部と外反する短い口縁部とからなる小型の壺である。底部は、小さな平底で中央は僅かに窪む。体部外面と口縁部内面にハケメ調整、体部内面にヘラケズリ調整、底部内外面にナデ調整を施す。橙色を呈し、1～5mm大の砂粒多くを含み、胎土は粗い。口径9.8cm。器高9.3cm。

鉢（2～4） 浅い椀状を呈する体部に、水平方向へ短くひきだした口縁部がつく小型の鉢で、口縁端部は内傾する平坦な面となる。内外面は、丁寧なナデ調整を施す。淡黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.7～12.9cm。

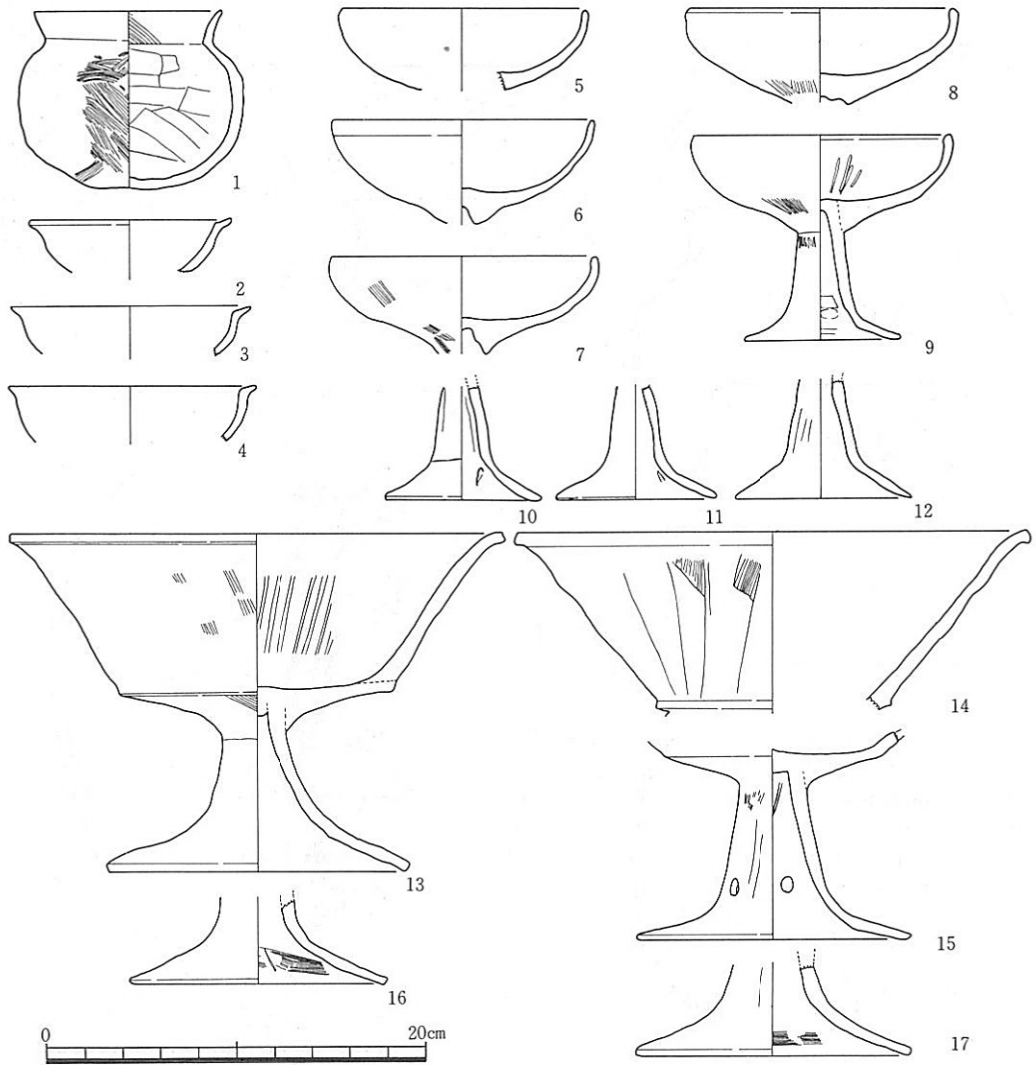
高坏（5～17） 坏部が椀状を呈するもの（5～9）とその脚部（10～12）と、坏底部との境に段を有し、口縁部が大きく開き深い坏部を持つ大型のもの（13～15）とその脚部（16・17）とがある。（5～9）は、坏部口縁にヨコナデ調整、底部外面にハケメ調整を施す。7・9は、坏部内面に放射状のヘラミガキ調整を施す。浅黄色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。9は、坏部口径13.4cm。裾部径8.2cm。器高10.9cm。13～15は、浅黄色を呈し、胎土は精良で、調整も丁寧である。13は、坏部外面にハケメ調整、内面に暗文風のヘラミガキ調整を施す。坏部口径26cm。裾部径16cm。器高17.9cm。14は、坏部内外面ともハケメ調整を施す。坏部口径27.2cm。残存高9.6cm。15は坏底部以下の破片である。坏底部の段は、さ程明瞭ではない。脚部には、四方に透し穴が穿孔されている。裾部径13.9cm。残存高10.4cm。

甕（18～34） 18は、球形の体部に外反する短い口縁部とからなる小型の甕で、体部下半を欠損している。口縁端部をわずかに上方へひきだし、丸くおさめる。頸部内面には、しぼり目が認められる。体部外面は、肩部以下をハケメ調整、体部内面は、ヘラケズリ調整を施す。体部中央には1条の沈線が巡る。淡黄色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口径10.5cm。残存高7.4cm。19・20は、布留式の甕である。19は、暗灰色を呈し、胎土中には、1～2mm大の砂粒を多く含む。口径12cm。20は、器壁も厚く、胴長の体部を呈する新しい段階のものである。内穹気味に立ち上がる口縁部は、端部を内方へ僅かに肥厚し、上端は平坦面となる。内面は、頸部以下にナデ調整を施す。灰白色を呈する。口径17.2cm。残存高6.9cm。24は、体部下半を欠損しているが、下膨らみの体部をもつものと推察される。外反する口縁部は、中位でやや肥厚し、短部は丸くおさめる。体部外面は、横方向のタタキの後、縦方向の粗いハケメ調整を施す。内面は、ヘラケズリ調整。灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口径18.2cm。残存高7.7cm。26・28・

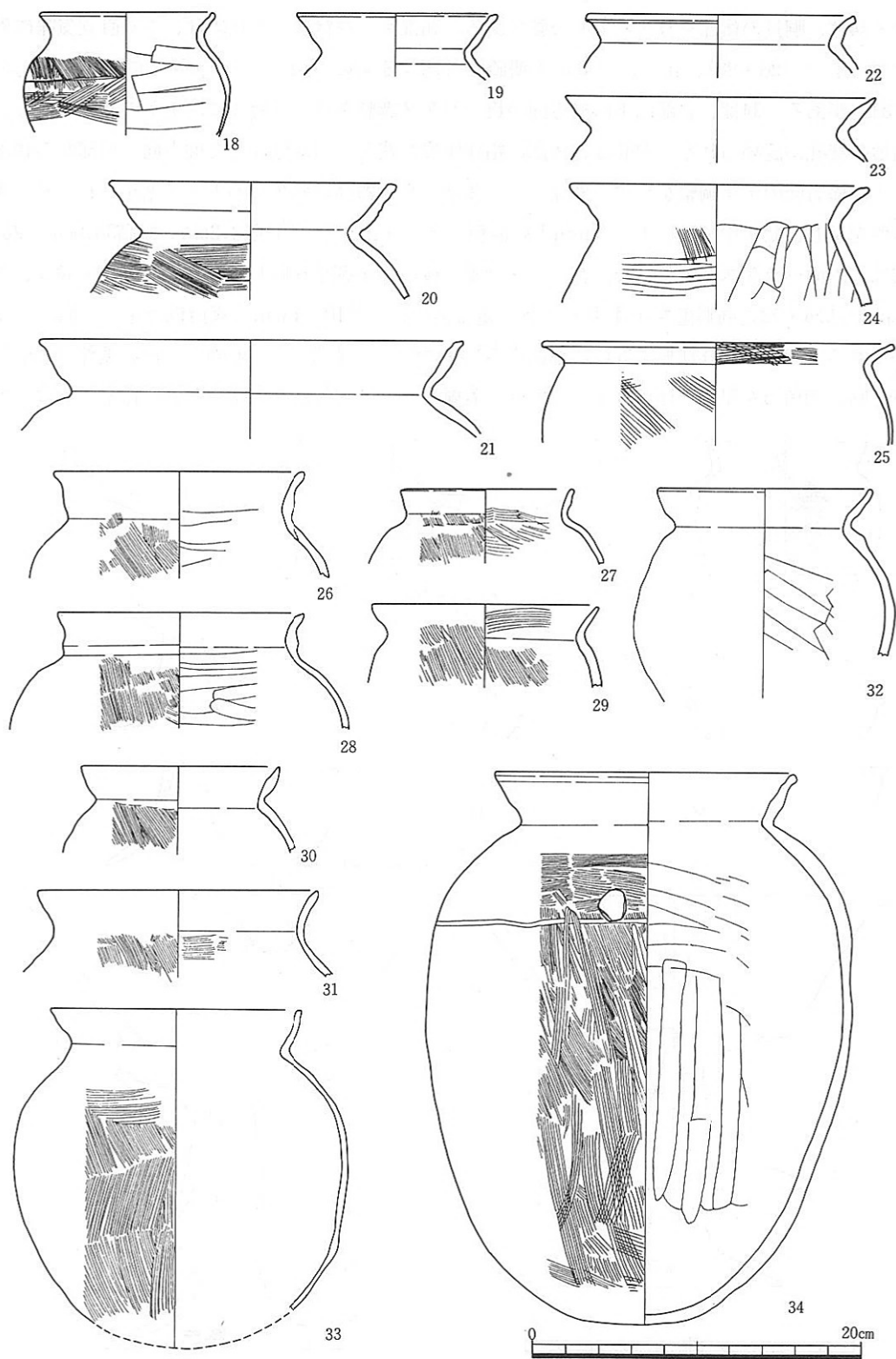


第209図 S Q5001遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図

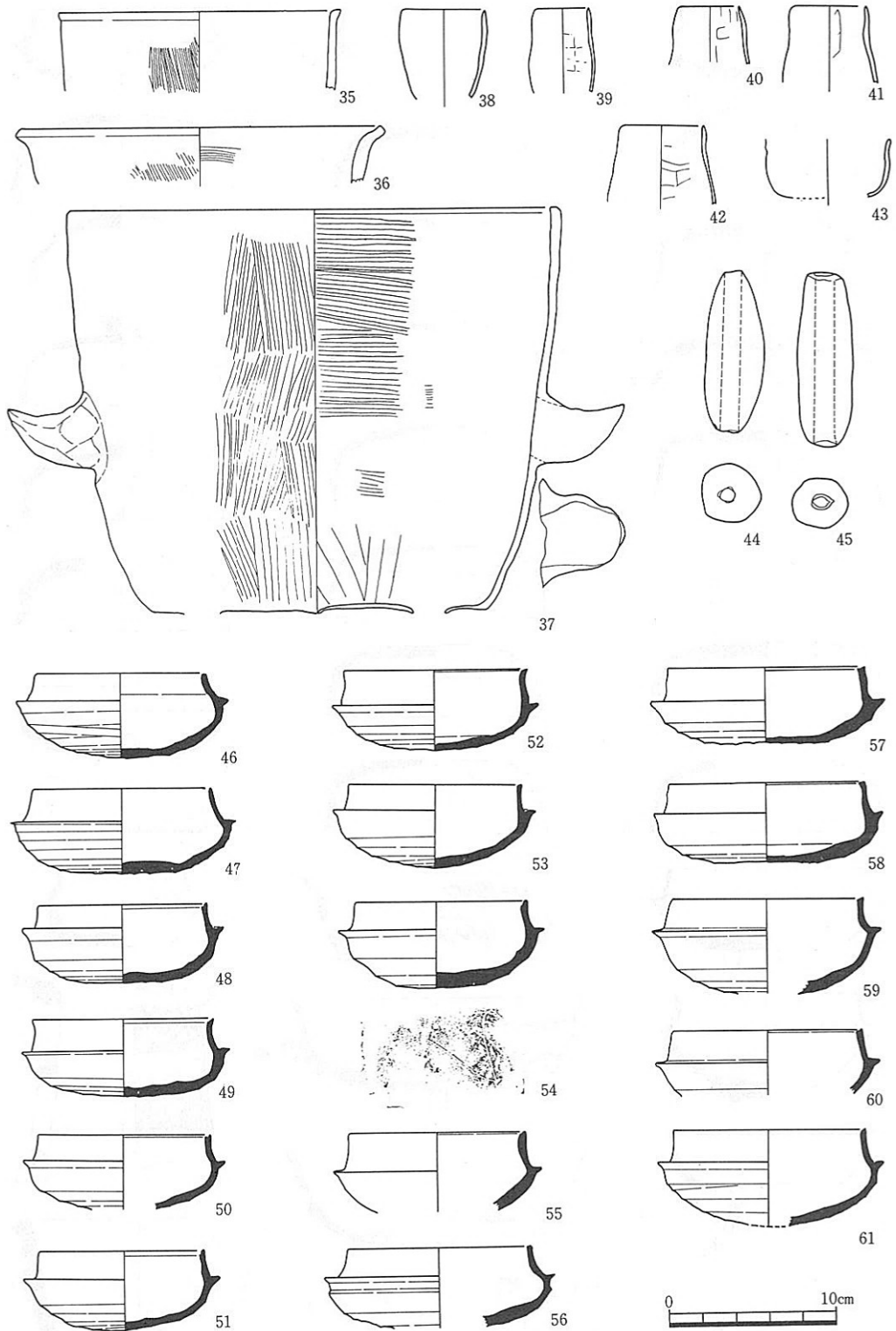
31・34は、胴長の体部を有する大型の甕である。頸部から口縁部の形状には、やや直立気味に外反するもの(26・28)、頸部との境が不明瞭で外弯するもの(31)、「く」の字に外傾するもの(34)がある。34は、肩部以下に縦方向の粗いハケメ調整を施す。肩部には1条の沈線が巡り、円形の穿孔が認められる。内面は、体部に指頭圧痕を残し、肩部付近まで縦方向、肩部から頸部までは横方向のナデ調整を施す。外面には、体部下半、器高の約3分の1まで煤が付着する。淡黄色を呈し、胎土中には、1～3mm大の砂粒が多く含まれる。口径18.3cm。器高33.6cm。26・28は、内面ヘラケズリ調整。25は、ハケメ調整の後にナデ調整を施している。27・29・30は、基本的には26・28と同形態を示す中・小型の甕である。口径10～13cm。灰白色を呈し、胎土は良好である。32は、ほぼ球形に近い体部に内弯気味に開く口縁部のつくもので、口縁端部は、面取りし断面四角形を呈す。体部外面は、器壁の剝離が著しく調整は明らかでない。体部内面は、斜



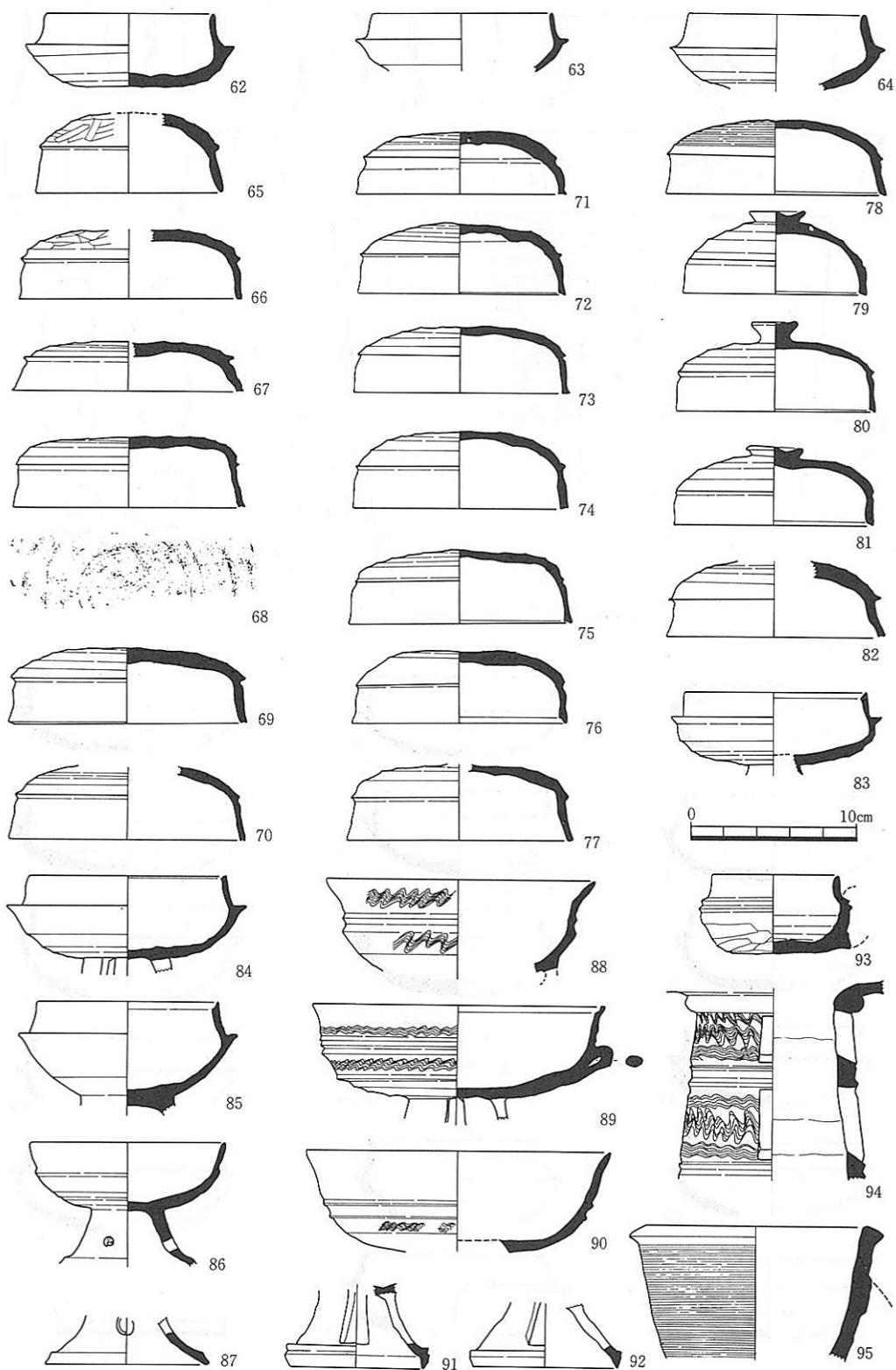
第210図 S Q5001出土遺物実測図(1)



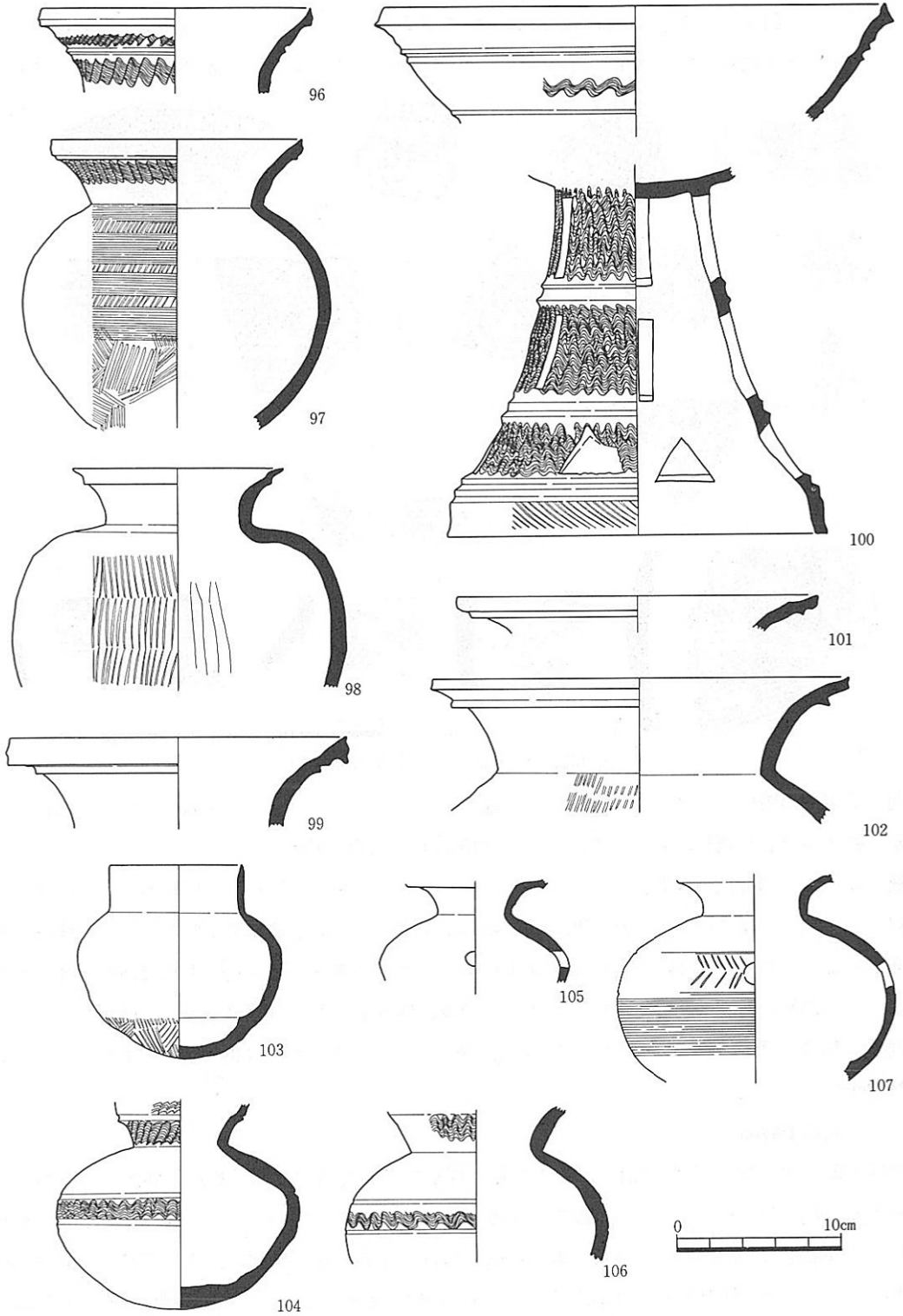
第211图 S Q5001出土遺物実測図(2)



第212図 S Q5001出土遺物実測図(3)

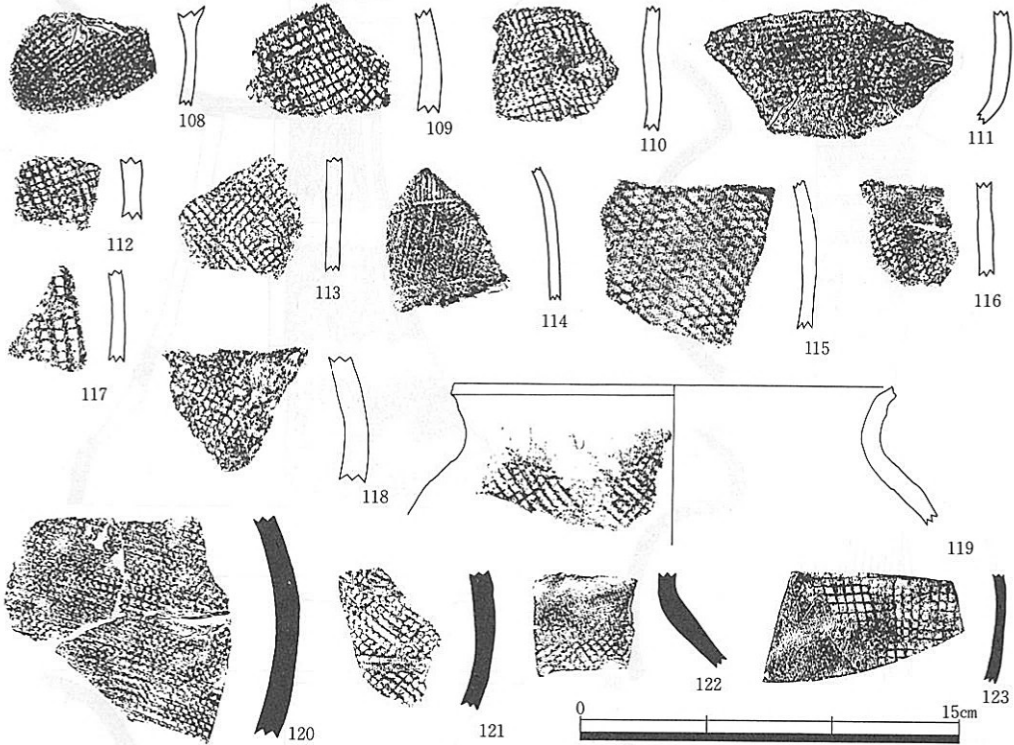


第213图 S Q5001出土遺物実測図(3)



第214図 S Q5001出土遺物実測図(4)

方向（下⇒上）にヘラケズリ調整を施す。灰白色を呈し、胎土中には2～3mm大の砂粒を僅かに含む。口径13cm。残存高9.8cm。33は、やや肩部のはる体部に、内穹気味に開く口縁部の付くもので、口縁端部は、断面四角形を呈し、外方へ僅かにひきだす。体部外面肩部以下を、横方



第215図 S Q5001出土遺物実測図（5）

向と縦方向の粗いハケメ調整、頸部から口縁部は、内外面ヨコナデ調整を施す。体部内面は、器壁の磨滅が著しく調整は明らかでない。口径15.3cm。残存高18cm。

甔（35～37） 36は、口縁部が短く外反し、端部は上方小さくへひきだし断面四角形を呈する。37は完形で、口径に比して器高が低い筒形の体部をもつ。口縁部は、やや肥厚して内穹する。体部中央よりやや下に、2個1対の牛角状の把手を付す。底部は、多孔式の平底である。体部外面はハケメ調整、内面は、縦方向のヘラケズリの後、体部中央から口縁部までに、横方向のハケメ調整を施す。灰白色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む胎土は粗い。口径29.8cm。器高24.2cm。

その他の土製品

製塩土器（38～43） 多数の細片が出土した。図示できたもののうち、6点を抽出した。38は、倒環形の脚部の付くものである。器壁の剝離が著しく調整は明らかでない。灰白色を呈す。39～43は、脚部を有しないものである。37～40は、体部上半の破片で外面は指ナデ調整、内面は、横方向のヘラナデ調整である。43は底部から体部にかけての破片である。内面調整は明らかでない。外面は、底部にナデ調整、体部にタタキを施している。灰白色を呈す。

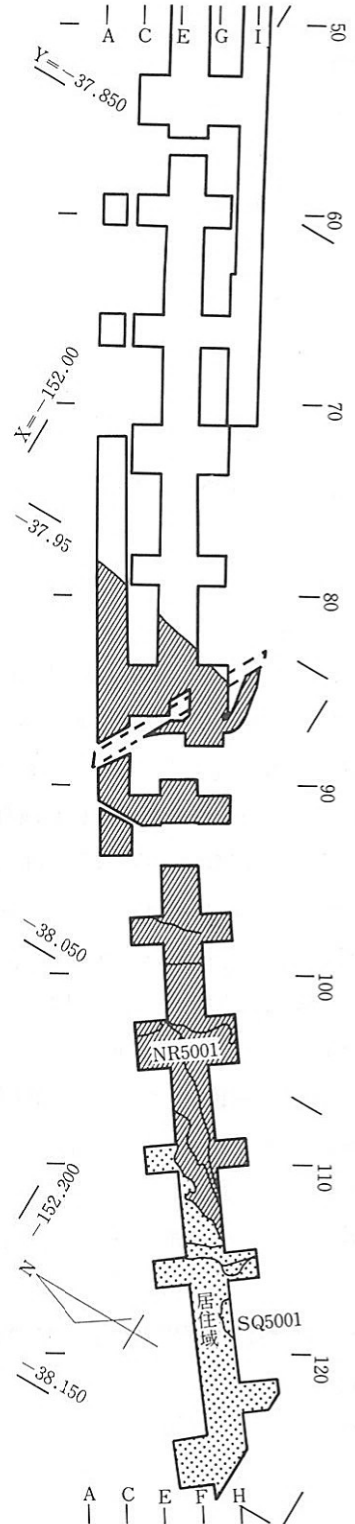
土錘(42・43) 赤灰白色を呈す。43は、全長9.8cm。最大幅3.4cm。42は、全長10.5cm。幅3.3cm。

N R 5001 (第216図、図版48・49)

調査区の南半部、74~116ラインの間をほぼ南北方向に北流する最大幅約120m前後の大河川である。この河川の前身河川と考えられる古墳時代前期自然河川N R 4002が、ほぼ同じ位置を北流しているが、N R 4002の埋土の大半はN R 5001によって流失している。周辺地域の状況より、当該期の長瀬川の本流と考えられる。N R 5001の右岸はCトレンチ78~86ラインの間に、左岸はFトレンチ109~116ラインの間にあるが、実際の流路の幅はもっと狭く、河床、河岸の侵食を繰返し、複雑な流れを見せながら、しだいに河床面を上昇させ、南へ移動していったものと推察される。この事は、調査区内南北土層断面の観察や、河川中で面を異なって検出された護岸杭列の存在によっても示される。ここで説明する、河床面・河岸は必ずしも実際の流路と対応するものではなく、河川内堆積物を全て除去した段階でのものである。右岸は、左岸より約20cm程高位にあり、細砂・シルトの互層を岸とする。更に北、Cトレンチ北半からB・Aトレンチにかけては、除々に下がり、N R 5001の活動によると考えられる黒色有機物や黄灰色の微砂・極細砂の薄層が数条も狭在する粘質シルト・粘土の層が堆積する。河床面からの立ち上がりは左岸に比べて急で、河床面・岸部への侵食が著しく、河床面には、侵食され大きな深みを形成する部分や、岸部より崩落した粘土塊が堆積する部分も見られた。これに対して左岸部は、粘土層を肩として、比較的ゆるやかに段をなしながら河床面に至る。堆積物の中には、極細砂・シルトの薄層を狭在する粘土質シルト層の堆積も見られたが、その大半は、ラミナの発達した粗砂・中砂・礫の互層で、豊富な水量があった事が窺える。護岸杭列は、中期遺構の集中するD・E・Fトレンチで検出され、また、河川中からは、弥生時代前期の土器をはじめ多数の土器が出土した。

出土遺物

- C・C-12トレンチ- (第217・218図、図版147・148)



第216図 N R 5001・居住域概略図

土師器

広口壺(1) 直立する頸部と大きく外反する口縁部のとからなる。口縁端部は、上方へ拡張し、端部外面には浅い凹線が2本巡る。器壁は厚く、鈍重な感じを受ける。灰黄色を呈し、胎土中には、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径21.4cm。

甗(2・3) 偏球形の体部を持つもので、口縁部を欠損する。2は、体部外面上半をハケメ調整の後ヨコナデ調整、体部下半をヘラケズリ調整、内面はナデ調整を施す。体部最大径14cm。残存高9.6cm。3は、体部外面をナデ調整、内面は、ヘラナデ調整を施し、底部付近に指頭圧痕が認められる。外面体部下半には、平行のタタキメが残る。灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底部中央外面には、「+」のヘラ記号が認めらる。体部最大径11.5cm。残存高8.2cm。

甗(4～9) 4は平底で下膨らみの体部と、外傾する口縁部とからなるものである。体部外面は、ハケメ調整の後体部上半の一部にヘラナデ調整、内面は、底部付近にハケメ調整、体部にヘラナデ調整を施す。底部付近は火を受けて赤変し、体部外面には、煤が付着する。口径12.8cm。器高16.5cm。5は、小さな平底に球形の体部をもつ小型の甗である。体部外面はハケメ調整、内面は、体部下半にヘラケズリ調整。上半に指ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.5cm。器高12.7cm。8は、やや肩の張る体部に、内弯気味に立ち上がる短い口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部外面は、平行タタキの後肩部と体部上半にヘラナデ調整、体部内面は、ヘラナデ調整を施す。体部下半は火を受けて赤変している。外面肩部から内面頸部にかけては、黒色有機質の付着がみられる。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。口径14cm。器高17.1cm。船橋遺跡H-II甗B(38)に酷似する。6の体部の形態は、8に酷似する。口縁部は外傾し、端部は舌状におさめる。体部外面にハケメ調整、内面に指ナデ調整を施す。外面には煤が付着し、内面にも黒色有機物が付着する。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。口径13.2cm。器高18.7cm。

高坏(8～11) 8の裾部外面には、絵画風の線刻が見られる。9は、碗状の坏部を持つもので、口縁部は内傾し、端部は断面四角形をなす。坏底部外面はハケメ調整、内面は暗文風のヘラミガキ調整を施す。脚部外面はヘラナデ調整、内面は、筒部にヘラナデ調整を施し、裾部との境に指頭圧痕と、筒部上半にしぼれ目を残す。脚部には、三方に透し穴が穿孔されている。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径13cm。裾部径9.3cm。器高11.6cm。9は、口縁部が外反する坏部をもつもので、坏底部との境は不明瞭である。外面と裾部内面は、粗いハケメ調整、坏部内面は、ナデ調整、筒部内面は、しぼり目の後にナデ調整を施す。口径15.5cm。裾部径11.9cm。器高12.5cm。

坏(12) 内弯気味に立ち上がる体部からそのまま直立して口縁部に至るもので、底部を欠損する。口縁端部は、舌状におさめる。口縁部はヨコナデ調整、外面は、体部下半をヘラケズリ、上半をヘラナデ調整、内面は指ナデ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土砂粒を多く含み粗い。口径13cm。残存高5.1cm。

甗(7) 外反する短い口縁部の付く長胴の甗で、体部下半を欠損する。体部上半から口縁部にかけて器壁を増し、端部は断面四角形におさめ、上端は平坦な面をなす。体部外面は縦方向の粗いハケメ調整を施し、内面は、口縁部直下に横方向のハケメ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、体部外面には黒斑がある。胎土は砂粒を多く含み粗い。口径21.2cm。

鉢(13) 平底で厚い底部から、外上方へ内弯しながら立ち上がるもので、体部の大半を欠損している。器面の磨滅が著しく調整は明らかでない。灰白色・褐配色を呈し、胎土中には、5mm大の砂粒も含まれ、粗い。

須恵器

蓋(15~17) 17は、平坦な天井部から、鋭い稜を持ちまっすぐ開く口縁部に至る。口縁端部内面には、段がつく。天井部の3分の2は、回転ヘラケズリ調整。口径12.8cm。器高4.6cm。15は、やや丸味のある天井部から、鋭い稜を持ち、やや開く口縁部に至る。天井部には、中央が窪むつまみがつき、口縁端部内面には、段がつく。内外面ロクロナデ調整。16は、口径に比して低く平坦な天井部から、水平方向に鋭い稜を持ち、「ハ」の字に開く口縁部に至るものである。天井部中央を欠く。天井部には、2本の列点文が施される。口径14.6cm。残存高3.0cm。

壺(18・19) 18は広口壺の口縁部である。口径16.5cm。全体的にシャープなつくりである。3本の突線を巡らし、突線間には、波状文を各1条配す。I型式2段階に比定される。19は、やや大きめの体部を持つ、直口壺である。口縁部上半を欠損する。底部外面は、ナデ調整で仕上げる。口縁部には2本の突線とその間に波状文を、体部中央には沈線とその下に波状文を施す。体部最大径15.1cm。残存高13.5cm。I型式2段階に比定される。

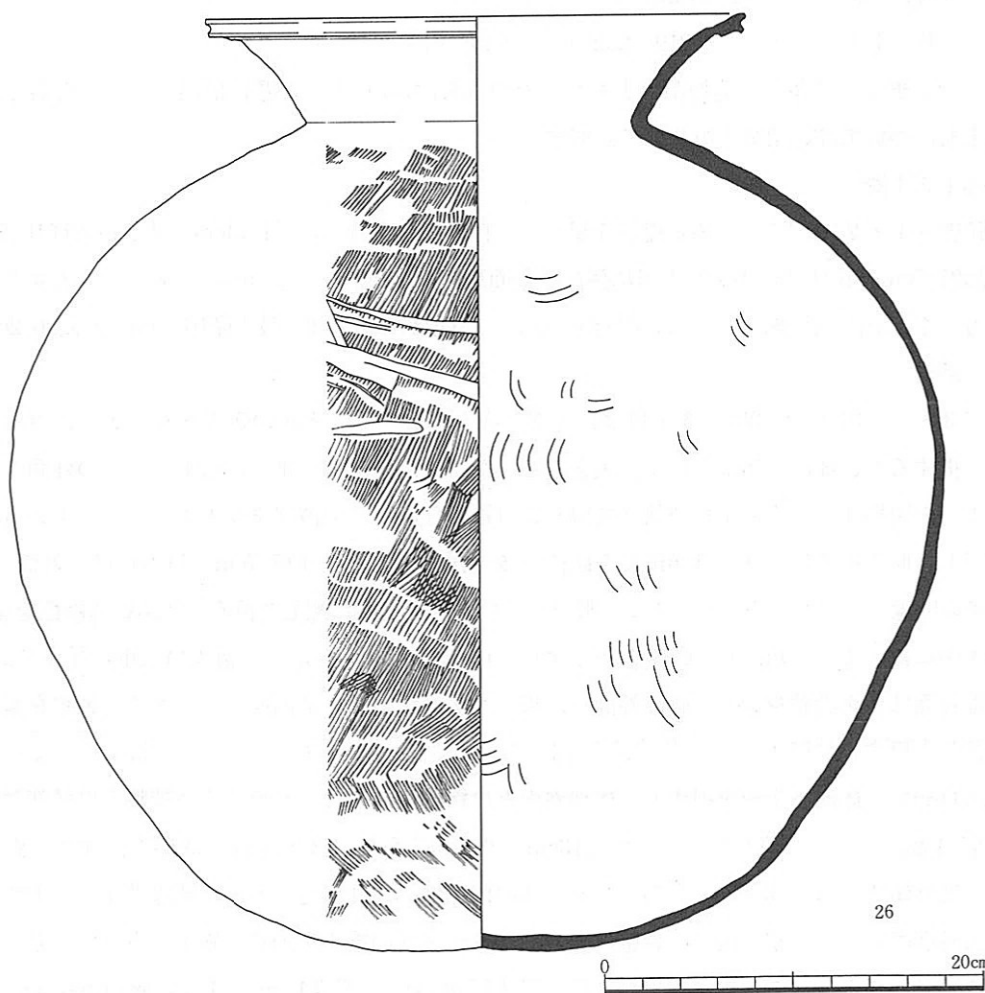
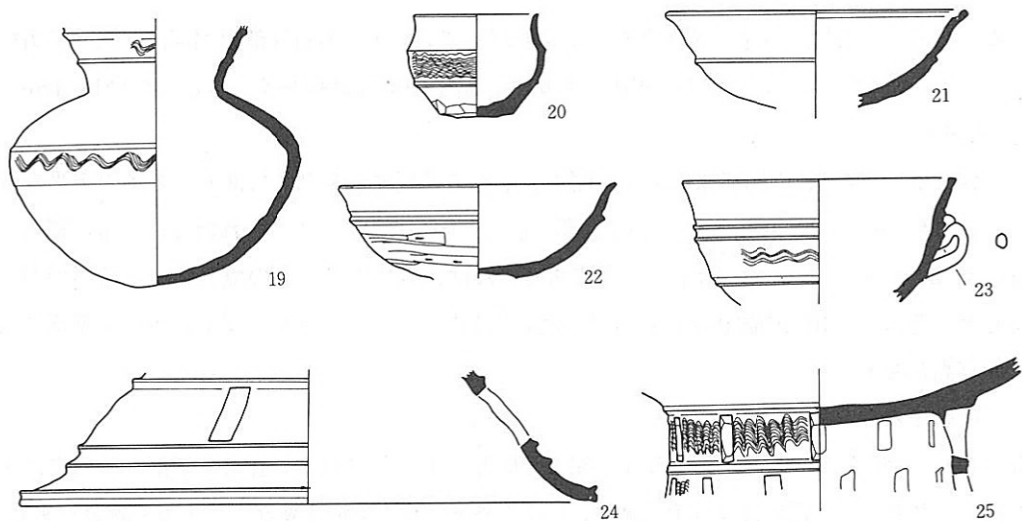
甗(26) 口径28.6cm。器高49.4cm。の大型の甗である。体部最大径は、体部中央よりやや上にある。口縁部は、「く」の字に大きく外反し、端部直下の下外方に突線が巡る。体部外面は、タタキ整形の後、部分的にナデ調整。内面は、波状文をすり消している。I型式2段階に比定される。

椀(20) 体部下半と口縁部との境にシャープな突帯を巡らせ、その間にやや雑な波状文を施す。口縁部は外反して開き、端部は舌状におさめる。底部外面は、手持ちヘラケズリで施す。口径6.4cm。器高5.5cm。I型式2段階に比定される。

無蓋高坏(21~23) 22は、浅く丸い底部から外反して開く口縁部がつくもので、口縁部との境には、段がつく。口縁部は、上半で更に外反し、端部は面取りを施す。断面四角形を呈し、根に段がつく。口縁部内外面は、ロクロナデ調整。底部内外面はナデ調整。灰色を呈し、焼成は、ややあまく、胎土中には、砂粒が多く含まれる。口径16cm。残存高5.2cm。21は、土師器高坏に類似する形態である。口縁部との境には、シャープな段が巡る。口縁部は、端部で外方へ短くひきだしている。坏底部外面は手持ちヘラケズリの後ヘラナデ調整、内面はナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土は、精良である。口径14.5cm。残存高5cm。23は、口径に比して深い坏部をもつもので、口縁部直下には1個の把手がつく。底部と口縁部との境には、各2条1対のシャープな



第217図 CトレンチNR5001出土遺物実測図(1)



第218図 CトレンチNR5001出土遺物実測図(2)

突帯を巡らせ、その間に5条の波状文を配す。外反して立ち上がる口縁部の端部は、内外横方向にひきだし上面は平坦な面となる。褐灰色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。口径14.4cm。残存高6.6cm。

器台(24・25) 24は、内穹気味に大きく開き、端部で外反する脚部片である。3条の突帯を巡らせ、長方形の透し穴が穿孔される。裾端部にも、上方へ小さくひきだされた様な突帯が巡る。裾部径30.2cm。灰色を呈し、胎土は精良である。25は、脚部と受部との境に断面三角形の突帯を巡らせ、その間に10条の波状文と長方形の透し穴を配している。灰色を呈し、焼成も堅緻である。残存高7.3cm。

黒色研磨土器

高坏(14) 内傾する短いちあがりは、端部で肥厚し丸くおさめる。また、受部との境には丸味を持つ。ちあがり部分はヨコナデ調整、体部内外面は横方向の丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土は緻密である。口径13.3cm。

—D～Fトレンチー(第219～232図、図版149～161)

Cトレンチ以上に多くの遺物が出土した。そのうち次の210点を任意に抽出した。須恵器・韓式系土器については、第VI章第2節で説明する。

弥生式土器

長頸壺(1・2) 1は、にぶい橙色を呈し、砂粒を多く含む。口径13.4cm。体部最大径16.5cm。器高27.5cm。底部は、中央が円形に窪む。外面肩部に、棒状の浮文がつく。2は、器表面の磨減が著しく、全体の調整については明らかでない。口径11.6cm。体部最大径16.1cm。器高26.2cm。

土師器

壺(3～12・31・32・35) 5・11は口縁部外面を加飾する庄内式の壺である。5は、頸部以下を欠損するが、球形の体部が付く。大きく開いた口縁部の端部を下方に拡張し、その外面に、2個1対の円形浮文とその上を波状文で飾り、口縁端部内面にも波状文を1条施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土中には、1～3mm大の砂粒が多く含まれる。口径17.7cm。11の口縁部外面には、2条の凹線を巡らし、更にその上に円形浮文と竹管文を交互に配して飾る。にぶい黄橙色を呈し、胎土中には、1～3mm大の砂粒を多く含む。口径33.4cm。6は、布留式の二重口縁壺である。体部外面はナデ調整を施し、底部外面には粗いハケメ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。浅黄色を呈す。口径10.6cm。体部最大径11.6cm。器高12cm。7は外反する口縁部がつく布留式の広口壺で、体部下半を欠損する。体部外面と口縁端部内面は、ヘラミガキ調整。口縁部および体部内面は、ハケメ調整を施す。口径13cm。残存高7.8cm。3・4は、球形の体部に、直立もしくは外傾する口縁部のつくものである。3の体部は、偏球形となり、底部は僅かに突出する。体部外面はハケメ調整の後ナデ調整、内面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。浅黄色呈し、胎土中には砂粒を多く含む。口径9.7cm。体部最大径14.6cm。器高15cm。4は、灰白色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。体部外面は、ヘラナデ調整を施すが、体部下半には、ヘラケズリの跡

が残る。体部内面は、ナデ調整。口径8.8cm。体部最大径13.8cm。器高17.5cm。9・10は、肩が水平方向に張った球形の体部から外上方に開く小型の壺である。橙色を呈し、胎土は3mm大の砂粒を多く含み粗い。体部外面は、粗いハケメ調整の後肩部と底部をナデ調整、体部内面はヘラナデ調整、口縁部内面下半にハケメ調整を施す。口径10.9・9.2cm。体部最大径14.6cm。器高15.5・15.6cm。8は、肩部の張る偏球形の体部から短く外傾する口縁部のつく、小型の壺である。体部外面はハケメ調整、体部内面はナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径12.5cm。体部最大径15.7cm。器高12.4cm。12は、布留式の二重口縁の大型壺である。口縁端部は内外方に拡張し、上端は平坦な面となる。口径26.8cm。31~33は、球形の体部に短く外反する口縁部のつく小型の壺である。32は、体部外面ハケメ調整、体部内面下半にヘラケズリ、上半にヨコナデ調整を施す。淡赤橙色を呈し、焼成・胎土とも良好である。口径8.7cm。器高9.9cm。33の体部は下膨み気味で、体部下半の器壁は厚い。体部外面はハケメ調整の後ナデ調整、底部外面はヘラナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口径10.3cm。器高11.1cm。35は、卵形の体部に外反する口縁部のつくもので底部は欠損しているが、丸底を呈するものと思われる。口縁端部は、内上方へ小さくひきだす。体部外面頸部以下は粗いハケメ調整、体部内面は横方向のナデ調整を施す。褐色を呈する。口径12.5cm。残存高16.4cm。

小型丸底壺 (13~30) 口径が体部最大径より大きく、体部高が器高の2分の1以下のB・C類(13・14・20)と、体部最大径が口径より大きく、体部高が器高の2分の1以上のD類(15~19・21~30)とがある。13・14・20は、体部外面ナデ調整。内面ヘラケズリ調整。その他は、ハケメを多用する。

高坏 (38~48) 38~40は、浅い碗状を呈し、口縁部が上方へ立ち上がるものである。口径12.4~14cm。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。38の内面には、放射状のヘラミガキ調整が施される。39・40の外面はハケメ調整で、40は口縁部との境付近に横方向のヘラミガキ調整を施す。41~43は、底部との境が丸味を持ち不明瞭で、口縁部は、外傾して開くもの(41)と、やや内弯気味に開くもの(42・43)である。41は、内外面ハケメ調整、42・43は、外面ハケメ調整、内面は放射状のヘラミガキ調整を施す。褐灰色を呈し、41・43の胎土は砂粒が多く含み粗い。口径14.9~16cm。44は、口縁端部で器壁が薄くなり、更に外反し舌状におさめる。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。口径15.7cm。45・46は、口径に比して浅い坏部である。45は、底部との境が浅い凹線状に窪み段をなす。口縁部外面は粗い横方向のヘラミガキ調整、底部外面はヘラケズリ調整、底部内面はハケメ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。口径16.2cm。46は、底部との境に浅い段をなし、口縁部は外傾する。端部は、上方へ小さくひきだし、断面四角形をなす。口縁部内外面ヨコナデ調整、底部内外面ヘラケズリ調整を施す。灰白色を呈し、焼成も良好で、胎土は精良である。口径16.9cm。47は、底部との境に段をなし、大きく外反する坏部である。口縁端部で外反し、僅かに上方に肥厚する。口縁部内外面はヘラミ

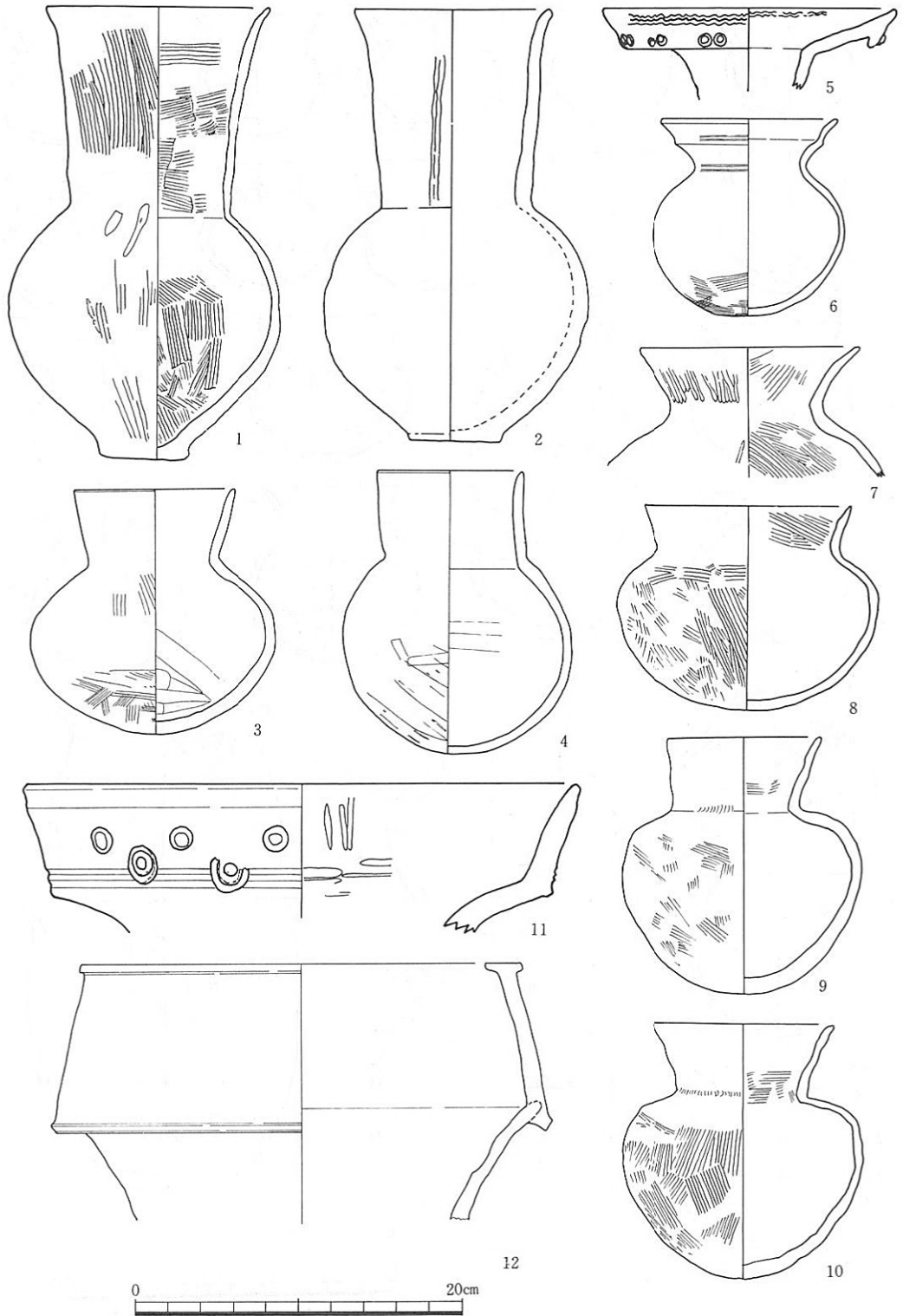
ガキ調整、底部内面にも放射状のヘラミガキ調整を施す。にぶい橙色を呈す。口径22.8cm。残存高9.05cm。48は、底部との境に稜をなす。口縁部は外傾し、端部は舌状におさめる。口縁部はヨコナデ調整、脚部外面と脚裾部内面はヨコナデ調整、筒部内面はヘラケズリ調整を施す。灰白色を呈し、胎土は精良である。坏部口径15.5cm。裾部径10.8cm。器高12.3cm。

坏 (58) 平底で内弯して立ち上がる体部からそのまま口縁部に至るもので、口縁部は、ヨコナデ調整が施され、器壁が薄くなる。端部は、舌状におさめる。体部外面はハケメ調整、底部はヘラケズリ調整、体部内面はヘラナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は、砂粒を多く含み、粗い。口径12.5cm。器高5.3cm。

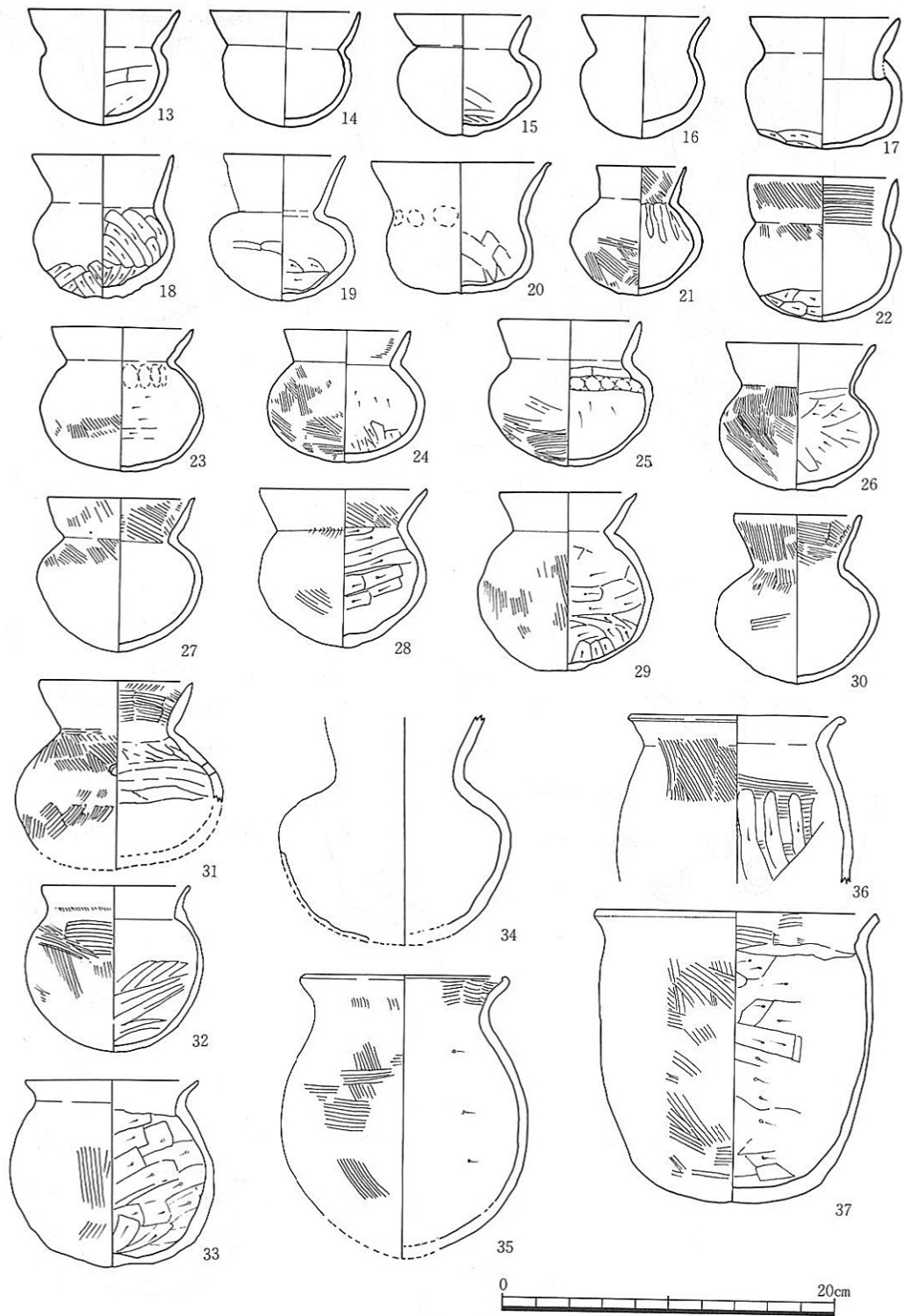
鉢 (59・72・73) 59は、丸底で内弯して立ち上がる体部と2段に屈曲して開く口縁部とからなる布留式の大型鉢 I B₂類である。口縁部は内弯し、外面に段を持つ。端部上面は内傾し、内外方へ小さくひきだす。体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。内面体部上端には、横方向のハケメが残る。にぶい橙色を呈し、胎土中には砂粒が多く含まれる。口径37.8cm。器高21.3cm。72は、丸底で内弯して立ち上がる体部に、外傾する長い口縁部のつく鉢である。体部下半を欠損する。体部外面の調整は、磨滅の為明らかでない。体部内面はヘラケズリを施す。口径21.6cm。残存高7.9cm。73は、口縁部が「く」の字に外反する大型の鉢である。体部内面は、ヘラケズリ調整を施す。口径33.5cm。残存高7.8cm。

甕 (36・60~71) 36は、胴長で下膨らみ気味の体部の甕である。短く外反する口縁部は、内側で肥厚し、端部は外下方に小さくひきだす。外面は頸部以下をハケメ調整、内面は、横方向のハケメ調整の後下から上へ指ナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。口径13cm。残存高10cm。60~63・67・70・71は布留式の甕である。61・62は、体部も長くなり、器壁も厚い。布留式でも新しい段階のものである。63・66の口縁部内面には、ハケメ調整が施される。60は、口径14cm。器高22.2cm。61は、口径15.7cm。器高25.6cm。62は、口径15.3cm。器高28.2cm。70は、口径14.4cm。器高22.2cm。64は、胴長の体部に、直立する口縁部がつくもので、口縁端部は、外方へ小さくひきだす。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。指頭圧痕が残る。淡黄色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。奈良県発志院遺跡 S K15 中層出土の壺 F₁類 (524) に類似している。⁽⁸⁾65は、やや卵形の体部に、外傾する口縁部のつくもので、口縁端部は断面四角形となる。体部外面は粗いハケメ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は良好である。口径16.4cm。器高27.3cm。66の口縁部は、「く」の字に外傾し、端部は断面四角形をなす。体部外面と口縁部内面は粗いハケメ調整、内面の頸部以下はヘラケズリ調整を施す。口径16.2cm。器高25.4cm。69は、球形の体部から「く」の字に外傾する口縁部のつくもので、端部は丸くおさめる。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。口径12.8cm。器高17.9cm。

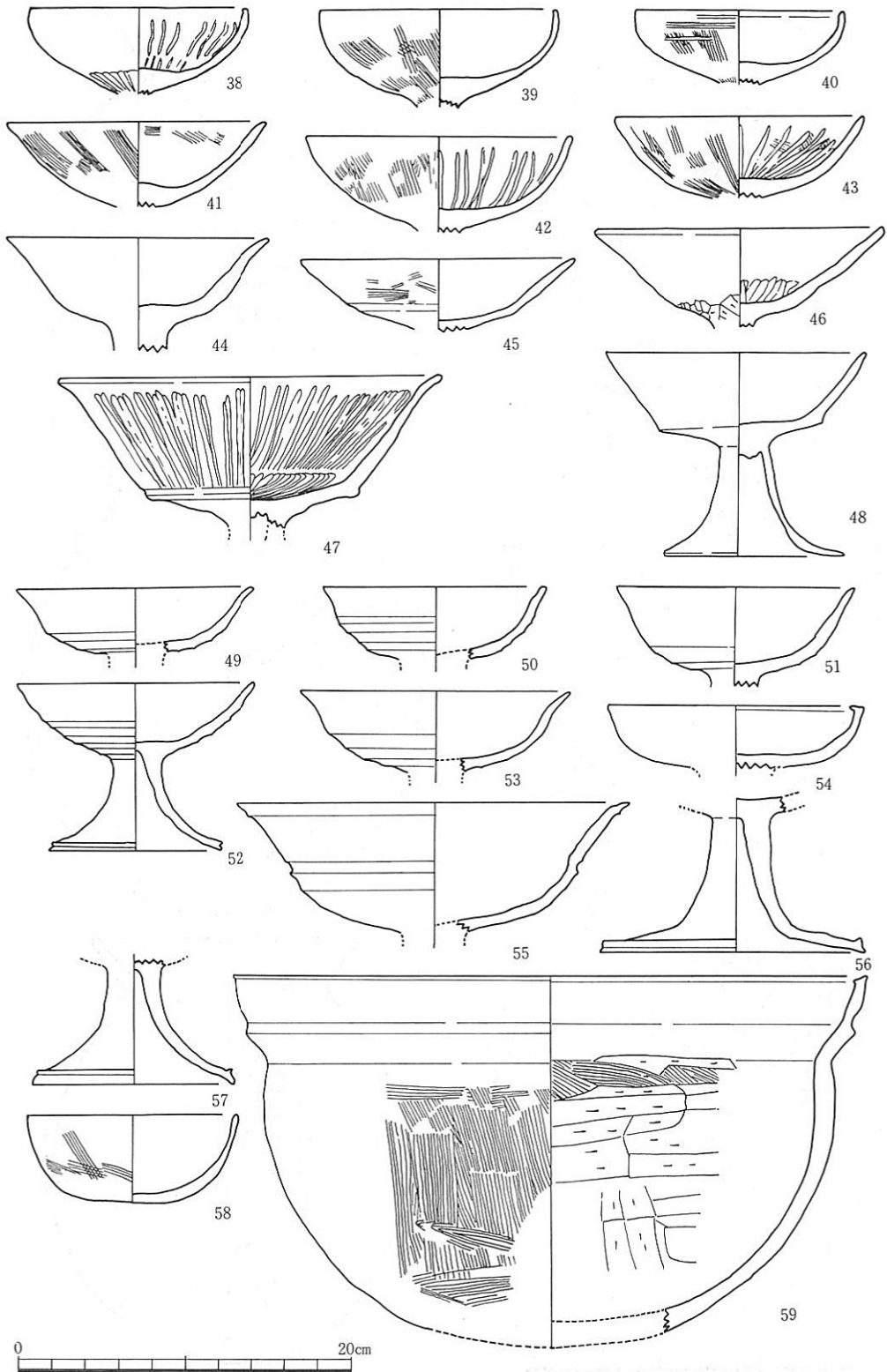
甗 (74~77) 74には、2個1対の把手がつく。口縁部は、やや外反気味に直立し端部は丸くおさめる。体部内面はヘラケズリ調整を施し、外面は、器壁の剝離が著しく調整は明らかでない。



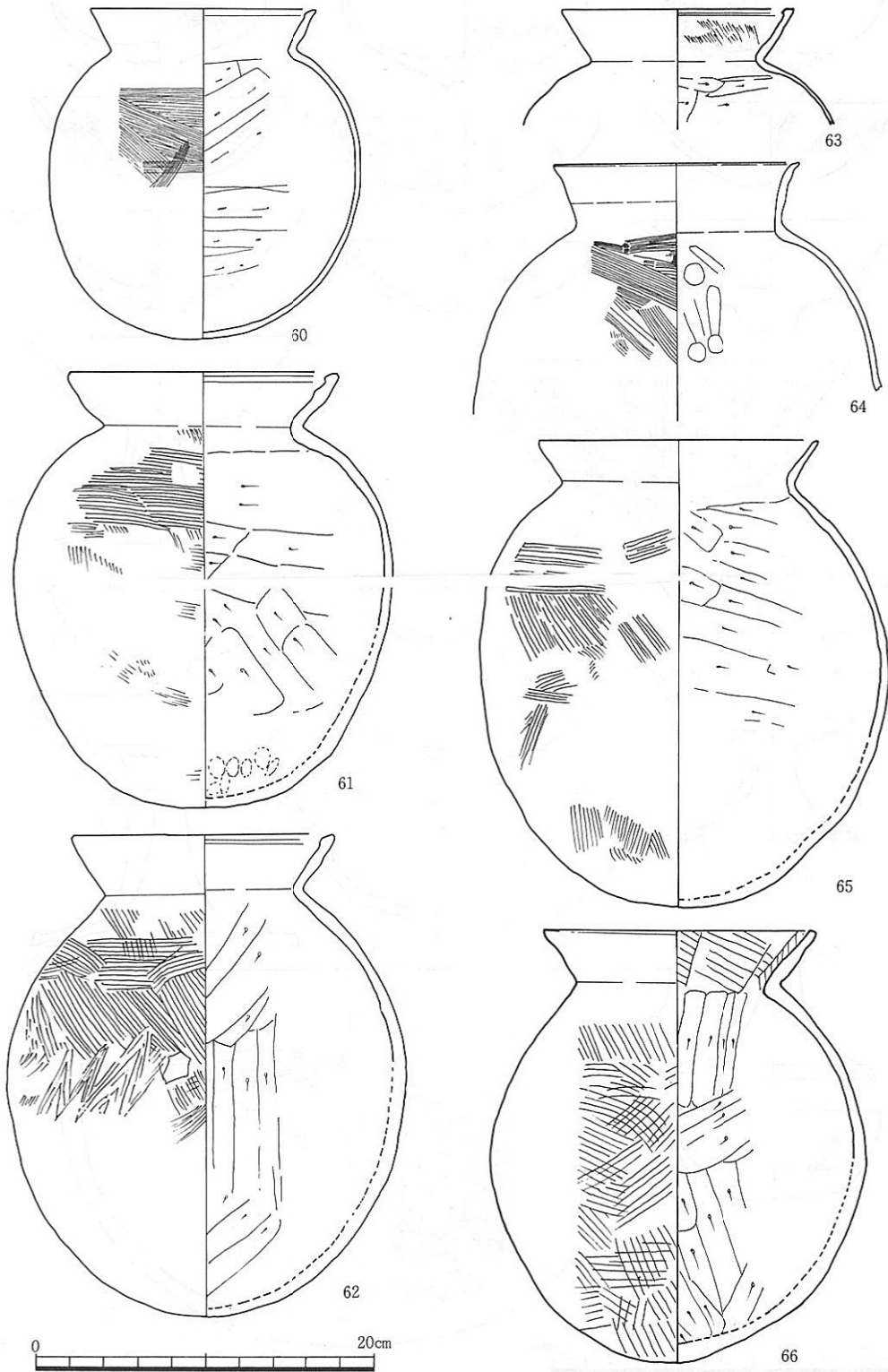
第219図 D～FトレンチN R5001出土遺物実測図(1)



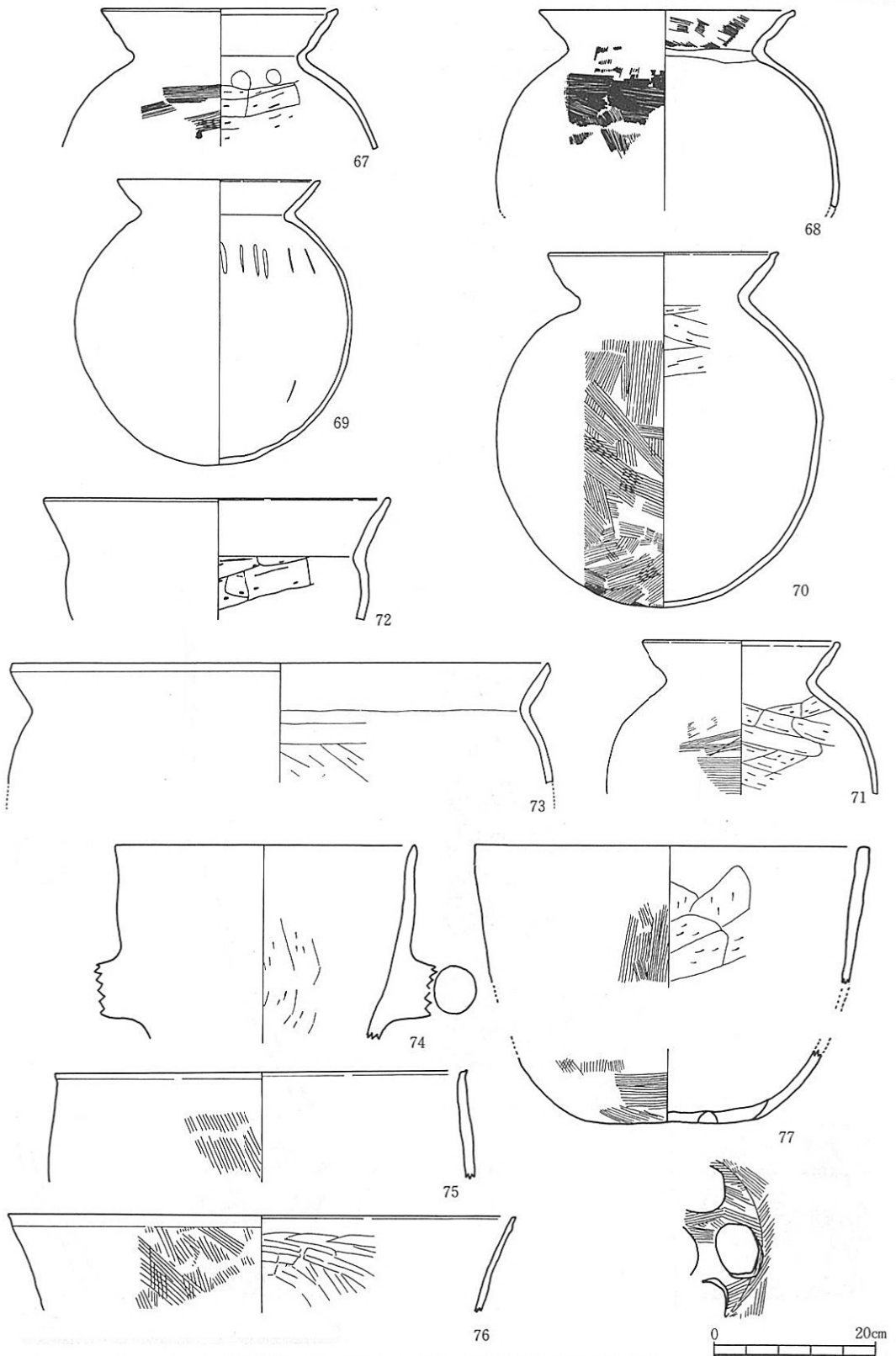
第220図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(2)



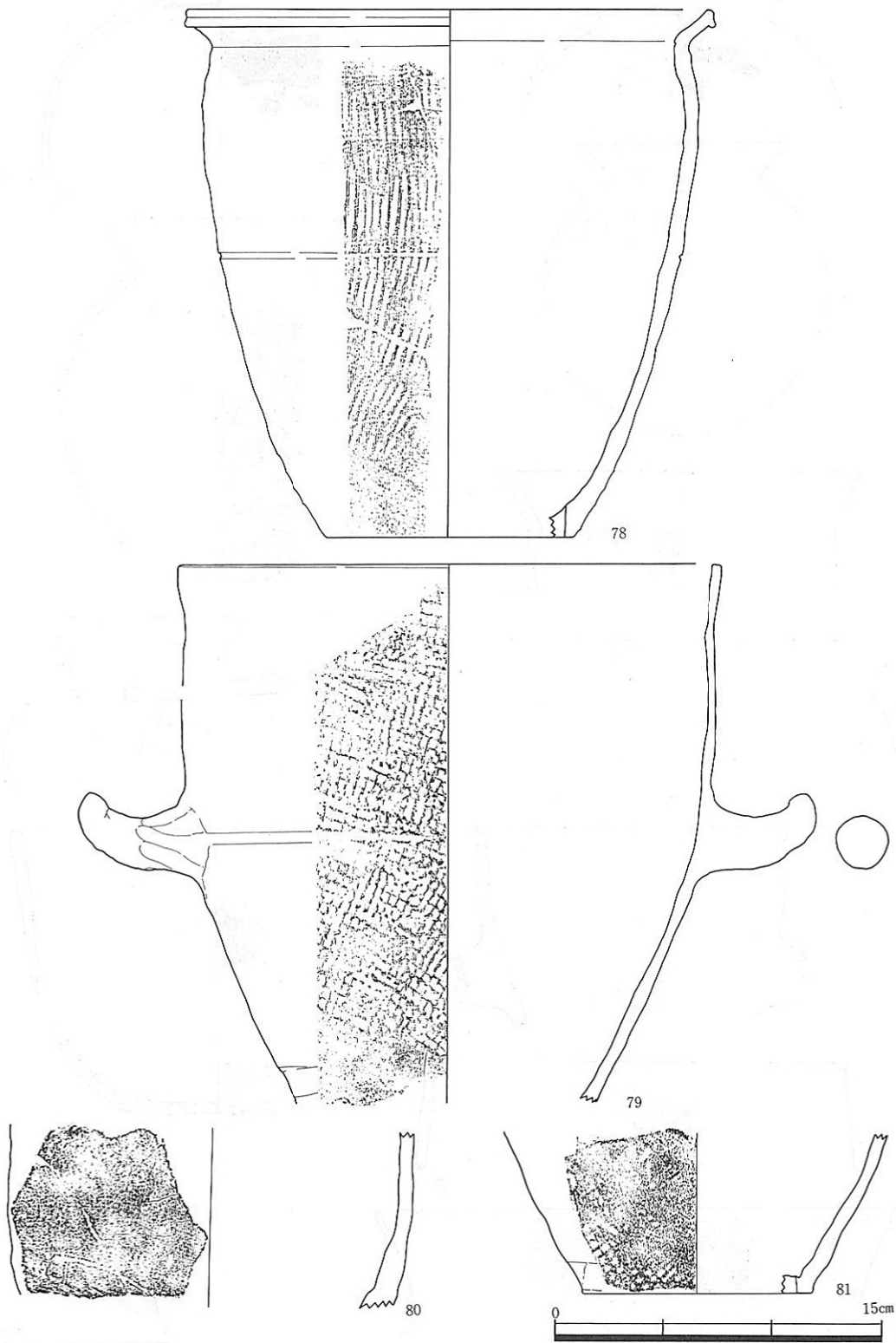
第221図 D～FトレンチN R5001出土遺物実測図(3)



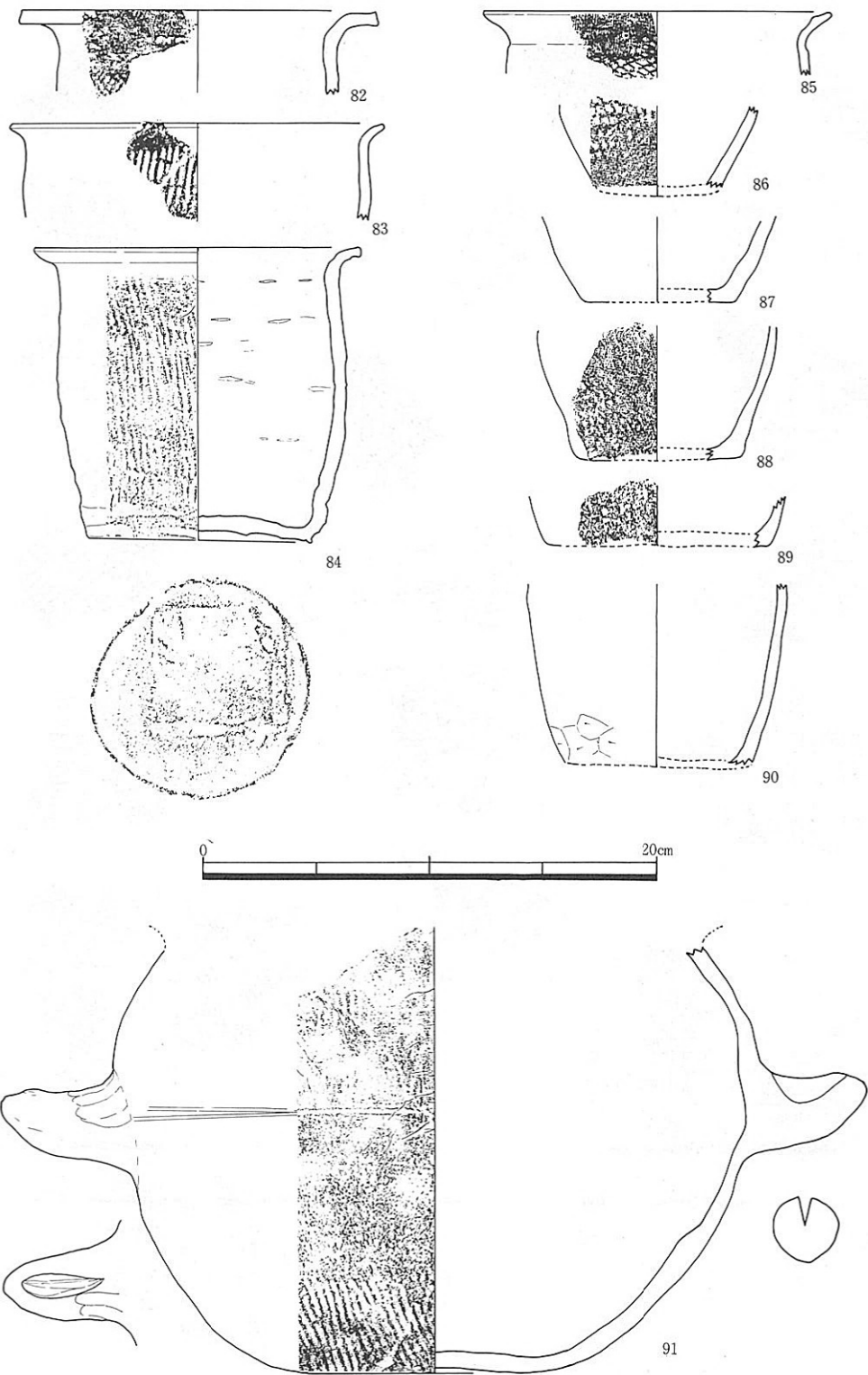
第222図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(4)



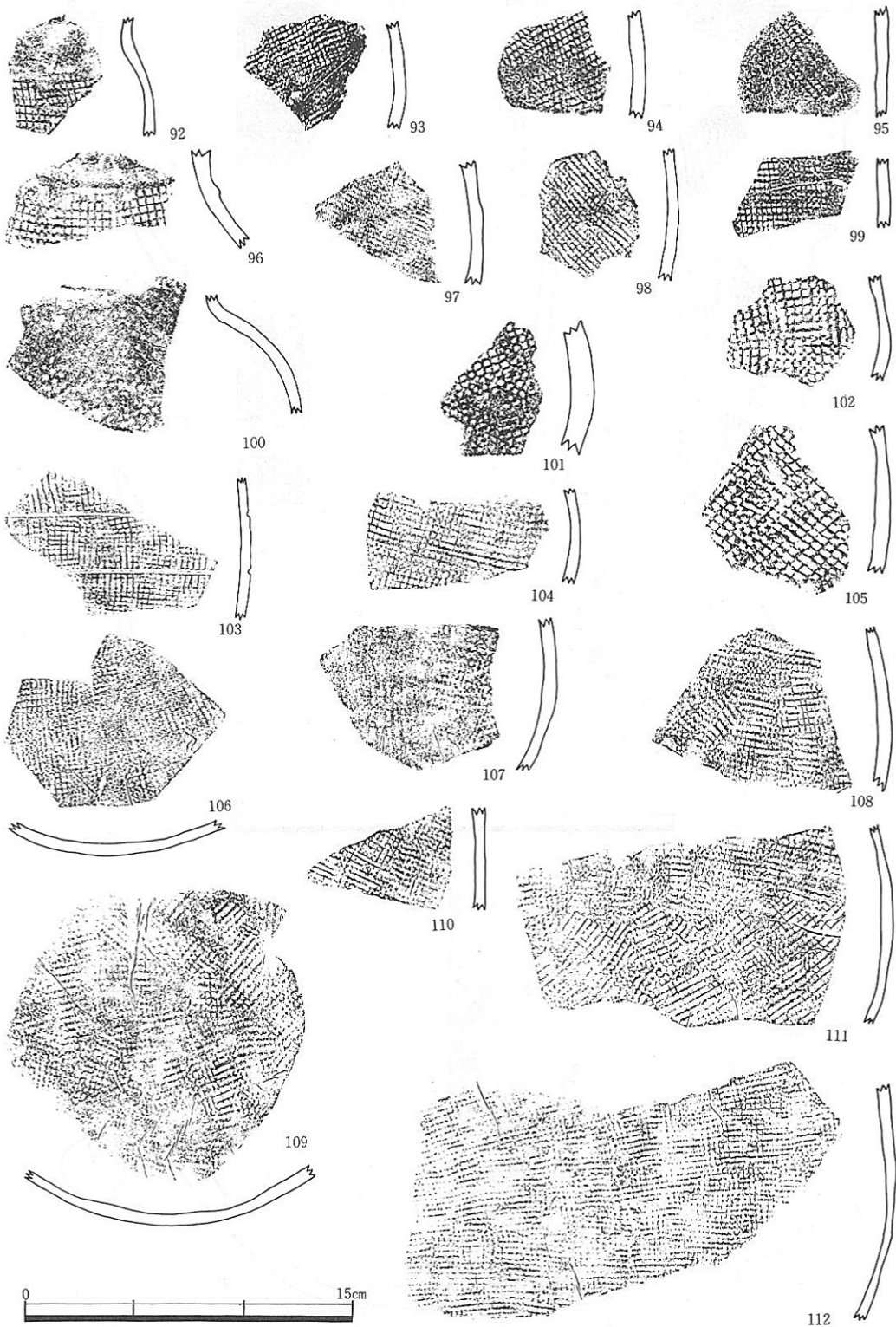
第223図 D~FトレンチNR5001出土遺物実測図(5)



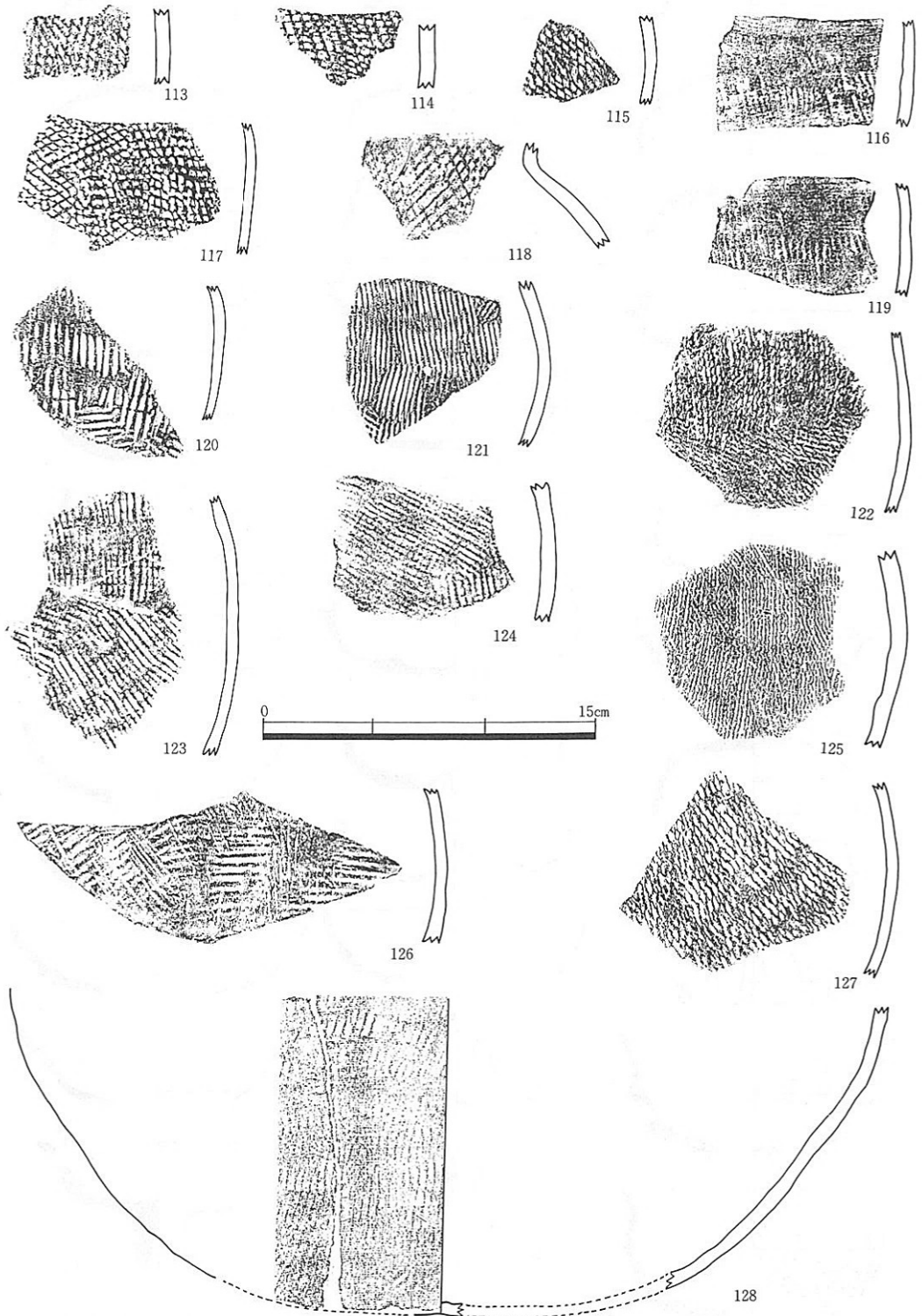
第224図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(6)



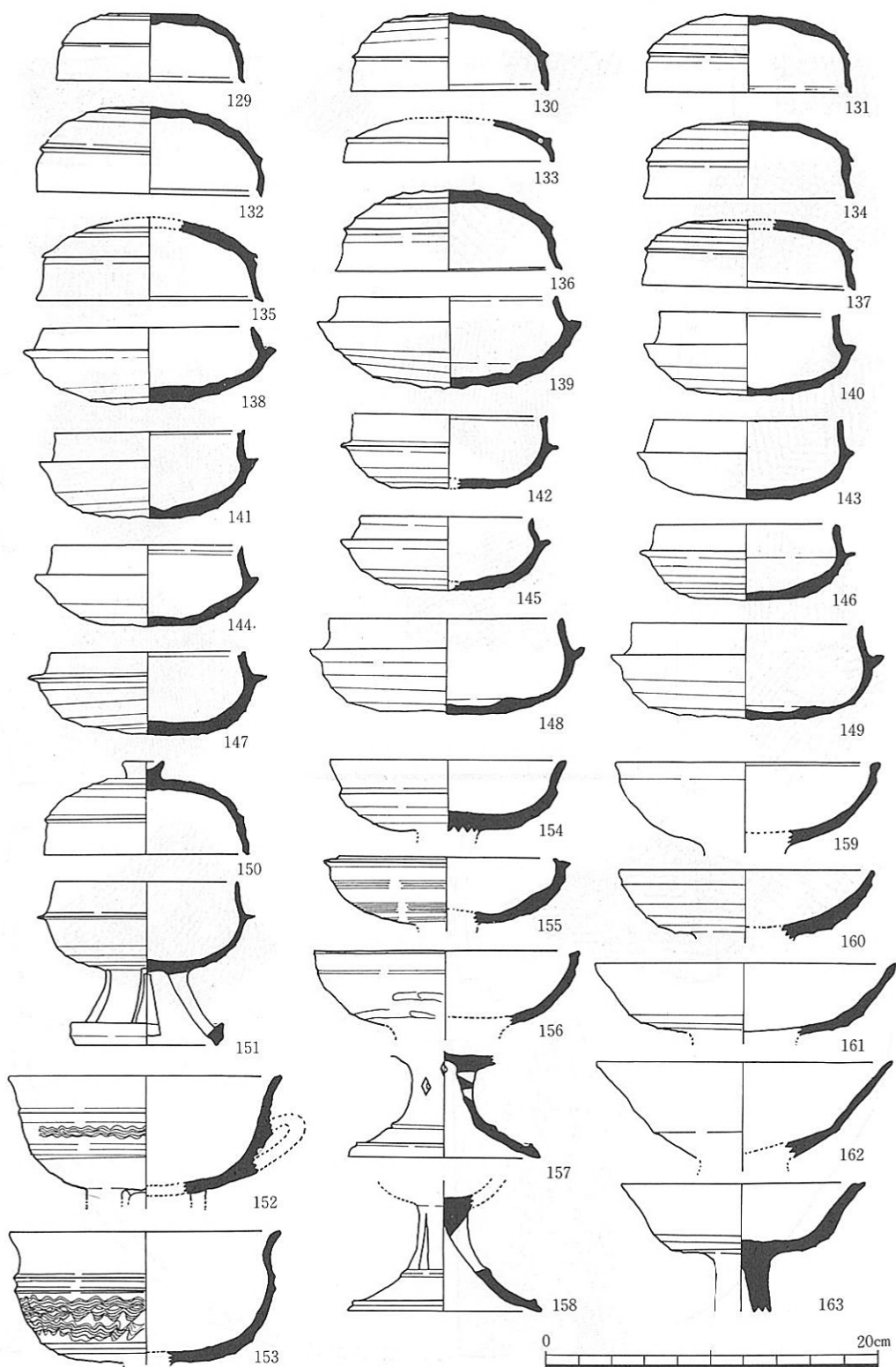
第225図 D～FトレンチNR.5001出土遺物実測図(7)



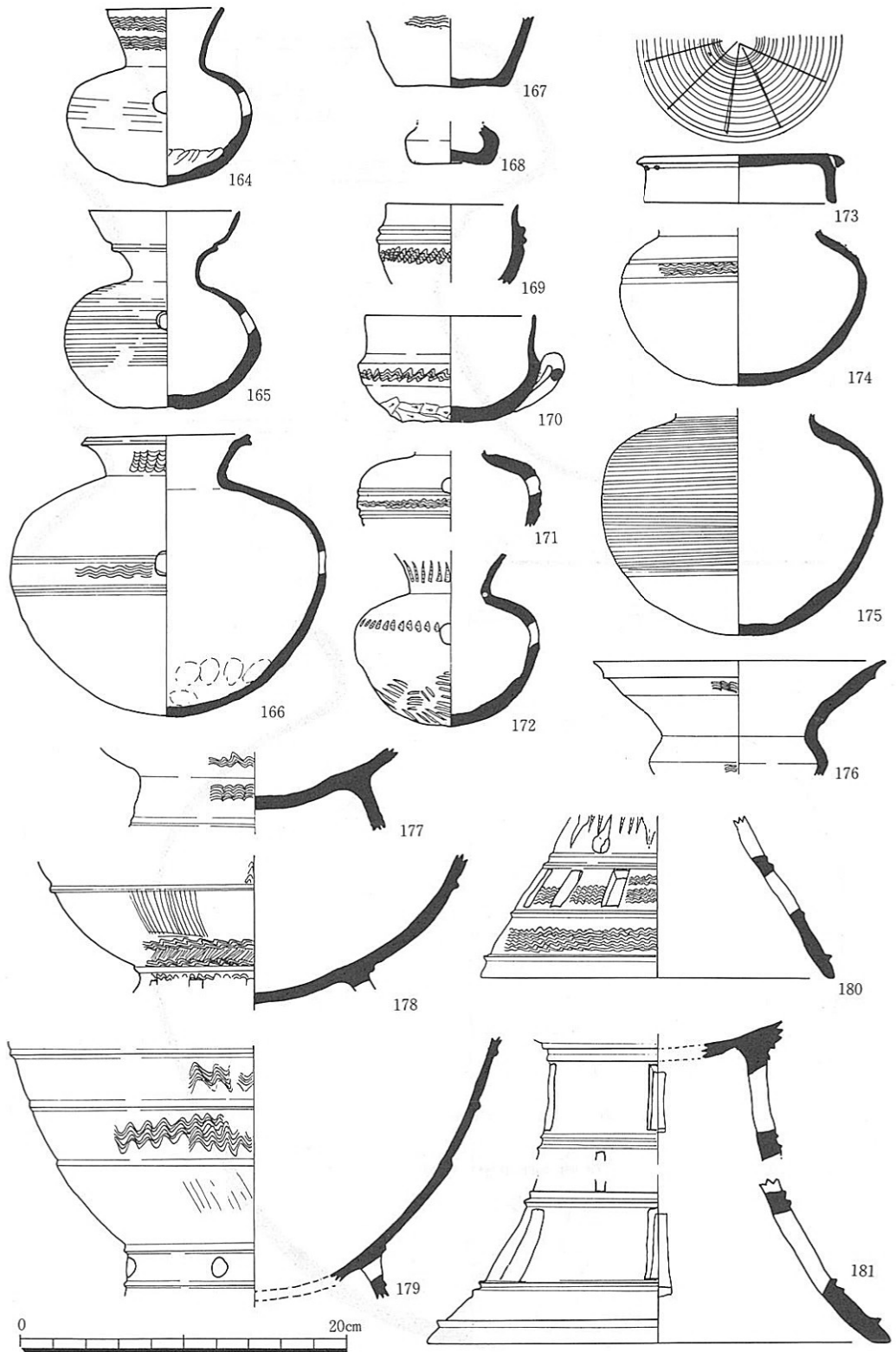
第226図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(8)



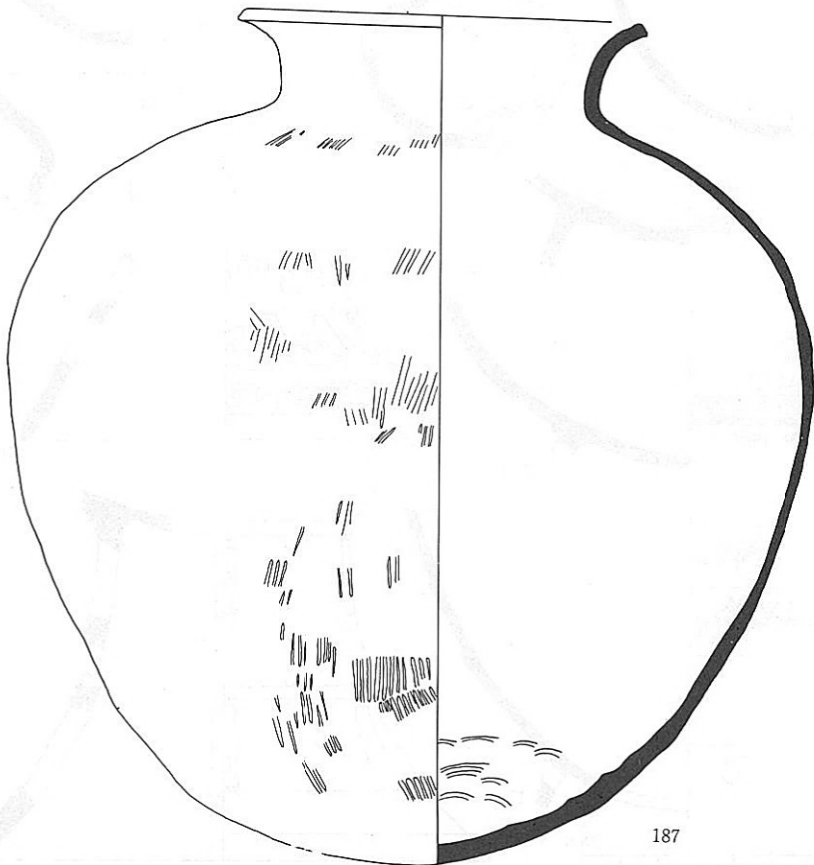
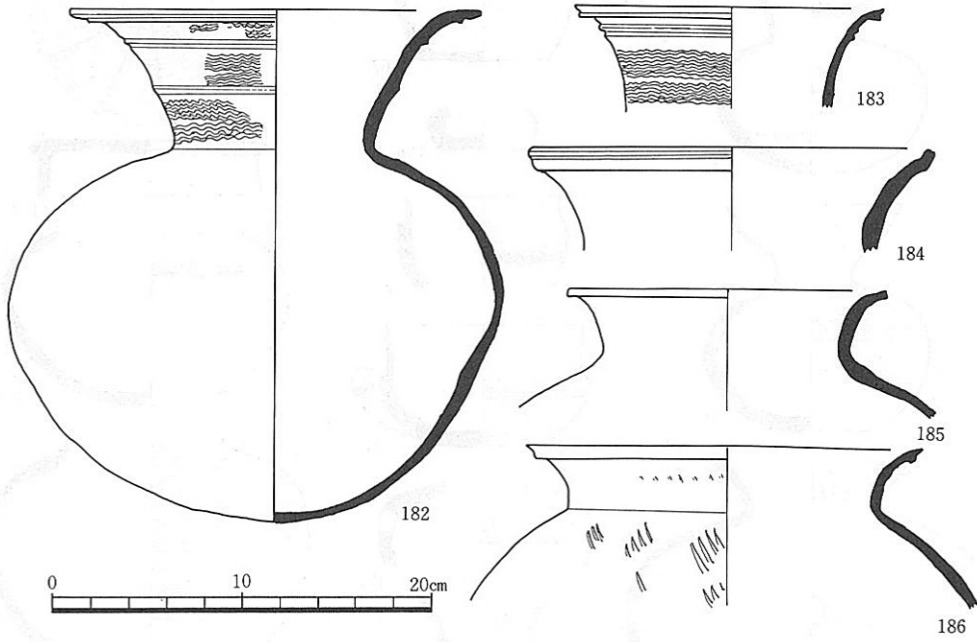
第227図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(9)



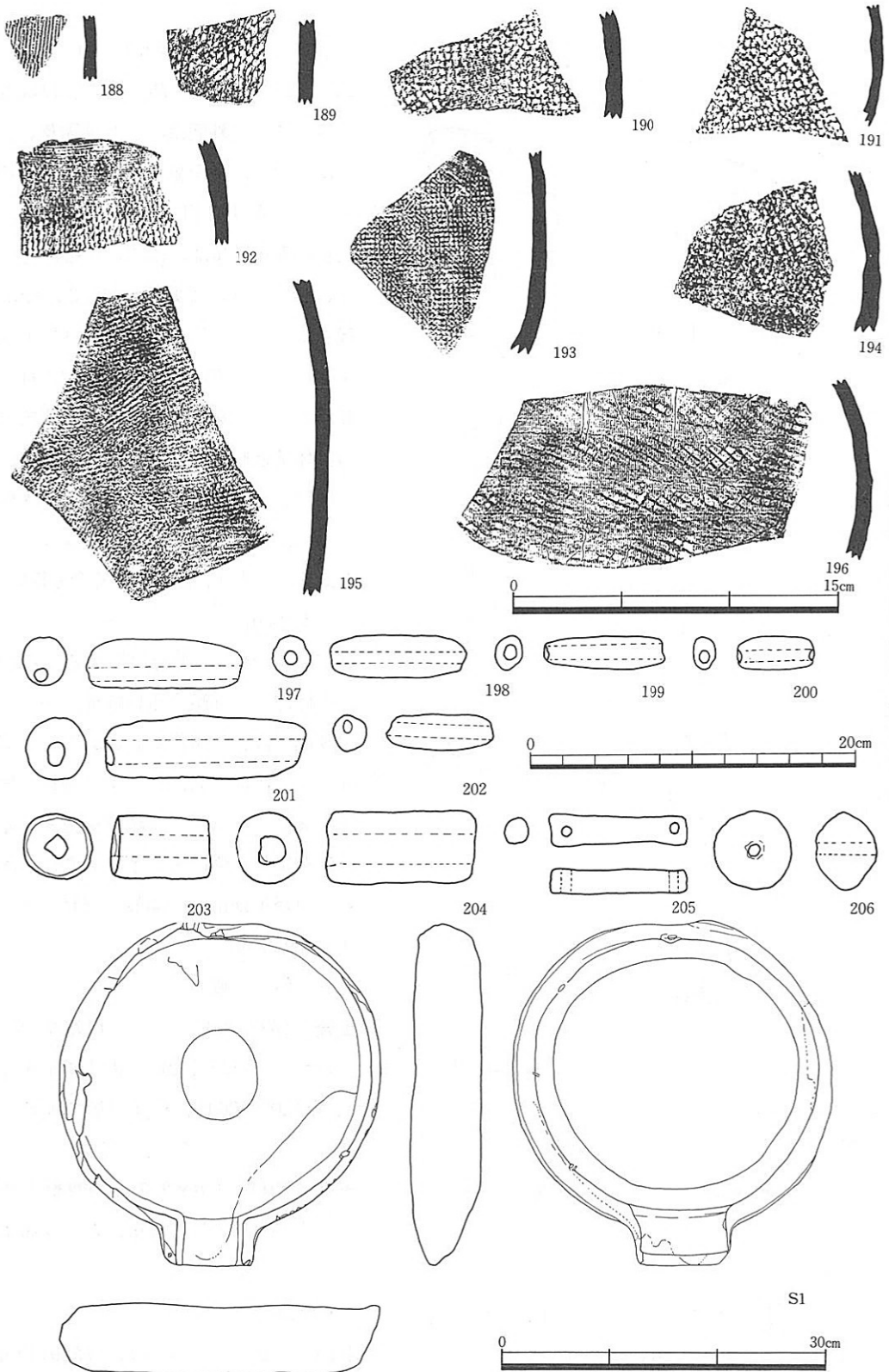
第228図 D～FトレンチNR5001出土遺物実測図(10)



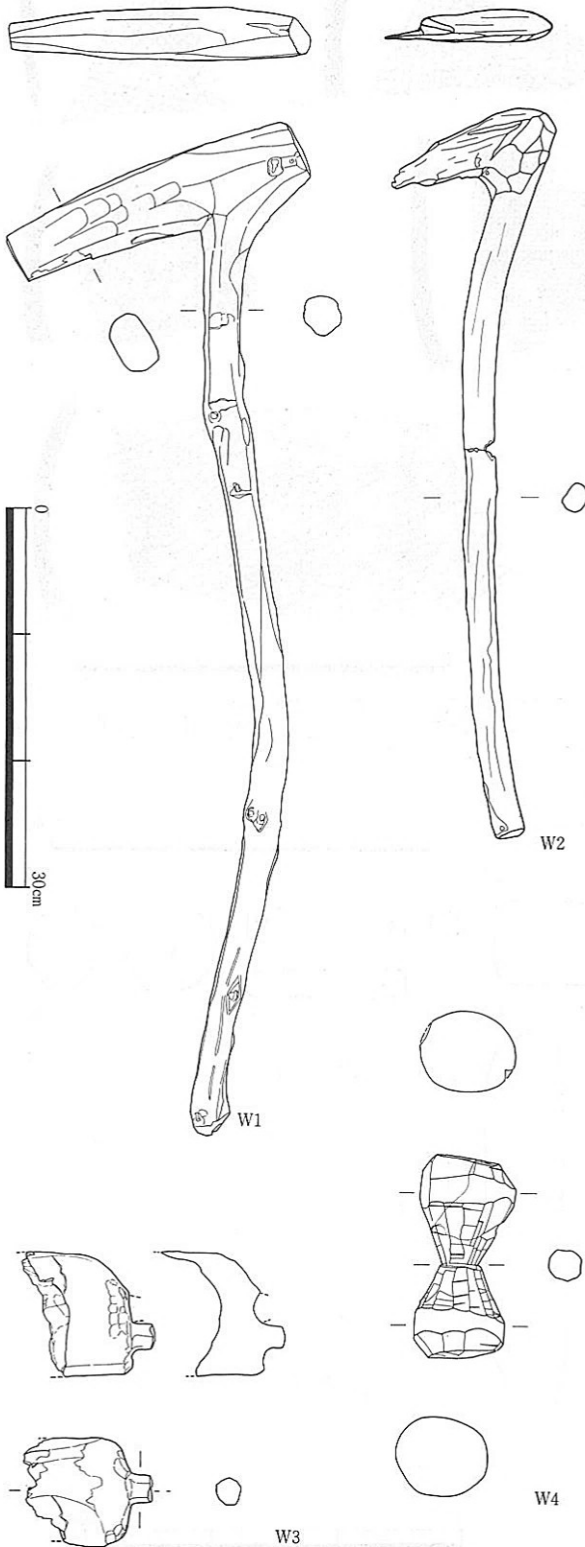
第229図 D～FトレンチN R5001出土遺物実測図(11)



第230図 D～FトレンチN R.5001出土遺物実測図(12)



第231図 D~FトレンチNR5001出土遺物実測図(13)



第232図 D～FトレンチNR5001
出土遺物実測図(14)

灰色を呈し、胎土は粗い。口径18.8 cm。残存高12cm。75・76は、口縁部のみである。外面は、ハケメ調整、内面は、ナデ調整を施す。75は、灰白色を呈し、胎土は粗い。口径25.9cm。残存高7cm。76は、にぶい黄橙色を呈し、胎土は良好である。口径33.8cm。残存高6 cm。77は、体部中央を欠損する。底部中央に1とその周辺に推定6個の円孔を穿孔した多孔式の甑である。体部と底部外面は、ハケメ調整。内面は、ヘラケズリ調整を施す。灰白色・にぶい黄橙色を呈し、焼成は堅緻である。胎土は、砂粒を多く含み粗い。口径24.9cm。

甗(31) 体部下半を欠損する。偏球形の体部に、外傾する口縁部がつく。口縁端部は、尖頭状におさめる。体部外面と口縁部内面は、ハケメ調整。体部内面は、ヘラケズリ調整を施す。赤褐色を呈し、焼成・胎土とも良好である。口径9.2cm。体部最大径12.4cm。残存高9.8cm。

その他の土製品

土錘(192~200) 棒状で粗雑なつくりのもの(197~202)と太めで丁寧なもの(203~204)、断面円形で両端に穿孔したもの(205)がある。

土玉(201) 4.8×3.7cmの算盤玉状をなす。中央に径0.7cmの穴が貫通する。灰白色を呈す。

石製品

石臼(202) 厚さ6.3cm、径29.4cmの円盤の一端に注ぎ口をつけた形状で

ある。外縁は低く、中央琢磨面を中心として、全体に赤色顔料が付着する。縁外面には、油脂状の炭化物が付着する。河内野中古墳の主体施設南端第3群から、ほぼ同形態の石臼が出土している。⁽⁹⁾野中古墳例は砂岩製で、厚さ5.6cm、直径24.6cm、である。

木製品

斧の柄 (W1・W2) 偏平片刃石斧の柄の未製品である。幹の枝分かれ部分を利用している。握部は、枝をそのまま用いている。幹を木目に沿って半裁し、台部に当てている。W1は、完形である。全長81cm。握部は、長さ73cm、径3cm。台部は、長さ2.4cm、幅4.8cm、厚さ3.0cm。着柄角度66°。台部は、両端に切断面をそのまま残し、上面はまだ基部と着装との区別がなく平坦な面のままである。断面は、四角形を呈している。W2は、握部端部と台部着装部先端を欠いている。残存長57.5cm。握部は、残存長5.3cm、径2cm。着柄角度68°。台部は、基部の端部を丸く加工しており、着装面は平坦な面のままである。

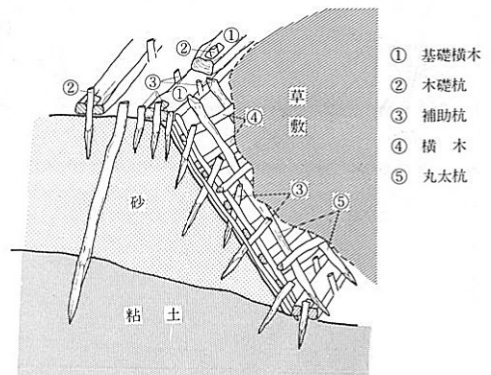
編錘 (W4) 丸太材を使用したものである。長さ15.4cm。丸木部径6.5~7.0cm。くびれ部径2.5cm。両端の角を削り落とし、くびれ部は深く、丁寧に削り込んでいる。

用途不明の木製品 (W3) 丸太材を加工したものである。長さ10.2cm。径8.7cm。一方は丸く加工し、中央を径2.5cmの突起状に削り出している。一方は深く割れているが、摩滅が著しく加工痕を観察することは出来なかった。

杭列 (SS) (第233~240図)

調査区の南半部を北流するNR5001が、複雑な流路変更(中州の形成、侵食等)を繰返しながら、6世紀前半頃には調査区外南西方向へ移動していった事は、先に述べたとおりである。杭列は、この変遷の過程で構築されたもので、計5基がDトレンチ以南91~116ラインの間で検出された。居住域を示す遺構の集中する範囲と各杭列の位置は、付図に示すとおりである。各杭列の構築時期については、これを示すような直接的な資料が得られなかった為に明らかにはし得なかった。ただ、NR5001の存続時期が5世紀中葉を中心として6世紀初頭までである事や同じく居住域の遺構の時期が5世紀代でおさまる事、更に各杭列周辺からI型式2~3段階に比定される須恵器(第228図、135・137)、や船橋遺跡H-II坏A1類に類似する土師器坏が出土している事などから、杭列も5世紀中葉以降6世紀に入らない時期に、相次いで構築されたものと考えられる。構造、機能については次に説明するとおりである。

構造：各杭列の構造は、細部において若干の相違が見られるものの、基本的には同様の構築方法を用いている。この構築方法は、SS5002において最もよく観察された。ここでは、このSS5002と第233図構造模式図をもとに説明する事とし、細部の構造、規模については、各杭列ごとに説明する事とする。

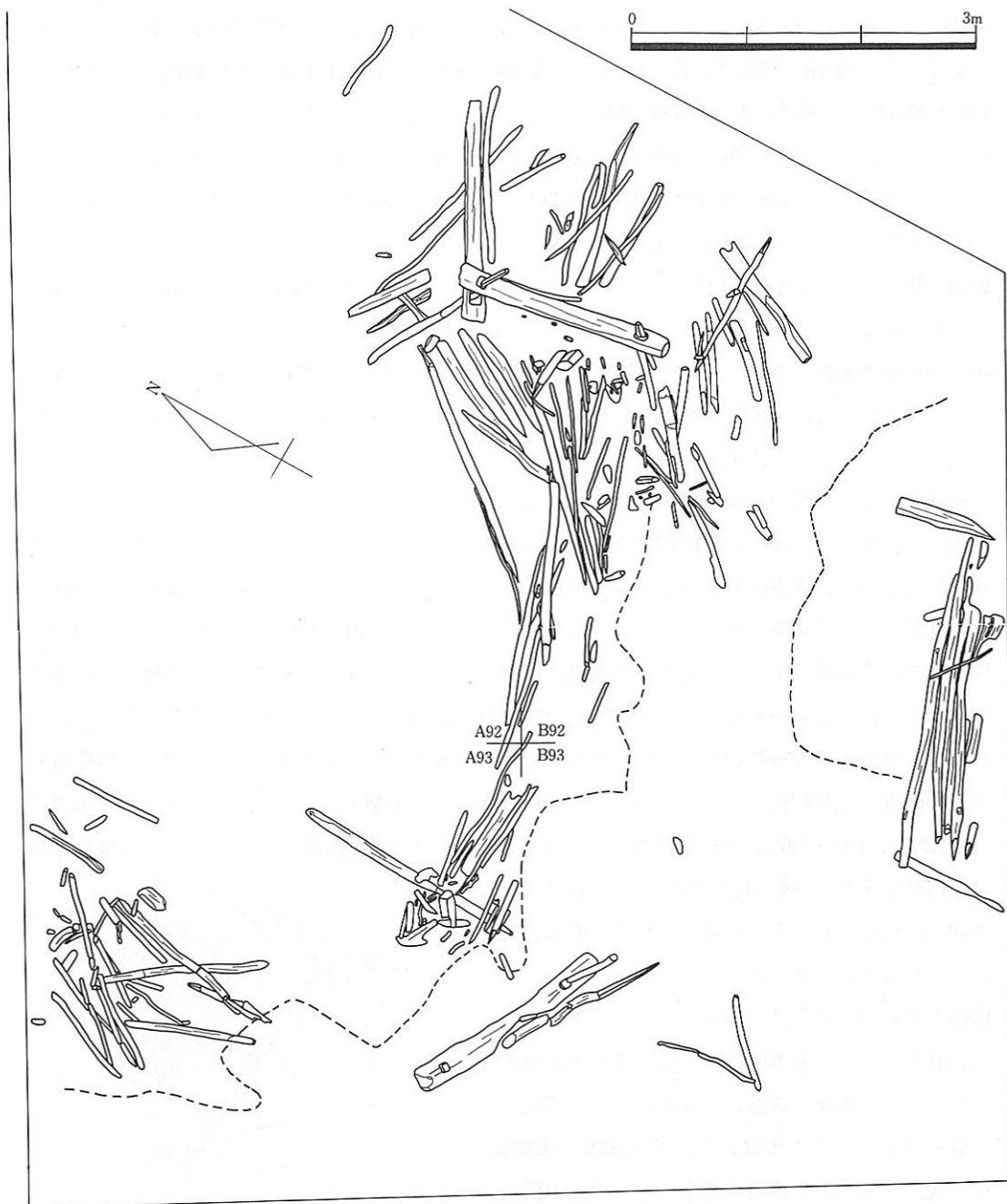


第233図 杭列構造模式図

(1) 上面肩部に、方形のはぞ穴が穿孔された基礎横木（幅7～10cm。厚さ3～6cm。長さ100～180cm。）を、はぞ穴を重ねて基礎杭を打って継いでいく。基礎杭は、頭部をソケット状に加工したものもある。

(2) この連続した基礎横木を更に固定させる為に、補助杭を打ち込む。

(3) 斜面には、補助杭を打ち込み、これに横木（径3～4cm、長さ100～250cm）をわた



第234図 S S 5001遺構平面図

し、更にこの上に丸太杭（径約6cm）の杭先を下にして並べていく。横木材の設置は2～3段に及ぶ。更にこの丸太杭の上に、長い横木を横方向に並べて斜面を覆う。この場合にも任意に補助杭を打ち込んでいく。

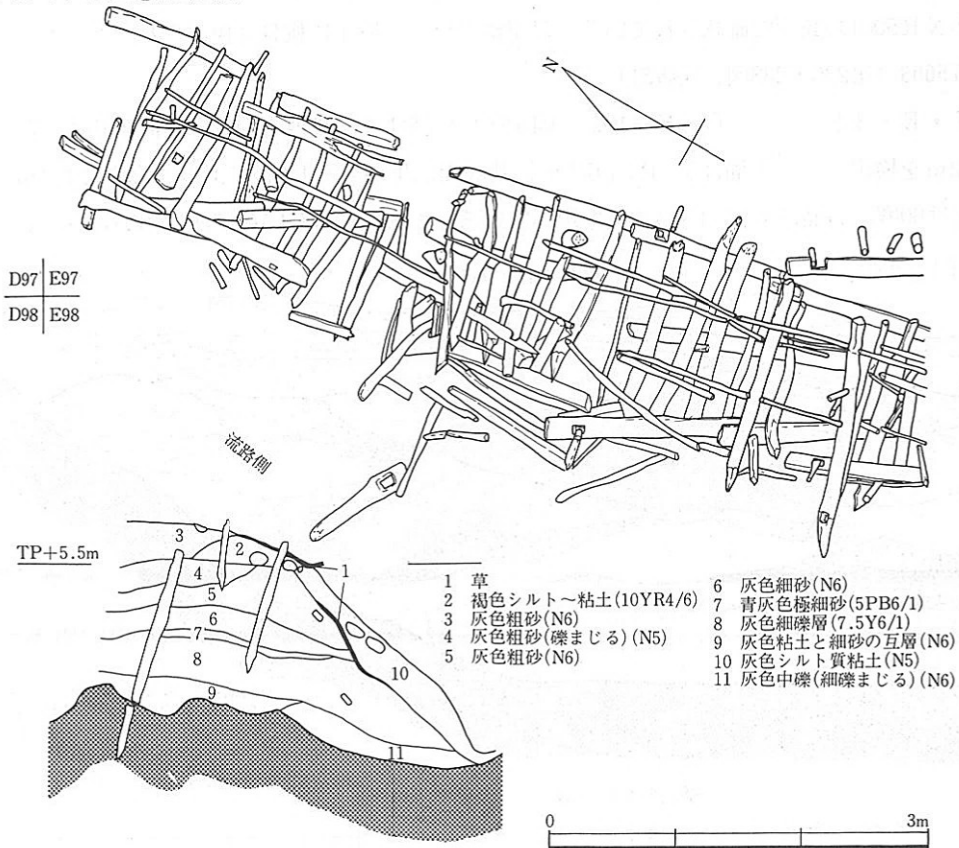
(4) 底面にも(1)と同様の造作を行ない、斜面丸太杭の押さえとする。

(5) 上面と斜面の骨組みを、粘土・シルトで被覆し、更にこの上に草を敷く。この草敷は、斜面補助杭打設前にも、行なわれる場合がある。

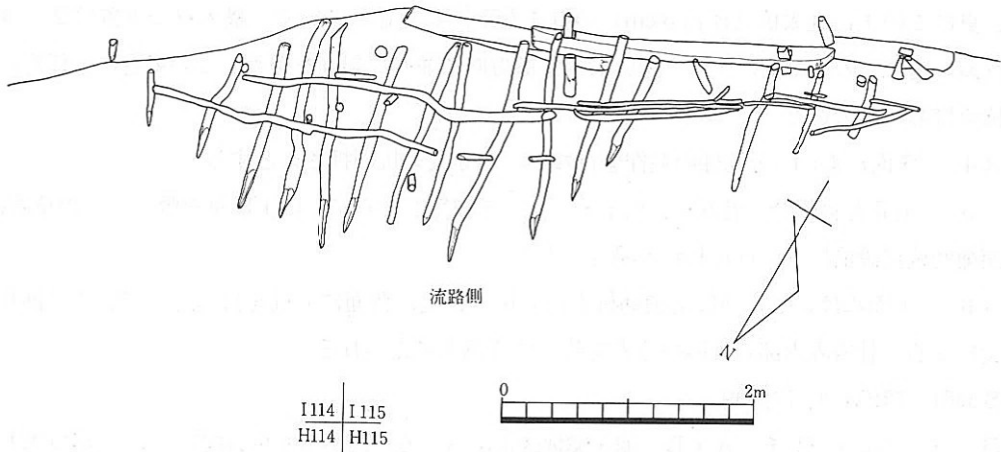
(6) 上面には、この他にも補助杭を打ち込み、更に背面にも杭を打ち込んでいく。河川の侵食による。骨組み内部の土砂の流失を防止する為と考えられる。

S S 5001 (第234図、図版49)

ONランプ1トレンチ A・B-92・93地区に位置する。西から北東方向に逆L字状にのびる。全長約12mを検出した。後の流水によってかなり破壊され、本来の位置を保っている部材は少ない。上面はT.P.+5.2m基底面はT.P.+3.0mにあり、高さは2.2mと推定される。斜面勾配については明らかにし得ない。部材の残存状況及び杭列北東横断面の観察より、杭列の南西、南方向に流路が想定される。斜面は、両端近くにほぞ穴を設けた基礎横木を斜面に並列に補助杭で固定させていたと思われる。



第235図 S S 5002遺構平面図・断面図



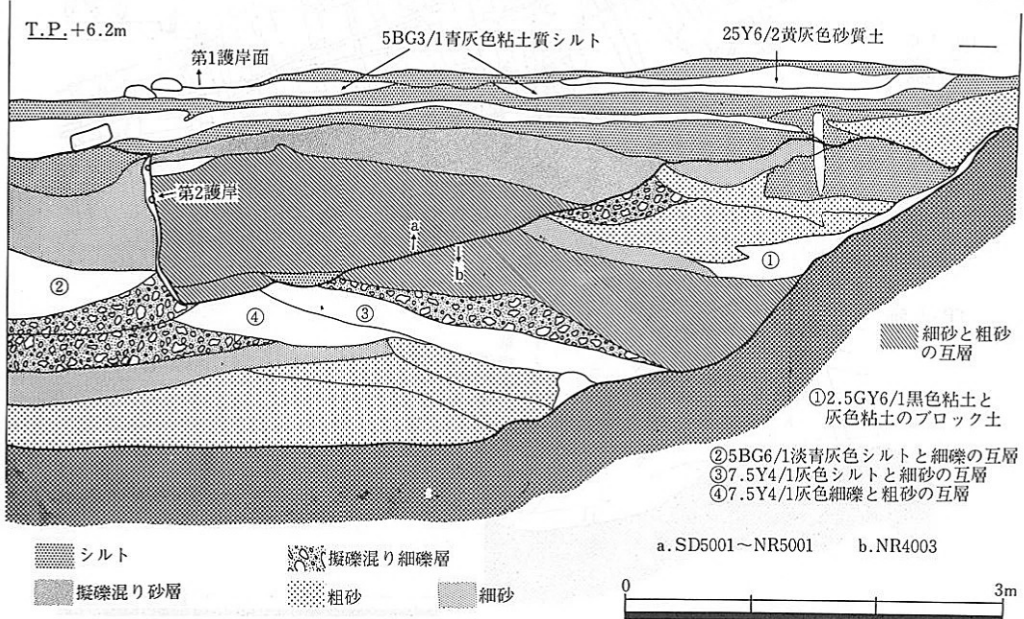
第236図 S S 5005遺構平面図(1)

S S 5002 (第235図、図版50)

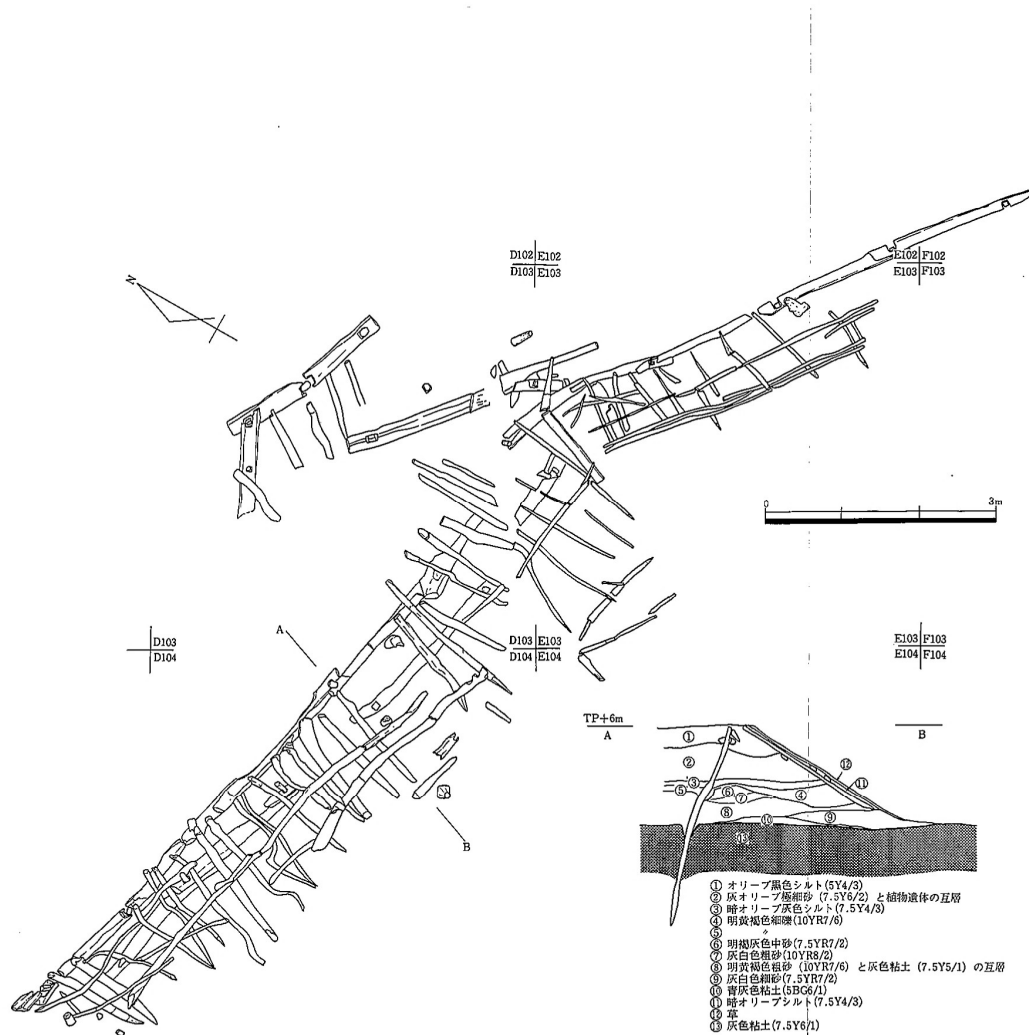
Eトレンチ D・E-97・93地区に位置する。南北方向に直線的にのび、全長約13mを検出した。上面はT.P.+5.7m、基底面はT.P.+4.0~4.5mにあり、高さは1.2~1.7m。斜面勾配は50度。杭列の西側に、この杭列に対応すると考えられる底部幅4~7mの南北方向の流路の痕跡がN R 5001の底面で確認されている。対岸にあたる位置上に杭列は検出されなかった。

S S 5003 (第236・238図、図版51)

E・E-3トレンチ C~F-102~104地区に位置する。東西方向にほぼ直線的にのびる。全長22mを検出した。上面はT.P.+6.0m、基底面はT.P.+4.6mにあり、高さは1.4m、斜面勾配は60度。斜面にも、(1)の工法を用いているが、底面には(4)の工法は用いられていない。



第237図 Hライン土層断面図-S D5001~N R5001・N R4001-



第238図 S S 5003遺構平面図・土層断面図

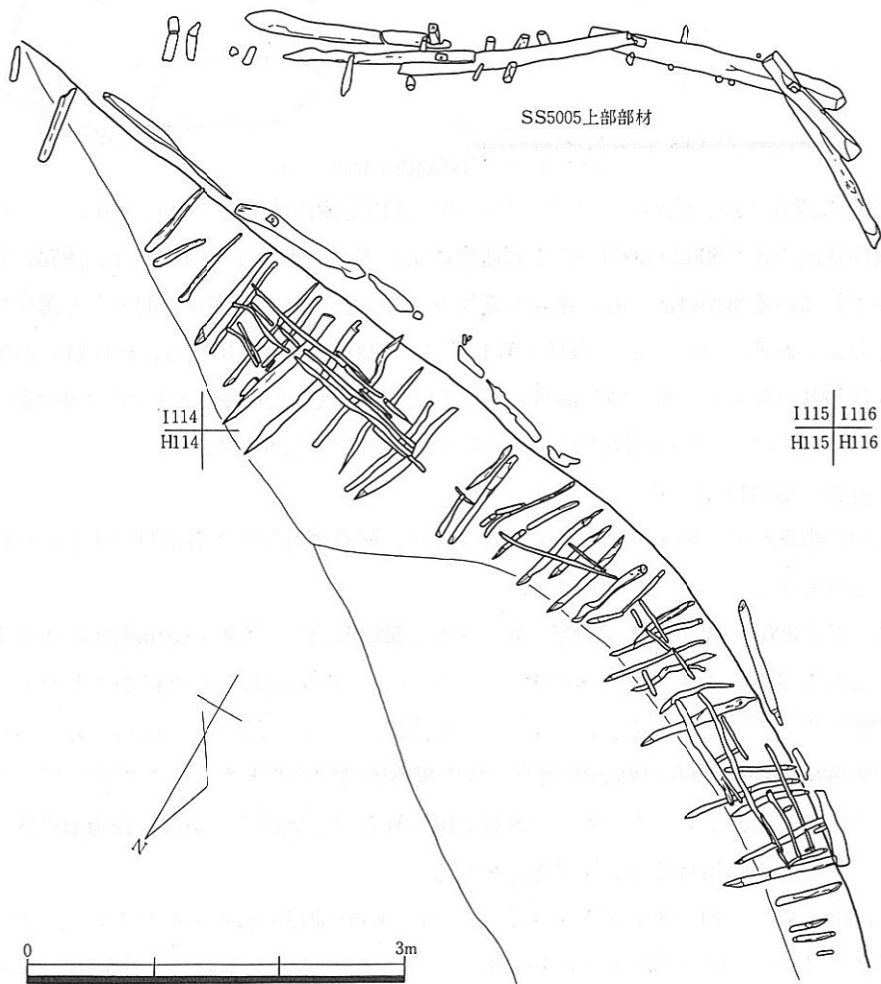
E-3 トレンチでは、この他にも数基の杭列の残骸が検出されている。トレンチ際の土層断面の観察によって、複数の異なる方向に流れる流路があった事が確認されており、これら杭列の残存状況から、流路が変わるたびにその都度新たな杭列が、構築されていったものと考えられる。

S S 5004 (第239図、図版52)

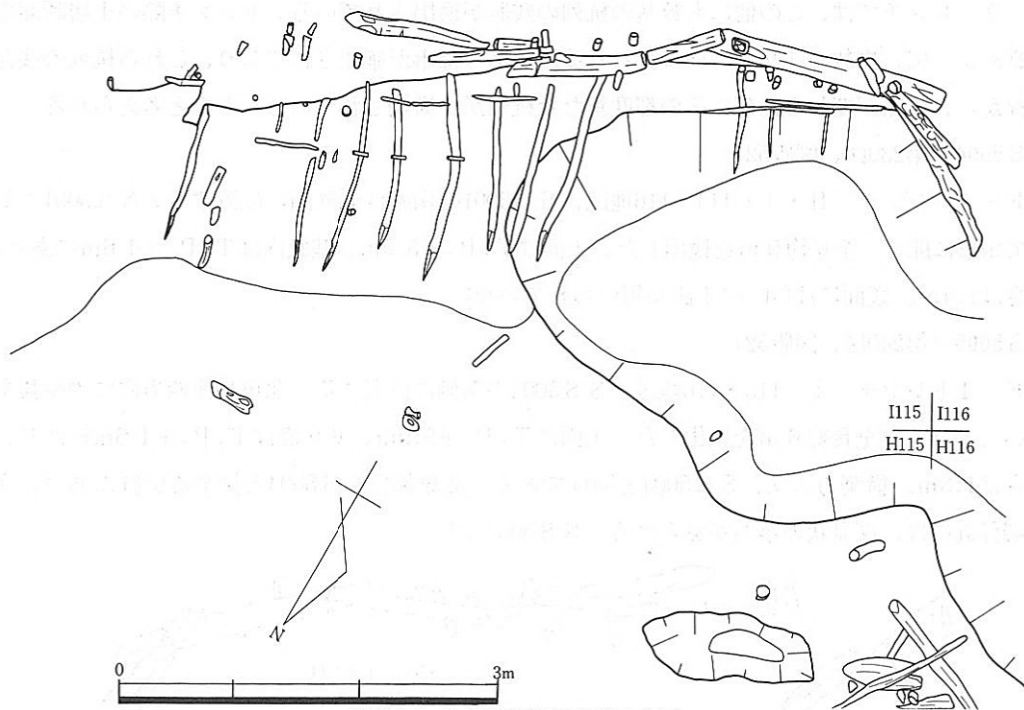
F-4 トレンチ H・I-114~116地区、S D 5001の南端西側壁面に位置する。NR 5001に対して扇形に開く。全長約9 mを検出した。上面はT・P.+5.9m、基底面はT・P.+4.6mにあり、高さは1.4m。底面には(4)の工法が用いられていない。

S S 5005 (第240図、図版52)

F-4 トレンチ I-115・116地区、S S 5004の南側に位置する。北東⇔南西方向にやや弧を描いてのびる。全長約6 mを検出した。上面はT・P.+5.9m、基底面はT・P.+4.6mにあり、高さは1.3m。構築方法は、S S 5004と同様である。北東端はS S 5004と接する位置にあり、南西端付近には、深見状の落ちが見られる。S S 5004より



第239図 S S 5004遺構平面図



第240図 S S 5005遺構平面図(2)

目的：今回の調査では、杭列に対応する具体的な流路を検出することは出来なかったが、S S 5001の残存状況やS S 5002・5003での土層観察によって、これら3基の杭列は、流路に対して平行に構築されている事が確認され、複雑な変遷をしていた流路の固定を目的とした護岸の杭列であったと考えられる。また、S S 5004（第1護岸）・5005（第2護岸）は、居住域の西側、S S 5001とNR5001が合流し、水流の攻撃面に当たる位置に相次いで構築された護岸の杭列であるが、その目的については、今回の調査では明らかにする事はできなかった。

出土遺物（第241～248図）

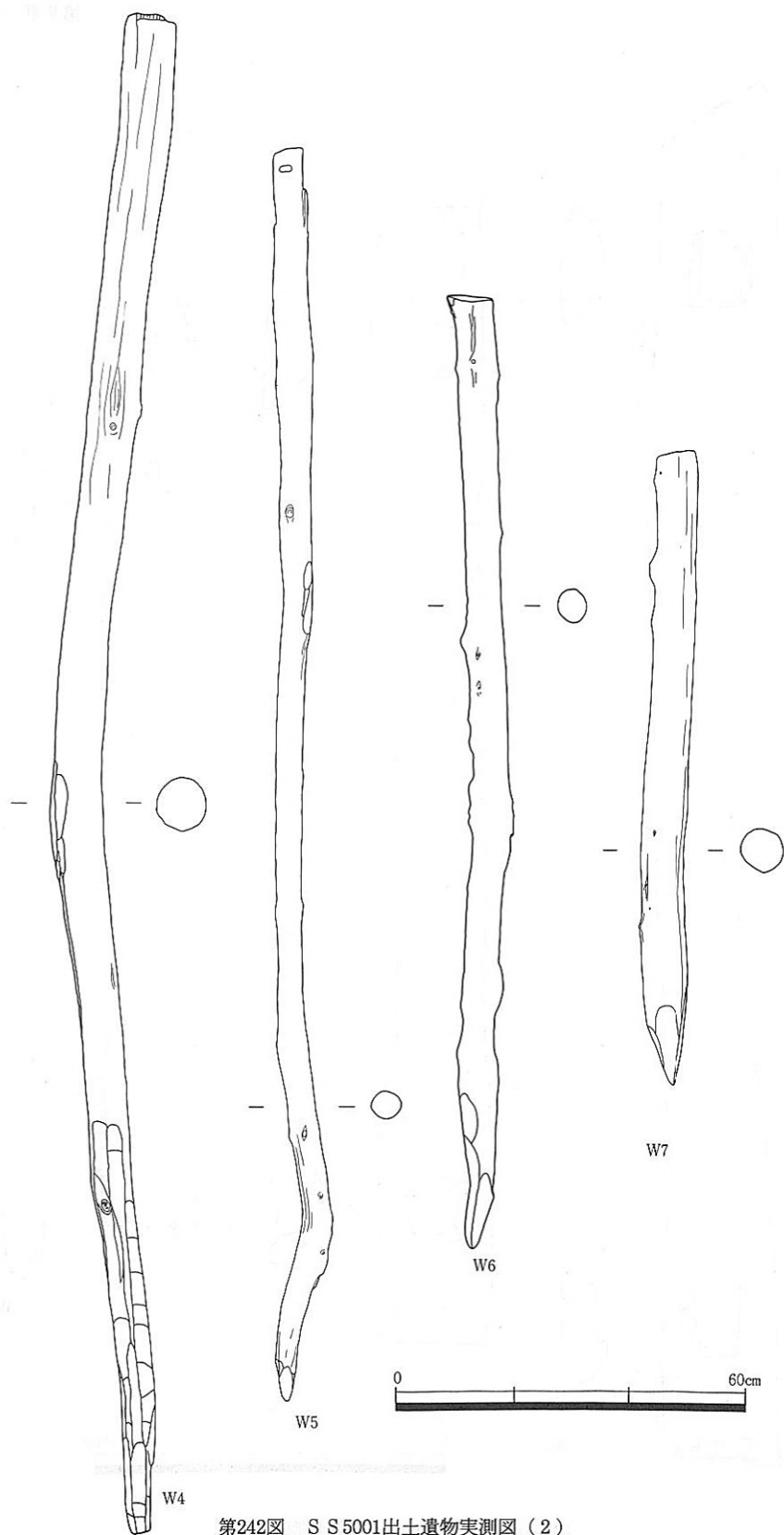
大半は杭列の構築材で、膨大な量に及ぶ。ここでは、任意に抽出した各部材の主なものについてのみ触れる事とする。

基礎横木（S S 5001-W 1～3、5002-W 1・2、5003W 2） 径9～10cm前後の木材を使用している。これを半裁したもの（S S 5001）や、厚さ3～6cm前後の板状に加工したもの（S S 5002・5003）などがある。現存長80～120cm。両端若しくは一方に3～4cmの方形の穴を設けるが、穴の間隔は中心で65～90cmを測り、特に規格性は認められない。この中には、中央部の一片を細く削り込んだものもみられた。S S 5001-W 3は、側面の一面にも長方形の穴が穿孔されており、何等かの転用材の可能性が考えられる。

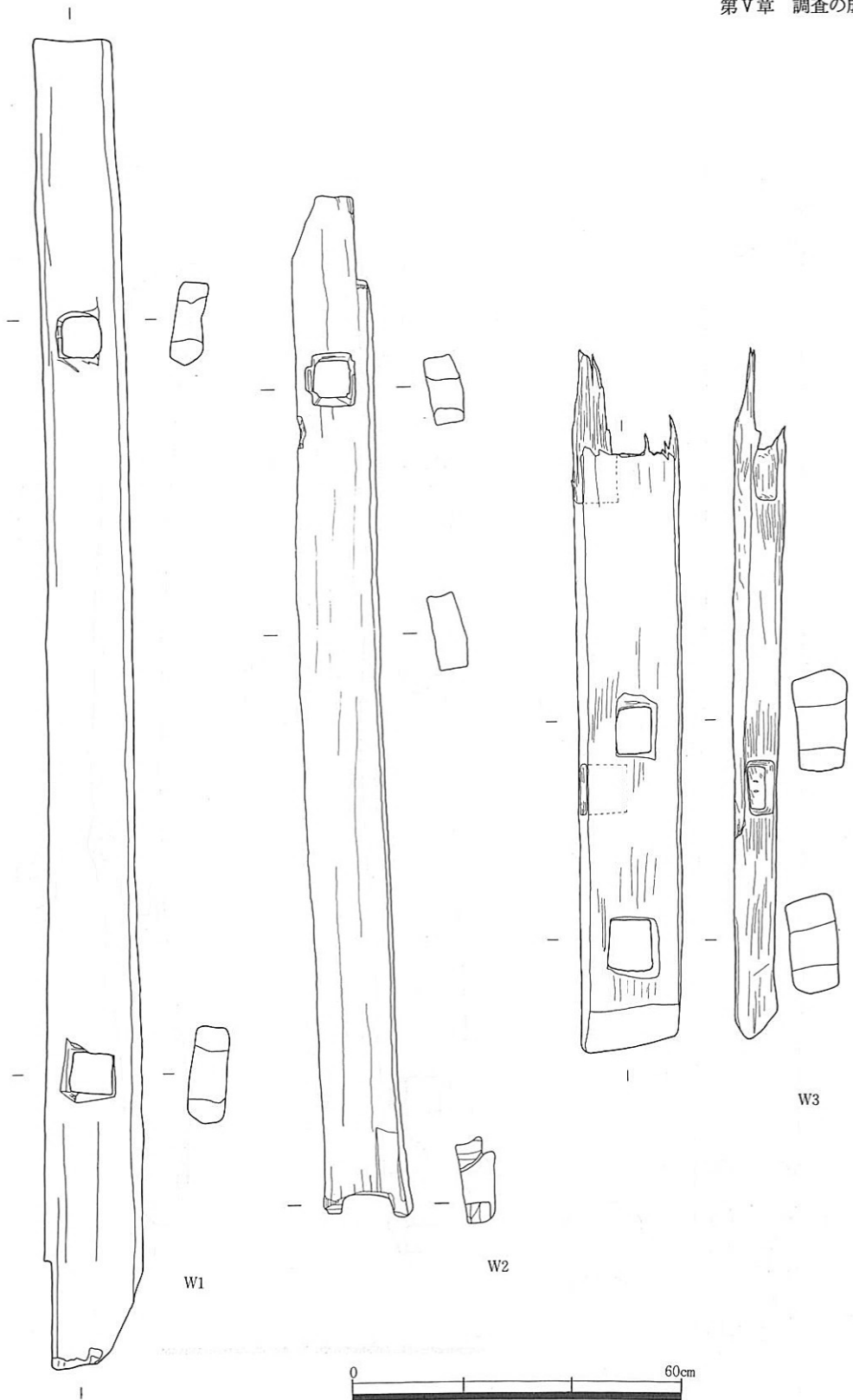
杭（S S 5002-W 7～14・5003-W 4～7） 径3～6cm前後の自然木を加工したもので、両端を削り込んだものと（S S 5002-W 11～14）、一方を削り込んだもの（S S 5001-W 4～7・5002-W 7～10・5003-W 4～7）とがある。両端を削り込んだものは、杭列上部の基礎横木の



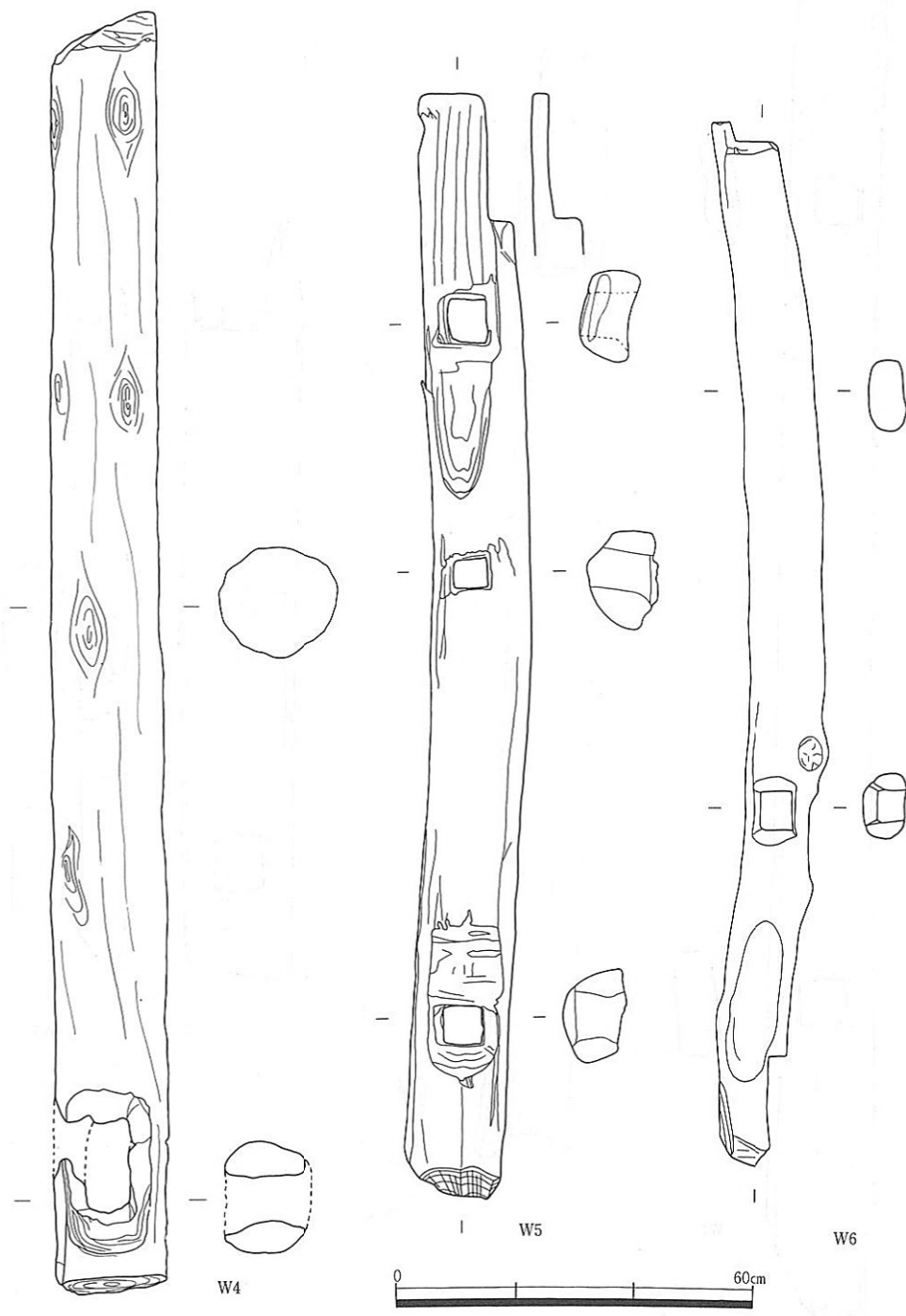
第241図 S S 5001出土遺物実測図(1)



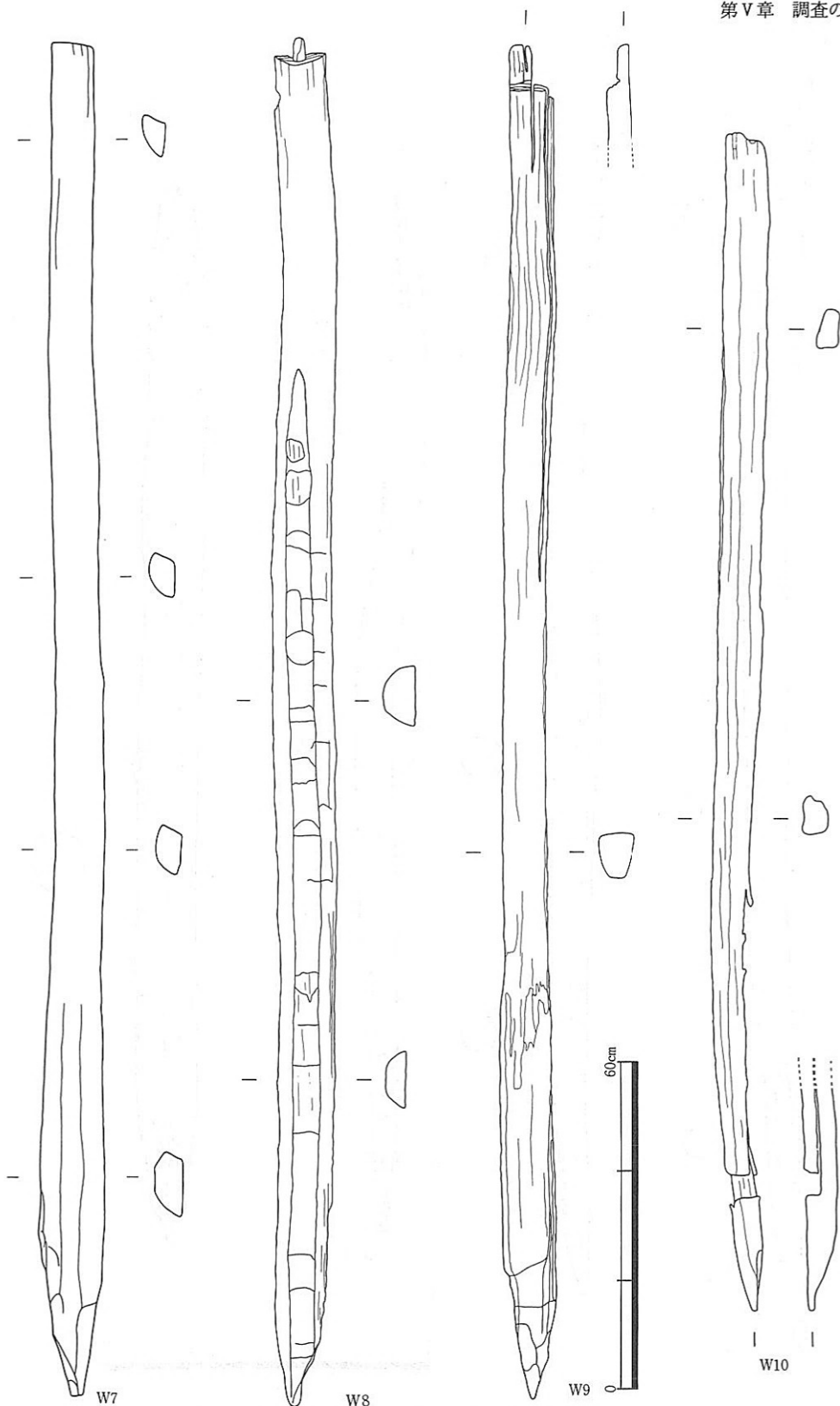
第242図 S S 5001出土遺物実測図(2)



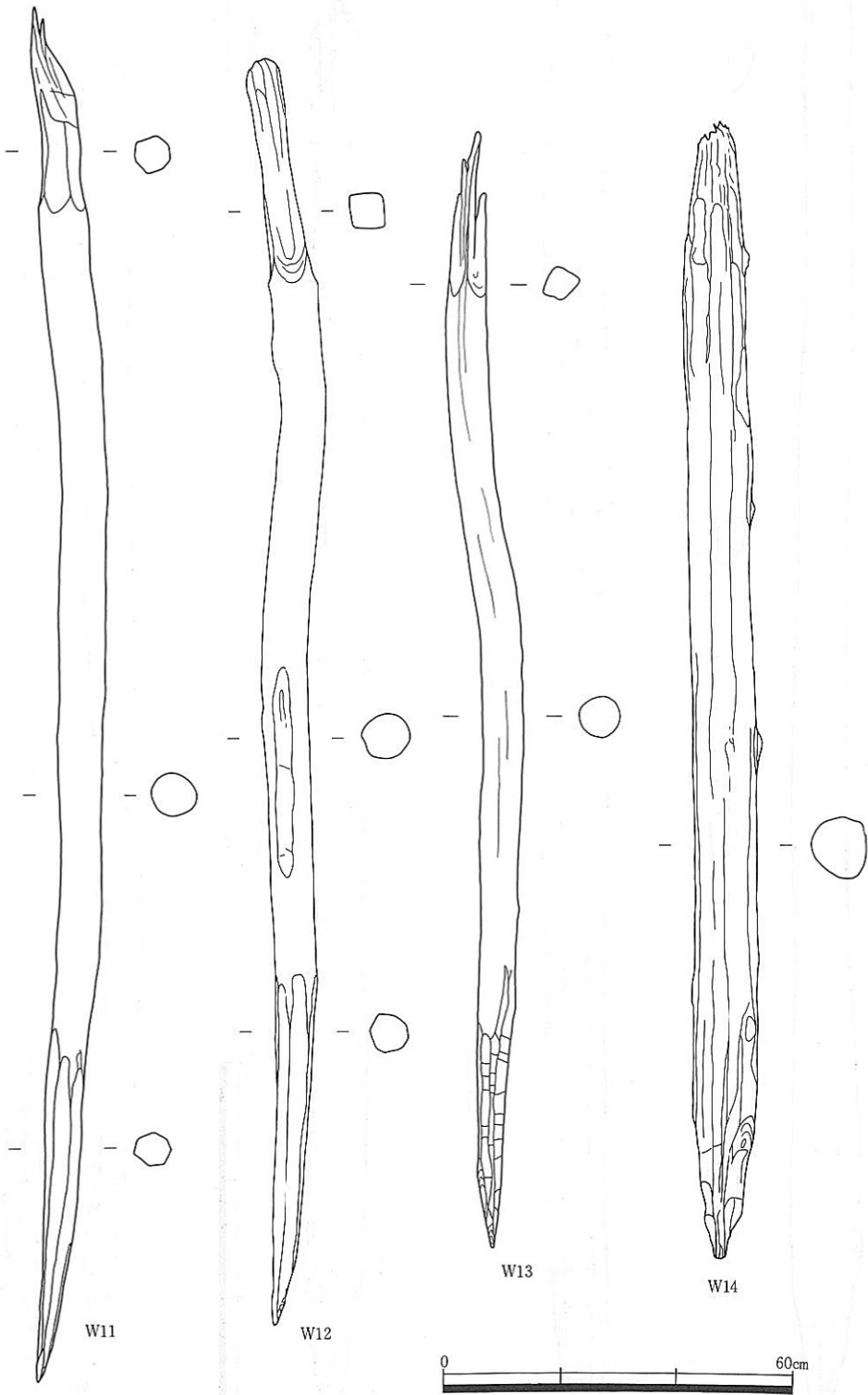
第243図 S S 5002出土遺物実測図(1)



第244図 S S 5002出土遺物実測図(2)



第245図 S S 5002出土遺物実測図 (3)



第246図 S S 5002出土遺物実測図 (4)



第247図 S S 5003出土遺物実測図(1)



第248图 S S 5003出土遺物実測図(2)

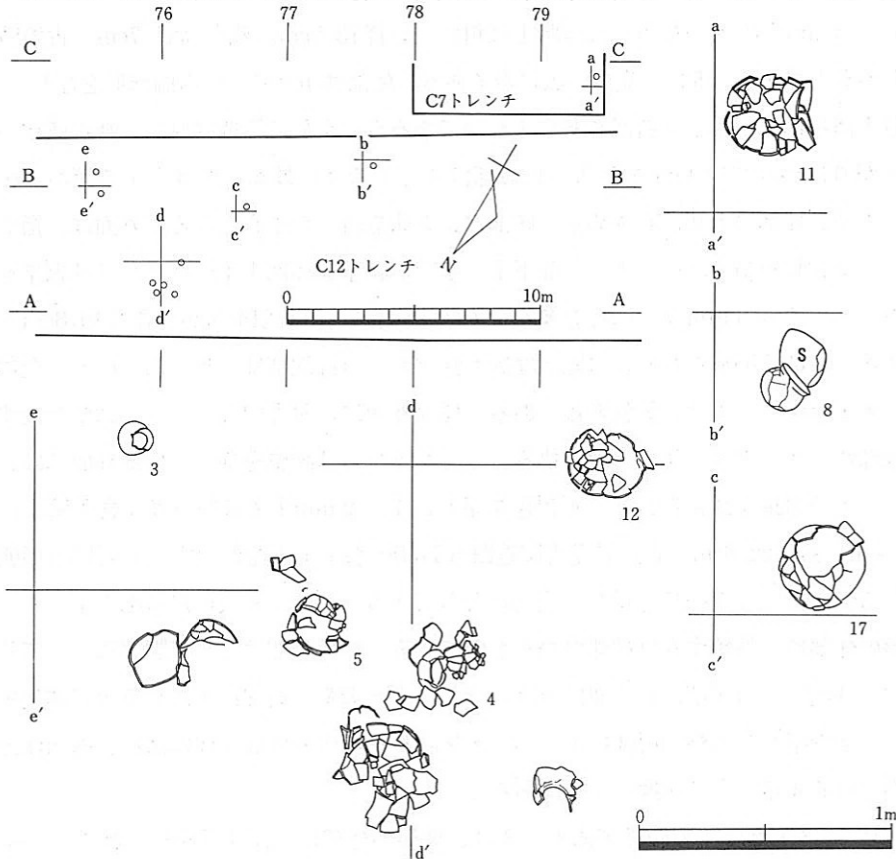
連結に用いられたものである。また、現存長100~130cmに及ぶものは杭列斜面に用いられた丸太杭であり、工事の際には杭列の規模に合わせて加工されたものと考えられる。その他のものは補助杭として用いられたものであろう。

3. 第5層出土遺物 (第250~253図、図版53)

第5層E層は、古墳時代中期遺構面から奈良・平安時代遺構面までの間に堆積している地層である。層厚は各地点によって異なる。層相・色調については第IV章で述べた通り一様ではなく、その変化は水平・垂直方向ともに漸移的であった。数層に分類する事が可能と思われるが、調査区全域に普遍的に存在し、分層を行なう際に鍵層となるような地層の堆積を確する事は出来なかった。地層堆積の要因としては、古墳時代中期自然河川N R5001が徐々に天井川化しつつ調査区外へ移動していく過程での、自然河川の堆積作用が考えられる。この第5層中からは、C・C-1~14トレンチを中心として、比較的遺存状態の良い遺物が多く出土した。特に、C-12トレンチA・B-77地区では、数個体の完形近くまで復元される土器が列状をなして出土した。(第249図、図版53) ここでは、これらの土器を中心に抽出して報告する事とする。

出土遺物 (第249~252図、図版166~168)

3・5・8・12・15・16はA・B-77地区土器列の一部である。1・1~6・7・10・13・14・



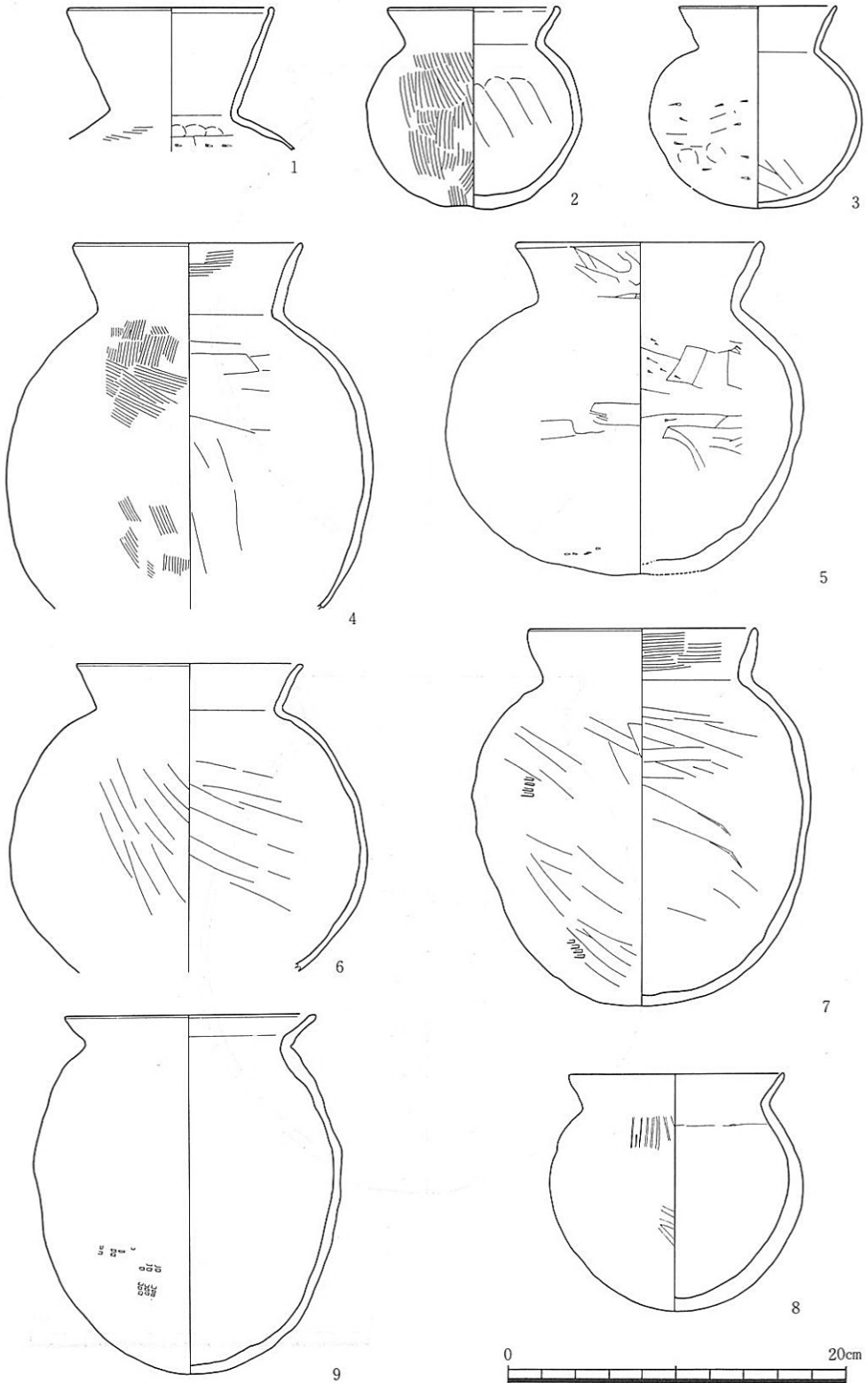
第249図 C7・C12トレンチ第5層遺物出土状況図

17・19はC-12トレンチA・B-74~78地区から、9はCトレンチE-66~70地区から、11はC-7トレンチ、18はC-6トレンチから出土したものである。

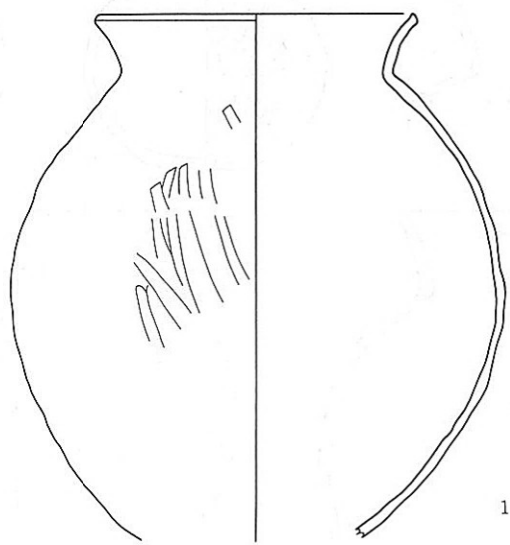
土師器

壺(1~7) 1は、頸部が細くしまり口縁部が外上方へ開く直口壺で、口縁端部は内方へ小さく肥厚する。肩部以下を欠損する。肩部外面はハケメ調整、肩部内面は下半にヘラケズリ調整を施し、肩部内面上半には指頭圧痕が認められる。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径12.1cm。残存高8.4cm。2・3は、球形の体部に外傾する口縁部のつく小型の壺である。2の口縁端部は内方へ小さくひきだし、底部中央は僅かに窪む。体部外面は縦方向の粗いハケメ調整、体部内面は指ナデ調整を施す。体部かから底部にかけては、器壁が厚い。にぶい橙色を呈し、2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径10cm。器高12cm。3は、口縁端部を薄く舌状におさめ、体部外面に横方向のヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。外面体部下半には指頭圧痕が認められる。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.2cm。器高12cm。4は、最大径が体部中央にある胴長の体部に、外上方へ外反気味に開く口縁部がつくものである。口縁端部は舌状におさめる。体部外面は縦方向のハケメ調整、体部内面は縦方向の後上半に横方向のヘラナデ調整を施す。外面口縁部から肩部にかけては黒斑、外面体部下半には煤の付着が認められる。にぶい橙色を呈し、3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径13.5cm。残存高21.7cm。古墳時代前期布留式期のものである。5は、完形の広口壺である。体部はかなりひずみ偏球形をなしているが、本来は最大径を体部上半から肩部に有するものであろう。全体に器壁は厚く、特に底部から体部の立ち上がりにかけては1cmを測る。口縁部は「く」の字に外傾した後上半で僅かに屈曲して外上方へのび、端部は舌状におさめる。底部は、丸味を持った平底となる。外面は、指ナデ調整の後ヘラナデ調整を施す。内面は、体部下半に指ナデ調整、体部上半にヘラケズリ調整を施す。浅黄色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14.5cm。器高19.8cm。7は短頸壺である。体部は卵形をなし、口縁部は短く直立し、口縁端部は舌状におさめる。全体に器壁が厚く、鈍重な感じを受け、調整も雑である。体部外面は、斜方向のヘラナデ調整を施す。内面は、口縁部にハケメ調整、体部に深く抉るようなヘラケズリ調整を施す。体部外面には、不明瞭ながらタタキの痕跡が認められる。灰褐色を呈し、1~2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径13.5cm。器高22.6cm。奈良県発志院遺跡S D50中層出土土器群の中にも同様の形態を成すものが有る。⁽¹⁰⁾布留式期の中でも新しい段階のものである。6は、最大径が体部下半にあって下膨みの球形の体部に、外傾する口縁部のつくものである。口縁端部は、ナデ調整によって断面四角形をなす。外面は、口縁部から肩部にかけてはヨコナデ調整、肩部以下にヘラナデ調整を施す。内面は、肩部を指ナデ調整、肩部以下にヘラナデ調整を施す。外面全体には煤、内面体部下半には炭化物が付着する。布留式期のものであろう。

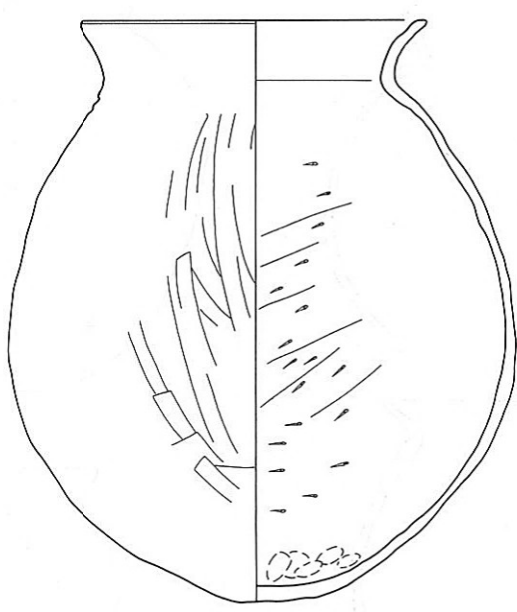
甕(8~12) 8・9は小型の甕である。8は、球形の体部に外傾する短い口縁部がつく。底部から体部下半にかけては器壁が厚い。体部外面は粗いハケメ調整、体部内面はナデ調整を施す。



第250図 第5層出土遺物実測図(1)



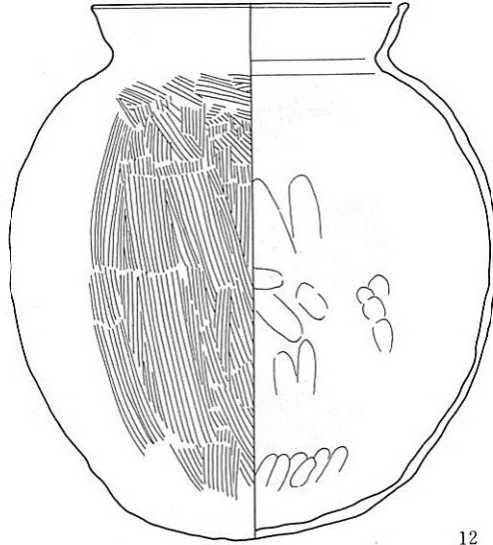
10



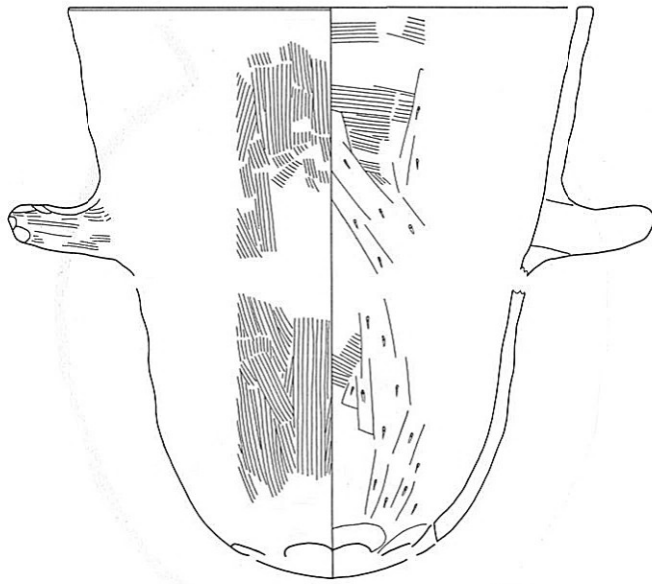
11



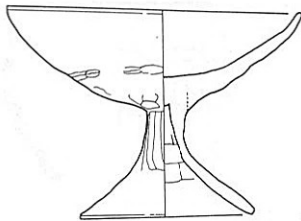
第251図 第5層出土遺物実測図(2)



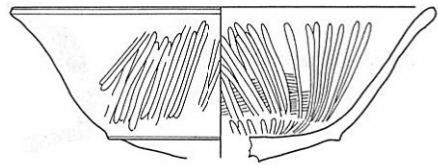
12



13



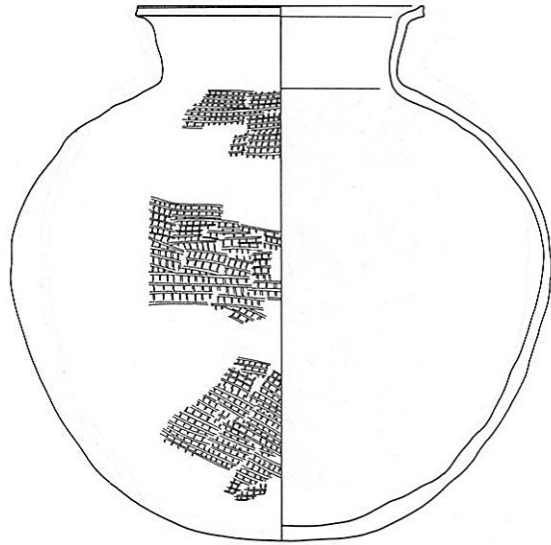
15



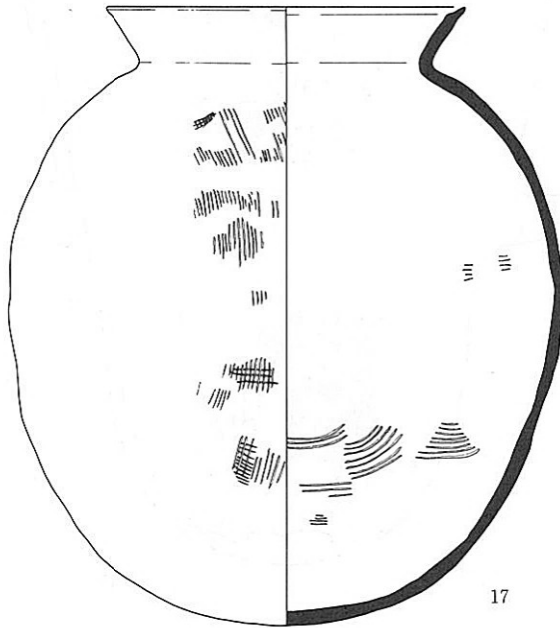
14



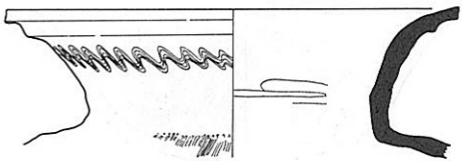
第252図 第5層出土遺物実測図(3)



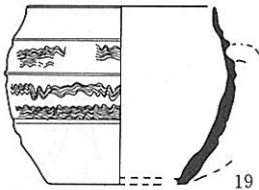
16



17



18



19



第253図 第5層出土遺物実測図(4)

灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径12.6cm。器高14.1cm。9は、卵形の体部に「く」の字に外傾する短い口縁部がつく。口縁端部は、ナデ調整によって僅かに内傾する面をなす。内外面の調整は、器壁の磨滅が著し明らかでないが、体部外面の一部に格子のタタキの痕跡がかすかに認められる。外面体部下半には煤、底部内面には炭化物が付着する。灰褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14.9cm。器高21.3cm。10は、最大径を体部中央に有する長卵形の体部に、外傾して立ち上がり上半で小さく外反する口縁部がつくものである。口縁端部は、ナデ調整によって外傾する面をなし、更に上端は上方へ小さくひきだす。体部外面は縦方向のヘラナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。外面体部下半には煤が付着する。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径16.6cm。残存高27.8cm。11は最大径が体部下半にあって下膨みとなる卵形の体部に、直立した後上半で外反する口縁部のつくものである。口縁端部は舌状におさめる。底部は丸味のある平底で、やや突出する。体部外面は縦方向のヘラナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。底部内面には指頭圧痕が認められ、体部外面には煤が付着する。にぶい黄橙色を呈し、1～5mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径18.3cm。器高30.7cm。12は、布留式甕の型式組列上に位置づけられる甕で、初期須恵器を伴う時期のものである。胴長でやや肩の張る体部に、外傾して立ち上がる口縁部がつき、口縁端部は内方へ小さく肥厚する。体部外面は縦方向の粗いハケメ調整、体部内面は指ナデ調整を施す。外面肩部以下に煤、内面体部下半には炭化物が付着する。にぶい黄橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径16.8cm。器高28.3cm。

甕 (13) 丸底で多孔式の甕である。体部は、直線的に上方へ立ち上がる砲弾形をなし、そのまま口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整を施し、上端は平坦な面をなす。体部中央より上に牛角状の把手がつく。体部外面は縦方向のハケメ調整を強く施し、体部内面は横・斜方向のハケメ調整の後口縁部直下までヘラケズリ調整を施す。にぶい橙色を呈し、1～5mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径27.8cm。器高は29.3cm以上。

高坏 (14・15) 14は、外面底部と口縁部との境に低い突帯を貼り付ける高坏で、脚部を欠損する。口縁部は内弯気味に開き上半で外反する。口縁端部はナデ調整によって断面四角形をなす。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はハケメ調整の後放射状のヘラミガキ調整を施す。橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径22.5cm。残存高8cm。15は、浅い碗状の坏部に、細く短い筒部とゆるく外反して開く裾部とからなる中空の脚部を挿入するものである。坏部外面には、口縁部ヨコナデ調整によって底部との境に浅い稜をなす。口縁端部は丸く、裾端部は断面四角形におさめる。底部外面は指ナデ調整を施す。脚部は、筒部外面ヘラナデ調整、裾部内面ヘラケズリ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.5cm。裾部径9.5cm。器高10.5cm。

須恵器

甕 (17～18) 17は、長卵形の体部に、「く」の字に外傾する口縁部のつくものである。口縁端部は外方へ薄く舌状にひきだし、端部内面には浅い段をなす。体部外面は平行タタキの後ナデ調

整、体部内面は、丁寧にナデ調整を施し、あて具痕を消している。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径18.4cm。器高32.8cm。焼成は堅緻である。16は、やや肩の張る球形の体部と、ほぼ垂直に立ち上がった後「く」の字に屈曲して開く口縁部とからなる甕である。口縁端部は、上方へ小さくひきだし断面四角形をなす。口縁部はロクロ調整、体部外面は擬格子の細かなタタキ、体部内面はナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土はやや粗く、焼成は甘い。口径15.4cm。器高28.4cm。18は、小型の甕で、体部下半を欠損する。口縁部は、外上方へ外反して立ち上がり更に上端で外反する。肩部は、水平方向へ張り出す。口縁端部は断面四角形をなす。口縁部直下には、断面三角形の低い突帯を巡らし、突帯の下には1条の波状文を施す。肩部外面は、細筋の平行タタキ、内面にナデ調整を施す。全体にシャープな作りである。灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。口径23.8cm。残存高8.0cm。16・17の形態は、須恵器の中にはあまり見られないものであり、また、17のように、口縁端部を薄く舌状にひきだす特徴は、城山遺跡城山第5号墳出土の韓式系土器⁽¹¹⁾にも共通するものがあり、本例もまた、韓式系土器の可能性が考えらえる。

把手付碗(19) 底部と把手の部分を欠損する。内弯して立ち上がる体部に小さく外反する口縁部が付く。口縁部は薄く、端部は尖状におさめる。口縁部直下と体部上半に突帯と体部下半に1条の沈線を巡らせ、その間に波状文を配す。波状文はやや雑に施される。灰白色を呈し、胎土は精良である。焼成は不良で生焼けの状態である。口径9.8cm。器高9.5cm。I型式2段階に比定される。

(注)

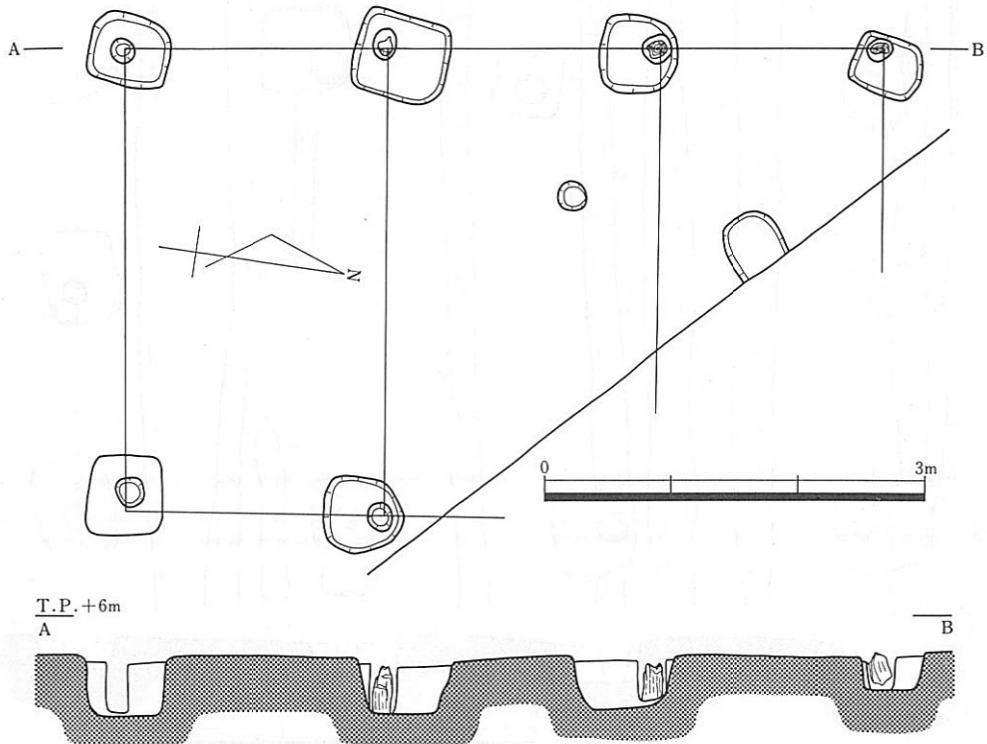
- (1) 赤沢秀則 1985年『出雲地方古墳出現前後の土器編年試案』松江考古 第6号 松江考古学談話会
- (2) 船越元一郎ほか 1977年「青木遺跡発掘調査報告書II」青木遺跡発掘調査団
- (3) 原口正三・田辺昭三 1962年「河内船橋遺跡出土遺物の研究(2)」大阪府文化財調査報告書第11号
- (4) 中村 浩 1978年「陶邑Ⅲ-和泉窯出土遺物の時期編年-」大阪府文化財調査報告書第30号 以後、特に明記しない限り須恵器の編年については本報告書の編年を参考とする。
- (5) 小林行雄 1973年「続古代の技術」
- (6) 注(5)に同じ
- (7) 注(3)に同じ
- (8) 藤井利章 1980年「大和郡山発志院遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41号
- (9) 北野耕平 1979年「河内野中古墳の研究」大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊
- (10) 注(8)に同じ
- (11) 杉本次郎・岩瀬 透 1986年「城山(その1)」大阪文化財センター

第4節 奈良・平安時代

今回の調査で検出された主な遺構は、水田・掘立柱建物4棟・溝3条・土坑5基・井戸6基であった。水田は、調査区の北側30ライン以北に広がり、T.P.+5.5m付近にある。第5層—青灰色粘土層をベースとし、畦畔・水田面上には、厚さ約10cmで黄灰色・灰白色の微砂・シルトが堆積していた。これに対して、掘立柱建物などの遺構は、調査区の中央66～106ラインの間、T.P.+6.4m付近にあり、第5層—灰褐色・黄灰色の極細砂・微砂層をベースとする。また、66～84ライン付近では、掘立柱建物などの遺構と重複して耕作に伴うと考えられる幅約15cm前後の小溝群も検出されている。各遺構から出土する遺物には、7世紀～10世紀までのものがあり、かなりの長期間にわたって、生活の場や生産の場として土地利用がなされていたものと思われる。

S B 6001 (第254図、図版54・170)

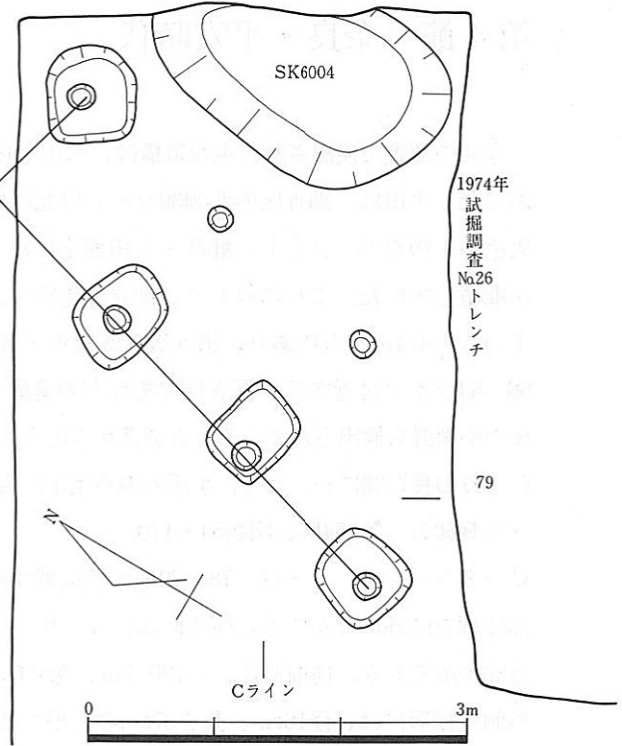
C-8 トレンチ F・G-78・79地区に位置する。3間(6.0m)×1間(3.6m)を検出した。北東部は調査区外に存在する。棟方向は、N-9°-Eを示す。各柱間寸法は、桁行175～210cm、梁行360cmである。柱掘形は、一辺0.7m、深さ0.5mの方形を呈し、柱穴は、径約0.3mである。西側柱掘形には、径16cm、長さ37cmの柱根が残存しているものもあった。柱に利用された樹種は、コウヤマキであった。この他、柱掘形内からの遺物の出土は認められなかった。



第254図 S B 6001遺構平面図・断面図

S B 6002 (第255図、図版54)

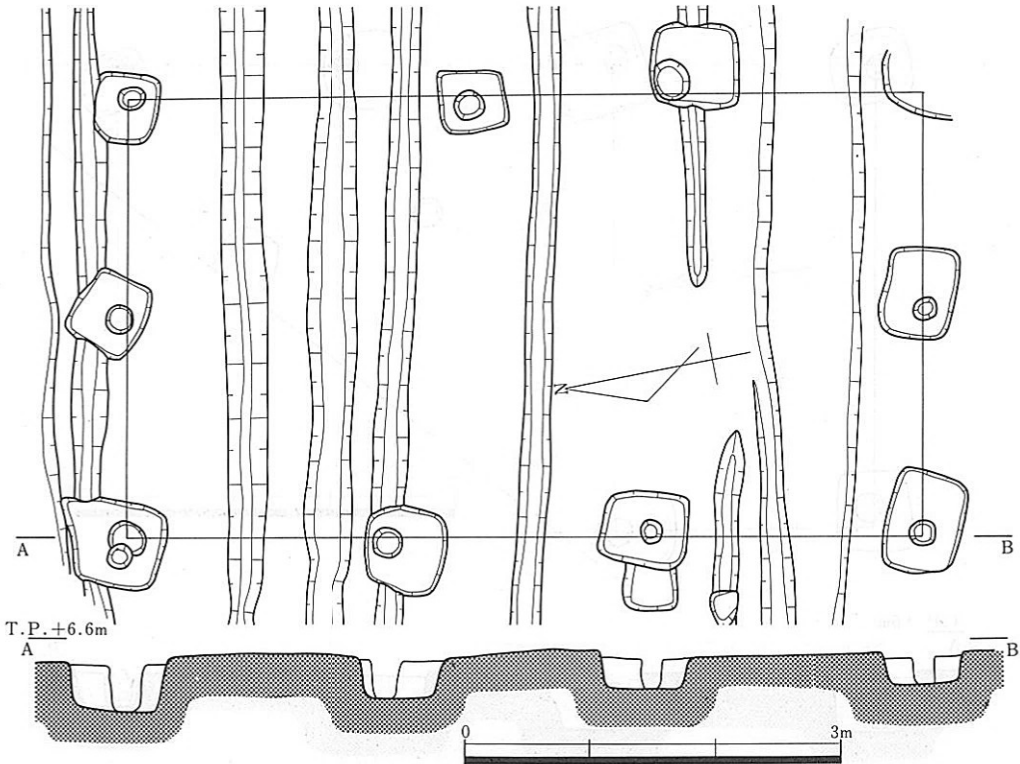
C-7トレンチ B・C-78・79地区に位置する。3間(4.6m)×1間(1.2m)を検出した。S K 6004や小溝群と重複し、S K 6004・小溝群よりも古い。棟方向は、N-16.5°-Eを示す。各柱間は、桁重150cm、梁行推定120cmである。柱掘形は、一辺0.6~0.8mの方形を呈し、柱穴は、径約0.25mである。身舎内には、柱掘形と並行して径約20cmの柱穴が2個検出されており、床束柱の可能性も考えられる。柱掘形内からの遺物の出土は認められなかった。



第255図 S B 6002遺構平面図

S B 6003 (第256図、図版55)

C-9トレンチ B~D-85・86地区に位置する。3間(6.5m)×2間(3.5m)の建物である。小溝群と重複し、小溝群よりも古い。東側B・C-86地区でも、一辺0.5~0.6mの柱



第256図 S B 6003遺構平面図・断面図

掘形が検出されており、更に数棟の建物が存在していたものと思われる。棟方向は、 $N-11.5^{\circ}-E$ を示す。各柱間は、桁行210cm、梁行175cmである。柱掘形は、一辺60~70cm、深さ40cmの方形を呈し、柱穴は、径0.2~0.25mである。柱掘形内からの遺物の出土は認められなかった。

S B 6004 (第257図、図版56)

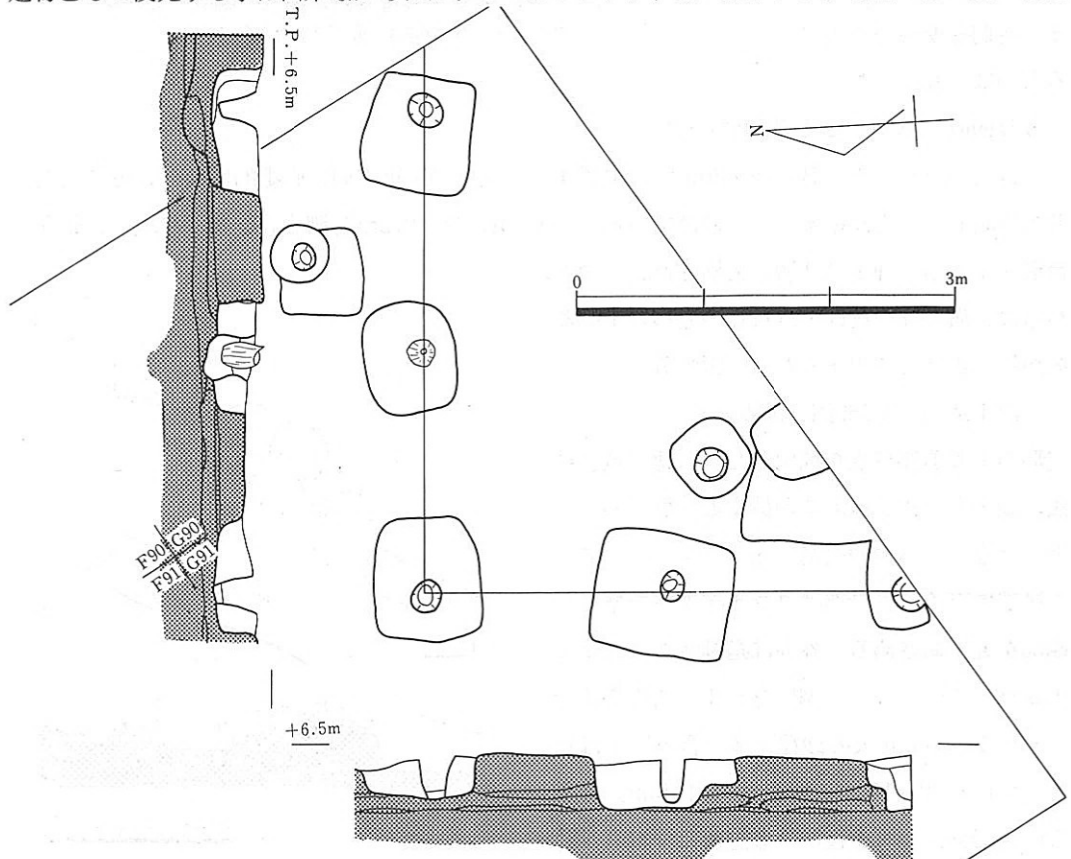
D-4 トレンチ G-91・92地区に位置する。2間(3.8m)×2間(3.8m)を検出した。東南部は、調査区外に存在する。西側柱通りで、 $N-4.5^{\circ}-E$ を示す。各柱間は、全て190cmである。柱掘形は、一辺0.9~1.0m、深さ0.4mの方形を呈し、柱穴は、径0.2~0.3mである。北側柱掘形には、径20cm、長さ45cmの柱根が残存していた。また北西隅の柱掘形からは、中村浩氏の編年によるIV型式3段階に相当すると思われる須恵器の提瓶が出土したが、細片のため図示し得なかった。

S B 6005 (第258図、図版56)

E-3 トレンチ C・D-104・105地区に位置する。3間(4.5m)×2間(3.6m)の建物である。棟方向は、 $N-97^{\circ}-E$ を示す。各柱間は、桁行150cm、梁行180cmである。柱掘形は、径0.2~0.35mの円形を呈し、柱穴は、径0.15mである。柱掘形内からの遺物の出土は認められなかった。

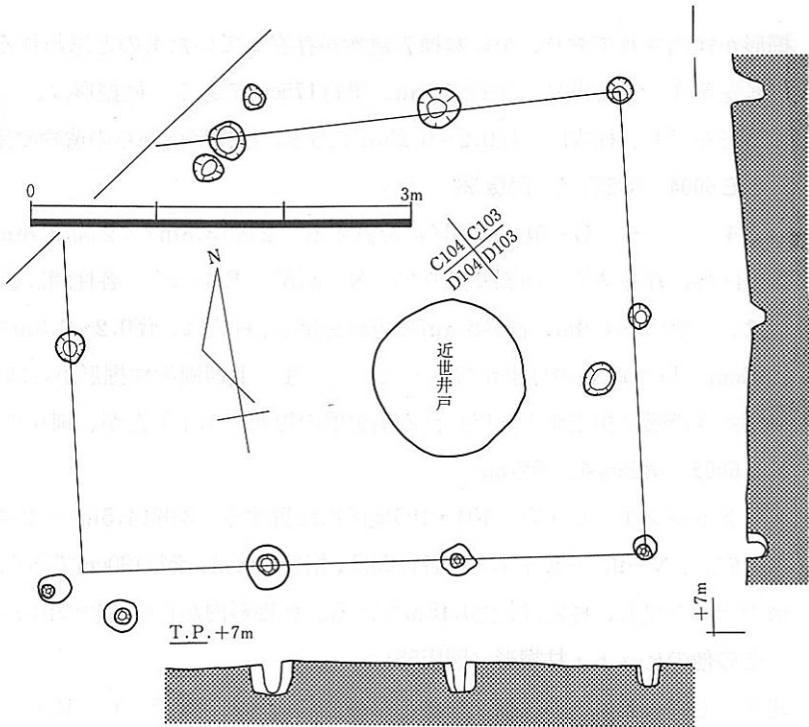
その他のピット・柱掘形 (図版55)

建物として復元する事は出来なかったが、C-9 トレンチ、C-12 トレンチのA・B-73~75地



第257図 S B 6004遺構平面図・断面図

区・同B-85・86地区、
ONランプ1トレンチ
A・B-90・91地区では、
径0.15~0.2mのピット
や、一辺0.5~0.6mの方
形の柱掘形が多数検出さ
れた。特に、A・B-73
~75地区では南側に近接
して、SK6001・6002、
SE6005が位置しており、
複数棟の建物が存在して
いるものと考えられる。
これらピット・柱掘形の中
には、遺物が出土したも
のもあったが、細片が多
く時期を明らかに出来る
ものは少なかった。



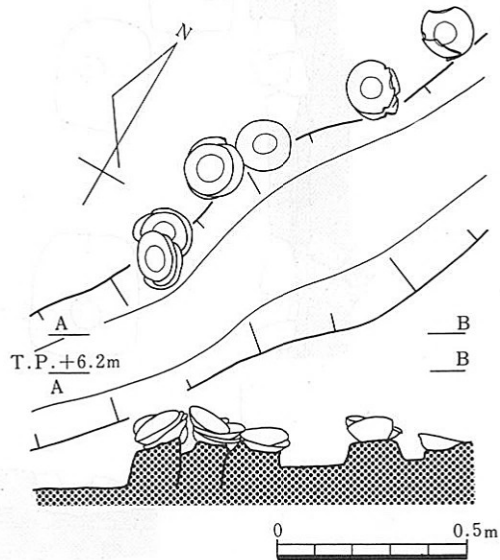
第258図 SB6004平面図・断面図

S D 6001 (第259・262図、図版57)

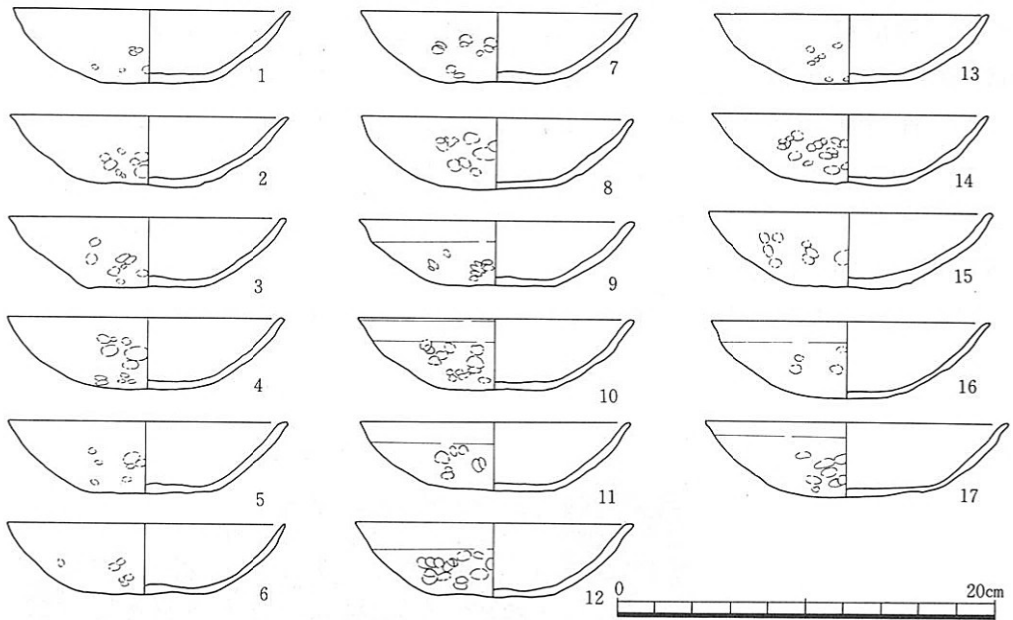
C-11トレンチ A・B-65・66地区に位置する。北西⇨南東方向に直線的にのび、更に南端付近で分岐し、一方は南東方向へのびている。幅0.4m、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、断面逆台形を呈する。埋土は2層に大別され、1層中からは、溝北端の肩部で計17点の完形の土師器杯が折り重なって出土した。(図版57)

出土遺物 (第260図、図版169)

完形の土師器杯17点を抽出した。形態、調整技法、胎土ともに、極めて類似する一群である。平らな底部からやや内湾気味に開き、そのまま口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整を施し、端部を丸くおさめる。外面は指押さえのまま未調整、内面にはナデ調整を施す。明赤褐色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14.2~15cm。器高3.6~4.1cm。これらの土器群は、調整技法・形態から平城宮SD650A杯A e類⁽¹⁾やさみ山遺跡79-38区SE01



第259図 SD6001遺物出土状況図



第260図 S D6001出土遺物実測図

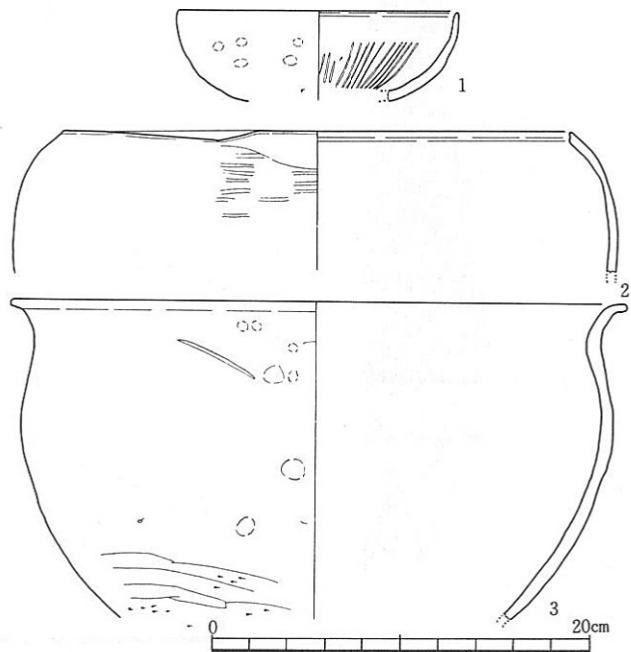
(2) 中層出土の中に類例が求められ、9世紀前半頃に比定する事が出来る。

S D6002 (第262図、図版57)

C-11トレンチの北東コーナー、S D6001の東側に位置する。東側肩部は調査区外にあり、幅1.7m、総延長3.1m、深さ0.4mを検出した。西壁は2段になって立ち上がり、底面は平坦である。埋土は、3層に分層され、第3層中からは少量の遺物が出土した。

出土遺物 (第261図、図版170)

図示できたのは、土師器杯・片口鉢・鍋の3点であった。1の杯は、飛鳥II様式に並行する時期のものである。(3) 口縁端部内面には、浅い沈線が巡り、体部内面には、放射状の暗文が施される。外面は器壁の磨減が著しく、調整技法については明らかでないが、僅かに指頭圧痕が認められる。にぶい黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径14.8cm。残存高4.7cm。2は、口径26.6cmの大型の片口鉢である。内弯する口縁部の端部を上方へ小さくひきだし、内面に浅い段

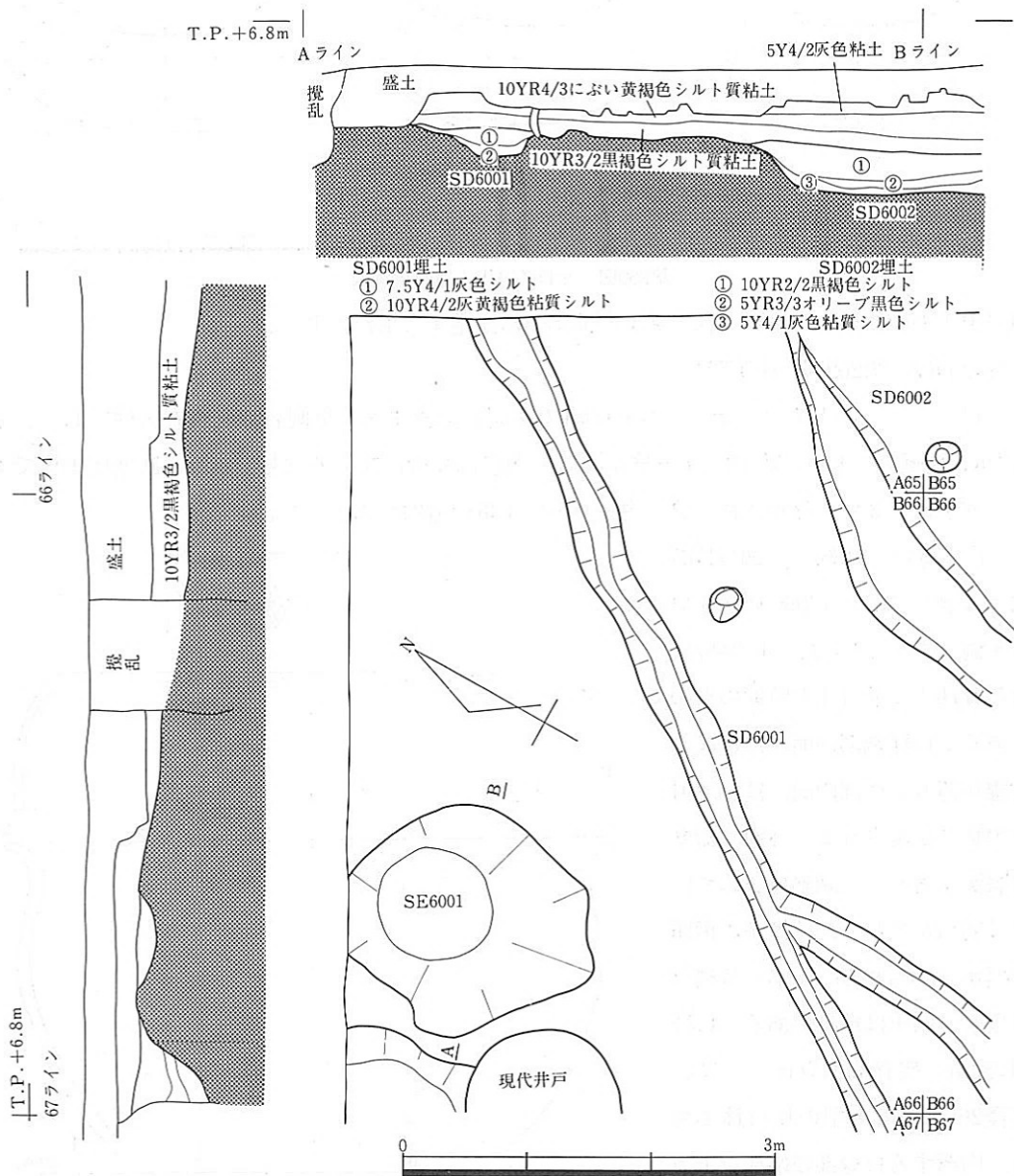


第261図 S D6002出土遺物実測図

をなす。外面に粗いヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土は精良である。
 3は口径32cm、残存高16.3cmの鍋である。口縁部は、ヨコナデ調整により水平方向へひきだし、
 端部は断面四角形におさめる。体部下半は横方向のヘラケズリ調整、体部上半は指押さえの後、
 軽くヘラナデ調整を施す。体部内面はナデ調整。頸部内面には炭化物が付着する。明赤褐色を呈
 し、1~2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。

S D 6003 (第263図、図版58)

C-12トレンチ A・B-78~81地区・CトレンチD・E-82~84地区・C-14トレンチF~H



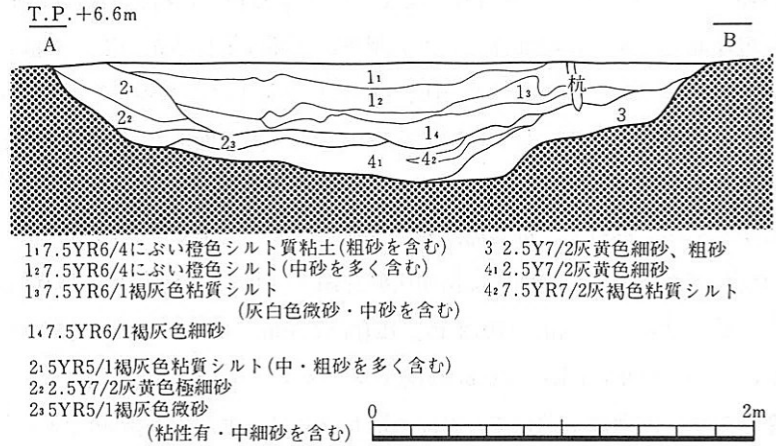
第262図 C11トレンチ遺構全体図・土層断面図

—84～88地区に位置する。N-15°-E方向に直線的にのびる大溝で、総延長約52mを検出した。更に調査区外へ延びる。肩部幅3.5～4.0m、底部幅2.0～3.0m、深さ0.6～1.0m。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がり、断面逆台形を呈するが、A・B-78・79地区の西壁の一部では、2段になって立ち上がり狭いテラス面をなす箇所も認められた。埋土は、砂、シルトで4層に大別され、粘土層や腐植土層などの堆積は認められなかった。遺物は、最下層とテラスの肩部付近の第1層中から特に多く出土した。

出土遺物（第264～266図、図版171～172）

土師器18点、須恵器17点を抽出した。

土師器
 坏（1～7） 1は、
 完形の坏である。1は、
 小さな平底から外傾気



第263図 S D6003土層断面図

味に立ち上がり、直立する口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整により、端部は上方へ小さくひきだし、内面には沈線が巡る。外面は指押さえのままで未調整、体部内面には放射状の暗文を施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径10.4cm。器高3.8cm。2は、口縁部ヨコナデ調整で、端部は舌状におさめる。外面は口縁端部直下までやや粗いヘラミガキ調整、内面は放射状の暗文を施す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径13.6cm。残存高4.4cm。3は、内弯して立ち上がる体部と僅かに外反する口縁部とからなるもので、底部を欠損する。口縁端部は、外方へ小さくひきだし、内面に浅い段をなす。底部外面はヘラケズリ調整、内面は口縁部に横方向のヘラミガキ調整、体部に放射状の暗文を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径12.6cm。残存高4.1cm。6の口縁部は、ヨコナデ調整により僅かに外反し、端部は舌状におさめる。体部との境には浅い段をなす。器壁の磨滅が著しく調整技法については明らかでない。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径13.4cm。残存高3.8cm。5は、平らな底部から、内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至る坏で、口縁端部は外方へ小さくひきだす。口縁部はヨコナデ調整、外面は指押さえの後ナデ調整を施す。内面の調整は器壁の磨滅の為明らかでない。にぶい褐色を呈し、胎土は精良である。口径15cm。残存高4.2cm。7は、平らな底部から、外上方へ僅かに外傾して立ち上がり、口縁部に至る坏である。口縁部は僅かに外反し、端部は内方へ巻き込むことなく、上方へ小さくひきだし丸くおさめる。器壁の磨滅が著しく、調整については明らかでない。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径16.4cm。器高4.7cm。4は、底部より内弯して立ち上がって体部をなし、口縁部はヨコナデ調整により、端部は僅かに外方へひきだし

て舌状におさめる。外面は指押さえの後軽くナデ調整、内面も同様のナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径14cm。残存高2.9cm。

皿(8) 平らな底部とやや外反する口縁部とからなる小皿である。口縁端部は舌状におさめる。口縁部はヨコナデ調整、外面は指押さえの後ナデ調整、内面ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径11cm。残存高2.1cm。

高坏(9~15) 9は、坏部片である。内弯する短い口縁部の端部内面には沈線が巡り、上端は平坦な面をなす。口縁部はヨコナデ調整、外面は指押さえの後やや粗いヘラミガキ調整、内面は放射状の暗文を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径19cm。残存高3.7cm。10~12は、手捏ねによるミニチュアの高坏である。内外面には指頭圧痕が顕著に認められる。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。器高5.1~6.6cm。14は、脚筒部上半が中実の脚部片である。裾部へはゆるやかに移行し、裾端部は外方へ長くひきだし丸くおさめ、内面には浅い段をなす。坏部との接合部外面と裾部内面には指頭圧痕を顕著に残す。外面にナデ調整を施す。にぶい赤褐色を呈し、胎土は粗い。裾部径10.2cm。残存高7.7cm。15は、中空の脚部片である。裾部は、ゆるやかに「ハ」の字に開き、端部は舌状におさめる。筒部との境には、浅い段をなす。外面はナデ調整を施す。内面は未調整で、筒部にはしぼり目、裾部には指頭圧痕をそのまま残す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は粗い。裾部径10.6cm。残存高8.5cm。13は、胎土・色調とも14と同じで、これの坏部と思われる。

鉢(16) やや偏球形の体部に外傾する短い口縁部のつく鉢で、底部を欠損する。口縁端部は舌状におさめ、頸部の器壁は厚く、内面に稜をなす。器壁の磨滅が著しく、調整技法については明らかでない。橙色を呈し、胎土は粗い。外面体部下半の一部には煤が付着する。口径11cm。残存高5.8cm。

甕(17・19) 17は、口縁部が「く」の字に外傾する大型の甕である。口縁端部は、断面四角形におさめる。口縁部内面と体部外面にはハケメ調整を施す。体部内面には、指頭圧痕と炭化物の付着が認められる。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径30.4cm。残存高7.8cm。19は、砲弾形の体部に、外反する短い口縁部の付く甕で、底部は丸底である。口縁端部は丸くおさめる。体部上半の内外面には、幅2cm前後の粘土紐の継目が顕著に認められる。体部外面の一部には、縦方向の粗いハケメ調整痕が認められるが、器壁の磨滅が著しく全体については明らかではない。にぶい黄橙色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む胎土は粗い。口径12.8cm。器高17.5cm。

鍋(18) 頸部直下に体部最大径を有し、体部中央に舌状の把手が付く鍋である。外傾する口縁部は器壁が厚く、端部は舌状におさめる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径31.4cm。残存高13.5cm。

須恵器

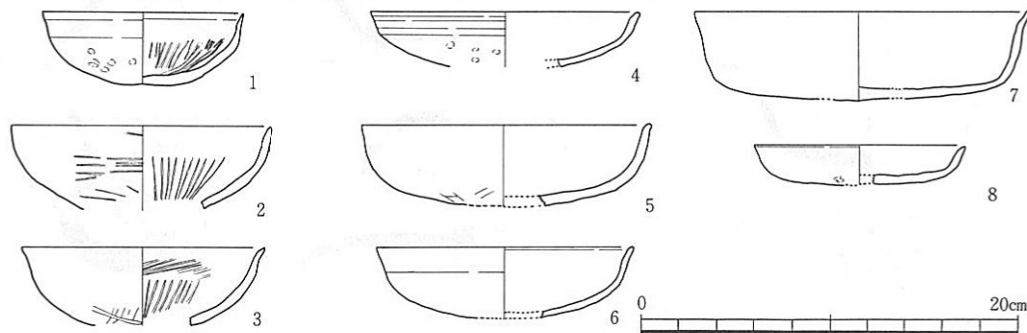
坏(20~27) 20~25は身、26・27は蓋である。20・21は、内傾するたちあがりを受部を持つ坏である。20のたちあがりは太く端部を丸くおさめ、受部は水平方向へ小さく突出する。外面は、

体部下半以下を回転ヘラケズリ、上半と内面にナデ調整を施す。灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗く、焼成はあまい。口径14.2cm。残存高4.8cm。21のたちあがり短く強く内傾する。底部は、ヘラ切り未調整で中央がやや突出する。体部外面と底部内面にナデ調整を施す。体部外面には、4本のヘラ記号が認められる。灰白色を呈し、胎土はやや粗く、焼成はあまい。口径8.3cm。器高3.4cm。22は、中央がやや突出する平底の底部と外傾する口縁部とからなる坏で、口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、ヘラ切り未調整で、並行する2本のヘラ記号が認められる。灰白色を呈し、胎土は粗く焼成はあまい。口径11.4cm。器高4.1cm。23～25は、高台の付く坏である。口径に比して器高が低く、高台も低い。暗オリーブ灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗く、焼成は堅緻である。口径14.4～16cm。器高3.5～4.2cm。22は、平坦な天井部に内弯する口縁部の付く坏蓋である。天井部はヘラ切り未調整である。灰色を呈し、胎土は粗く、焼成はあまい。口径12cm。器高3.6cm。27は、天井部に、扁平な擬宝珠のつまみが付く浅い蓋である。口縁部は、短く直下に折り返し、断面三角形をなす。天井部は回転ヘラケズリを施す。灰色を呈し、1～4mm大の砂粒を多く含み胎土は粗く、焼成は堅緻である。口径18cm。器高2.4cm。

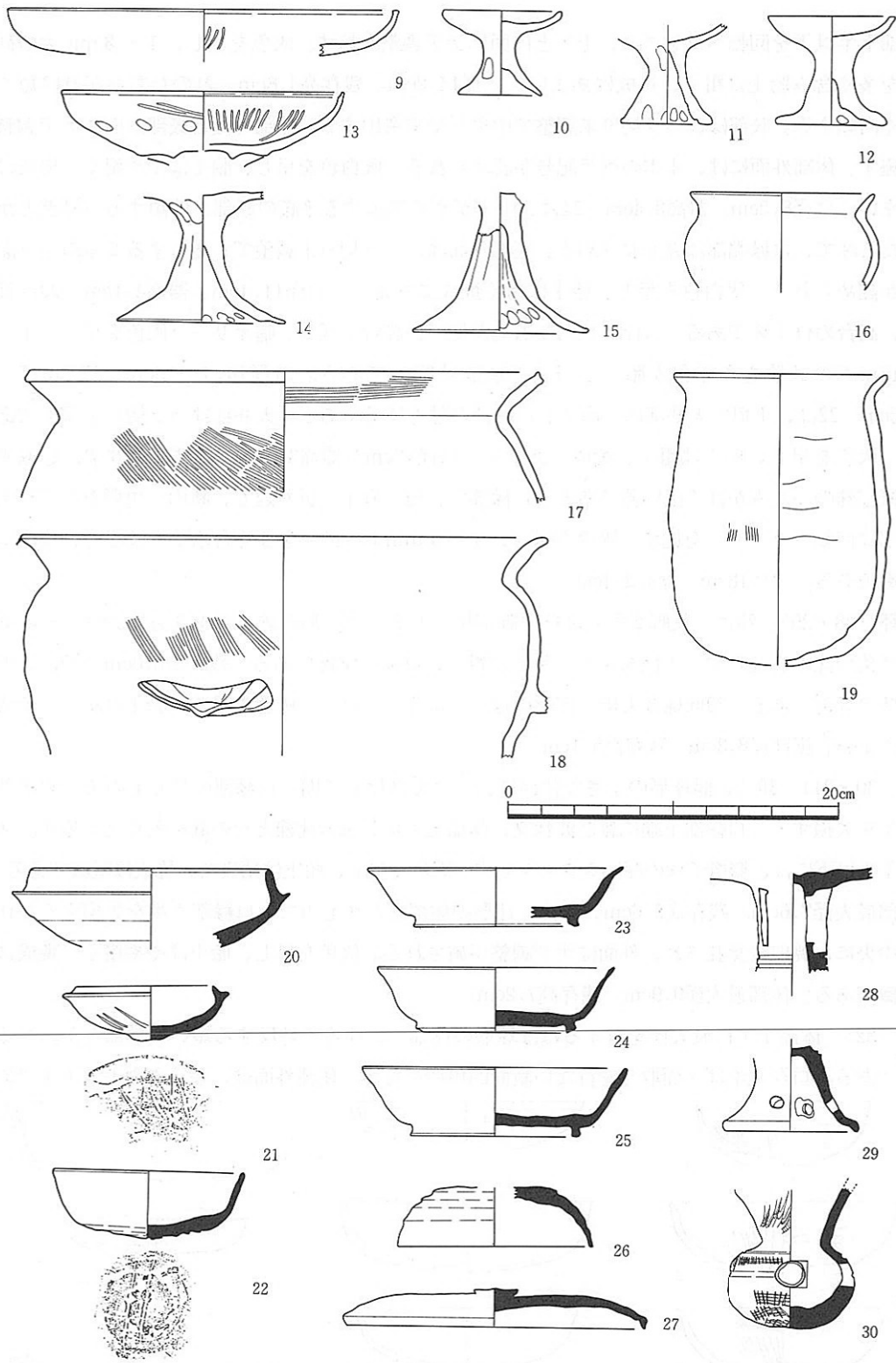
高坏 (28・29) 28は、長脚2段の高坏の脚部片である。長方形の透し穴を3方に設け、その間に2条の沈線を巡らす。灰色を呈し、胎土は粗く、焼成は堅緻である。残存高6.0cm。29は、低脚坏の脚部である。28同様3方に、円形の透し穴が穿孔される。灰色を呈し、胎土は粗く、焼成はあまい。裾部径8.3cm。残存高5.1cm。

甕 (30・31) 30は、偏球形の小さな体部に、大きく外反して開く口縁部の付くもので、口縁部上半を欠損する。口縁部下端に雑な波状文、体部上半に2条の沈線とその間に列点文を施す。体部下半以下には、擬格子状の深いタタキを施す。灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は堅緻である。体部最大径7.6cm。残存高8.6cm。31は、球形の体部をなすもので、口縁部上半を欠損する。体部中央に、焼成後穿孔され、外面はナデ調整が施される。灰色を呈し、胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。体部最大径9.9cm。残存高7.2cm。

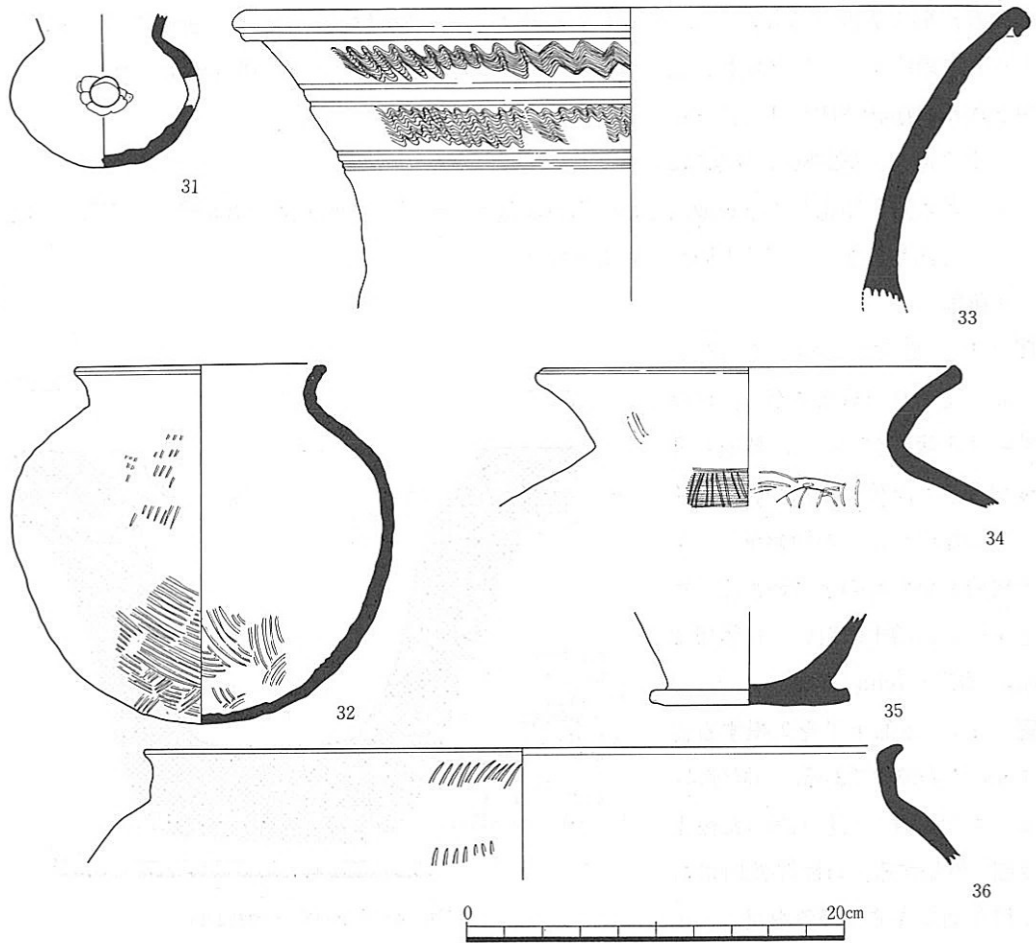
壺 (32) 体部上半に最大径を有するほぼ球形の体部と、ゆるく外反する短い口縁部とからなる壺である。口縁端部は、面取りを行ない断面四角形をなす。体部外面は、並行タタキの後上半に



第264図 S D6003出土遺物実測図 (1)



第265図 S D 6003出土遺物実測図(2)



第266図 S D6003出土遺物実測図(3)

丁寧なナデ調整を施してタタキ目を消し、体部内面も同様に、下半にのみあて具痕を残し、上半は丁寧なナデ調整を施している。灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成はややあまい。口径13.5cm。器高18cm。

甕(33・34・36) 33は口縁部が大きく外上方へ開く大型の甕である。口縁端部は、折り返して垂下させ、シャープに仕上げる。口縁部上半は、丁寧な2条の波状文と2条1対の沈線で飾る。青灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は堅緻である。口径42cm。残存高16cm。34は、頸部がしまり、「く」の字に外傾する口縁部の付くもので、肩部より下を欠損する。口縁端部はやや丸味を持つ。肩部外面は、並行タタキの後カキ目調整を施し、内面にはあて具痕が残る。灰白色を呈し、胎土はやや粗く、焼成はあまい。口径21.4cm。残存高5.0cm。

ねり鉢(35) 体部上半を欠損している。内外面にナデ調整を施す。灰白色を呈し、1～5mm大の砂粒を多く含み胎土は粗く、焼成はあまい。底部径10.6cm。残存高5.0cm。

S E 6001 (第267図、図版57)

C-11トレンチの北西コーナー、S D6001の北西約1.2mに位置する。径1.9～2.1m、深さ1.6m

のはぼ円形の素掘りの井戸である。壁は、底面から約1.2m付近まではほぼ垂直に立ち上がり、更に若干の段をなして立ち上がる。埋土は、3層に大別され、第1層と第3層から遺物が出土し、第2層には植物遺体が多く含まれる。

出土遺物（第268図、図版172）

土師器4点、須恵器4点を抽出した。須恵器蓋5と台付長頸壺7は、第3層から完形で出土したものであり、他は全て第1層からの出土である。

土師器

坏（1） 底部からゆるく内弯して立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は舌状におさめる。器壁の磨滅が著しく調整技法については明らかでないが、その形態から、7世紀前半頃のものと思われる。橙色を呈し、胎土は粗い。口径12.2cm。器高3.7cm。

甕（2） 体部下半を欠損する約3分の1の破片である。口縁部は、まっすぐ上方へ立ち上がった後半部で外傾する。口縁端部上面は、平坦な面をなす。橙色を呈し、1

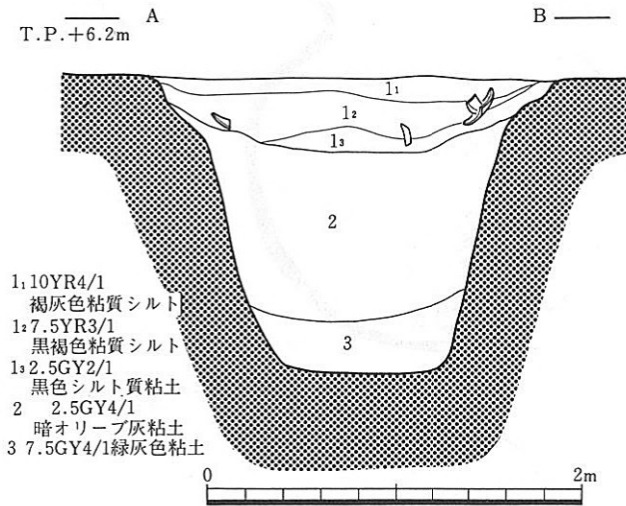
～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。器壁の磨滅が著しく調整技法については明らかでない。胎土、色調とも坏1と類似する。口径14.9cm。残存高9.9cm。

鍋（3・4） 3・4とも口縁部直下に舌状の内弯する2個1対の把手の付くものである。3の口縁部は器壁を増してゆるく外反し、端部は丸くおさめ、上端をナデで平坦な面となす。外面は、口縁部から把手付近までナデ調整を施すが、指頭圧痕が認められる。体部下半はハケメ調整、内面は、全体にナデ調整を施すが、体部下半に指頭圧痕が顕著に認められる。橙色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。3は、口径32.3cm。残存高15.3cm。4は、口径28cm。残存高6.2cm。

須恵器

蓋（5） やや丸味を持つ天井部から内弯して下がる口縁部のつく小型の坏蓋である。口縁端部内面には狭い内傾する面を持つ。天井部は、回転ヘラケズリ調整を施す。灰色を呈し、胎土は粗い。口径10.8cm。器高3.4cm。II型式5・6段階に相当するものである。

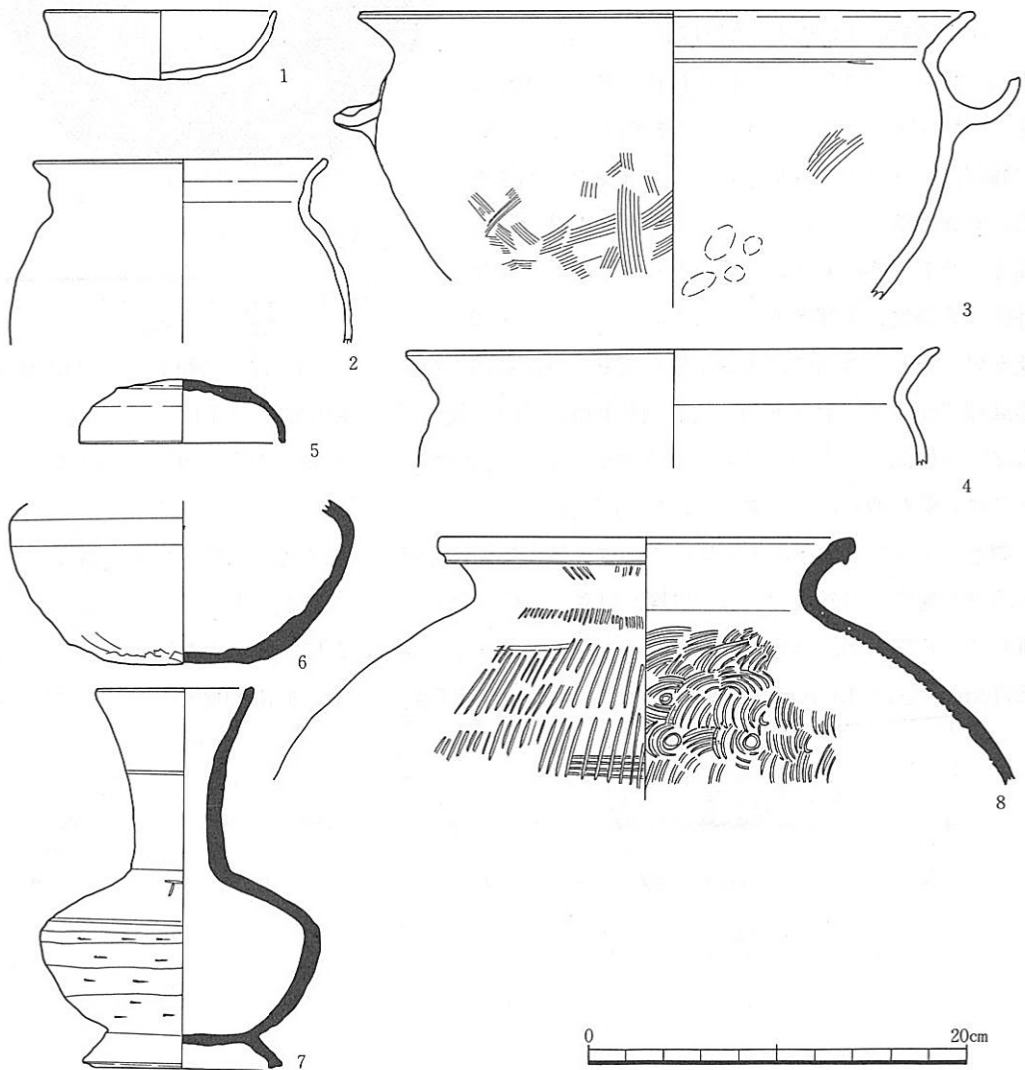
壺（6・7） 6は、体部のみ約3分の1の破片である。平底で、肩部の張りは丸味を持つ。体部下半は、ヘラナデ調整を施す。灰白色を呈し、焼成はあまい。体部最大径18.1cm。残存高8.8



第267図 S E 6001土層断面図

cm。7は、「ハ」の字に開く高台の付く長頸壺である。肩部の張りは弱く丸味を持ち、体部はやや扁平となる。高台端部は内外方へ肥厚し、内方端部で接地する。口縁部上半は内弯し、端部は丸くおさめる。口縁部中位と肩部に1条の沈線が巡る。外面下半体部は回転ヘラケズリ調整を施す。灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。口径8.1cm。体部最大径15cm。器高20.1cm。II型式に属ものと思われる。

甕(8) 球形の体部に短く外反する中型の甕と思われる。体部下半を欠損する。口縁端部は断面四角形をなし、口縁端部直下には1条の突帯が巡る。体部外面は、横方向の細筋のタタキの後縦方向のタタキを施し、内面にはあて具痕が明瞭に残る。灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む胎土は粗い。焼成は堅緻である。口径21.8cm。残存高13.8cm。



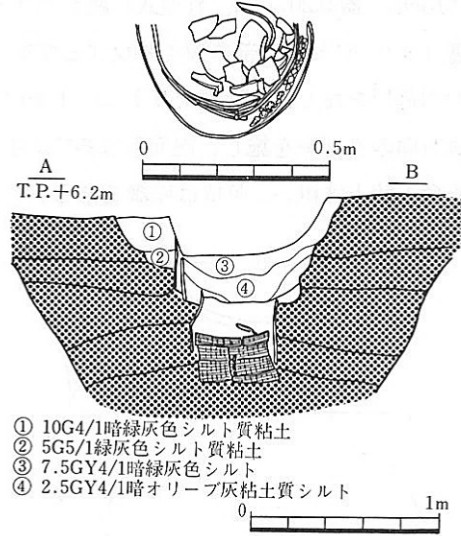
第267図 S E 6001出土遺物実測図

S E 6002 (第269図、図版59)

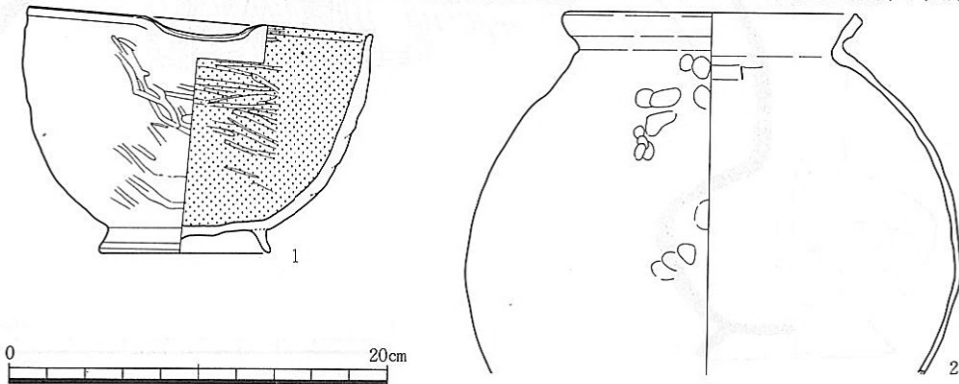
C-6トレンチ北西コーナー付近 G-73地区に位置する。南半部は調査区外にある。井筒に曲物をういた井戸である。東西1.8m、南北1.0m、深さ0.5mを検出した。井筒は4段確認されたが、全体が残るのは最下段の1段のみで、他の3段は遺存状態が悪く、土層断面にその痕跡をとどめるのみであった。井筒底面には径2~3cmの礫が敷かれており、礫直上からは、完形に復元された黒色土器鉢と底部を欠いた土師器甕が一括で出土した。埋土は、井戸掘形内が2層、井戸枠内が4層に分層された。遺物は、上記以外にも数点出土したが、細片のみで図示できるものはなかった。

出土遺物 (第270図、図版174)

1は、黒色土器A類の高台付片口鉢である。体部は深く内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は、ヨコナデ調整を施し、端部を丸くおさめる。外面体部との境には、浅い段をなす。高台は、高く「ハ」の字に開き、端部を丸くおさめる。底部外面は未調整、体部内外面にはためのヘラミガキ調整を粗く施し、外面には指頭圧痕が残る。外面は浅黄色を呈し、胎土はやや粗い。口径18.2cm。器高12.7cm。高台径8.8cm。高台高1.4cm。2は、最大径が体部中央より下にある球形の体部に、「く」の字に外傾する短い口縁部のつく土師器甕である。頸部から口縁部にかけては器壁を増し、口縁端部は、断面四角形をなし外傾する面を持つ。頸部外面への強いヨコナデ調整によって、体部との境に段をなす。体部外面は指押さえのまま未調整、体部内面はヘラナデ調整を施す。内外面の一部には煤が付着し、体部外面には、二次的な加熱によって器表面が剥離している箇所が認められる。灰褐色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15.1cm。残存高19.1cm。これら2点は、大和川今池遺跡AトレンチS K03出土土器群や長原遺



第269図 S E 6002土層断面図・遺物出土状況図

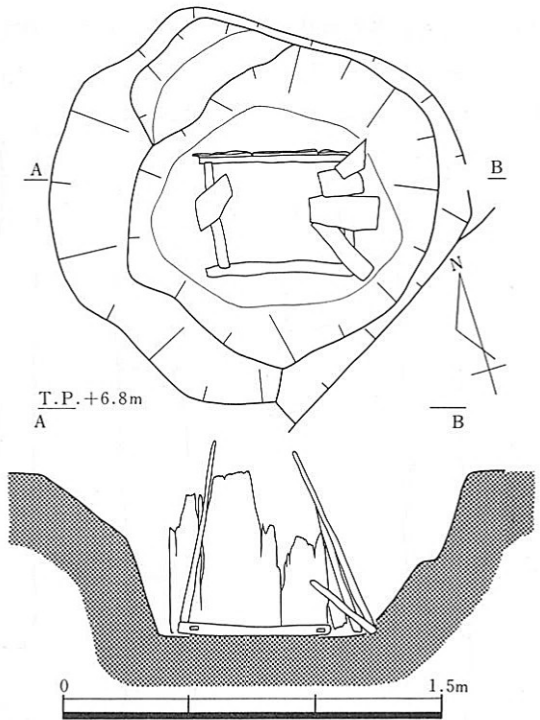


第270図 S E 6002出土遺物実測図

跡B-II-2期土器群との比較から、10世紀中葉～11世紀初頭に比定されるものと考えられる。

S E 6003 (第271図、図版60)

CトレンチE-70地区に位置する木枠組の井戸である。井戸枠は、最下段の木枠と内方へ倒壊する数枚の板材が残存するのみで、その遺存状態は著しく悪く、詳細な構造については明らかにする事は出来なかった。部材の残存状況やS E 6004との比較から、内法0.4×0.5m、深さ0.8m前後の1段のみであったと推定される。井戸枠掘形は、径1.6m、深さ0.7mを検出した。壁は2段になって立ち上がる。最下段の枠材は、径10cm前後の丸材の両端を凹形と凸形に造り出して仕口として組合せている。この枠の周囲を幅20～40cm、長さ80～90cm、厚さ6cmの縦板で囲み、各隅の外側に、幅15～20cm、厚さ6cmの板材を掘立てた構造のものと思われる。埋土は、暗灰色粘土のブロックと暗灰色シルト・砂が混在していた。埋土内からは、少量の土器片と井戸枠の部材と思われる木製品が出土したのみであった。



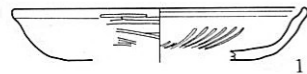
第271図 S E 6003遺構平面図・断面図

出土遺物 (第272・273図、図版174)

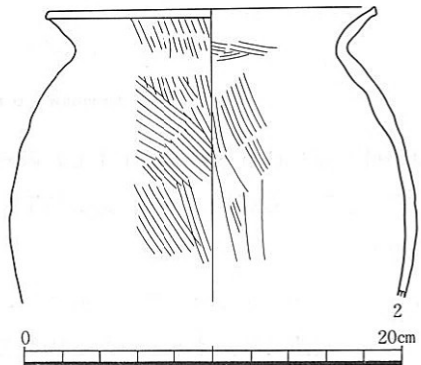
土師器

皿(1) 口縁部上半で僅かに外反し、端部は巻き込むことなく上方へ小さくひきだして丸くおさめる皿である。外面は、体部下端から底部周縁にヘラケズリ調整後口縁端部直下

まで粗くヘラミガキ調整を施す。内面は、斜放射の暗文を施す。橙色を呈し、胎土は精良である。口径15.6cm。器高2.8cm。平城宮第III～IV期に並行する時期のものである。



甕(2)口縁部は「く」の字に外反し、端部は断面四角形をなす。内外面に粗いハケメ調整を施した後、内面に軽いナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土は粗い。口径17.2cm。残存高15.4cm。



木製品

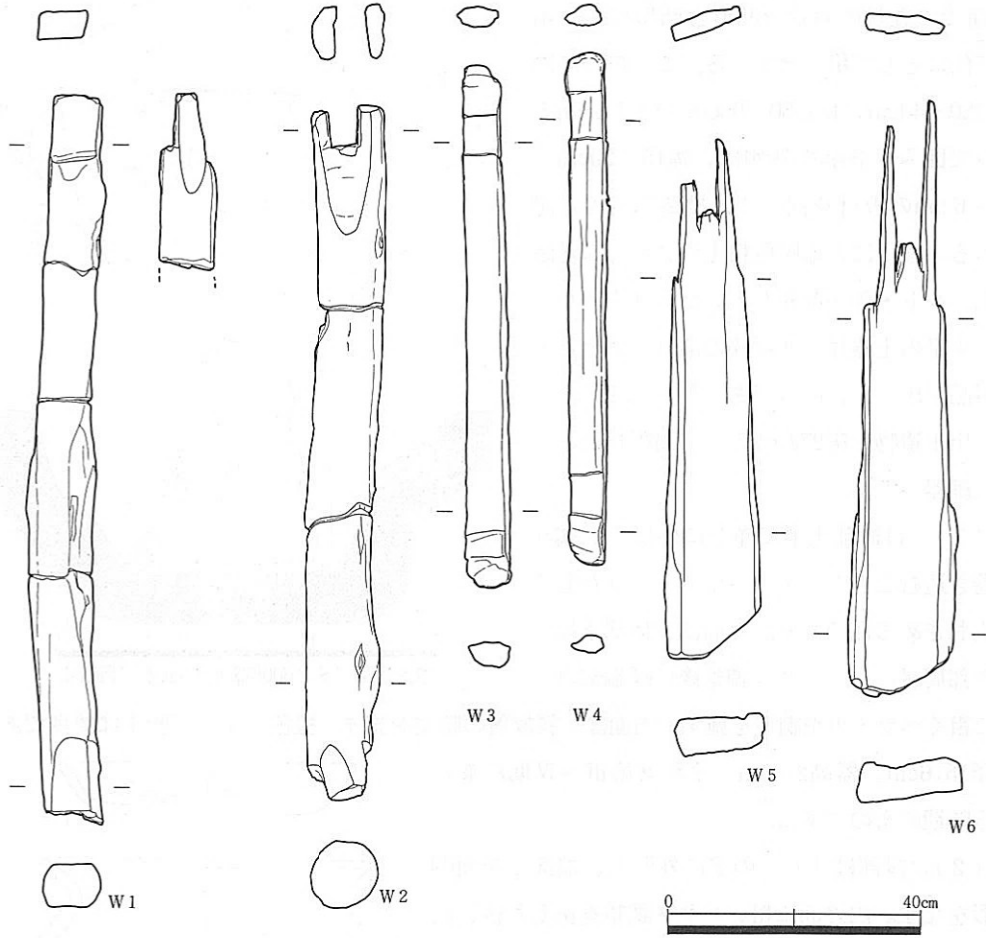
W1・2・5・6は井戸枠の部材、3・4は井戸枠内から出土したものである。1・2は、最下段の部材で、径5.5cmの自然木の樹皮を剥ぎ、両端を・形と・形に切り込んで仕口とする。現存長57cm。3・4は、両

第272図 S E 6003出土遺物実測図(1)

端を丸く仕上げ、更に幅3cm・深さ0.2cmの溝状に切り込んでいる。現存長41cm。幅3cm。5・6は、木枠の堅板である。現存長41~47cm。幅7~8.5cm。厚さ3cm。

S E 6004 (第274図、図版60)

S E 6003の西方約30m、F-76地区に位置する。S E 6003と同様の規模・構造の木枠組みの井戸である。井戸枠は、内法0.5m、深さ0.75mの1段である。井戸枠掘形は、径1.6m、深さ0.55mを検出した。堅板の中には、幅60cm、厚さ3cmに及ぶ重厚なものも使われていた。埋土は、掘形内が3層、井戸枠内が3層に分層された。遺物の出土は少なく、井戸枠内から須恵器片と井戸



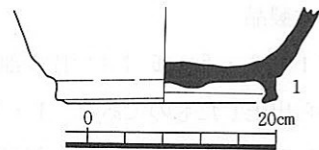
第273図 S E 6003出土遺物実測図(2)

枠の部材と思われる木製品が出土したのみであった。

出土遺物 (第274・276図、図版175)

須恵器

高台付壺類の底部片と思われる。高台は、底部周縁にまっすぐ付けられる。端部は外傾する面をなし内側で接する。内外面にナデ調整を施す。灰色を呈し、砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。



第274図 S E 6004出土遺物実測図(1)

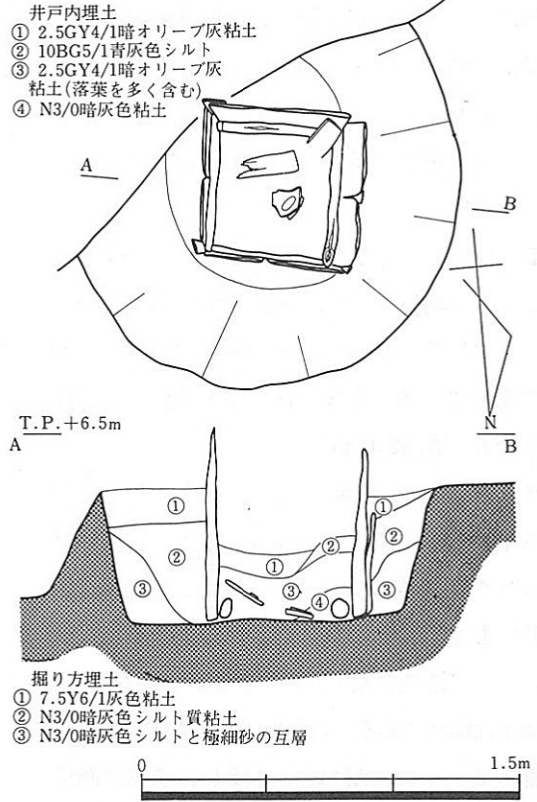
高台径11.7cm。残存高4.9cm。

木製品

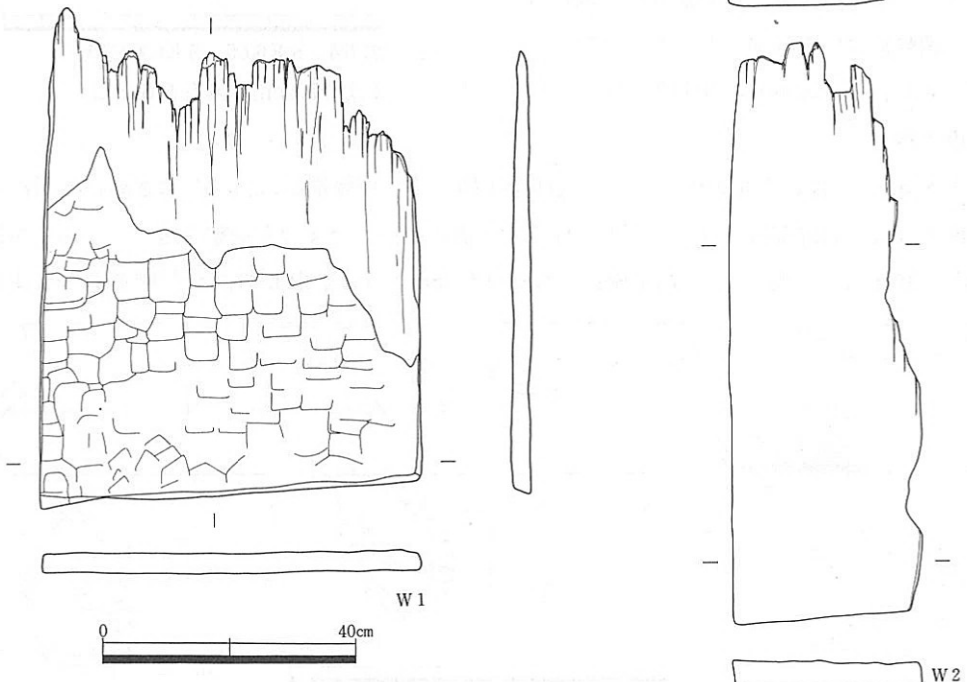
W1・W2は、井戸枠の部材である。W1は、幅60cm、長さ80cm、厚さ3cmの縦板である。幅6cmの加工痕が明瞭に残る。W2は、幅6.2~7.0cm、長さ91cm、厚さ2cmの板材で、井戸枠の隅に据え置かれていたものである。加工痕は不明瞭で、単位や方向は明らかでない。

S E 6005 (第277図、図版61)

C-12トレンチ A-74地区に位置する。S K 6002と重複し、S K 6002よりも新しい。井筒に曲げ物を用いた井戸である。井筒は、最下段から2段が確認された。全体が残るのは最下段のみで、他の1段は土層断面にその痕跡をとどめるのみであった。井戸掘形は、径1.2m、深さ0.8mを検出した。井筒底面には、1~3cm大の礫が敷かれていた。埋土は3



第275図 S E 6004遺構平面図・断面図



第276図 S E 6004出土遺物実測図(2)

層に分層され、第1層は、上段井筒崩壊後の堆積である。第1層中からは、多くの土器が出土した。

出土遺物(第278図、図版174)

土師器

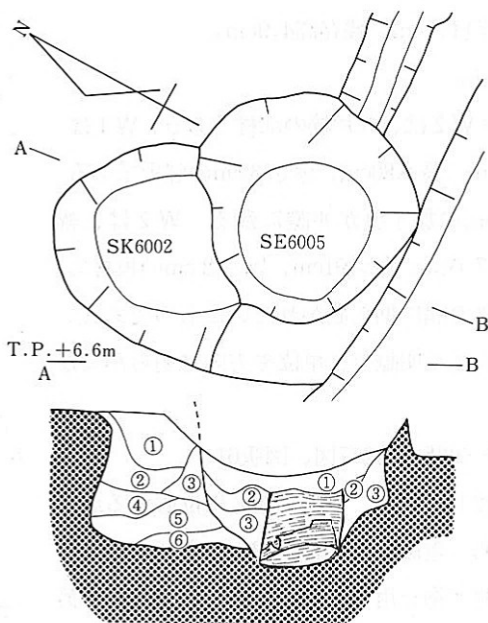
皿(1) 丸底で浅い小皿である。口縁部はヨコナデ調整により、端部は舌状におさめる。外面は指押さえのまま未調整、内面はナデ調整を施す。砂粒を多く含み胎土は粗い。口径9.6cm。器高2.0cm。

坏(2) 丸い底部から、ゆるく内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整により僅かに外反し、端部は舌状におさめる。器壁の磨滅が著しく調整技法については明らかでない。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径13.6cm。器高4.0cm。

甕(3) 口縁部は短く外傾し、端部は断面四角形におさめ、上端は平坦な面をなす。端部は内方へ小さくひきだす。器壁の磨滅が著しく、調整については明らかでない。にぶい橙色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径17.2cm。残存高6.3cm。

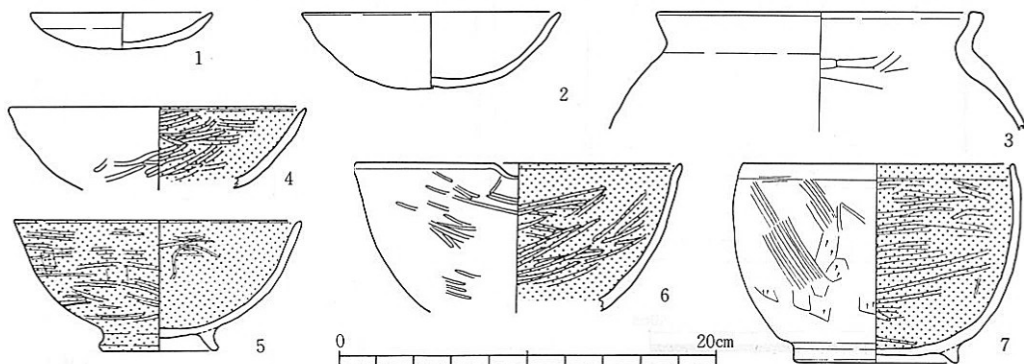
黒色土器

椀(4・5) 4は、A類の椀である。底部を欠損する。口縁端部は舌状におさめ、内面には浅い沈線が巡る。口縁部はヨコナデ調整、体部内外面に粗いヘラミガキ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.6cm。残存高4.4cm。5は、B類の高台付椀である。体部は



- SK6002
- ① 7.5YR5/1 褐灰色シルト質粘土(極細砂を含む)
 - ② 5YR5/1 褐灰色シルト質粘土
 - ③ 5YR5/1 褐灰色シルト質粘土
 - ④ 5Y5/1 灰色粘質シルト(灰白色シルトを含む)
 - ⑤ 5Y5/1 灰色シルト質粘土(細砂・シルトを含む)
 - ⑥ 5Y5/1 灰色シルト質粘土
- SE6005
- ① 10YR4/1 褐灰色粘土(土器を多く含む)
 - ② 5Y5/1 灰色シルト質粘土
 - ③ 5YR5/1 褐灰色シルト質粘土

0 2m
第277図 S E 6005・S K 6002遺構



第278図 S E 6005出土遺物実測図

やや内弯気味に開き、そのまま口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。高台は、底部周縁より内方へ付けられる。太く「ハ」の字に開き、端部は丸くおさめる。体部は、外面をヘラケズリの後内外面にヘラミガキ調整を施し、底部外面はナデ調整を施す。胎土は精良である。口径14.8cm。器高6.9cm。高台径6.3cm。高台高0.9cm。

鉢（6・7） 6は、A類の片口鉢で、底部を欠損する。体部は深く、内弯気味に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反し丸くおさめる。体部は、外面をヘラケズリの後内外面にやや粗いヘラミガキ調整を施す。灰黄色を呈し、胎土はやや粗い。口径17.2cm。残存高7.9cm。7は、A類の高台付鉢で、口径に比して深い体部である。平らな底部から内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整により内外面体部との境に浅い段をなし、端部は、内傾する狭い面を持ち、断面四角形におさめる。底部周縁よりやや内方に、太くて低い高台を付ける。高台端部は丸くおさめる。体部は、外面ヘラケズリの後内外面にヘラミガキ調整を施す。灰黄色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.2cm。器高10.5cm。高台径8.7cm。高台高0.8cm。

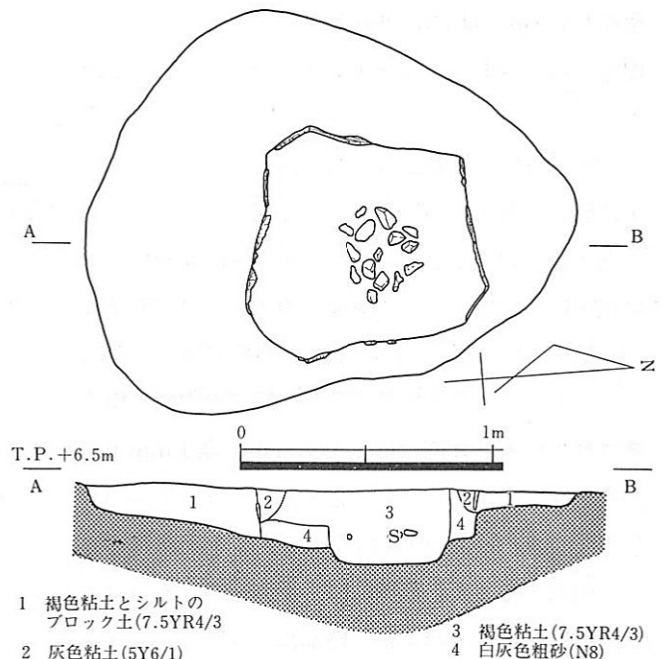
5の黒色土器碗は、薬師寺西僧坊床面出土のものに類例を求める事が出来る。⁽⁷⁾ またその他の土器についても、これとほぼ並行する時期の大和川今池遺跡AトレンチS K03出土土器群の中に類例を求められる事から、今回抽出した土器群の時期については、10世紀後葉～11世紀初頭に比定されるものと考えられる。

S E 6006 (第279図、図版61)

F-2 トレンチ H-109地区に位置する木枠組みの井戸である。上部の大半は近世以降の耕作等によって削平されており、深さ約30cmが残存するのみであった。井戸枠は、内法一辺0.9mの方形を呈する。枠材は、幅15～20cm、厚さ5mmの縦板が僅かに数枚残存するのみで、大半は腐朽しており、詳細な構造については明らかに出来なかった。井戸枠底面の中央には、30cm四方の範囲に、10cm前後の礫が集中しており、曲げ物の井筒が据え置かれていたものと推察される。井戸枠掘形は、径1.5～2.0mの不整円形を呈する。埋土は、4層に分層され、第1層は掘形の埋土である。遺物の量は、僅かであった。

出土遺物 (第280図)

土師器



第279図 S E 6006遺構平面図・土層断面図

坏（1～3） いずれも平らな底部から、ゆるく内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至り、口縁端部を舌状におさめる坏である。器壁の磨滅が著しく、調整技法については明らかでない。2・3の体部外面には指頭圧痕が認められる。にぶい橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14.5～15.4cm。器高3.4～3.8cm。

甕（4） 口縁部は短く外反し、端部は外方へ小さくひきだし上端に浅い段を成す。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径15cm。残存高4.8cm。

羽釜（5） 外反する口縁部の直下に、水平方向にのびる鏝をめぐらす。口縁部上半と鏝より下の部分を欠損する。明赤褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多量に含み胎土は粗い。鏝の最大径は31.3cm。

須恵器

細頸壺（6） 体部以下を欠損する。口縁部は、水平方向へ屈曲し、端部を上下方向に小さく拡張させる。灰色を呈し、焼成はややあまい。口径9.3cm。残存高6.7cm。

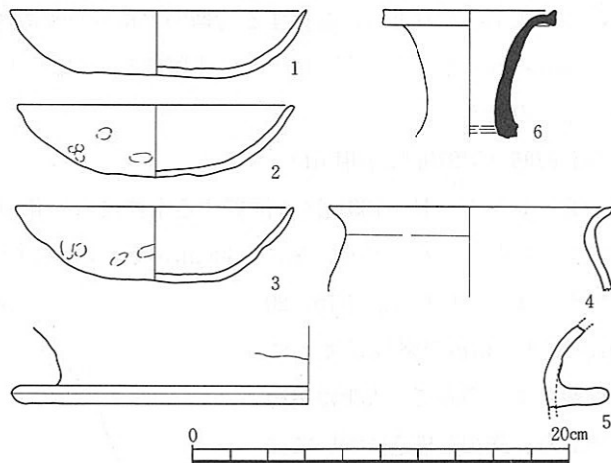
土師器坏1～3は、調整技法・形態ともにS D6001出土坏に類似するもので、これとほぼ同時期の9世紀前半頃に比定する事が出来る。

S K 6001（第281図、図版65）

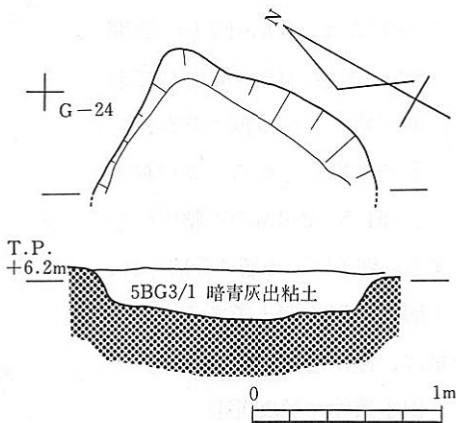
A-8トレンチ北端 G-23・24地区で検出された。遺構は半分を欠失するが平面は方形になると見られる。現存長1.3m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰色粘土（5 B G 3/1）である。

出土遺物（第282図、図版175）

1は黑色土器のB類碗である。体部は内弯して立ち上がり、ゆるやかな屈曲部を経て外反気味に上方にのびて口縁部に達する。口縁端部は尖り気味に仕上げられ、内面には明瞭な凹線を残す。ヘラミガキは体部の内外面及び口縁部の内面に粗く施されている。体部は緻密であるが、径1mm大の砂粒を僅かに含む。なお残存する部位は全周の約6分の1であり、復元径は16cm。2は土師器皿である。内弯する体部と直線的に外上方へのびる口縁部から構成される。調整は口縁部にヨコナデで、体部内面にナデ調整が施され体部外面は成形の際に生じ

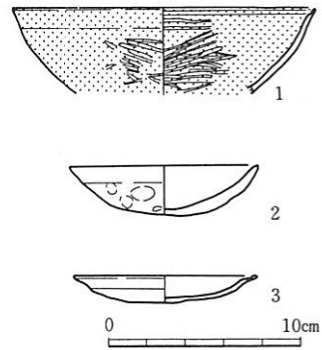


第280図 S E 6006出土遺物実測図



第281図 S K 6001遺構平面図・土層断面図

た指押さえ痕が残されたままである。胎土はやや粗く、径1～3mm大の砂粒を含む。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。口径は10cm、器高は28.9cmを測る。3は口縁部の断面形がいわゆる「て」字状を呈する土師器皿である。底部外面には成形時の指押さえ痕を残し、口縁部はヨコナデにより外反し、端部は弱く突出する。胎土は緻密で僅かに径1mm大の赤色砂粒を含み、色調は灰白色、または淡橙色を呈する。完形品であり、口径は9.5cm、器高は1.4cmを測る。



第282図 SK6001出土遺物実測図

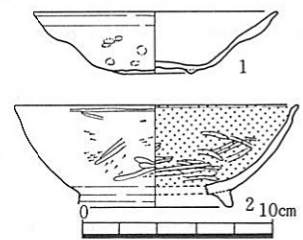
以上、SK6001から出土した遺物を提示したが、その時期に関して、3の土師器皿は10世紀代を中心として平安京で多く認められる形態に近似しており、そのなかでも特に口縁端部の突出が弱まり、整形にも簡略化の傾向が窺われる点等は平安京内膳町遺跡のSK18に対比できるものとする⁽⁸⁾。また、1の黒色土器B類碗についても、同遺構等から類例が認められるものであるところから、これらの資料に対して概ね10世紀末の時期を比定できるものとする。(鋤柄俊夫)

S K 6002 (第277図、図版61)

C-12トレンチ A-74地区に位置し、南側はSE6005によって削平される。径1.1m、深さ70cmの円形を呈する。底面は平坦で、壁は下方で膨らみ、断面フラスコ状を呈する。埋土は、3層に大別され、第1・2層から若干の遺物が出土したが、細片が多く、図示できたのは2点のみであった。

出土遺物 (第283図、図版175)

1は、断面三角形の低い高台の付く土師器坏である。平らな底部から、丸味を持って外傾して立ち上がり、中位で僅かに外傾して口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整により、端部は舌状におさめる。体部外面は、指押さえのまま未調整、内面はナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径12.8cm。器高2.95cm。高台径3.7cm。2は、黒色土器A類の碗である。体部は、ゆるく内弯して立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。端部内面には、浅い沈線が巡る。太くてやや低い高台は、体部との境に「ハ」の字に付く。口径に比して、体部は浅い。外面は、ヘラケズリの後口縁部直下までやや粗いヘラミガキ調整を施し、内面はヘラミガキ調整を施す。暗褐色を呈し、砂粒を多く含み胎土は粗い。口径14.8cm。器高5.4cm。高台径8.1cm。高台高0.8cm。



第283図 SK6002出土遺物実測図

1の土師器坏は、藤井寺市はさみ山遺跡とその周辺で多く出土しており、一瀬編年のV期坏B類に類似するものである⁽⁹⁾。また、2の黒色土器は、平城京SD650B様式のものに類例が求められる。これらの事から、2点の土器は、9世紀後半～末頃に比定されるものと思われる。

S K 6003 (第284図)

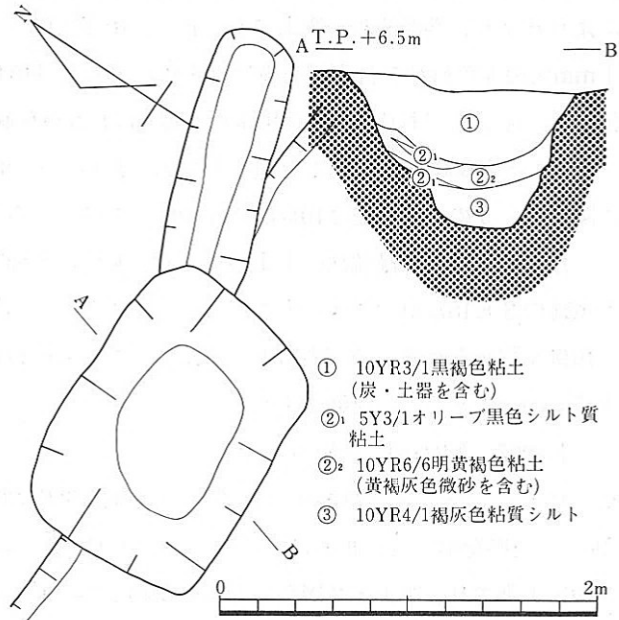
C-12トレンチ A-75地区 S K 6002の西約3mの地点に位置する。東西1.5m×南北1.1m、深さ0.80mの隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、同じく隅丸長方形を呈する。壁は、北側の一部で2段になるが、ほぼまっすぐに立ち上がる。埋土は、3層に大別され、第1層中からは特に多くの遺物が出土し、そのほか牛の下顎骨も1点出土している。第2・3層からの遺物の出土は僅かで、細片のみであった。

出土遺物 (第285図、図版175図)

図示できたのは、土師器7点、黒色土器13点で、うち18点を抽出した。

土師器

皿(1・2) 1は、いわゆる「て」の字状の口縁を有する皿である。口縁端部の突出は弱い。外面は、指押さえのまま未調整。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.2cm。器高1.0cm。2は、丸味をみ持った底部から、外傾して立ち上り、そのまま口縁部に至る小皿である。口縁部は、ヨコナデ調整により、端部は舌状におさめる。



第284図 S K 6003遺構平面図・土層断面図

外面は、指押さえのまま未調整、内面はナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径9.7cm。器高2.2cm。

坏(3) 平らな底部から、ゆるやかに外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は、ヨコナデ調整により僅かに外反し、端部は丸くおさめる。内外面は、指押さえの後軽くナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は粗い。口径12.8cm。器高3.4cm。

甕(15~18) 口縁端部を丸くおさめるもの(15)と、断面四角形をなし、端部を外下方に小さくひきだすもの(16~18)がある。口縁部は短く「く」の字に外傾する。体部外面は、指押さえのまま未調整、内面は、ナデ調整を施す。にぶい赤褐色を呈し、1~3mm大の砂粒を多く含む胎土は粗い。16は、口径14.6cm、残存高6.6cm。17は、口径16.8cm、残存高6.2cm。18は、口径17.2cm、残存高3.5cm。19は、口径20.4cm、残存高4.4cm。

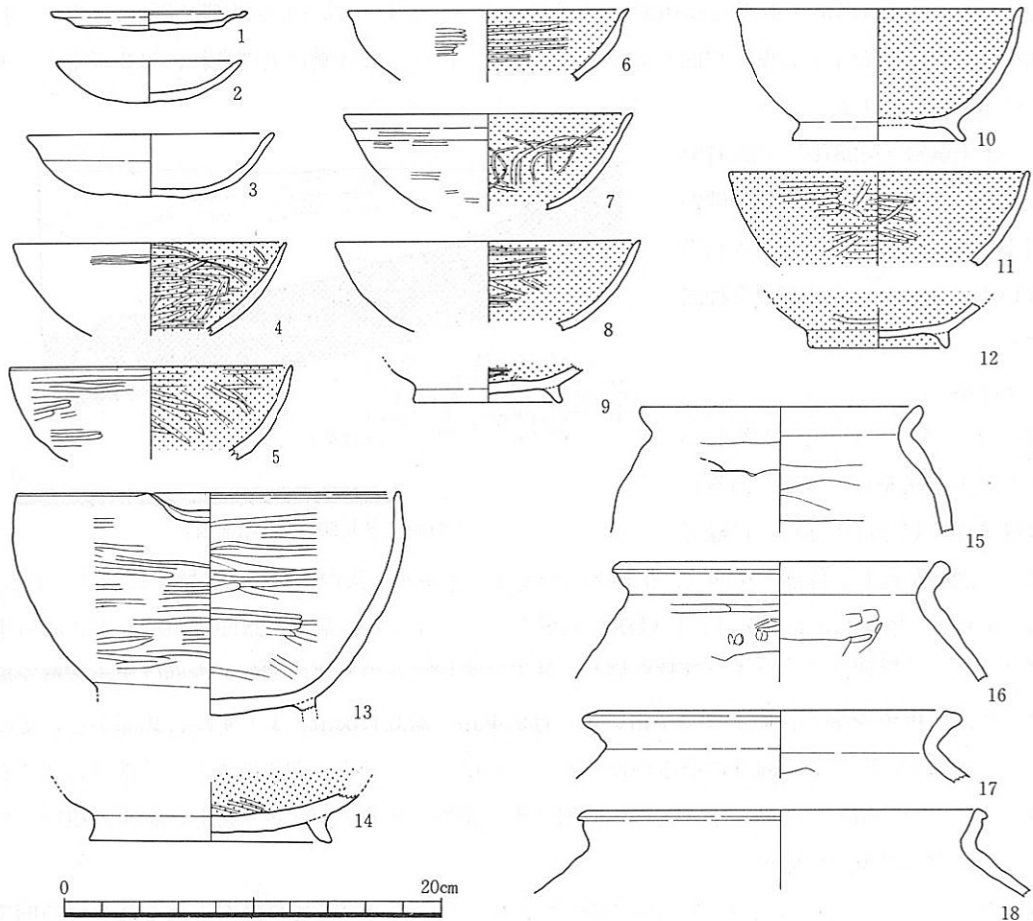
黒色土器

椀(4~12) 4~10はA類、11・12はB類の椀である。全体に、体部外面のヘラミガキ調整は粗く、8の外面は、指押さえのまま未調整である。口縁部はヨコナデ調整により、端部は舌状におさめる。6・7・10の口縁部は僅かに外反し、体部との境に浅い段をなす。11の口縁端部内面には浅い沈線が巡る。10は、口径に比して深い体部をなし、高台は、体部との境に「ハ」の字に

開いて付けられ、端部は丸くおさめる。器壁の磨減が著しく、調整については明らかでない。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.8cm。器高7.5cm。高台径9.1cm。高台高1.0cm。9・12は底部のみの破片である。9の底部外面は未調整で、高台は、体部との境に「ハ」の字に開いて付けられる。高台径7.4cm。残存高1.9cm。12の底部外面にはナデ調整を施し、高台は、体部との境に垂直に付けられ、断面三角形をなす。高台径7.3cm。残存高2.2cm。A類は、いずれもにぶい黄橙色を呈し、胎土は粗い。口径14.2cm～15.8cm。

鉢 (13・14) A類の鉢である。13は、高台付きの片口鉢で、高台を欠損する。平らな底部より内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。やや内傾する口縁部は、ヨコナデ調整により、体部との境に浅い段をなす。口縁端部は、上方へ僅かにひきだし舌状におさめ、端部内面にも浅い段をなす。体部外面を指押さえの後、内外面に太いヘラミガキ調整を粗く施す。にぶい橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。口径20cm。残存高11cm。

以上、抽出した土器群のうち、土師器小皿1は、口縁部の折り返しが弱く、端部の肥厚も僅かで、調整技法の簡素化などの特徴が窺え、長原遺跡No.26トレンチSK022、平安京右京二条二



第285図 SK6003出土遺物実測図

坊S X 1出土土器群の中に類例を求める事ができ、平安京S X 1や長原遺跡では、同様の坏、皿、甕類も出土している。一方、黒色土器は、抽出したもの以外を含めてもA類がはるかに多く、大和川今池AトレンチS K03や薬師寺西僧坊出土のものに、また、10の椀は、長原遺跡S K022土師器坏に類似している。これらの事から、抽出した土器群は、10世紀中葉～11世紀初頭に比定する事ができるものと考えられる。

S K 6004 (図版54)

C-7トレンチ B・C-78地区に位置する。S B6002と重複し、S B6002よりも新しい。東側半分は、調査区外に有る。南北2.1m×東西1.5m、深さ40cmを検出した。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、黒褐色粘質シルトと暗灰色シルトの2層に分層される。遺物の出土は少なく、また細片のみで図示できるものはなかった。

S K 6005 (第286図)

C-7・12トレンチ A・B-79地区に位置する。西側はS D6003に隣接し、東側はS B6002と約2.6mなれている。南端部は調査区外にあり、東側は、鋼矢板によって分断されている。推定規模は、南北約4.4m×東西約3.5mの大土坑で、深さは、C-12トレンチ側で85cmを測る。断面形はすり鉢状を呈し、壁と底面の境は不明瞭である。埋土は3層に大別され、第2層中より多くの遺物が出土した。

出土遺物 (第287図、図版175)

土師器・黒色土器・須恵質の磚が出土した。このうち図示できたのは13点であった。次の10点を抽出する。

土師器

皿 (1～4) 1は、口縁部が

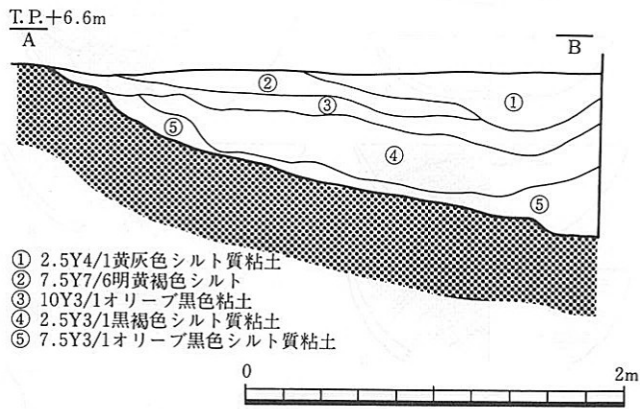
「て」の字状をなす小皿である。

口縁端部の肥厚は小さい。口縁部

はナデ調整を施し、体部と底部は、指押さえのまま未調整。灰白色を呈し、胎土は精良である。

口径9.8cm。器高1.3cm。2は、口縁部を水平方向にひきだし、端部を断面四角形におさめる小皿である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、外面は指押さえのまま未調整、内面はナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径9.4cm。器高1.5cm。3・4は、底部から、そのまま内弯気味に開き、口縁部に至る小皿である。口縁部はヨコナデ調整により、端部は舌状におさめる。外面は指押さえのまま未調整、内面はナデ調整を施す。黄灰色を呈し、胎土は粗い。口径10cm。器高2.2～2.4cm。

椀 (5) 平らな底部から、ゆるく内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る高台付の椀である。口縁部は、ヨコナデ調整により僅かに外反し、端部は舌状におさめる。高台は、体部との



- ① 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土
- ② 7.5Y7/6明黄褐色シルト
- ③ 10Y3/1オリーブ黒色粘土
- ④ 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土
- ⑤ 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土

第286図 S K 6005土層断面図

境に「ハ」の字に開いて付けられ、端部は丸くおさめる。体部内外面は粗いヘラミガキ調整を施し、底部外面は未調整である。浅黄橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15cm。器高6.3cm。高台径7.0cm。高台高0.8cm。

羽釜（6） 体部上半に、水平方向よりやや上向きの短い鏝の付く羽釜で、鏝より下の部分を欠損する。鏝の端部は僅かに肥厚し、丸くおさめる。体部は内傾して頸部に至る。口縁部は器壁を増して外反し、断面四角形におさめ、上端は平坦な面をなす。茶褐色を呈し、1～5mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径21cm。残存高5.6cm。鏝最大径27.8cm。

黒色土器

椀（7～9） 8・9はB類、7はA類の椀である。7の高台は、底部周縁より内側へ「ハ」の字に付けられる。断面三角形をなして、低い。外面は指押さえ、底部内面はヘラミガキ調整を施す。胎土は精良である。高台径6.6cm。高台高0.4cm。残存高0.7cm。8の高台は、太く「ハ」の字に開く。端部は肥厚し、丸くおさめる。灰白色を呈し、胎土は粗い。高台径6.5cm。高台高1.4cm。残存高1.7cm。9は、底部を欠損する。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は舌状におさめる。外面をヘラケズリの後、内外面にヘラミガキ調整を施す。胎土はやや粗い。口径14cm。残存高4.9cm。

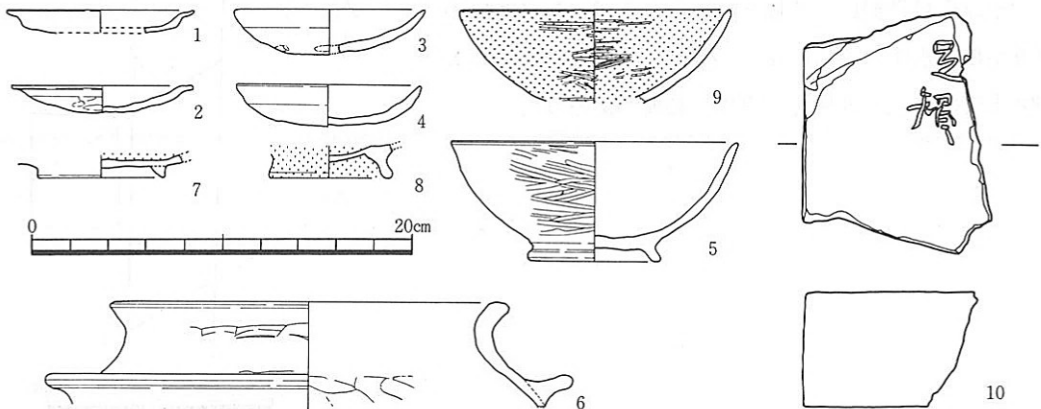
その他

磚（10） 須恵質の磚である。12.6cm×10cmが残存する。厚さ6.0cm。一面には「足智」の文字が刻まれ、片面には布目の圧痕が残る。暗灰色を呈し、砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。

以上、抽出した土器群は、S K6003とほぼ同時期のものと考えられるが、この他にも、細片で図示できなかったが、9世紀後半～10世紀前半頃の高坏脚部片なども少数出土している。

S T6001（第288図、図版62～65）

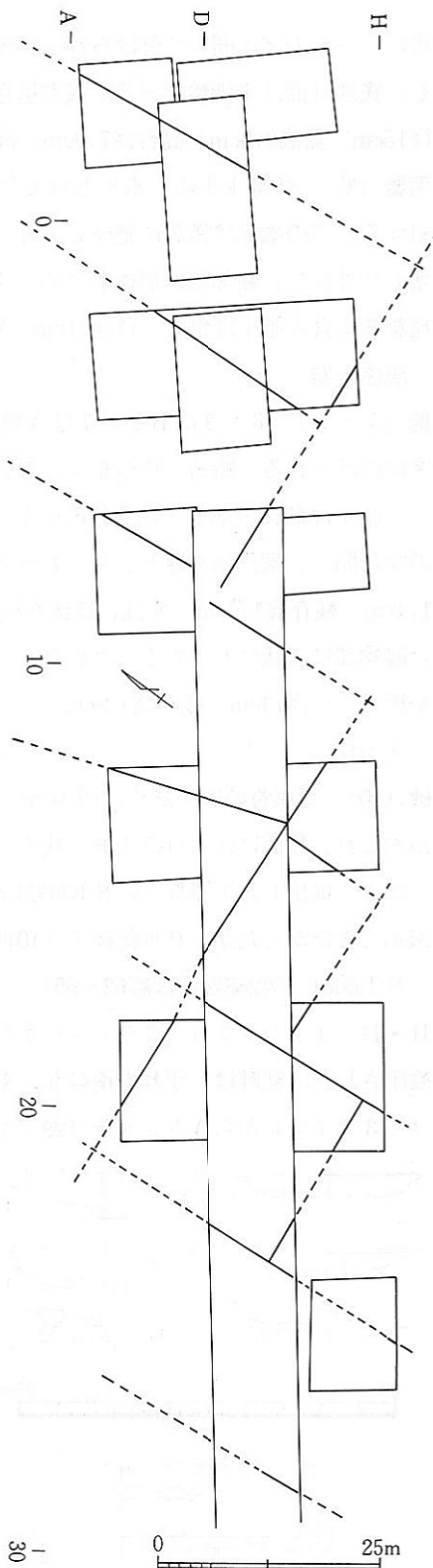
H・H-1トレンチ（-3ライン）からAトレンチ（29ライン）間において灰青色粘土層上面で検出された。畦畔はいずれも南⇄北、東⇄西方向に走る。南北方向の畦畔はH・H-1トレンチ（-3ライン）からAトレンチ（29ライン間）において7条検出しており畦畔間の距離は東から



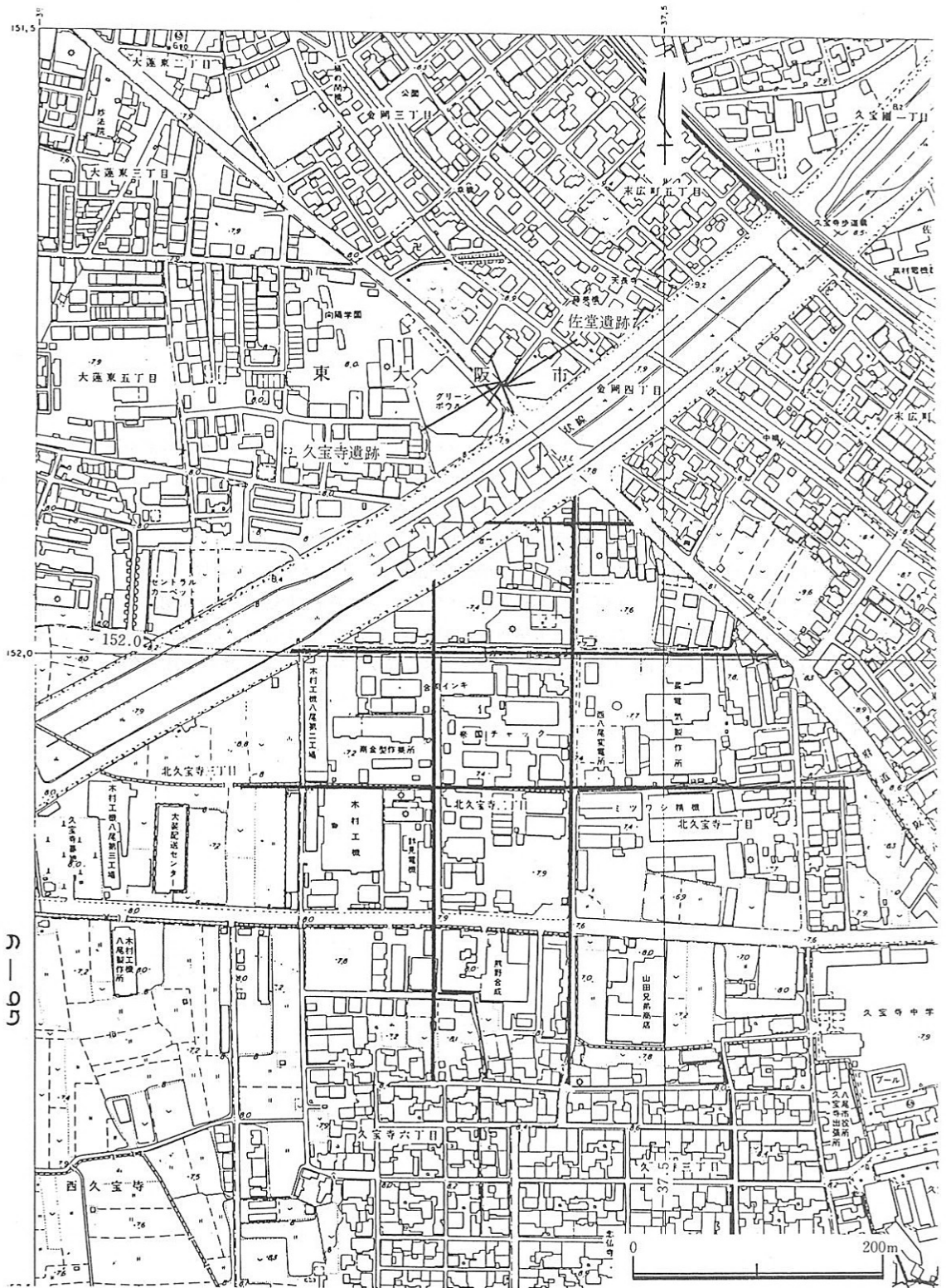
第287図 S K6005出土遺物実測図

18・23・21・21・21mを測る。東西方向は、G-2からA・A-6トレンチ間で3条検出し畦畔間の距離は、北から21.5、13.5、10mを測る。畦畔の規模は上端幅0.2~0.5m、下端幅0.5~1.4m、高さ0.1~0.6mを測る。畦畔の盛り土についてはその有無を確認出来なかった。南北畦畔の東から1・3条目、東西方向の北から1条目が他に比べて太く、それぞれ幅1.4、0.8~1.4、1.4mを測る。この南北畦畔の東から3条目と東西畦畔の北から1条目の交点の一部が途切れ、水口と考えられる。13ラインより北には足跡が残されており、水田面の高さは概ねT.P.+5.5m前後である。水田面は検出した畦畔を延長すると正方形に近いものと、長方形とに分かれ、面積はそれぞれ推定で483m²、283m²となり現存する条里にあわせると、南北畦畔の東から5条目と東西畦畔の北から2条目が坪境にのる。また佐堂遺跡E、Fトレンチにおいて検出された水田畦畔も南北、東西方向で、青灰色粘土面をベースとしている。

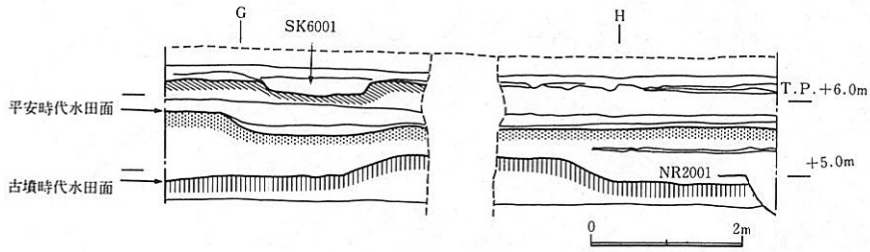
当該遺構からは時期を決定する遺物は出土していないが、下層NR2001の新しい遺物が7世紀、A-8トレンチSK6001が水田面より約60cm上(T.P.+6.2m)で検出され、その遺物から10世紀末頃に比定される。佐堂遺跡の水田面4は同一面で検出されたSD3001が水田面と同時期かそれ以降と考えられており、その時期は9世紀末から10世紀初めとされる。以上の事から当該遺構は7世紀以降11世紀以前の幅と考えられるが、NR2001の埋没から、水田面までの粘土の堆積、水田面から、SK6001までの粘土の堆積を考慮する必要がある



第288図 畦畔復元図



第289図 遺跡周辺条理復元図



第290図 A 8 トレンチ北壁遺構関係土層断面図

(注)

- (1) 奈良国立文化財研究所 1982 「平城宮発掘調査報告Ⅵ」 奈良国立文化財研究所学報第25冊
- (2) 一瀬 和夫 1980 「はさみ山遺跡発掘調査概要」 大坂府教育委員会
- (3) 奈良国立文化財研究所 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」 奈良国立文化財研究所学報第31冊
- (4) 岩瀬 透 1983 「大和川今池遺跡発掘調査概要」 大坂府教育委員会
- (5) 植木 久・鈴木 秀典ほか 1983 「長原遺跡発掘調査報告Ⅲ」 大坂市文化財協会
- (6) 奈良国立文化財研究所 1976 「平城発掘調査報告Ⅶ」 奈良国立文化財研究所学報第26冊
- (7) 奈良国立文化財研究所 1975 「平城宮跡と平城宮京の発掘調査」 奈良国立文化財研究所年報 1975
- (8) 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1983 「昭和56年度 平安京跡発掘調査概報」
- (9) 注(2)に同じ
- (10) 陣内 暢子ほか 1978 「長原」 大阪文化財センター
- (11) 注(6)に同じ

第5節 鎌倉時代以降

当該時期の遺構は、第1・2層を除去したところで検出された溝、井戸、土坑などであるが、府道中央環状線建設以前の建物の基礎、あるいはゴミの廃棄穴など随所で攪乱を受けていた。

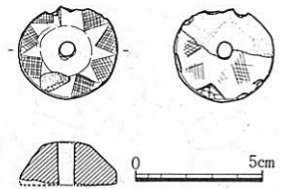
溝は数十本検出され、そのいずれもが南北、東西方向にはしる。規模は0.5mから2～3mまでさまざまであり、深さは0.1mを測る。

井戸は10数基検出され、木枠の施設をもつもので、桶を3～4段積み、その上に方形の井桁を乗せているもの、瓦を円形に巡らすもの、桶を積み重ねただけのものなどがある。井戸掘り方はいずれも、その上面より3～4m以上掘りこまれ特にA、Bトレンチでは、粘土層を中心にして地山面まで堆積しており湧水層に達しない為であろうか当遺跡のベース面以下に達するものもしばしばみられる。ベース面以下、井戸を掘り下げると湧水が激しく井筒を取り上げるのもままならない状態であった。C～Fトレンチでは、古墳時代の河川がトレンチを横切するためかその中に多く掘りこまれ、井筒の底も河川の埋土である砂礫層で終わる。土坑としたものは、径1m前後、深さ0.5mを測る掘り方に桶を置いたもので、野壺として利用されていたものと考えられる。

検出された遺構は以上であり、これらは水田、畑経営にかかわるものであると考えられる。遺物の量は少なく、混入ではあるが滑石製紡錘車、瓦を図示した。

滑石製紡錘車は、近世以降の溝から出土したものである。

法量は、下端部径3.9cm、上端部径2.0cm、厚さは1.65cmを測り、断面形状は台形状を呈する。穿孔部分は上端で0.7mm、下端で0.55mmを測る。上端面は無文であるが、斜面部分および下端面には線刻により文様が施文されている。斜面部分・下端面とも欠損、磨滅により文様の全容を知り得ない。斜面部分には、7つ以上の格子文入りの鋸歯文が上向きに配列去れている。下端面は、約2分の1が欠損しているが、穿孔部に向かう内向きの格子文入りの鋸歯文が3つ以上確認される。



第291図 第3層出土遺物
実測図(1)

今回、当遺跡で出土した滑石製紡錘車の類例は、近畿地方を中心に比較的多く、管見にのぼる範囲でも30例近くが確認できる。当遺跡周辺では、東大阪市大蔵古墳、友井東遺跡、南河内郡美原町太井遺跡等からその出土が知られ、その他大阪では高石市大園遺跡、貝塚市脇浜遺跡でも類例が確認される。

さて、本例の帰属する年代であるが、近世溝からの出土であり、供伴遺物からその年代を決定することは出来ない。しかし、他の類例の供伴遺物等の検討すれば、本遺跡で出土したタイプの滑石製紡錘車は、6世紀末から7世紀初頭にかけてのものである可能性が強く、したがって本例についても同様の時期を与えて置きたい。

また同タイプの滑石製紡錘車は、その施文・形態等がきわめて画一的であり、その生産遺跡は未

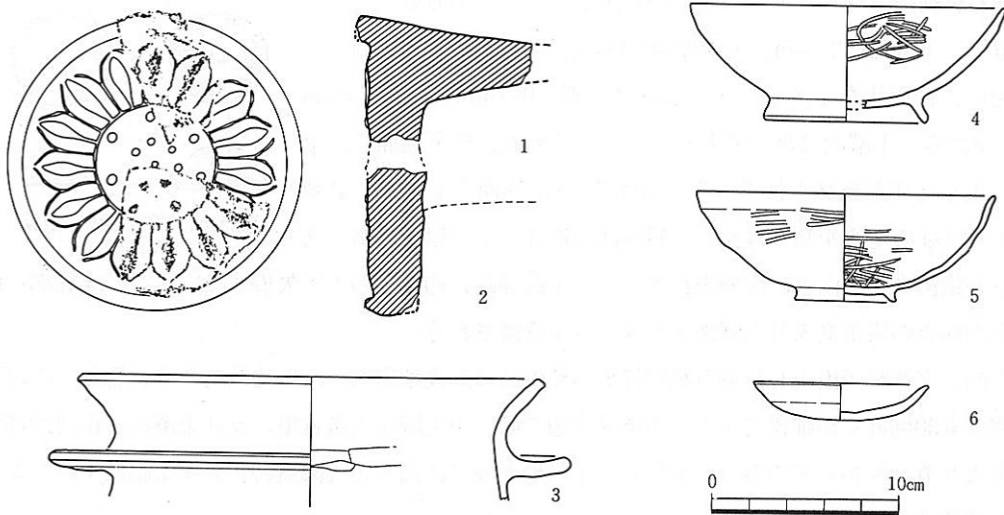
だ確認されていないが、その生産と供給が一元的なものであった可能性が十分に示唆されるものである。

本遺跡で出土した瓦当は、軒丸瓦の2点であり、おそらく同範であると考えられる。

いずれも細片であり、瓦当面の全容を知ることは出来ないが、反転復元径15.6cm、瓦当厚は下端で3.2cmを測る中房は復元で径13.2cmで大きく、圏線で区画された中に1+6+8前後の蓮子を配するものと考えられる。蓮弁は比較的短く弁端は尖り、間弁は有さず弁どうしが接する形態をとる。また、外区はなく、周縁は低い直立縁とする。胎土は、1~3mm前後の砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。

時期については、供伴遺物から決定することが難しく、瓦当文様の意匠等から推定せざるを得ない。まず単弁であること、外区を有さず内区のみであることなどが古い要素となるが、それに対して十五葉と細片化の傾向が著しいこと、中房径が大きく三重に蓮子が配されること、周縁が直立縁であることなどを勘案すれば、古い時期を考えるよりは、奈良時代でも後半に近い時期と考えておきたい。(江浦洋)

この他、第3・4層からは、古墳時代須恵器・平安時代の各種土師器・黒色土器や瓦器など各時代の期の遺物が出土している。この事は、今回の調査区内で水田や畑作に伴うと考えられる溝以外に顕著な遺構が検出されていない事から、当地域周辺が、平安時代以降主に生産地域として重要な役割を果たしてきたものと考えられる。



第292図 第3層出土遺物実測図(2)

第VI章 遺構と遺物の検討

第1節 久宝寺遺跡出土の布留式土器

金光正裕

はじめに

今回の調査によって検出された各期の遺構と遺物のうち、古墳時代のそれは、久宝寺遺跡が当該時期の中心とする複合遺跡である事を示すに十分な内容を有するものであると共に、河内平野における古墳時代社会の様相を明らかにしていく上においても貴重な資料を提供するものであったと考える。

小稿では、古墳時代前期の各遺構や包含層から多量に出土した布留式土器を編年的に位置付ける事を目的として検討を行なう。

(1) 布留式土器の研究史

畿内古式土師器の研究は、1938年、末永雅雄・小林行雄・中村春壽氏らによって、「土師器の古い様式を代表するもの」と認識された「布留式」の提唱に始まり、これまでに先学諸氏による数多くの研究が提示されている。こうした研究は、畿内においては主に、良好な資料が豊富であった大和地域を中心として精力的に進められてきた。一方、早くから学会に紹介されてきた河内地域の具体的な様相については、ここ数年来の沖積平野における集落や古墳など調査例の増加に伴って資料も蓄積され、ようやく活発な研究がなされるようになってきた。当遺跡出土土器群の検討を行なう前に、これまでの研究を整理しておく。

畿内において古式土師器の編年的研究の方向性は、1956年、坪井清足氏によって示された⁽²⁾。坪井氏は、「最も純粋な形」の布留式土器として大阪府小若江北遺跡出土土器群を紹介すると共に小若江北からの変遷が窺える資料として大阪府小若江南遺跡出土の土器群をも紹介した。そして小若江南遺跡出土須恵器よりも古い須恵器の存在を示されたが、両者の共存関係については「須恵器の様式区分より土師器の様式区分の方が大まかにならざるをえない」として、論及する事を留保された。

純粋な形の布留式土器として紹介された小若江北遺跡出土土器群の内容や須恵器との共存関係については、1955年から開始された大阪府河内船橋遺跡の調査によって最初の検証がなされる。O地区出土の土器を中心として詳細な検討を行ない、その成果をまとめた原口正三・田辺昭三・田中琢氏は、「各系統の同一様式の土器の間には、同一層位に属することにより、時間的同時性を認め得る」としてV II・K I b→K I a・H I→O I→O II→H II・K II→O III→O IV→

OVよりなる編年を提示された⁽³⁾。この中で小若江北遺跡出土の土器については、これよりも古く位置付けされるK Ia・HIの中にすでに「古い土師器を構成する器種」である小型土器3種が含まれる事を確認した上で、OIではこの小型土器のセットが崩壊し始めているとしてOIより古く位置付け、更に「両者の間に近接した要素——甕A1・高坏B1の存在・須恵器を含まない——を見出すのであるから、両者の間にさして大きな時間差を置かなくてもよい」(傍点筆者)とした。また、OIIについては「土師器は概してOIと大差ない」としながらも、小型土器3種の消滅・新たな器種(格子印目持つ甕・深鉢形甕・坏A1)の出現・須恵器の伴出する点を積極的に評価し、須恵器の導入を契機として、土師器が新たな局面をひらく時期の土器様式としてここに画期を設定された。この河内船橋遺跡の調査では、初めて畿内の資料によって土師器の変遷が示されると共に、集落内での須恵器との共伴関係が明らかにされた。

1965年、田中琢氏は、畿内第V様式と布留式の間を埋める最古の土師器として「庄内式」を提唱された⁽⁴⁾。氏は、「庄内式に布留式のような定形化した三種の小型土器が存在したが疑問であり、」
「船橋遺跡O地点第I層出土土器などは、布留式の標式とされる小若江北遺跡出土の土器よりは明らかに後出するものとみられる点がありながら、甕などではその区別は困難である。」(傍点筆者)として、布留式の内容の検討をうながした。この庄内式を1様式として成立させる事に躊躇する意見も出されたが⁽⁵⁾、1968年には、原口正三氏によって大阪府上田町遺跡の調査が実施され、その変遷が層位的に確認された⁽⁶⁾。このうち第II層は、都出比呂志氏によって「庄内式の特徴を河内地方の資料としてより純粋な形で示すもの」と認識され、上田町2式として設定された⁽⁷⁾。

1969年 安達厚三氏は、平城宮第2次朝堂院東集殿下層溝SD6030下層の土器群が、「小若江北遺跡出土のものより古い要素をもっている。」として、これを「広義の布留式」とし⁽⁸⁾、1974年、坂田寺下層(=平城宮下層溝SD6030下層)→上ノ井手遺跡SD031・藤原宮SD912・同SD914(=小若江北)→上ノ井手遺跡SE030下層→同上層の布留式4細分案を提示された⁽⁹⁾。このうち上ノ井手遺跡SE030上層と船橋遺跡OIとの比較においては、布留式を須恵器出現以前の土師器とする立場から、「OIには須恵器を共伴する時期に盛行する要素が強く、上層土器群よりもやや新しい時期の土器とみることができるとして、船橋OIを布留式の範疇より除いた。

1971年から開始された奈良県纏向遺跡の調査を手がけてきた石野博信氏は、出土土器が6期に分けられる見通しを示された後⁽¹⁰⁾、1976年に刊行された報告書では、纏向1~4式の内容と周辺地域との併行資料について詳細に論及すると共に、TK208型式以前の初期須恵器を含む辻地区土壙35出土土器を6式として布留式の範疇に含めた⁽¹¹⁾。

こうした大和地域で積極的な布留式土器細分が進められる中で、小若江北・船橋諸式の検証がなされてきたが、河内地域の資料による検証がなされるようになるのは、1980年代になってからである。

1979年、都出比呂志氏は、上田町2式に続く河内地域の布留式土器細分案を提示された⁽¹²⁾。氏は、布留式を須恵器出現以前の土師器とした上でこれを3相に細分し、古相の資料として船橋HI・

東大阪市馬場川T地点出土土器を、中相の資料として小若江北遺跡出土土器を挙げたが、新相の資料については、船橋遺跡O Iには須恵器を伴出するO IIとの共通点が多いとしてこれを除き、安達・木下両氏の編年で3期とされる飛鳥地域の上ノ井手遺跡S E 030下層の土器群をあてた。1980年には大阪市瓜破北遺跡⁽¹³⁾、1981年には八尾市恩智遺跡⁽¹⁴⁾、八尾南遺跡⁽¹⁵⁾の調査報告書が相次いで刊行され、各遺跡単位での編年案が示された。なかでも八尾南遺跡では、土坑や井戸などから初期須恵器や韓式系土器を含む良好な一括資料が多数出土した。この中で米田敏幸氏は、須恵器出現期の様相が各地域・各集落によって異なる点を指摘し、纏向3式に併行し初期須恵器(T K 85)や韓式系土器を含むS E 21出土土器をもって八尾南遺跡における布留式の終焉とした⁽¹⁶⁾。1984年、阪田育功氏は、布留式土器を須恵器出現以前の土師器としたうえで、河内地域布留式土器の4細分案を示された⁽¹⁷⁾。

先に田中琢氏によって提起された布留式土器の再検討は、こうした布留式土器の細分という作業を中心として進められてきたが、各研究者によって布留式土器の解釈が異なり、特に布留式の成立と終焉をめぐる論争には、現在大きな齟齬をきたしている⁽¹⁸⁾。こうした中であって、1986年、寺沢薫氏は、「小型三種の供献土器」の『「盛行」という規定をその祖形までを含めた「出現」から「消長」までの「存在」という範囲にまで広め、そこから「庄内式」をさしひいた残りを「布留式」と考えることが、先学の成果に立脚した現存的理解であろう』とした上で、古式土師器(庄内・布留式)の各様式の検討を行ない、布留式土器については、布留0～2式までを「典型的な布留式」として布留I式、布留3・4式を「広義の布留式」として布留II式とする細分案を示された。そして『「庄内式」との過渡的な様相を具備した』最古の布留式土器細別様式として設定した布留0式の重要な要素として「①布留形甕とこれに伴う布留形影響甕の出現 ②小型精製土器(小型器台C形式+小型丸底鉢I・II・III形式+小型丸底壺)の完備」する点をかかげると共に、布留式土器の終焉が定型化した須恵器(T K 208型式)の出現と画期を一にする事を明らかにし、諸様式と周辺地域の資料との併行関係についても論及された⁽¹⁹⁾。

以上、編年的研究を中心としてその研究史を概括してきた。「布留式土器」様式が提唱されて以後今日の布留式土器研究の若干の混乱を招く要因の一つに、寺沢氏も指摘するように『「布留式」という大別様式の何か等閑に付されたまま』に進められてきた点が挙げられる。この点で様式細分の方法論的立場を明らかにし、諸形式・型式の詳細な検討を経て設定された寺沢氏の布留式土器様式は、論理的にも整合性が認められ説得力のあるものとする。今後、河内地域においても細別様式の内容を明らかにする作業が迫られるが、かと言って先学諸氏によって提示された河内地域における細分案が有効性を失うものではなく、これらの成果に導かれながら、止場させていく事が必要と考える。今回は河内地域における新たな編年を目的とするものではなく、また、筆者の及ぶ所ではないが、この観点に立って当遺跡出土土器の検討を進める事とする。

(2) 久宝寺遺跡出土布留式土器の様相

今回の調査区内での布留式土器の出土状況及び各遺構・包含層の状況については第V章で記述した通りである。これら土器群は必ずしも良好な一括資料とは言い難いが、比較的まとまって出土した遺構についてその器種構成を第1表に示した。この遺構出土土器群を中心として当遺跡出土布留式土器の様相について検討を加える事とする。まず、形態的特徴と調整技法を基準として分類した各器種の特徴を整理する。なお、当遺跡出土布留式土器全体の器種構成は第1図に示す通りである。

1. 各器種について

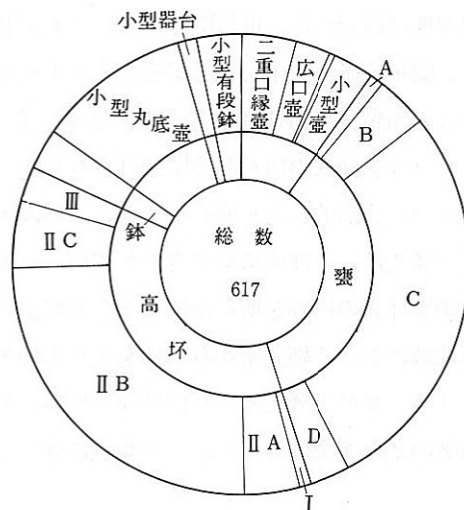
〔壺〕

二重口縁壺 細片で図化できなかったものを含めても18点を数えるにすぎない。また完形で全容を知る事が出来た資料はCトレンチ包含層出土の1点(第191図2)のみであった。SD4009出土のG類(第115図1)は、口縁部外面の緩が鋭くその形態的特徴から山陰系の搬入品の可能性が考えられる。

広口壺 A類15点、B類2点、C類1点、D類2点、E類1点が出土した。A類の体部外面はいずれも粗いハケメ調整を施し、口縁部内外面のハケメ調整をそのまま残すものもある。底部を欠くが倒卵形の体部にやや尖底気味の丸底となると思われるSD4003(第94図4)は、紀井系若しくはその影響を受けたものと考えられる。Cトレンチ包含層直上粘土層-第7層-出土のB類(第167図1)は、中田遺跡No.39トレンチSX01出土甕C(図版7-63)⁽²⁰⁾と形態的に酷似している。また、SD4004(第103図3)の胎土・色調は同遺構C13トレンチ第3層出土の東海系甕(第106図72・73)と酷似しており、当地域から搬入品と考えられる。

直口壺 2点を数える。いずれも口縁部のみの破片で全容を知り得るものではないが、胎土は精良で調整も丁寧である。特にSD4001出土のもの(第90図2)は縦方向の丁寧なヘラミガキ調整を施している。

小型壺 21点を数える。A1類は二重口縁壺D類の超小型品である。A2・3類は他地域での資料も少なくその形態は特異である。恩智遺跡SD25(Fig28-31)⁽²¹⁾や友井東遺跡SX5509(第66図75)⁽²²⁾は、A2類に類似しており、いずれも体部外面はハケメ調整による。B類は、小型丸底壺C2・D類と形態が類似しているが小型丸底壺よりも器高が高くやや大きい。船橋OI・OIIに主体となる形式である。



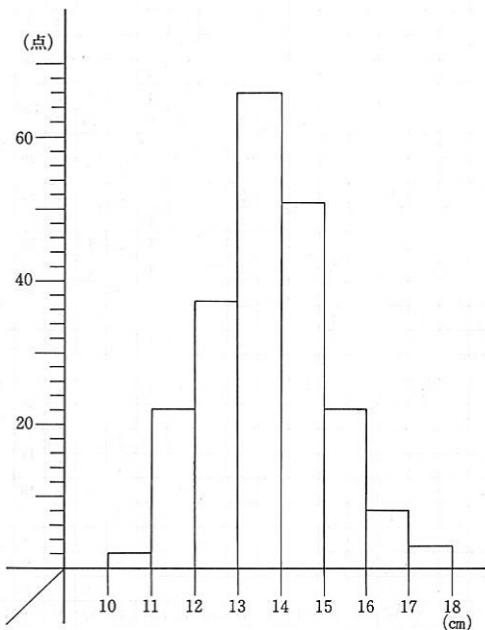
第1図 久宝寺遺跡出土布留式土器器種構成

〔甕〕

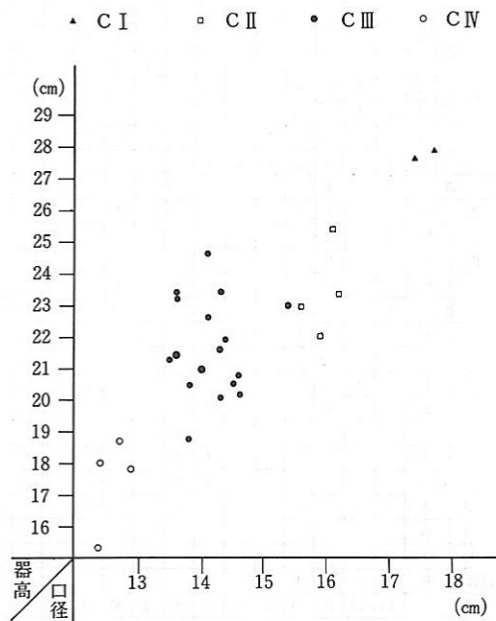
A類 5点を数える。口縁部のみの破片で全容を知りうるものではない。S D4004出土の2点(第106図31・70)は混入したものと考えられる。

B類 22点を数える。S D4029ではB・B₁類が布留式甕C類とほぼ同率でしている。またS Q4004は、このB類甕のみである。S D4029出土のものが体部内面に指頭圧痕が認められ、かつ口縁端部が上方へ僅かにひきだされるのに対して、S Q4004出土のものには指頭圧痕は認められず口縁端部を薄く舌状におさめている。いずれも完形の資料はなく全容については明らかではないが、体部外面をハケメ調整とヘラケズリ調整の両技法を用い、内面に指頭圧痕を認めないB₃類は、佐堂遺跡C'トレンチ包含層中土器群の中にも類例を求める事ができる(第85図245)⁽²³⁾。B₁類は寺沢氏による布留式影響の庄内式甕⁽²⁴⁾の範疇で捉えられるものであるが、B₂・3類については、資料数の少ない現段階では明らかでない。

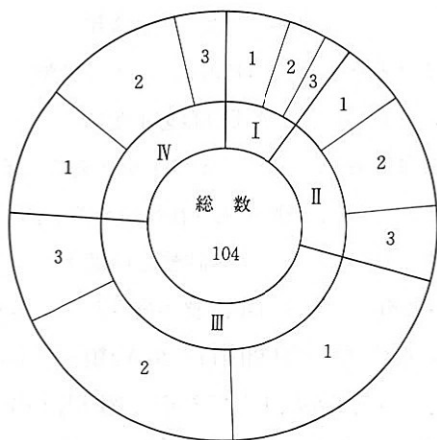
C類 全体の中でも高坏に次いで多く出土し、171点を数えた。大きさ(口径)によって4類(第2図)、体部の形態によって3類の計12類に分類され、その構成は第4図に示した通りである。長胴化の傾向を示す3類はハケメ原体も粗く、その施行方向も斜・縦方向に雑に施され肩部へ横方向に施されるものはない。1・2類のハケメ調整は3類と比較すると細かく丁寧なものが多く、肩部への横方向の調整も連続して施されるものが見られるが、その数は少ない。この他肩部外面にヘラ状工具による刺突痕跡・波状文、直線文が施されるものが数例見られるが、これらは1類に限られ、また、波状文は秀麗さに欠ける。また、口縁部との接合方法に関連するものとして、頸部内面に段を有するものと段を有する事なく屈曲するものが見られた。体部の形態と調



第2図 甕C類口径頻度図



第3図 甕C類口径・器高相関図



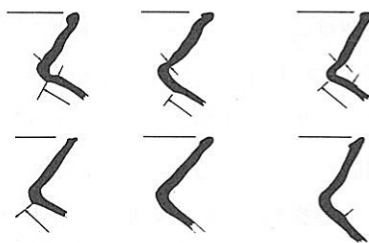
第4図 甕C類体部形態別の比率

大きさ					
		1	2	3	計
I	12	5	3	2	10
II	29	5	9	6	20
III	95	21	19	9	49
IV	35	10	11	4	25
	171	41	42	21	104

第2表 甕C類体部形態と大きさの相関表

整技法との関係において、また出土遺構間においても今回出土品の中では有意差を見出すことはできなかったが、生産者集団或いは地域差を抽出する上で1つの属性となると考える。(第5図)

D類 18点を数える。体部外面をナデ調整による甕は、佐堂遺跡⁽²⁵⁾、西岩田遺跡⁽²⁶⁾、奈良県発志院遺跡⁽²⁷⁾、布留遺跡⁽²⁸⁾などで



第5図 C類甕口縁部諸形態

も知られる。D4類は点数も少なく、また特異な形態をとるものである。

高坏 224点を数える。II A、II B₁類はヘラミガキ調整を主体とし、また胎土も精良なものが多い。II C₁類もヘラミガキ調整を施すが、主体となるのはハケメ調整である。II B₂・II C₂類にヘラミガキ調整が施されるのはごく希で、ハケメ調整が主体となり、ハケメ原体もII B₁・2、C₁類のものとは比べると粗く、その施行も粗雑であるが、中にヨコナデ調整を丁寧に施しハケメを

消しているものも数例あり、これらは比較的胎土も良好であった。脚裾部内面に布目圧痕が認められる例は、北接する佐堂遺跡などでも確認されているが、当遺跡でもII A₂・II C₁類に数例認められた。C13トレンチ包含層出土の小型高坏(第177図20)は、東奈良遺跡溝II-3出土のもの(第21図)に酷似する。また、SK4006出土のもの(第146図8)⁽²⁹⁾は、脚筒部を欠き全容は明らかでないが、胎土・色調とも他のものと異なり搬入品と思われる。

A ₁	9	18(1)	
A ₂	9(1)		
B ₁	38(3)	97(12)	
B ₂	57(9)		
C ₁	9	27(1)	
C ₂	18(1)		

A ₁	1	22(5)	
A ₂	13(4)		
A ₃	8(1)		
B ₁	2	24(2)	
B ₂	13(2)		
B ₃	9		
C ₁	3	35(18)	
C ₂	2(7)		
C ₃	30(11)		

脚部	坏部	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	計
A ₁				1				1
A ₂		1	1	5		1	1	9
A ₃		2		3	4			9
B ₁			1					1
B ₂		2		5	1		2	10
B ₃				1	2		1	4
C ₁				1	1		1	3
C ₂								0
C ₃			2	1(3)	9			12(3)
計		5	4	16(3)	17	1	5	48

第3表 高坏II類坏部・脚部相関表

鉢 I類5点、II類8点を数え、その他手捏ねによるミニチュア品が数例ある。

小型丸底壺 図示できたものは86点で、このうち分類できたものは69点を数える。A類7点、B類30点、C類14点、D類18点である。調整技法について見ると、C₂・D類は、ハケメ調整のみで、ハケメ原体もB₂・C₁類に比べると粗い。A類は、外面および口縁部内面を丁寧にヘラミガキ調整を施し、S D4004（第106図86）では口縁部内面に更に縦方向のヘラミガキを加えている。B類では、ヘラミガキ調整がやや粗くなり口縁部内面のヘラミガキ調整が施されないものもあり、体部外面下半から底部にかけてはヘラケズリ調整を施す。C₁類は、ハケメ調整と体部下半ヘラケズリ調整が主体となるが、口縁部内面と体部外面にやや粗くヘラミガキ調整が施される。S D4032では、口縁部内面に更に縦方向のヘラミガキを加えるC₁類（第133図17）がA₂類とともに出土している。D類は、包含層および包含層直上粘土層から大半が出土しており、遺構出土のものはS D4009・4010・S K4006から各1点出土しているのみである。S D4010出土の1点（第117図7）は、底部がやや突底気味となり特異な形態である。

小型器台 A類のみで、S D4002から3点、S D4004から2点、S Q4001から1点、Fトレンチ包含層から1点の計7点が出土している。いずれも受部と脚部の間には貫通孔が設けられ、丁寧にヘラケズリ調整がなされている。S D4004出土の1点（第106図88）は、外面ナデ調整、脚部内面ハケメによるもので、砂粒を多く含み胎土も粗く、脚部内面には煤が付着している。その他の小型器台は、胎土も精良で丁寧にヘラミガキ調整によるものである。S Q4001では、小型器台と同形態の大型品が1点出土している。

小型有段鉢 A類が8点、B類が9点の計17点を類する。A類はいずれもFトレンチ第2遺構面の遺構・包含層中からの出土である。S Q4001の脚部が付くB₁類（第132図19）では、接合面に刻み目を施していた（図版126）。こうした技法は韓式系土器の高坏などにも見られる。技術的系譜についてはにわかには決しがたいが、両者の関係を知る資料である。

以上、各器種の特徴について簡単にまとめてみたが、二重口縁壺、直口壺、広口壺、鉢、器台については全体の中でも極めて出土点数が少なく充分把握できなかった。今回調査した久宝寺遺跡跡全体で見ても（第1図） 甕216点、高坏224点と両器種で約7割を占めているのに対して、壺63点、鉢17点と著しく少ない。古墳時代になると甕・高坏が壺を凌駕する傾向が顕著になる点はすでに先学によって指摘されているが、今回出土土器群が示す状況はこのような一般的傾向に一致するとは言いがたい。この様相が、集落間の質的差を反映するものが集落内の空間（場所）の機能差を反映するものか、現段階では明らかでない。

2. 各遺構出土の様相

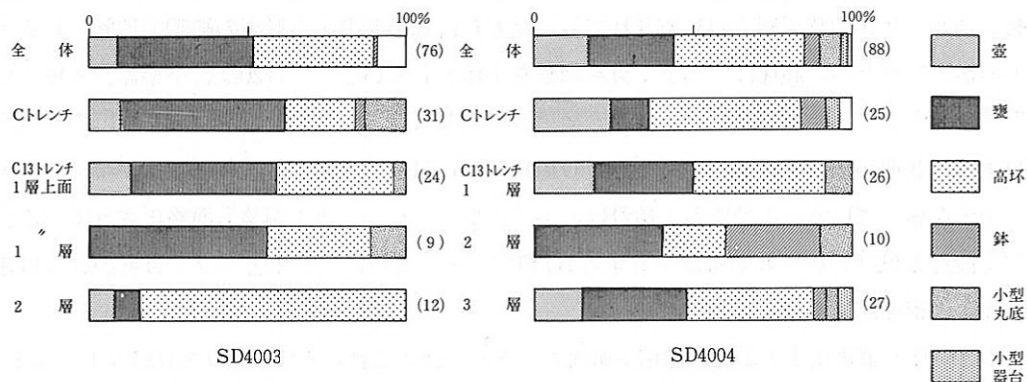
以上各器種に対する理解をもとに、比較的多くの遺物を出土したS D4003・4004・4029・4030、S K4011、S Q4001を中心として各遺構・包含層出土土器の様相について検討してみる。

S D4003（第V章第95～100図） S D4003全体では壺7点、甕33点、高坏29点、鉢1点、小型丸底壺6点の計76点が出土している。甕は、D類1点を除き全てC類である。Cトレンチでは

1類でもより正円形に近く、内面ヘラケズリ調整も丁寧で器壁の薄いものが3点(5・8・19)出土しているが、主体を占めるのは斜・縦方向にやや粗いハケメ調整を施すもので、C13トレンチ①層上面、①層出土の甕は、器壁が厚く、粗いハケメ調整を施し、長胴化の傾向が窺える。高坏では、ヘラミガキ調整を用い坏部外面に稜を有するB₁類と坏部外面ハケメ調整の後ヨコナデ調整を施すものがほぼ同率で出土している。小型精製土器3種では小型器台・小型有段鉢を欠いているが、小型丸底ではB類が主体でハケメ調整を主体とするC₂・D類は認められない。

SD4004(第V章第103~106図) 壺15点、甕24点、高坏36点、鉢4点、小型丸底壺6点、小型器台2点、製塩土器1点の計88点が出土している。甕では、A類2点、D類2点、東海系2点を含んでいる。C類甕では口縁部のみの破片が多く詳細については明らかでないが、Cトレンチでは、肩部外面への横位のハケメ調整も比較的連続して丁寧に施し、更に波状文を施すもの(5)が出土している。5・6の口縁端部は内方へ肥厚することなく外方へ僅かにひきだしている。布留式甕でも比較的古い要素である。C13トレンチ第3層出土甕69の体部も正円形を主体とする小若江北遺跡出土のものに比べると古い段階のもので、萱振遺跡SE03出土のもの(図版35-30)⁽³⁰⁾に類似するが、外面ハケメ調整は粗雑で斜方向に粗く施されている。高坏は、II B₂類とII B₂類がほぼ同数出土しているが、C13トレンチ第3層では、口縁部は丁寧なヨコナデ調整によっている。小型精製土器3種では各器種が出土している。小型丸底壺は、A・B類に限られる。小型器台・小型有段鉢ではヘラミガキ調整が簡略化され、一部に細かなハケメ調整が認められる。

SD4029(第V章第126・127図) 壺3点、甕15点、高坏8点、鉢3点、器台(山陰系)1点、小型丸底壺4点、小型有段鉢3点の計37点を数える。壺23は、混入品と考えられる。甕はB類7点、C類8点を数えB類とC類がほぼ同率で出土している。C類甕9は、縦方向に細かなハケメ調整を加え、また口縁部の形態も古い様相を示している。15・16のハケメ調整は細かく丁寧に特に肩部外面から体部上半へは横方向を主体として丁寧に、体部内面ヘラケズリも器壁を平滑に仕上げている。高坏は、II B₁類が2点含まれるがII A類が主体となっている。特にII A類は口縁部が長く直線的に開き、口径に比して小さな底部を有しており、瓜生堂遺跡B地区高坏II a類⁽³¹⁾に類似しており、これの型式組列上に位置するものと考えられる。小型精製土器3種は、小型丸底



第6図 SD4003・4004層位別器種比率

壺A類2点、B類3点、小型有段鉢A類3点を数え、小型器台を欠く。小型丸底壺A₂類は、扁平な体部に長く内弯気味に外上方へ開くもので、馬場川T点出土のもの⁽³²⁾や船橋HI（第9図33）に類似するがこれらよりはヘラミガキ調整が省略され、体部下半にはヘラケズリが認められる。小型有段鉢は、小若江北・船橋KIaのもの⁽³²⁾と比べると小型で、ヘラミガキを主体とするがやや簡略化されている。

S D 4030（第V章第133図） 壺2点、甕5点、高坏2点、小型丸底壺2点が出土している。甕ではB類3点、C類2点が出土し、B類とC類がほぼ同率である。C類甕はS D 4029のものと同じ様相で、C III₁類7は、口縁部が「く」の字に外傾して開き、体部内面ヘラケズリも頸部直下に及び丁寧で器壁を平滑に仕上げている。高坏は、II A₁類のみで、口縁部は長く外方へ直線的に開き、丁寧なヘラミガキ調整を施すものである。小型精製土器は、小型器台、小型有段鉢を欠くが、小型丸底壺2点はいずれもB₁類である。

S K 4011（第V章第152図） 甕3点、高坏3点、鉢1点、小型丸底壺2点の計9点を数える。甕は、球形の体部に外傾する小型のもの（7）1点とC類が2点である。C類の外面ハケメ調整は細かく丁寧で、8の肩部外面は更に丁寧なヨコナデ調整が施され、肩部には棒状の刺突痕が施されている。高坏は、II B₁類2点、II A₂類が1点である。いずれもヘラミガキ調整を主体とするが、調整は粗雑で方向も一定していない。5の裾部内面には布目圧痕が認められる。小型丸底壺はA₁類とB₁類である。A₁類の2は、S D 4029出土のもの⁽³²⁾と形態・調整技法とも酷似する。

S Q 4001（第V章第179・180図） C₁トレンチ包含層中から出土した良好な一括資料である。壺3点、高坏4点、鉢1点、器台1点、小型丸底壺1点、小型器台1点、小型有段鉢2点の計21点が出土した。二重口縁壺C類2は、口縁部のみで全容は明らかでないが、外面には断面三角形の突帯を貼り付け、内外面に縦方向の丁寧なヘラミガキ調整を施している。甕はB₁類1点、D₂類1点の他は全てC類である。B₁類9は口縁部のみの小片である。C類のうち完形で全容を知る事ができるのはC IV₁類7とC II₁類10の2点のみであるが、外面ハケメ調整は全体にやや粗い。その中で5・8は、肩部外面への横方向のハケメ調整は比較的連続して施され、口縁端部の形態も古い要素を具備している。C II₁類10は、口縁部が「く」の字に外傾し端部を上方へ丸く肥厚させ、外面ハケメ調整が縦方向に施されているなど布留式影響の庄内形甕の範疇で理解されるべきものかも知れない。高坏は、ヘラミガキ調整を主体としている。器台20は、小型器台A類と相似形をなすもので、丁寧なヨコナデ調整の後更に丁寧なヘラミガキ調整を密に施している。小型精製土器は3種が揃っている。小型丸底壺D類17は、口縁部内外面と体部外面にやや粗いヘラミガキ調整を施している。小型器台A類21は、やや大型で、ヘラミガキ調整も簡略化されている。小型有段鉢2例は、いずれも脚部を有するB₁類である。A類に比べるとヘラミガキ調整は粗雑で、19には指頭圧痕が認められる。

以上、主要な遺構出土土器群の様相を概観してきた。次にこれら土器群相互の比較を試みる。これら6遺構出土土器群のうち顕著な差異が認められたのは、S D 4003・4004とS D 4029・4030

である。

後者では、B類甕がC類甕とほぼ同率で出土し、高坏ではII A類、小型丸底壺ではA₁・B₁類が主体を占め、かつC類甕もS D 4003・4004のもの比べると古い要素を具備するもので構成されていた。S K 4011は、6遺構の中では出土点数が少ないが、甕・高坏・小型丸底壺などはS D 4029・4030出土土器に類似するものである。これら土器群と類似する様相を示すものにS D 4026・4031・S K 4010・S Q 4004出土土器群が挙げられる。いずれも出土点数が少なく要検討資料ではあるが、S D 4026出土小型有段鉢は、口径に比して深い体部と口縁部の段が深く明瞭で、体部内面に放射状のヘラミガキ調整を加えるなどS D 4003・4004出土のものより古い要素を具備している点、S K 4010では、坏部が深く丁寧なヘラミガキやナデ調整を施す高坏II A₂類・甕A類・口径が大きく内面にヘラミガキ調整を丁寧に施す小型丸底壺A類で構成されている点、S Q 4004ではB類甕のみで構成される点が指摘できる。

S D 4003・4004は、C 13トレンチで炭層・粘土層などの堆積によって分層が可能で、第V章ではCトレンチ・C 13トレンチ各層出土のものに分けて記述した。しかし、S D 4003では現段階においては出土土器群に差異を認める事は困難であった。S D 4003出土土器の示す様相は、甕類ではより正円形に近い体部を有するもの数点を含むものの長胴化傾向を示すC₃類を主体とし、高坏では、ハケメ調整を主とするII B₂類・II C₂類を数点含み、ヨコナデ調整を主とするII B₂類がヘラミガキ調整を主とするII B₁類を僅かに凌駕している。小型精製土器では小型器台・小型有段鉢を欠き、小型丸底壺ではB類が大半を占めるなどの点が指摘される。またS D 4004では、層位ごとに取り上げる事ができたC 13トレンチにおいて、甕・高坏の良好な資料を欠いている。甕では、C 13トレンチ第1・3層で甕A類の口縁部片が出土しているが混入品の可能性が考えられる。Cトレンチ出土の3点(4~6)、C 13トレンチ第3層出土の69は、長胴化の傾向が窺えるS D 4003の甕類よりは古い要素を具備している。高坏では、C 13トレンチ第3層において、II A類が主体を占め、特に79、80は口縁部が外上方へ大きく直線的に開き、胎土も精良なもので、口縁部外面に施されるハケメ調整はII B₂・II C₂類などのものと比べると細かく丁寧である。小型精製土器では3種が揃っており、小型丸底壺ではA類2点を含んでいる。これらの事を考えるとS D 4004出土土器群は、C 13トレンチ各層出土の土器群の方がCトレンチ出土土器よりも若干古い要素を有するものが多いと言えるが、全体ではほぼ同じ様相を示しているものである。これらの事からS D 4004とS D 4003出土土器を比較した場合、S D 4003の方が新しい様相を呈しているものと考えられる。

S Q 4001は、高坏が数量的に少なくこの点で検討の予地があると考えられるが、甕類のハケメ調整は、やや粗くなっているがB₁類を含み、C類甕でも口縁端部は古い形態を示し、肩部外面への横位のハケメ調整も比較的整っているなどの点が指摘され、更に小型精製土器3種が揃っている。

これらの事から、6遺構出土土器は次の3群にまとめる事ができる。

I 群… (S D4026・4029・4030・4031、S K4010・4011、S Q4004)

甕類では、B₁・2類がC類とはほぼ同率で存在している。またC類も1・2類を主とし、肩部外面への横方向のハケメ調整をはじめとして、全体に細かく丁寧である。高坏では、II A類が主体でこれにII B₁類が若干加わる。小型精製土器3種では、小型器台を欠いているが、小型丸底壺ではA類、B₁類、小型有段鉢ではA類で構成されている。

II 群… (S D4002・4004・4010、S K4001、S T4001、S Q4001・4002)

甕類では、B類を少量含むが主体を占めるのはC類である。C類は完形品が少なく不明な点が多いが、S D4004(第103図4～6・第106図69)を見ると長胴化の傾向は検著には認められず、肩部外面ハケメ調整もさ程乱れていない。高坏ではなおII A類が存在する。小型精製土器は3種が存在する。小型丸底壺ではB類が主体となるがなおA類が認められる。

III 群… (S D4003・4007・4008・4009、S K4002・4003・4006、S Q4003)

甕類では、B類は含まれず、C類甕は長胴化の傾向を見せはじめ、肩部外面へのハケメ調整も粗雑となり、全体で斜・縦方向に粗く施されている。高坏では、II A類は見られずヘラミガキ調整を主体とするII B₁類とII B₂・II C類で構成される。II B₁類のヘラミガキはII A類に比べると粗く、II B₂・II C類ではハケメ調整の後ヨコナデ調整を施すものが多く、粗いハケメ調整によるものが若干含まれる。小型精製土器では、小型器台・小型有段鉢を欠いている。小型丸底壺では、A類は見られずB₁・2類が主体で、C₂・D類がごく僅か含まれる。

これら3群のうち、II群とIII群については、甕・高坏類で資料数が少なく具体的様相について不明な点を有すものの、甕の長胴化傾向、小型精製土器3種の崩壊(小型有段鉢・小型器台の欠落)などの違いが指摘される。次にこれらの土器群を中心として編年的位置付けを行なう中で、この点についても検討を行なう事とする。

(3) 久宝寺遺跡出土布留式土器の編年的位置付け

先の研究史の中で見てきたように、河内地域布留式土器の様相は、古くは小若江北遺跡出土土器、河内船橋遺跡諸様式が提示され、近年では阪田氏を始め幾つかの編年案が提示されるなど徐々に明らかにされつつある。ここでは、これら先学諸氏の研究成果を参考として編年的位置付けを行なう事とする。

I 群と類似する様相を示す資料としては、八尾市萱振遺跡 S E03・S K03⁽³³⁾、同市八尾南遺跡 S E09・S K74⁽³⁴⁾、東大阪市馬場川 T 地点出土土器⁽³⁵⁾などが挙げられる。これら土器群と I 群土器群とを比較検討してみる。甕について見ると先の土器群は、A類+B類+C類で構成されている。A・B類の占める割合は決して多くはなく、I 群土器群と同様の傾向を示していると言えよう。特に馬場川 T 地点出土甕91と94は、S D4029出土 B₄類(1)・C II₁類(10)などと調整技法・形態と

もに酷似している。高坏では比較資料の中に良好なものを見い出せないが、先の資料より古い段階に位置付けられる瓜生堂溝224高坏II a類に系譜が求められるII A類が主体を占め、船橋遺跡KI a群高坏とも類似しており、先の資料にはほぼ併行するものと考えられる。小型丸底壺では、同じA類が見られるが、I群土器では、萱振遺跡SK03(図版36-46・47)や八尾南遺跡SE9(PL26 1・2)のような形式のものは認められなかった。また小型有段鉢は、先の資料のものよりは小型化し、ヘラミガキ調整もやや粗く新しい様相を示している。

II・III群の比較検討資料として、小若江北遺跡、佐堂遺跡、船橋遺跡OIが挙げられる。小若江北遺跡出土土器は、「純粋な布留式土器」と紹介された土器群で正円形の体部を持つ定型化した甕C類+ヘラミガキ調整を多用する高坏II A・II B₁類+小型丸底壺B₁類+小型器台A類+小型有段鉢を主要な器種とする土器群である。これと比較し得る土器群はII群の土器群である。II群土器では甕の良好な資料が少ないがSD4010の2点(第117図1・2)、SQ4001の甕(特に第179図7・10)は、この小若江北出土のものと同様に形態的には類似しているが、小若江北よりは肩部外面のハケメ調整に簡略化の傾向が窺える。高坏では、II群出土のものにハケメ調整・ヨコナデ調整を施すII B₂・II C₂類がヘラミガキ調整を主とするII A、II B₁類を僅かに凌駕し、小型精製土器3種は、小型有段鉢・小型器台の占める割合が小若江北出土土器群よりも少ない。

次にIII群の土器と、船橋遺跡OIおよび阪田氏によって小若江北遺跡出土土器と船橋遺跡OIIとの間に位置付けられた佐堂遺跡SD6003・SK6010(第3期)と八尾南遺跡SE21・同26(第4期)出土土器群との比較検討を行なってみる。船橋OIでは、小型器台・小型有段鉢が欠落し、小型丸底壺はハケメ調整を施すD類のみで、小型精製土器3種のセット関係が崩壊している様相が窺え、高坏は、ハケメ調整のみによるII B₂類・II C₂類が主体をなし、更に船橋OIIやHII・KIIの段階に顕在化してくる口縁部が直立若しくは内弯して碗形を呈するものが新たに出現するなど、新しい要素が窺えるが、甕C類を見ると小若江北出土のものとはほぼ同形態で、肩部外面への横方向のハケメ調整も同様にまだ整っている。佐堂遺跡出土土器は、小型器台は僅かで小型有段鉢を欠落し、船橋OIと同様の傾向を示しているが、小型丸底壺は、形態的にはB₂・C類が主体をなし、調整技法についても体部外面ヘラケズリ調整によるもので、高坏では、ハケメ調整の後ヨコナデ調整を施すII B₂類・II C₂類を主体とし、甕C類では、船橋OIのものに比して長胴化の傾向が窺えるものが散見され、外面ハケメ調整も斜・縦方向が主となり全体に粗くなっているなど、船橋OIとは異なる要素が指摘される。これら土器群と、III群の土器を比較してみるならば全体の様相は佐堂遺跡出土の土器群に類似していると言える。その中では、小型丸底壺の調整技法において、III群土器の方が簡略化されているがヘラミガキ調整を施すものが主体となっているのに対して、佐堂遺跡出土のものはヘラケズリ調整を主とし、また高坏においても、簡略化されたヘラミガキ調整を施すものがIII群の中にも含まれるなどの異なった要素が指摘される。

甕C類は、小若江北出土のように体部が正円形近くになった完成された姿の後には、体部が長胴化し、それとともに器壁が厚くなり、外面ハケメ調整も斜・縦方向を主として粗く施されるよう

になるといった変化を示すが、正円形に近い体部を有するものは船橋O IIのなかにも含まれている(第2図201)。また体部の長胴化が顕在化し始める様子は、船橋O II以前に位置付けられる八尾南遺跡S E 21・同26出土甕C類の中に窺う事ができ、それ以前に長胴化が始まっているものと考えられる。八尾南遺跡出土土器群は、小型精製土器3種が全て欠落し、甕C類の肩部外面への横方向のハケメ調整も見られず、高坏もまた浅い碗状を呈するものが主体となっており、船橋O IやIII群の土器群よりは新しい様相を呈するものである。

これらのことから、I群とした土器群は定型化した布留式土器の様相を示す小若江北遺跡出土土器よりも古く位置付けられ、馬場川T地点出土土器や萱振遺跡S E 03・S K 03出土土器群と併行するものと言えるが、小型精製土器3種ではこれらよりも新しい要素を示している。II群の土器は小若江北遺跡出土土器群と併行するものであるが、C類甕のハケメ調整がやや粗雑となる点、小型精製土器3種のセットがいち早く崩壊していく様子が窺えるなど、小若江北よりも若干新しい要素を指摘することができる。III群の土器群は、小型精製土器3種セット関係が崩壊する様相が検著となり、またC類甕の体部長胴化・外面ハケメ調整の粗雑化(肩部横方向のハケメの省略・斜・縦方向を主とした不定方向のハケメ等)など、佐堂遺跡S D 6003・S K 6010出土土器群と類似する様相を呈し、これとほぼ併行するものと考えられる。ただ両者の間には、先に指摘されたような小型丸底壺や高坏の調整技法などにおいて差異が認められた。これが集団間の差異を反映するものか、時期差を反映するものか、なお検討を要するものと思われる。

主な遺構出土土器群を中心とする3群の土器群の比較検討を行ってきた。これらを現在提示されている当地域の編年案のうち阪田氏の編年案と対比させて見るならば、以下のようにまとめる事ができる。

I群：第1期に相当するが、なかでも新しい要素を含んでいる。小型精製土器では小型器台が欠落し、小型丸底壺のなかでは萱振遺跡小型丸底壺A類(S K 03：図版36-46・47)のような形式のものが認められないなど、なお検討を要するものと思われる。

II群：第2期に相当するが、なかでも新しい様相を呈している。定型化した布留式土器は、このII群の段階から、C類甕の長胴化・小型精製土器3種の崩壊などの現象が萌芽しているものと思われる。

III群：第3期に相当する。八尾市恩智遺跡S D 27出土土器群もほぼ当該期に属する。恩智遺跡S D 27では、船橋O Iと同様正円形に近いC類甕とやや長胴化したものが共伴しており、また、小型丸底壺でもB類・D類が見られ、高坏でもヨコナデ調整を施すII B₁・2類と船橋O Iと同様、ハケメ調整を施し浅い碗状を呈するII C₂類が共伴している。これらの事から船橋O Iも当該期に併行するものと考えられるが、III群土器や佐堂遺跡S D 6003・S K 6010出土土器群より新しい様相の土器群である。先の土器群の中には、小型精製土器のうち小型器台や小型有段鉢が少量残存している。両器種の消失時期がこの段階まで下るのか先代の混入品とするか今後の検討を要するものと思われる。また、C類甕は、

正円形をなすものと長胴化したものが混在するが、主体となるのは長胴化したハケメ調整が粗雑化したものである。

おわりに

当遺跡出土土器群のうち主構な遺構出土のものを中心として、その編年的位置付けについて検討してきたが、なお包含層出土のものについては検討できないままとなった。また、各土器群の中にも、出土点数が少なかった壺類をはじめ再検討を要する課題が少なからず含まれる結果となった。これらの点を含めて、今後の遺物整理の進展をまって再考を期すつもりでいる。

(註)

- (1) 末永雅雄・小林行雄・中村春壽 1938 「大和に於ける土師器住居址の新例」(『考古学』第9巻10号)
- (2) 坪井清足 1956 『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 笠岡市教育委員会
- (3) 原口正三・田辺昭三・田中琢・佐原 真 1962 『河内船橋遺跡出土遺物の研究(2)』(『大阪府文化財調査報告』第11輯) 大阪府教育委員会
- (4) 田中 琢 1965 「布留式以前」(『考古学研究』第12巻2号) 考古学研究会
- (5) 伊達宗泰・森 浩一 1966 「土器」(『日本の考古学』V) 河出書房新社
この中で氏は、唐古V様式と布留式の間に一型式を想定し、それに該当する資料として京都府宇治市八軒屋遺跡・同八幡町木津川底遺跡出土の土器群を充てるとともに、布留式土器成立について、A瀬戸内地方(津渚式)からの影響を受けて畿内で成立した、B瀬戸内地方で生みだされたものとするA、B2案が考えられる事を示唆された。
- (6) 原口正三 1968 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」(『大阪府立島上高等学校研究概要』) 復刊第3号
- (7) 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻4号) 考古学研究会
- (8) 安達厚三 1969 「平城宮第48次調査第2次朝堂院東朝集殿地域」(『奈良国立文化財研究所年報1969』) 奈良国立文化財研究所
- (9) 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻2号) 日本考古学会
- (10) 石野博信 1972 「奈良県纏向遺跡の調査一三輪山麓における古墳時代前期集落の問題」(『古代学研究』65) 古代学研究会
- (11) 石野博信・関川尚功 1976 『纏向』 桜井市教育委員会
- (12) 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻3号) 考古学研究会
- (13) 田中清美 1980 『瓜破北遺跡』 大阪市文化財協会
- (14) 瓜破堂遺跡調査会 1981 『恩智遺跡III』
- (15) 米田敏幸他 1981 『八尾南遺跡』 八尾南遺跡調査会
- (16) 註(15)に同じ
- (17) 阪田育功 1984 「河内における布留式土器の一様式」(『佐堂(その2)-I』 大阪文化財センター
- (18) 特に石野博信氏と木下正史の纏向諸式の評価をめぐる論争は、布留式成立をめぐる問題を顕在化させたもので、以後布留式壺をとりあげて再検討を試みる研究が幾つか提供されている。
木下正史 1978 書評 榎原考古学研究所編『纏向』(『考古学雑誌』第64巻1号) 日本考古学会

- 石野博信 1979 「奈良県纏向石塚古墳と纏向式土器の評価—木下正史氏の批評に答える—」(『考古学雑誌』第64巻4号) 日本考古学会
- 小山田 宏一 1982 「布留式成立に関する覚書」(『考古学と古代史』) 同志社大学
- 井上和人 1983 「「布留式」土器の再検討」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集) 奈良国立文化財研究所
- (19) 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- (20) 福田英人編 1986 『中田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- (21) 註(14)に同じ
- (22) 亀島重則・井藤暁子・阪田育功編 1984 『友井東(その1)』大阪文化財センター
- (23) 註(17)に同じ
- (24) 註(19)に同じ
- (25) 註(17)に同じ
- (26) 村上年生・小山田宏一ほか 1983 『西岩田』大阪文化財センター
- (27) 藤井利章編 1980 『発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- (28) 置田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」(『古代文化』第26巻2号)
- (29) 田代克己・奥井哲秀編 1979 『東奈良・発掘調査概要I』東奈良遺跡調査会
- (30) 大野 薫編 1983 『萱振遺跡発掘調査概要I』大阪府教育委員会
- (31) 中西靖人ほか 1980 『瓜生堂』大阪文化財センター
- (32) 福永信雄・芋本隆裕ほか 1977 『馬場川遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会
- (33) 註(30)に同じ
- (34) 註(15)に同じ
- (35) 註(32)に同じ

第2節 久宝寺遺跡出土の韓式系土器について

尾谷 雅彦

1. はじめに

近年、畿内各地、特に河内平野周辺部に於いて古墳時代中期の遺跡から初期須恵器や陶質土器を伴って、格子叩キ目、平行叩キ目、縄蓆文が施されていた土師質の平底鉢や甗などが出土している。これら一群の土器の技法、形態は従来の土師器とは異にするもので注目されている。久宝寺遺跡からも同様に初期須恵器を伴って、復元可能な破片も含めて100数点が出土した。

今回、これらの土器と供伴した須恵器も紹介し、若干の考察を試みたい。

2. 用語概念

上記の一群の土器に付いては、考古学の研究史のなかでは、国内の土器の系譜とは異なり、大陸や半島からの直接渡来もしくは技法の影響を受けた渡来系土器の範囲に入るものである。これらの土器に付いては、多くの論文があり、種々の用語が使用されている。⁽¹⁾

小稿では、今回紹介する土器に付いては、明らかに朝鮮半島南部原三国時代～三国時代の貝塚・古墳から出土する赤褐色軟質土器に系譜を求められるもので「韓式系土器」と呼称した。⁽²⁾この韓式系土器とは、国内に於いて赤褐色軟質土器の模倣もしくは、影響のもとに製作された土器であり、時期的には、特に古墳時代それも出土例の多い須恵器生産開始前後から陶邑編年Ⅰ－5前後、⁽³⁾田辺編年TK47間⁽⁴⁾として考えたい。

3. 久宝寺遺跡における韓式系土器の出土状況

当遺跡から出土した土器はSD5001、NR5001、NR4003、SQ5001、SE5002、SB5003の各遺構からである。これらの遺構の中で、特に出土量が際立ったのは、NR5001である。

NR5001

NR5001は流路幅120m以上の大規模なもので、深さ約4mを計る。堆積層の大部分が砂礫層で水量が豊富であった事が推測される。

韓式系土器は、この流路の中央部から南部分の堆積層から出土しており、出土状況が偏っている。この流路の南側にはSD5001、SE5002、SB5003が位置し、流路の切り込み面が、これらの遺構面と同一である。つまり、このような遺構の分布から、土器が北側に流れ込んだと考えられる。出土した土器は、韓式系土器の平底鉢形土器10点、甗7点、把手付鍋1点、高坏8点、丸底甕2点、大型丸底甕の底片1点、その他格子叩キ目、縄蓆文土器片などが出土している。これらの土器と供伴して須恵器、土師器、その他古墳時代前期の土師器、弥生式土器などが出土している。しかし、古墳時代前期の土師器や弥生式土器などは須恵器や韓式系土器に比べて、磨滅が激しい所から見て、他の場所からの流入のようである。

平底鉢形土器が10点出土しているが、図84が完形、口縁部が図82、83、85、底部が86~90である。図84は口径14.1cm、器高12.8cm、底径9.8cm、胴部最大径12.8cm。平底の底部から内湾しながらやや外傾し、頸部から口縁端部に外湾しながら（一部内湾）外上方に短く伸び、端部はそのまま終わる。胴部最大径は、中央に位置し、底部と胴部の境は凸状に粘土が残り、底部はやや、内側に湾曲する。外面の調整は、胴部に平行叩キが胴部と平行に施され、底部から胴部に約1cm幅で横方向にヘラ削りが施されている。内面は、ヘラ状のナデが下から上へ施されている。尚、胴部平行叩キの上には、一部ヨコナデが施されている。この土器の特徴の一つに、底部外面が、5.5cm×5.85cmの方形に凹んでいる。口縁部だけが残存していた図82は、口径15.5cm、残存器高3.5cm、胴部から頸部にかけて、やや内湾しながら外傾し、口縁部は短く水平に伸び、口縁端部は、やや内傾気味に面を持つ。口縁部内面も水平に伸びた後内湾する。外面胴部は、格子叩キ、頸部は、格子叩キをヨコナデによって消している。内面はヨコナデ。図83は、口径16cm、残存器高4.5cm、胴部は内湾気味で、頸部から、口縁端部にかけて外湾する。口縁部は、短く端部は丸い。外面は胴部から頸部に平行叩キ（一部原体に横方向の線が入る。）で頸部から口縁部、内面はヨコナデを施している。図85は、復元口径15cm、残存器高2.8cm、胴部は、やや内湾しながら頸部に至る。頸部から口縁部は、外湾しながら外傾し端部は丸い。口縁部内面は、外湾気味に内傾する。胴部外面は、斜格子叩キ、口縁部内外面はヨコナデを施している。ヨコナデは、口縁外面、内面2度、強く施され、やや凹面を呈する。次に、胴部が残存している図86は、残存器高3.5cmで、底部からやや内湾気味に外傾する。外面は、格子叩キ、底部近くは、ヨコナデを施している。内面もヨコナデを施している。図87は残存器高3.7cm、底部から胴部に外湾しながら上方に伸びる。外面の調整は不明であるが、底部から胴部に約1cm幅でヘラ削りが施され、底部内外面、及び胴部内面ヨコナデを施している。図88は、残存器高5.8cm、底部から胴部へ内湾気味に外傾し、上方に伸びる。胴部外面は、格子叩キ、底部外面は、ヘラ状ナデ、内面は不定方向へのナデを施している。図89は、残存器高2.8cm、底部から胴部に外湾しながら上方に伸びる。外面は、平行叩キが施され、内外面不定方向のナデを施している。図90は、残存器高8cm、底部は、ヘラ削りが施されている。内面はヨコナデを施している。以上、図示出来た平底鉢の内外面、平行叩キを施しているもの3点、格子叩キ4点、ナデ2点であった。

次に高坏であるが、高坏は9点（49~57）図示している。その内の図56・図57は、脚部である。坏部の形態から、（49・53）、（50・51）、52、54、55とに分類することが出来る。図49、図53は、底部から内湾しながら外傾し、口縁部付近で更に外傾する。外面には底部から1/2の所から回転ヘラ削りを施している。図49は、口径14.2cm、残存器高3.8cmであり、図53は、口径16cm、残存器高4.8cmである。図50は、底部から内湾しながら外上方にのび、口縁部近くでやや外傾し、端部は丸い。口縁部内面は、やや凹面をなくしてから外湾しながら終わる。底部外面2/3に回転ヘラ削りが施されている。図50は、口径13.4cm、残存器高4.4cmである。図51は、図50と同様に内湾しながら外上方に伸び端部近くでやや外傾しながら口縁端部は尖がる。外面1/3に回転へ

ラ削りが施されている。図52は、口径14.2cm、残存器高10.0cmであり、坏部底部から、やや内弯気味に外傾し、口縁端部は少し丸味を持つ。脚部は、外弯気味に外下方に伸び脚部端部は沈線が入る。坏部の1/2に回転ヘラ削り、その他は、ナデ調整が施されている。図54は、復元口径15.3cm、復元器高3.7cmあり、坏部底部から、やや水平に伸びた後、内弯気味に外傾しながら上方に伸びている。端部は水平な面を持ちながら、内面に少し上方に摘み出している。調整は不明である。図55は、大型の高坏で、底部から内弯気味に外上方に伸びた後、坏部中位より、やや口縁部よりで凹線を巡らしながら外上方に伸びている。口縁端部は鋭く尖がる。口径23.5cm、残存器高7.7cmである。図56、57は、脚部である。図56は、坏部接合部から、やや外へ上方に伸び、急に傾斜を緩め外下方に大きく拡がる。端部は外上方に伸びた後、垂直な面を持ちながら接地面で、短く外下方に伸びる。図57は、脚部接合部より、内弯気味に外下方に拡がり、脚部端で一度外上方に摘み出ししながら、やや内弯気味に接地する。端部は、やや丸味を持ち、口径12.1cm、残存高7.2cmある。以上のように、高坏は須恵器と同様に回転ヘラ削り、及び回転ナデを用いている。

把手付鍋である図91は、残存器高19.3cm、胴部最大径28.6cmある。底部は内弯し凹面をなす。胴部は、大きく内弯しながら頸部に至る。胴部最大径の部位には、沈線が1～2条巡り、把手が付く。把手は、上西からヘラによる切込みがなされている。内面は、胴部2/3がヘラ状ナデ、残り1/3から底部は不定方向へのナデ調整を施している。内面には、同心の当て具の痕跡がある。

甗は4点図示している(78、79、80、81)。図78は、復元口径24.0cm、器高24.1cm。平底の底部から外上方に伸び、頸部近くで、やや内弯する。口縁部は、短く外傾した後、口縁部に至る。口縁端部は、短く外下方に折り返した後、上方に伸び面を成す。面中央に沈線が入る端部内面は、やや外弯した後、内弯し胴部内面に至る。胴部外面は、縦平行叩キ、底部から約2cmにヘラ削りが施されている。中央部に沈線がめぐり、把手が恐らく付いたものと考えられる。底部の透しの形状は不明。図79、80、81のうち、図79は、復元口径24.8cm、器高24.6cm、底部から外上方に外傾した後、中位で把手が付き、やや内弯気味に外傾し上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は、水平な面を持つ。把手は、やや外弯した後、端部は更に、やや跳上がり丸い。外面は、やや大きい格子叩キの上、胴部中位に沈線が1条巡る。底部から約1cm幅でヘラ削りが施されている。底部の形状は不明である。図80、81は底部近くの胴部片であり、図80は、残存高4.6cm外上方にやや外傾しながら伸びる。外面は、底部近くに格子叩キが見られる。図81も底部から、外上方に外傾する。外面は、格子叩キが施される。いずれも底部の形状は、不明である。

甗8は口径14cm、器高17.1cm、体部最大径17.6cm、体部は底部から内弯気味ながら外上方へのびた後、やや内弯しながら内傾し、肩部で更に内傾し口頸部に至る。口縁部は外弯気味に外傾した後外上方にのび端部は丸い。体部外面は斜め平行叩キの後、ナデが施されている。内面は、口縁部がナデ、体部内面は、当て具同心円(?)痕をヘラ状ナデにより調整されている。外面煤が付着している。第277図-118は、肩部と考えられる。外面、斜格子が施されている。第227図

-128は、大型甕の体部下半部で、底部はやや平底気味である。外面は平行叩キ、内面は同心円の当て具の痕跡が残存している。

他に、平底に近い鉢形土器がある。図37の底部は、平底気味の丸底で胴部は内弯しながら上方に伸び、口縁部は外傾し、端部は面を持ちながら内傾する。口縁部内面は、「く」の字を呈する。外面と口縁部内面は、ハケ目、胴部内面はヘラ削りが施されている。胴部中位で、器壁がきわめて薄い。

S D 5001

S D 5001からは、甕2点、甕4点が出土している。第202図-23は、口縁部の細片である。口縁端部は、水平な面を成す。外面は、平行叩キ目を施す。口縁部近くは、ヨコナデにより、叩キを消している。図13は、胴部下半から底部にかけて残存していた。残存器高7.1cm、平底の底部から外傾しながら上方に伸びる。胴部から底部の境に、ヘラ削りが施されている。底部の透しは、中央に丸い孔を穿ち、周囲は、三角形の透しを配している。

甕は、肩部の細片は2点、丸底底部が1点であった。肩部の細片は、第202図-24、25で、共に頸部にかけて内傾し、頸部から口縁部にかけて外傾する様である。外面に、格子叩キが施されている。34は、丸底底部で体部にかけて、外傾しながら上方に伸びる。外面格子叩キ、内面ヘラナデ調整が施されている。

上記の他に形態が不明であるが、外面格子叩キが施されている細片が、9点出土し、第202図-26は、斜格子、第202図-27・32は沈線が残る。第202図-33・35は、やや格子が大きい。

S Q 5001

須恵器、土師器が供伴している。甕が1点、その他細片が11点出土した。復元図示した図119は、復元口径17.3cm、残存器高5.2cm。やや内弯気味に内傾した後、口縁部は内弯気味に外傾しながら上方に伸び、口縁部は内傾した凹面をなし、端部は尖がっている。肩部外面には格子叩キが施しており、更に、口縁部はヨコナデが施されている。

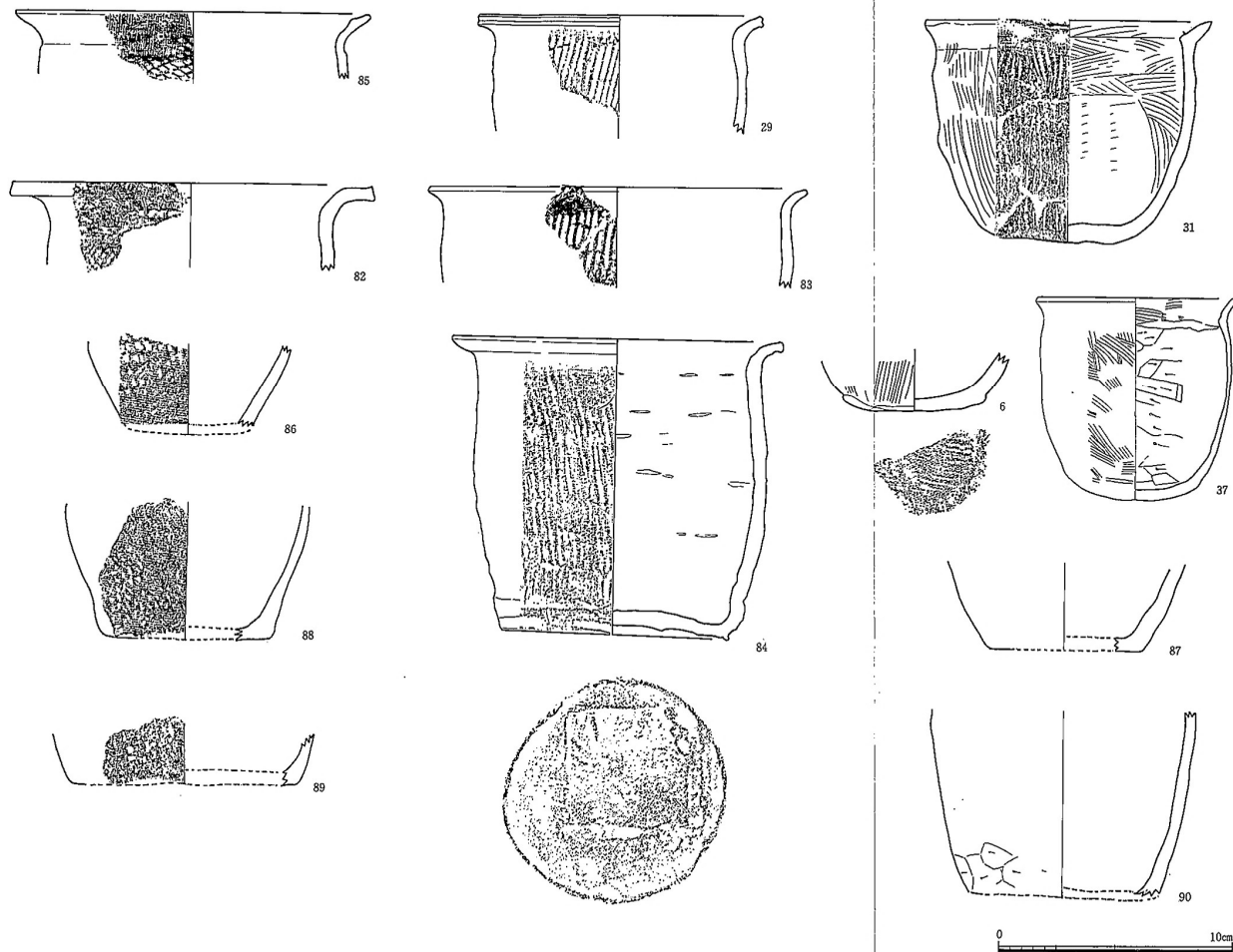
細片のうち、第215図-108は把手近くの細片と考えられる。第215図-114は、縄蓆文が施され、それ以外は格子叩キを施している。

S E 5002

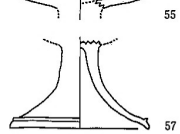
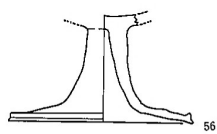
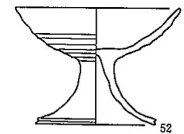
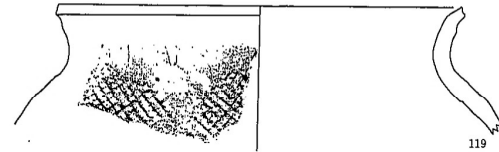
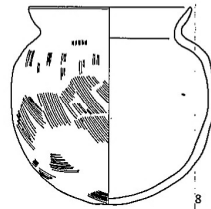
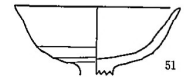
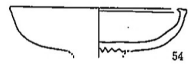
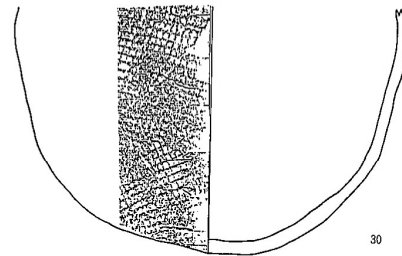
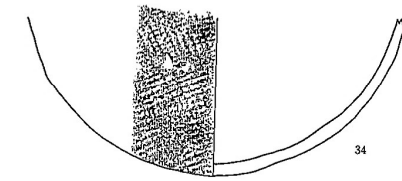
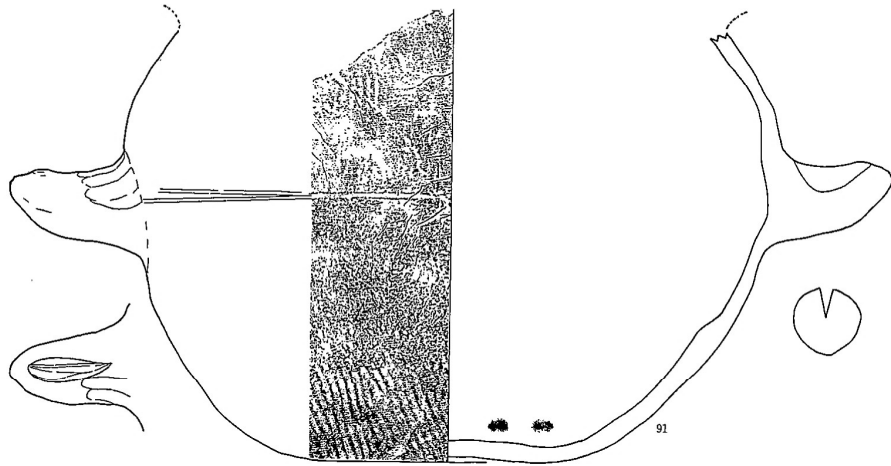
甕が1点、不明細片が1点出土している。第206図-8の甕の細片は、口縁端部が水平な面を持つ口縁部のみである。外面には、斜格子が施され、端部にかけてヨコナデが施されている。図7の細片は、外面に格子叩キが施されている。

S B 5003

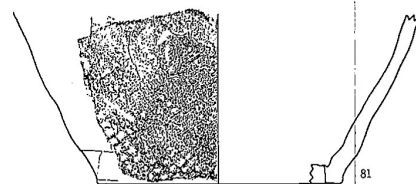
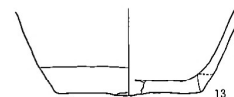
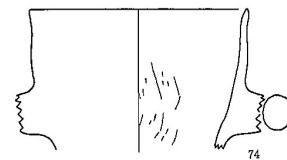
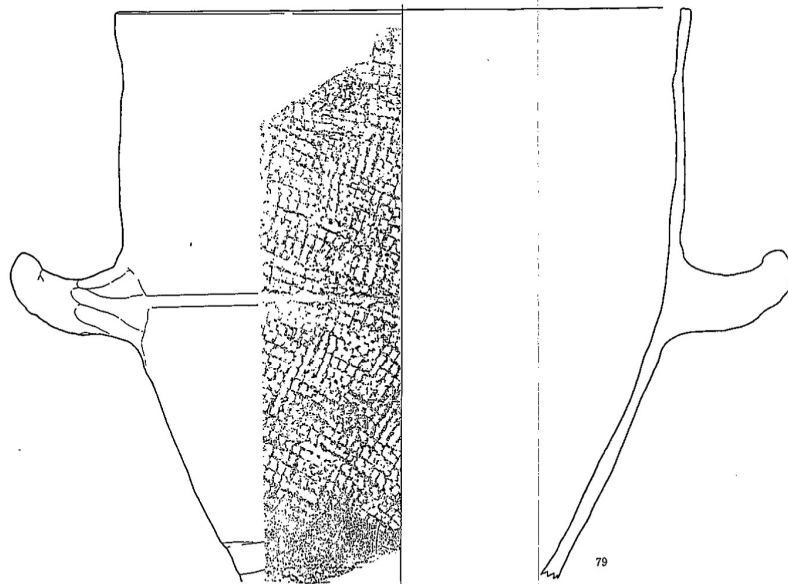
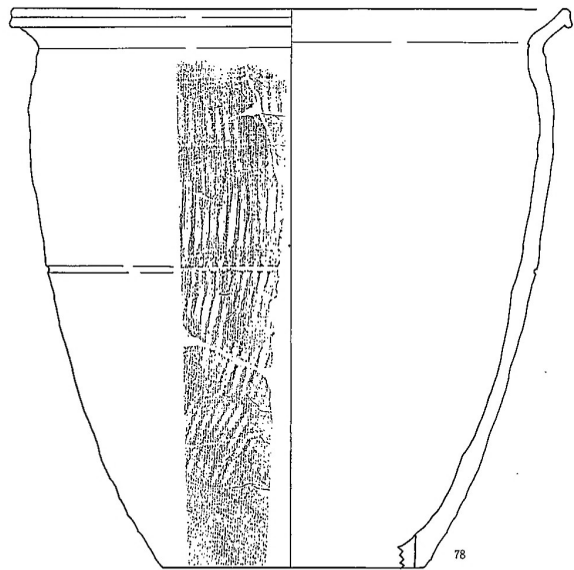
平底鉢形土器の底部と外面斜格子叩キが施された細片が、出土した。図6の平底鉢形土器は、底部から外傾しながら外上方に伸びる。底部と胴部の境の外面には、明瞭な段を成す。底部には、平行叩キが施され、体部外面は、ハケ目が施されている。底部の外面の一部は、ヘラ削り、内面はナデを施されている。



第1圖 久宝寺遺跡出土韓式系土器実測圖(1)



第2図 久宝寺遺跡出土埴式系土器実測図(2)



第3图 久宝寺遺跡出土韓式系土器実測図(3)

以上の5遺構は、遺構面が同一で、他の供伴する須恵器、土師器も同様である。次のNR4003は、前述の遺構面を形成するシルト層を堆積させた自然流路である。

供伴する土器は、土師器のみで、1点だけ縄蓆文を持つ陶質土器片（第163図-28）が出土している。他に須恵器は出土していない。韓式系土器は、平底鉢形土器2点、甑1点、丸底底部1点が出土している。

平底鉢形土器の図29は、復元口径12.4cm、残存器高4.8cm、胴部は内弯気味に上方に伸び、口縁部は短く外弯しながら、やや上方に伸びた後、外弯気味に上方に伸びた後、面を成す。外面は、平行叩キ（口縁部内外面は、ヨコナデ、その他内面は不定方向へのナデ。）を施している。図31は、完形に近く、器高9.6cm、口径12.4cmあり、底部と胴部の境は、やや不明瞭である。底部から胴部は、内弯気味に、やや外傾しながら上方に伸び、口縁部は内弯気味に外傾し、端部は尖がる。口縁部内面と胴部内面の境は鋭い。底部は、ハケ目が方形に施されている。底部と胴部の境は、ヘラ削り、胴部外面ハケ目、口縁部外面ヨコナデ、内面はハケ目、胴部内面もハケ目で部分的にナデ消している。ハケ目は粗い。

甑は、底部近くの細片で、底部から胴部に外傾し上方に伸びる様である。外面は、縦平行叩キ、底部近くは、ヘラ削りが施されている様である。底部は平底で透しは不明である。

上記の褐色系の韓式系土器以外に、黒色（炭素を吸着させ、断面も黒色を呈する。）で表面を丁寧なヘラ磨きによって仕上げている土器が出土している。一応、黒色研磨土器と呼称する。この土器は細片であれば黒色土器との区別は困難であるが、器形からは、陶質土器に類似するもので明らかに黒色土器とは区別することができる。

NR5001

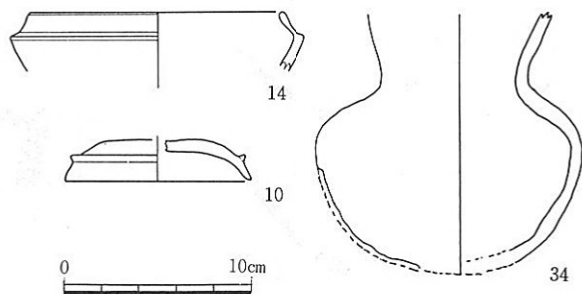
高坏（14） 坏部の破片と考えられる。体部から受け部にかけて外上方にのび、受け部に相当する部分は明瞭ではなく、口縁部は、内傾し端部は丸い。

壺（34） 復元口径9.8cm、復元器高13.7cm、底部から内弯しながら外上方にのびた後、胴部最大径は14.0cmで上位にくる。口頸部は、やや外傾し上方にのびる。口縁端部は不明。

SD5001

坏蓋（10） 復元口径9.8cm、器高2.2cm、天井部は、低く平らに近い。口縁部は外に開き、端部は丸味をもつ。天井部と口縁部の境には、上方に摘み上げた断面三角形の突帯がめぐる。

このような黒色研磨土器は長原遺跡からも出土している。



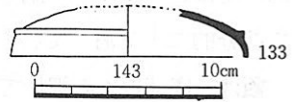
第4図 久宝寺遺跡出土黒色研磨土器実測図

4. 供伴する初期須恵器

NR5001

第228図～231図に図示された須恵器の中で、蓋坏図129～図149は、型的には、I型式の中では幅のあるものである。これらの中、図133は、口縁部が短く内弯気味に、やや外傾し端部は、水平な面を持つ。天井部は低く、恐らく、つまみが付くと考えられ、内外面の調整も丁寧であった。この蓋は、I-1の坏身と、セットになるものと考えられる。陶邑TK85出土に類似するものである。他の蓋坏はI-1のものではなく、図129、図132は、I-4、他はI-3に属すると考えられる。坏身もバラエティーに富み、図138と図139は、最上層出土のもので、II-1に属すると考えられる。他の坏身に関して、図146、図148などは端部がまるく納まる。外面にヘラ削りが施されており、恐らくI-2～3に属すると考えられる。坏蓋身は、特徴的な図133を除けば、特筆するものは出土していない。

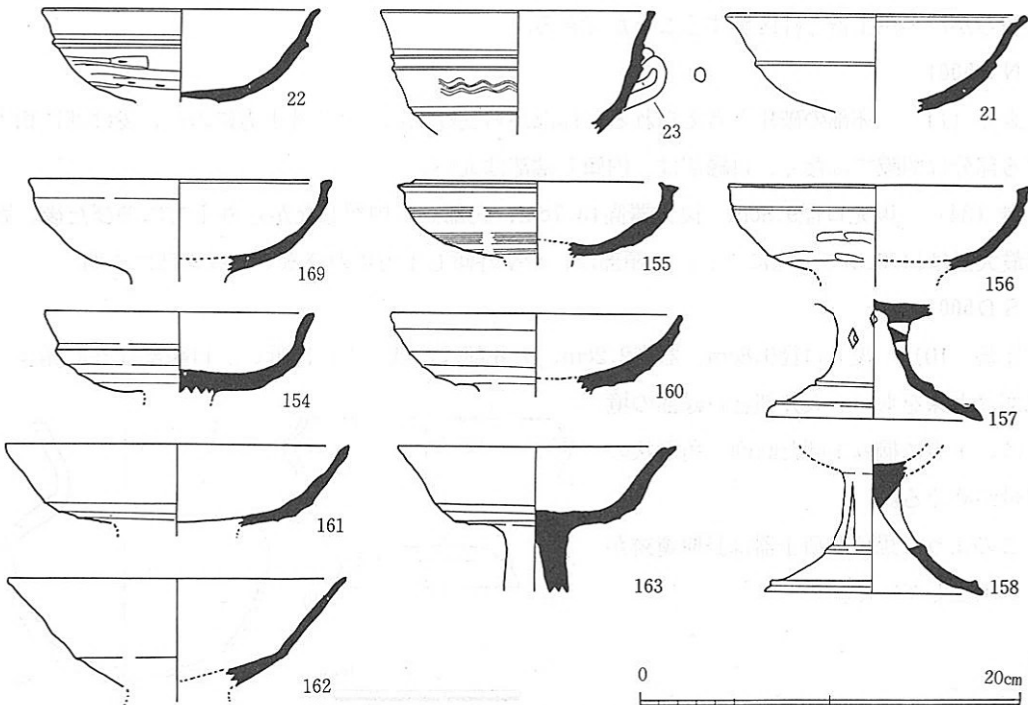
しかし、高坏、器台、甕に於いては、久宝寺遺跡出土の須恵器（一応、陶質土器の可能性を持つものも含めて）の特色を表している。



第5図 NR5001出土初期須恵器実測図(1)

高坏は、有蓋高坏が2タイプ、無蓋高坏が6タイプに分けられる。

その内、有蓋高坏の図160、図161は、従来の坏身に脚部を有する高坏である。図155は、立ち上がりは短く、摘み出す程度に短く内傾し、端部は丸い。受け部は水平に伸びる。体部は、やや内弯気味に外傾した後、受け部近くで立ち上がり、体部外面にカキ目が分けて施されている。脚部は、恐らく、図157や、図158タイプのもの



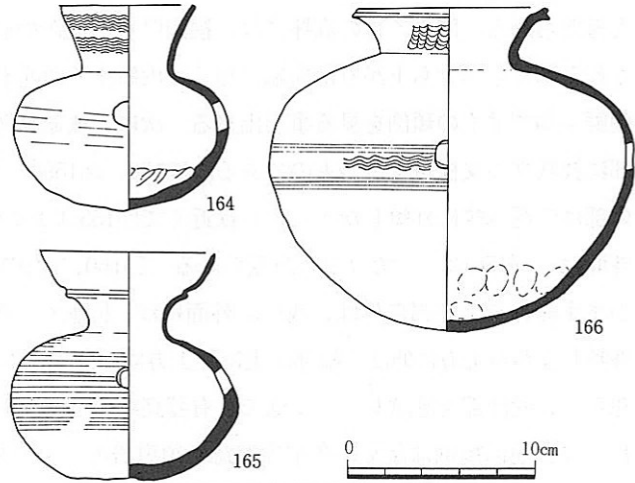
第6図 NR5001出土初期須恵器実測図(2)

と考えられる。同タイプの高坏には、福岡県有田遺跡⁽⁵⁾や池の上墳墓群出土の高坏に類似するが、これらにくらべ立ち上がりは極端に短く、内傾する角度も鋭い。この様な受け部を持つ高坏は、朝鮮半島ではその類例を見る事が出来る。次に、無蓋高坏であるが、図22、23は把手が付き、体部に波状文の文様帯を持つものである。図156、図159は、口縁部が、やや内傾気味の面を持ち、体部は内弯気味に外傾しながら、口縁近くで図155は1条の沈線を、159は凹線状を呈している。外面は、図156にヘラ状のナデが見られる。図160、図161は、やや内弯気味に外傾し、端部はそのまま終わり、坏部自体は、浅い。外面には、回転ヘラ削りを施している。図163は、底部から外傾しながら上方に伸び、端部は更に外上方に伸びている。内面には、沈線が施された面を持つ。想らく、受け部を意識している様で、有蓋高坏の可能性もある。図156、図159～161、図163のこれらは、他に類例はなく、久宝寺遺跡の須恵器の一つの特徴的な器種である。更に、図162は、土師器の高坏を意識した形態で、焼成温度に胎土が不適格で、気泡状に溶解しかけている。この土師器を模した高坏は、最近、岡山県法蓮古墳や、愛媛県福音寺竹ノ下遺跡⁽⁷⁾、香川県宮山窯⁽⁸⁾、大阪府四ツ池遺跡⁽⁹⁾等から出土し、いずれも、現在のところ陶邑内での窯出土例はなく、陶色以外の窯（宮山窯は、四国に於ける陶邑初期I-1～3に対応する。）が想定されており、久宝寺遺跡の高坏も陶邑以外で生産された可能性がある。図157、図158の脚部は、「ハ」の字形に開き、端部は丸くおさまられている。脚部上部に菱形の透しが、4ヶ所、上下交互に配されている。又、脚の裾部の上位と端部に凸線が巡る。図158は、同じく脚部で、大きく「ハ」の字形に開き、縦長三角形の透しが、3ヶ所配されている。透しの下線に、削り出しの凸帯が巡り、端部にも凸帯が巡る。尚、端部は、丸い。図157、図158の脚部⁽¹⁰⁾の形態は、陶邑I-1、TK73やTK85から出土する高坏脚部に類似するが、透しの種類からは、図157の菱形2段に、交互に配する類例はなく、韓国大邱出土の小型脚部有蓋壺⁽¹¹⁾の脚部、朝島貝塚上層出土の高坏に見られるだけである。楠見遺跡⁽¹²⁾では、多孔のものが出土している。図158については、野中古墳出土の脚部、兵庫県砂部遺跡⁽¹³⁾の脚部等に類似する。又縦長の三角形透しについては、対馬恵比須山遺跡⁽¹⁴⁾や、福岡県古寺墳墓群出土の高坏に散見出来る。

次に甕を見てみると、第7図の164、165、166、第229図171、172は、各々特徴を持つ形態であるが、図165については、I-3に属する。櫛目文を多用した甕である。図164は、直口の口縁部を持ち、端部は丸くおさまり、体部最大径は、中央に求められ、更に、体部2/3上位に円孔が穿たれている。円孔の下部にカキ目が巡る。口縁部には、2条の波状文の文様帯が付く。この直口の口縁部を持つ甕は、和歌山県野日地区遺跡で出土している陶質土器と考えられている甕があるが、この甕とは体部の形態上類似しない。図165は、図164と相違し、口縁部に文様帯を持たない。口縁部は、やや外弯気味に上方に伸びながら外傾し、屈曲した後、更に外傾し端部は丸い。底部は、やや平底に近く、体部最大径は、中位で求められ、体部2/3上位に、円孔が穿たれている。体部外面には、カキ目が施されている。図166は、大型の甕である。口縁部は、外傾した後、短く水平に伸び、端部は内傾しながら1条の沈線が巡る面を持つ。体部の最大径は、中位に求められ、

肩部は、やや直線的である。中位よりやや上に円孔が穿たれ、波状文による文様帯が巡る。図182は、体部のみであるが、肩部が水平気味に頸部へ至る。円孔の下縁に、波状文による文様帯が巡る。いずれの甌も類例が少なく、又体部最大径に比較して、口径が狭く、I-1か2に属するものと考えられる。

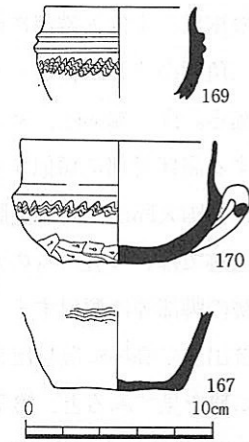
把手付碗は、図169、170、167。



第7図 NR5001出土初期須恵器実測図(3)

図169、図170は、把手が付く。図

169は、体部のみで、口縁部はほぼ直立し、端部はそのままおさまる。おそらく、平底の底部を持つ体部上位に、波状文の文様帯が巡る。図171は、底部から内弯気味に外傾した後、2条の突帯が巡り、口縁部は外弯気味に直立し、端部は鋭い。隆線下縁に、波状文の文様帯が巡る。図170は底部から内弯気味に外傾した後、口縁部は、ほぼ直立に立ち上がり、端部は丸い。体部は上位に、波状文の文様帯が巡る。把手は断面が丸く、底部から体部につく。底部外面は、静止ヘラ削りが施されている。図167は、形状を一定出来ないが、図170と同様な平底の把手が付く碗と考えられる。残存体部上位に、稚拙な波状文が巡る。図171は、I-3、図170は、I-4、図167、図169は、形態不明だがI-1~3の間と考えられる。



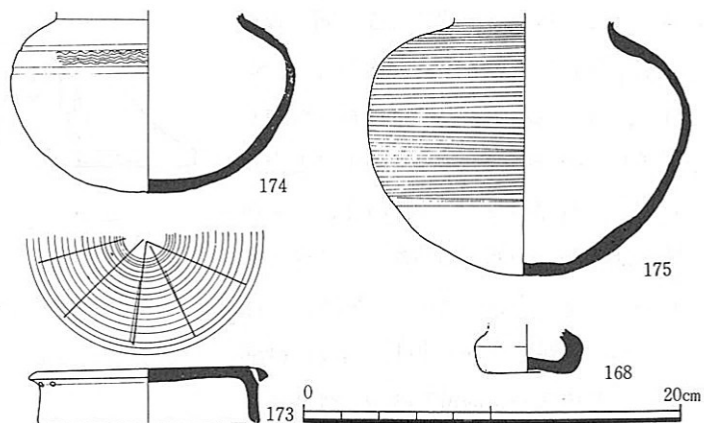
第8図 NR5001出土初期須恵器実測図(4)

図174は壺である。体部最大径を2/3上位に持ち、最大径の上縁に、2条の沈線で挟まれた波状文の文様帯を持つ。口縁部は不明であるが、短い頸部を持つと考えられる。図175は、やや肩の張るもので、体部から口縁基部にカキ目が施されている。図173は、壺の蓋と考えられるもので、天井部が平らで、口縁部はまっすぐに下がり、端部は内傾気味に丸味を持った面となる。天井部と口縁部の境に、2孔一對の細孔が1ヵ所穿たれている。いずれも、I-2、3の時期と考えられ、図173の蓋の類例は無い様である。

小型平底壺、第229図-168は、平底で体部が短く、やや外上方にのびた後、内傾し肩部を成す。口頸部は、長大となろう。畿内では、堺市四ツ池遺跡、四条畷市中野遺跡⁽¹⁷⁾、藤井寺市土師ノ里遺跡⁽¹⁸⁾、長崎県忠比須山遺跡⁽¹⁹⁾から出土している。この型式の土器は、想らく、朝鮮半島から出土する小型丸底壺が形骸化し、平底化した最終末期の形態と考えられている。形式的には、I-1~2に供伴するものであろう。

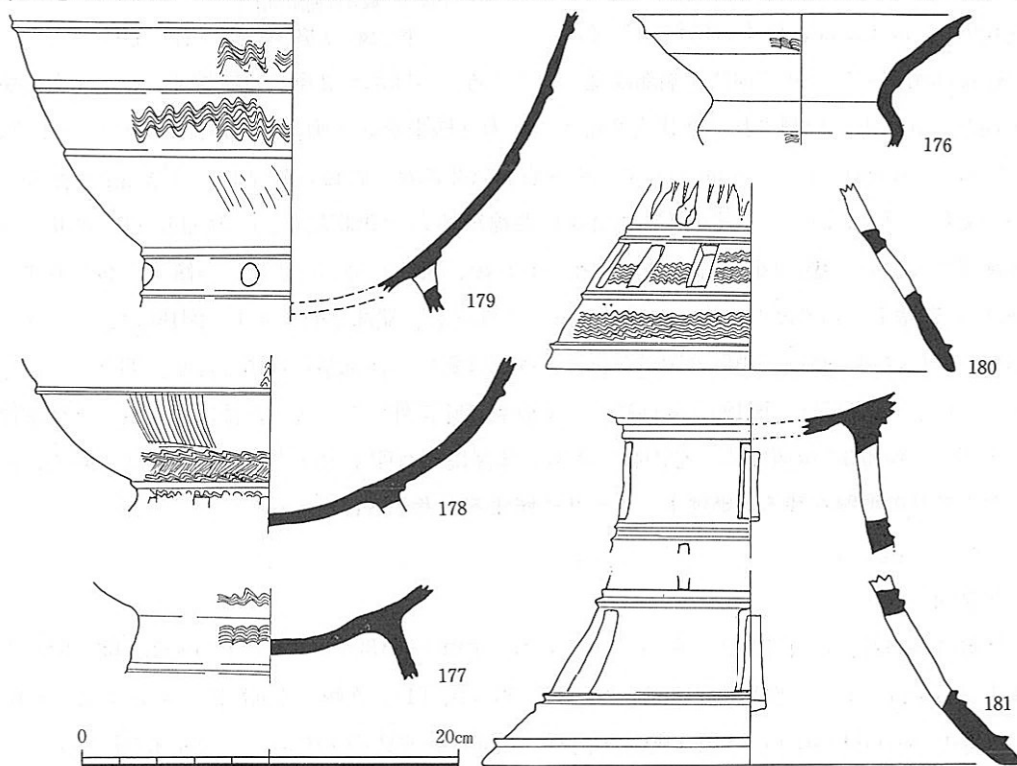
器台、すべて高坏形器台と考えられる。

図177～179は、脚部基部から坏部底部にかけての破片である。図177は、脚部と坏部底部外面に波状文が見られる。図178は、脚部は長方形透しと考えられ、波状文が施されている。坏部外面の文様体は複雑で、底部残存部に1条の凸線が巡り、上縁に波状文が見られる。又、下縁には、楕



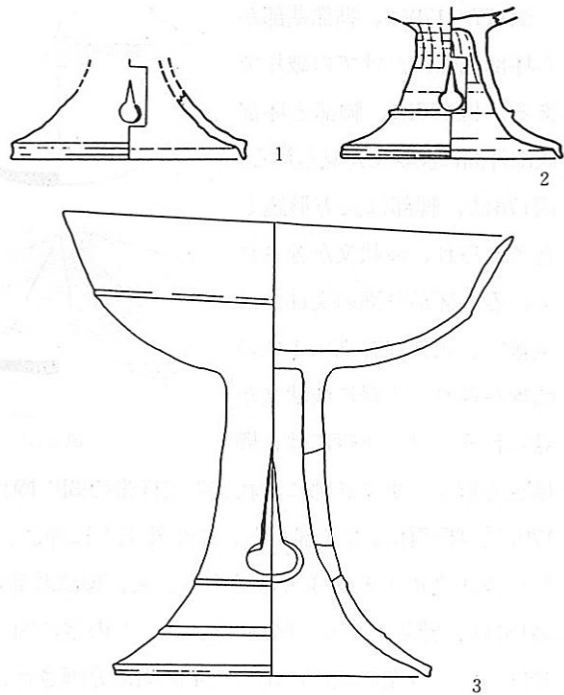
第9図 NR5001出土初期須恵器実測図(5)

描き方形文、更に底部に波状文の文様帯の間に楕目文が入り、一つの文様帯を形成している。図179は、坏部体部は底部から、やや外上方に伸び、残存部では3条の沈線によって、二つに画された波状文による文様帯を呈する。又、脚部基部近くに、円孔の透しが穿たれている。図180、図181は、脚部である。図180は、「ハ」の字に開いた脚部で脚部は丸くおさめられている。残存脚部には、3条の沈線によって4区画に分画され、最下段はナデ、2段目には波状文、3段目には、長方形の透しと共に波状文が2帯、4段目は、火炎形透しが、上下交互に配され、さらに、上部の透しの間は、楕による縦方向の刺突文が施されている。図181は、基部から真すぐに下がっ



第10図 NR5001出土初期須恵器実測図(6)

た後、中位からラップ状に大きく開く脚部で、端部は、やや鋭く平らな面を持つ。透しは、凸線に区画された3段の長方形透しが配され、中央の区画の透しが上下と交互になる。文様帯はない。図176は、形態が不明であるが、一応、筒形器台の坏部と考えたい。坏部は大きく外上方に開き、口縁部は外弯し、端部は細く丸味を持つ口縁部下縁に、波状文の文様帯を持つ。脚部は、基部から一度膨らむ様で、中位下縁に波状文の文様帯を持つ。いずれも、I-1~2と考えられる。特に、図180の火炎形透しは、国内では、奈良県布留遺跡⁽²¹⁾の高坏に見られるだけで、他は、半島南部の威安地域又は、伝威安出土の高坏などに見られる透しである。戦前、威安34号出土の一括遺物⁽²²⁾の中に見られ注目を引く。大型の広口壺、



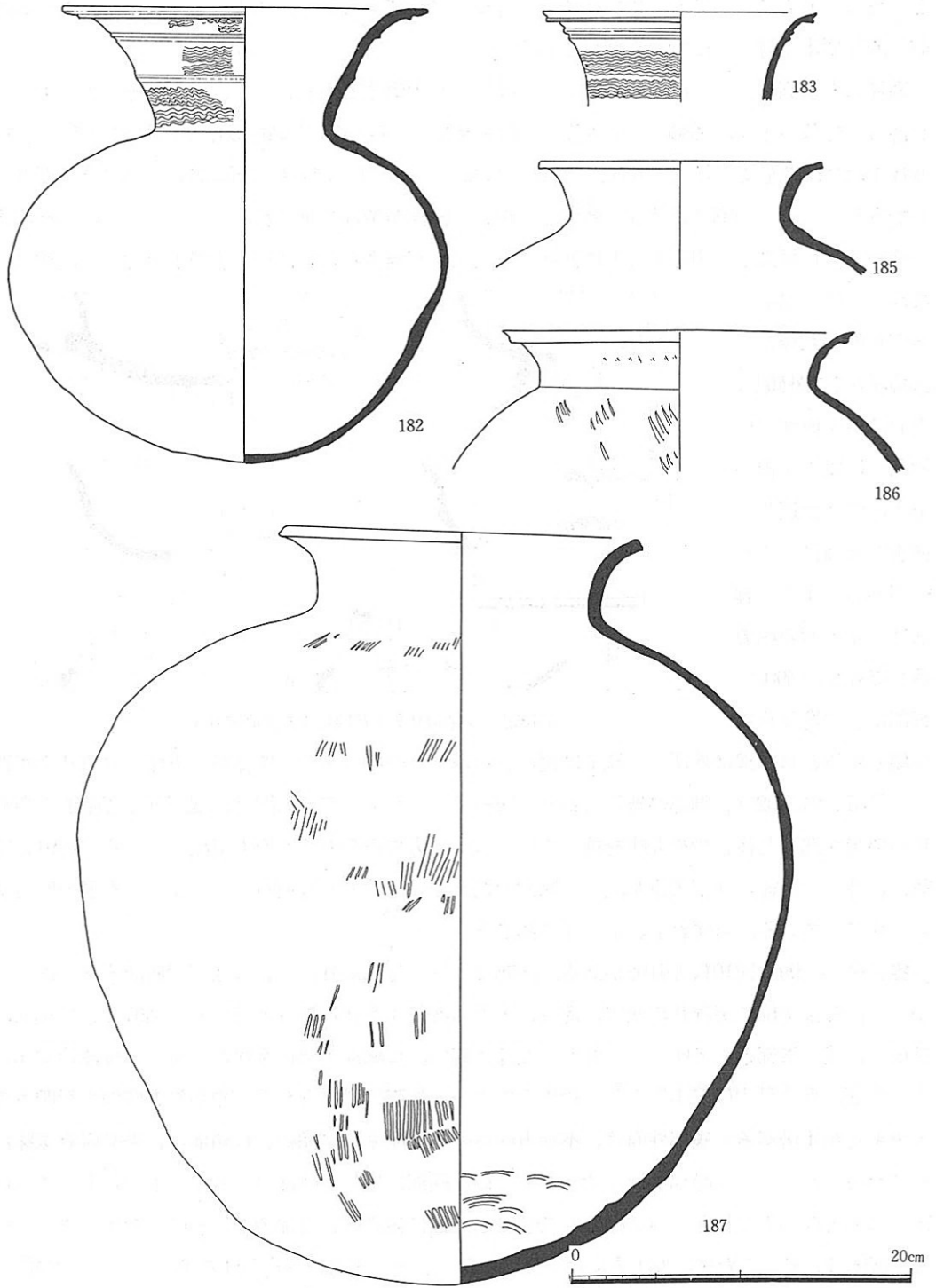
1.2…奈良県布留遺跡
3…韓国伝威安群伽倻面出土

第11図 火炎形の透しを持つ高坏

図182は、口頸部は、外上方に伸びた後、口縁部は水平に短く外に伸び、端部は丸くおさまる。口頸部に2条、口縁端部近くに1条の突線が巡り、3区画に分割され、波状文2帯で一つの文様帯を3区画持つ。体部最大径は、上位2/3に位置する。図183は、口頸部のみで、やや直立気味になった後、外反し、口縁端部に断面三角形の突帯が付き、さらに、その下にも2条の突線が付く。頸部基部と突線の間には、波状文が2帯施されている。甕の図186は、頸部が外反した後、屈曲し端部は更に、内傾する面を成す。図185は、頸基部から外傾した後、口縁端部近くで外反し、端部は面を成す。図186は、外反する口頸部で、口縁部に断面三角形の突帯が付き、端部は鋭い。体部から口頸部は平行叩キの後、すり消している。図187は、図185と同様に、やや直立気味に外反した後、端部は面を成す。体部は、最大径が上位2/3に位置する大型の甕である。体部は平行叩キの後すり消した底部内面に、同心円の当て具の痕跡が残る。甕はI-1~2に属すると考えられる。

S Q 5001

坏身は、口縁部が丸く仕上げられているもの（第212・213図-46・47・55・62・63・64）と内傾する面を持つもの（第212・213図-49、52、58、59、61）、内傾する面に凹面をもつもの（第212・213図-48・50・51・54・57・60）があり、底面は、平底のものと、やや丸味を持つものがある。坏蓋は、天井部が高く、口縁部が器高の1/2以上を占め、口縁部が面を持つか、やや内傾

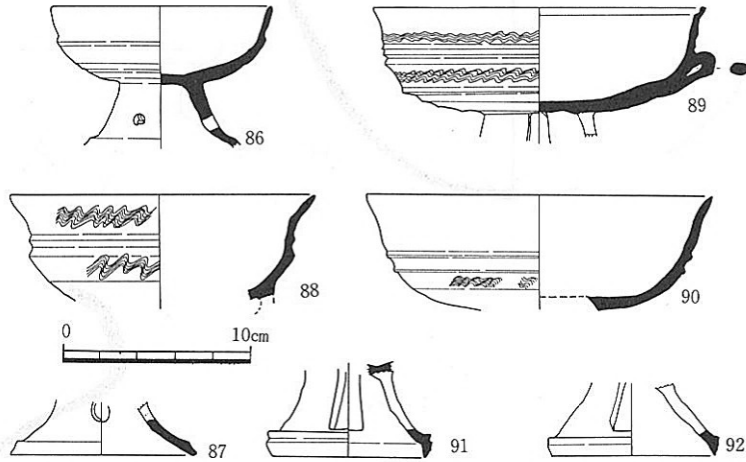


第12図 NR5001出土初期須恵器実測図(7)

するものがある。天井部外面が静止ヘラ削りで口縁部は丸く仕上げられているもの（65・66）と、更に、前者においても、78の様にカキ目が施されているものがある。I-2から、I-3の前半的な要素を持つもので占められている。

高坏（有蓋高坏）は、坏身と同様に、口縁端部が内傾する面を持つか、やや凹線が入るものがある。無蓋高坏は、図86の様な坏蓋を逆転させた形状のもの、図88、89、90の様に把手が付き、波状文の文様帯を持つものがある。図86は口縁部が丸く仕上げられ、脚部には円孔の透しが3ヶ所配されている。図88は、体部が外反した後、口縁部が突線で画され、外反し、端部は、そのまま終わる。口縁部と、突線下縁とに波状文の文様帯が施され、底部近くに把手が付く。図89は、

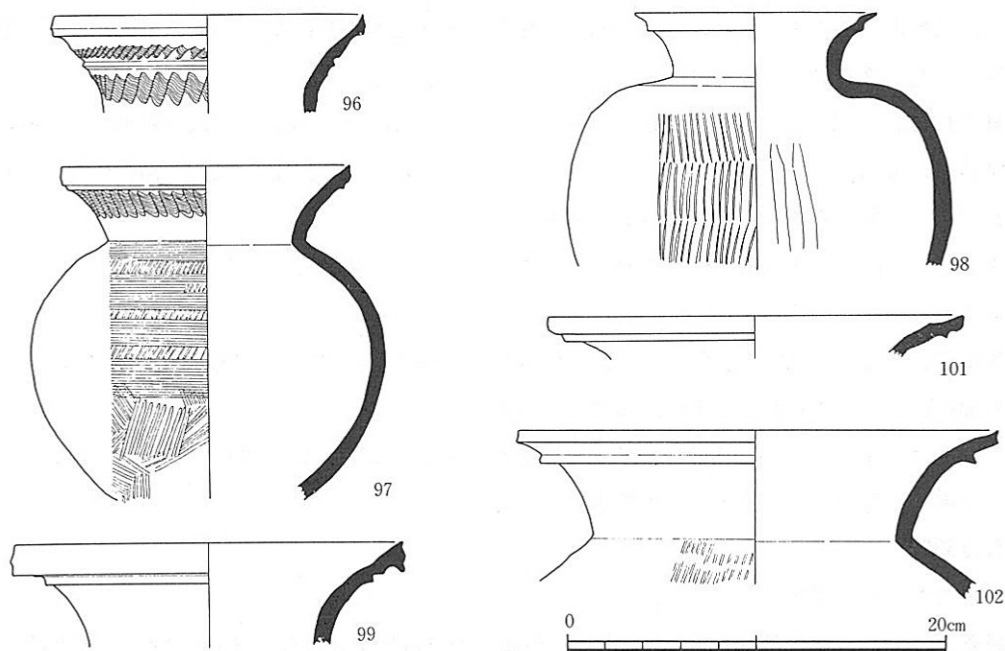
底部から直立気味に体部が伸びた後、口縁端部近くで外傾し、内面は段を成す。口縁部との境の突線の上下に波状が巡る。把手の断面は、やや楕円形を呈する。脚部は、長方形の四方透しである。図90は、底部から内弯気味に



第13図 S Q5001出土初期須恵器実測図（1）

外傾した後、口縁部は外弯し、端部は鋭い。口縁部との境に2条の突線が、下縁には波状文が巡る。図87、91、92は、脚部の破片である。図87は、「ハ」の字形に開き、端部近くで断面三角形の突線が巡った後、やや丸味を持って終わる。四方の円孔の透しをも支配している。図91、図92は、外反した後、端部で段を成す。図92の端部の段は、あまり明瞭でないが、長方形の四方透しが配されている。いずれも、I-3に属する。

甕、図96～99、図101、図102がある。図96は、外弯気味に外反し、口縁部で屈曲する。端部は鋭い。口縁部中位に突線状に沈線が巡り、上下に波状文が2帯施されている。図97は、口頸部は外反した後、端部近くでゆるく屈曲し、端部は鋭い。口縁部下部に突線が巡り、下縁波状文が巡る。体部は丸く最大径が中位より、やや上にくる。外面は縦方向から、やや斜方向の平行叩キの上カキ目が4帯巡る。底部外面は、不定方向への平行叩キ。図98は、口頸部が、やや直立気味に伸びた後、外反し、口縁部端近くで屈曲した後、端部は鋭い。体部は、肩部が張ったもので、体部が縦方向への平行叩キが文様として意識した様に施され、肩部では、その上をナデ消している。図99は、外反した後、外下方に短く伸びながら、無い上方に内弯気味に伸びる。口頸部端は、突線が2条施されている。図101は、外反した後、口縁端部は面なし、下縁に突線が巡る。図102は、同様に外反した後、端部は凹面を成す。その下縁に、三角形の鋭い突線が巡る。体部外面は、



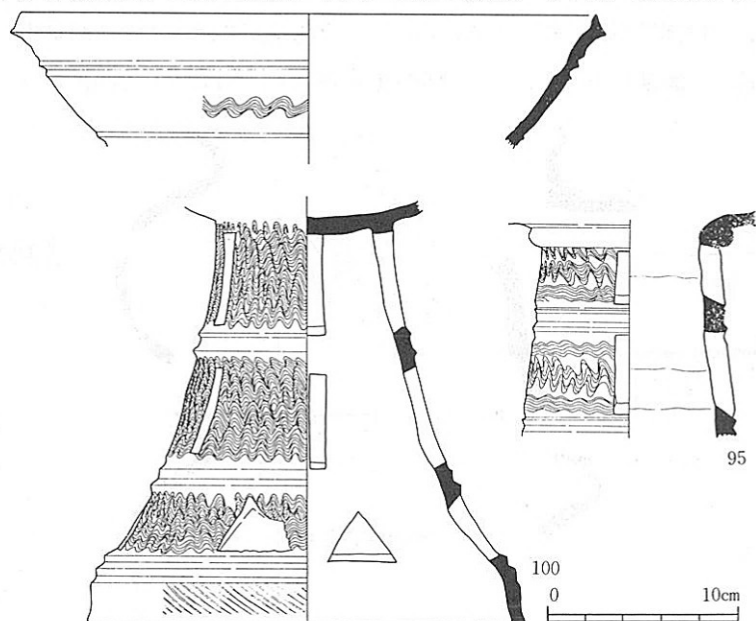
第14図 S Q 5001出土初期須恵器実測図(2)

平行叩キの上にナデ消す。この甕の中で、図98はI-1に近く、図101、図102は、I-2、他はI-3に属する様である。

器台、図95は、筒形器台の脚部である。脚部基部に半円の帯が巡る。透しは、長方形で四方に2段確認出来、各々に波状文が3帯施されている。図100の坏部は、外反した後口縁部が内傾する面を持ち、端部は鋭い。体部上位に2条の沈線、中位に1条の沈線、その間に波状文が巡る。

脚部は外反した後、口縁端部近くで真すぐ下がり、端部は水平な面となる。透しは3段で、上位1段は長方形で透しながら、下段は三角形の透しで、1つは意識的に打ち欠いている。脚部端部は、目文が施されている。I-3に属する。

図93は、把手付き椀で底部は静止ヘラ



第15図 S Q 5001出土初期須恵器実測図(3)

削り、口縁部はそのまま終わる。図94は、把手付き鉢で外反した後、口縁部は水平に短くのびた後、内弯し面を成す。体部は、カキ目が施されている。

甕の105は、小型のもので、図107は、大型甕の破片であった。図107には、駆使による刺突文の文様帯が体部最大径の位置を下縁にして巡っている。更に、これより底部にかけてカキ目が施されている。型式的には、I-2~3に属する。

壺、104と106は、体部最大径が中位よりやや上位になり、波状文による文様が巡る。更に、口縁部にも波状文が巡る。

直口壺、103は、体部最大径が2/3上位に位置し、口縁部は真すぐにのび、端部はやや鋭い。底部外面には、平行叩キが不定方向に施されている。

この他は、図120~123の格子叩キの破片が検出され、図121には、沈線が巡る。いずれも内面は、丁寧な不定方向へのナデ消しが施されている。

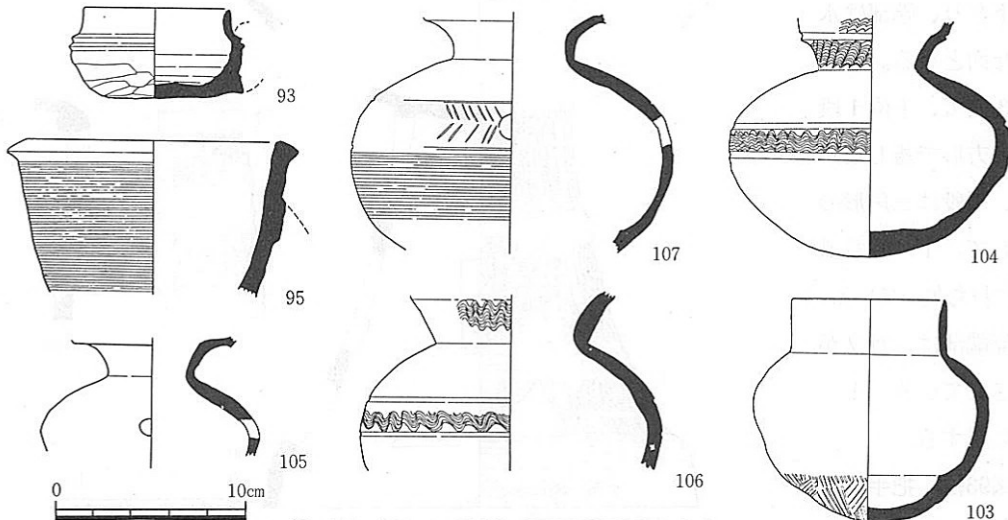
S D 5001

図示できた須恵器は、少なかった。

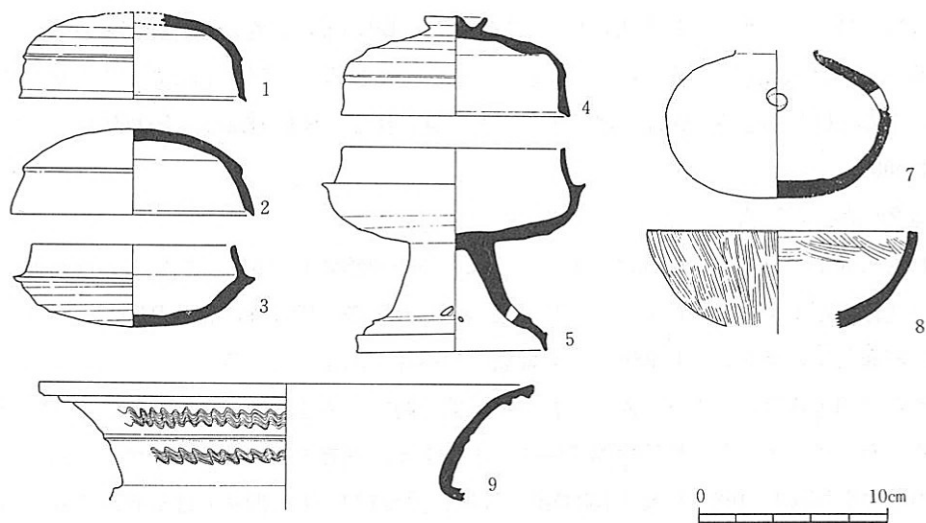
坏蓋1は、口縁部が器高1/2以上を占め、外傾した端部内面に内傾する面を持つ。天井部外面に、回転ヘラ削りが施されている。図2は、口縁部が「ハ」の字形に開き、端部は内傾する面を持ち、全体に曲線を描く。I-3

坏身3の底部は、やや平底に近く受け部は水平に伸び、立ち上がりは内傾し、端部は丸い。体部外面には回転ヘラ削りが施されている。I-2

有蓋高坏蓋、図4は、つまみを有する。口縁部は、やや外反し、端部は内傾する面を有する。天井部は、その90%に回転ヘラ削りが施されている。高坏5、坏部は底部から内弯気味に立ち上がり、受け部は短く、やや上方にのびる。立ち上がりは、やや外弯気味に内傾し、端部は水平な面を持つ。脚部は外反した後、段を成し内弯する。端部近くで凹線が巡り、端部は丸味を持つ。



第16図 S Q 5001出土初期須恵器実測図(4)



第17図 S D5001出土初期須恵器実測図

脚部には、小さな円孔の透しが四方に穿たれている。図8は、無蓋高坏である。体部は内弯気味に外傾し、端部は面を持つ。体部内外面には、ハケ目が施されている。

甕7は、平底の底部から外反し、体部最大径が2/3上位になり、口頸部は細い。全体にナデ調整。

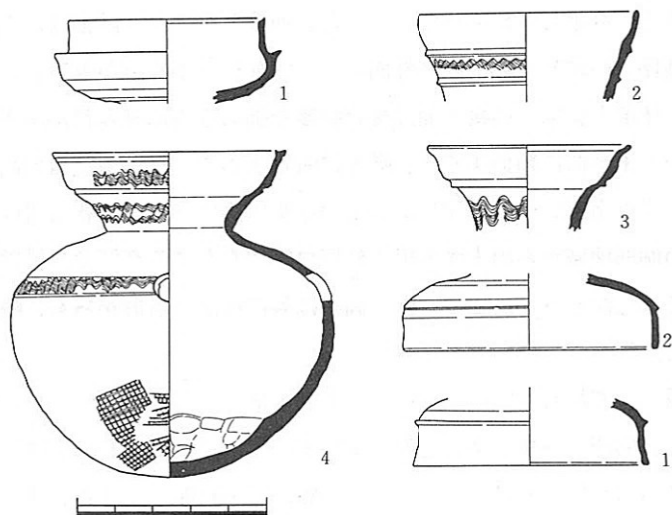
甕9は、外反しながら外上方に伸び、口頸部中位に凸線が、口縁部近くと口縁部直下に断面三角形の凸線が巡る。更に、中位の凹線の上下に波状文による文様帯が巡る。

S E 5002

甕が、口縁部を入れて3点、坏身が1点出土している。

坏身1は、受け部はやや外に短く伸び、立ち上がりは直立気味に伸び、口縁端部は、内傾する面を持つ。

甕、図2と図3は、口縁部のみである。図2は、頸部から外上方に伸び端部近くでやや内弯し、端部は丸い。口頸部上位に2条の凸線によって画された波状文の文様帯が巡る。図3は、口頸部から外反した後、屈曲し、1条の沈線が巡る。口縁部は短く外弯しながら、端部は丸く終わる。口頸部に波状文が巡る。図4は、完形品で、口頸部は外反



第18図 S E 5002・5003出土初期須恵器実測図

し、口縁部はやや内傾して外上方に伸び、端部は、凹線が入る面を成す。頸部と口縁部の境に沈線が巡る。体部最大径は2/3上位に位置し、肩部がやや張る。肩部の下縁に2条の沈線で画された波状文の文様帯が巡る。底部には、格子叩キが見られる。S E 5002は、全体的にI-3である。

S E 5003

坏蓋2点が図示出来た。

いずれも天井部平らで、口縁部は水平もしくは、やや内傾する面をもっている。その他、格子叩キの上沈線が巡るもの、平行叩キの破片がある。これらの遺構以外に、S B 5003のピットから沈線が巡る縄蓆文の破片、N R 4003からも縄蓆文の破片が出土している。

これらの須恵器は、そのほとんどが初期須恵器の範中に入るものであり、韓式系土器を供伴している。そして出土した初期須恵器の中には半島南部の陶質土器と関係を示すものがある。N R 5001出土の高坏167、168と礼安里130号出土高坏、器台180の火炎形透しは慶尚南道威安34号⁽²³⁾出土品、威安出土と伝えられている高坏、礼安里130号⁽²³⁾出土の有台壺などの透しに類例がみられ、久宝寺出土の高坏167、168、器台180の源流を半島南部洛東江西岸地域に求められるようである。

その他に、高坏162に見られるように、土師器の高坏を模した須恵器が出土している。このような須恵器は陶邑古窯跡の初期須恵器窯の出土例には類例がなく、今後問題が残る。

5. 韓式系土器について

前述のような出土状況で出土している平底鉢形土器・高坏・甑・把手付き鍋・甕について、以下各器種ごとに要約する。

平底鉢形土器は、完形に近いもの3点、口縁部3点、底部5点が出土している。外面の調整を見れば、格子叩キ5点、平行叩キ2点、刷毛目3点、ナデ1点。口縁部の処理では、そのまま終わるもの3点、面を成すもの3点。外面刷毛目のものと叩キのものとは、底部と体部の境が相違する。刷毛目が施されている方が、明瞭差を欠く。詳細は、別項に譲る。

高坏、いずれも坏部底部外面には、回転ヘラ削り痕がみられ、ロクロの利用が明白である。また、坏部と脚部との接合面は接合強度を強める為に刻み目が施されている。器形的には、坏部が従来の土師器に類似するが、脚部は陶質土器や、初期須恵器の高坏に類似する。このような高坏は、半島南部金海府院洞貝塚⁽²⁴⁾出土の赤褐色高坏形土器（報告書図面60-1、60-2）あるいは、他の伽耶地域から出土する短く外反口縁部を有する高坏の口縁部が退化した形態にもとめられるのではなかろうか。この一群の高坏は製作技法、器形からも、韓式系土器としての位置付けは必要であろう。

甑、いずれも平底の底部を成すものである。透しについては不明なものが多いが、13は中心に円孔、周囲に三角形透しを配している。この三角形透しは、やや、いびつであるが四条畷市中野遺跡からも出土している。外面の調整は、平行叩キが2点、格子叩キが3点、ナデが1点、刷毛目が4点である。この内、叩キを有する甑には、他の遺跡出土例も含めて、ほとんどが把手の着

く位置に浅い沈線、あるいは、凹線が1条ないし、2条巡るのが特徴である。把手は、図78の様な角状のもので、先端部がヘラ切りされたものや、中央を切り込まれたものと、帯状のものなどが存在する。そして帯状の把手は他の出土例からも刷毛目が施されている。この帯状の把手は、この以後奈良時代まで続くことから、この帯状の把手が出現することによって韓式系土器の甑から土師器の一器種へと確立される指標となるようである。

鍋、1点のみ出土であった。この叩キ目を有する鍋の出土例は少なく、三日市遺跡⁽²⁵⁾、長原13号墳⁽²⁶⁾、布留遺跡⁽²⁷⁾、鳴神遺跡⁽²⁸⁾、音浦遺跡⁽²⁹⁾に見られるだけである。この鍋も甑と同様に、把手取り付け付近に沈線が巡る。そして、把手の形状が角状から帯状に変化することが、土師器器種として確立された明しではなからうか。甑、鍋の把手は、須恵器からI-3~4の時期に角状から帯状に変化してゆくと考えられる。

丸底甕、甕には、外面平行叩キ目で球形の体部をもつものと大型品とが見られる。格子叩キ目については、(119)の口縁部や、(96、100)の肩部、(34、106、109)の底部があげられる。完形は、(8)のみであった。これと類似するものに、口縁部の細部が相違するが船橋遺跡H-2出土の甕がある。格子叩キを持つ(96)にみられるように、口頸部と肩部との境に段を成すものがある。これは、口頸部の叩キ目を丁寧に強くナデ消した結果であろう。これに類似するのが城山4号墳⁽³¹⁾から出土している。

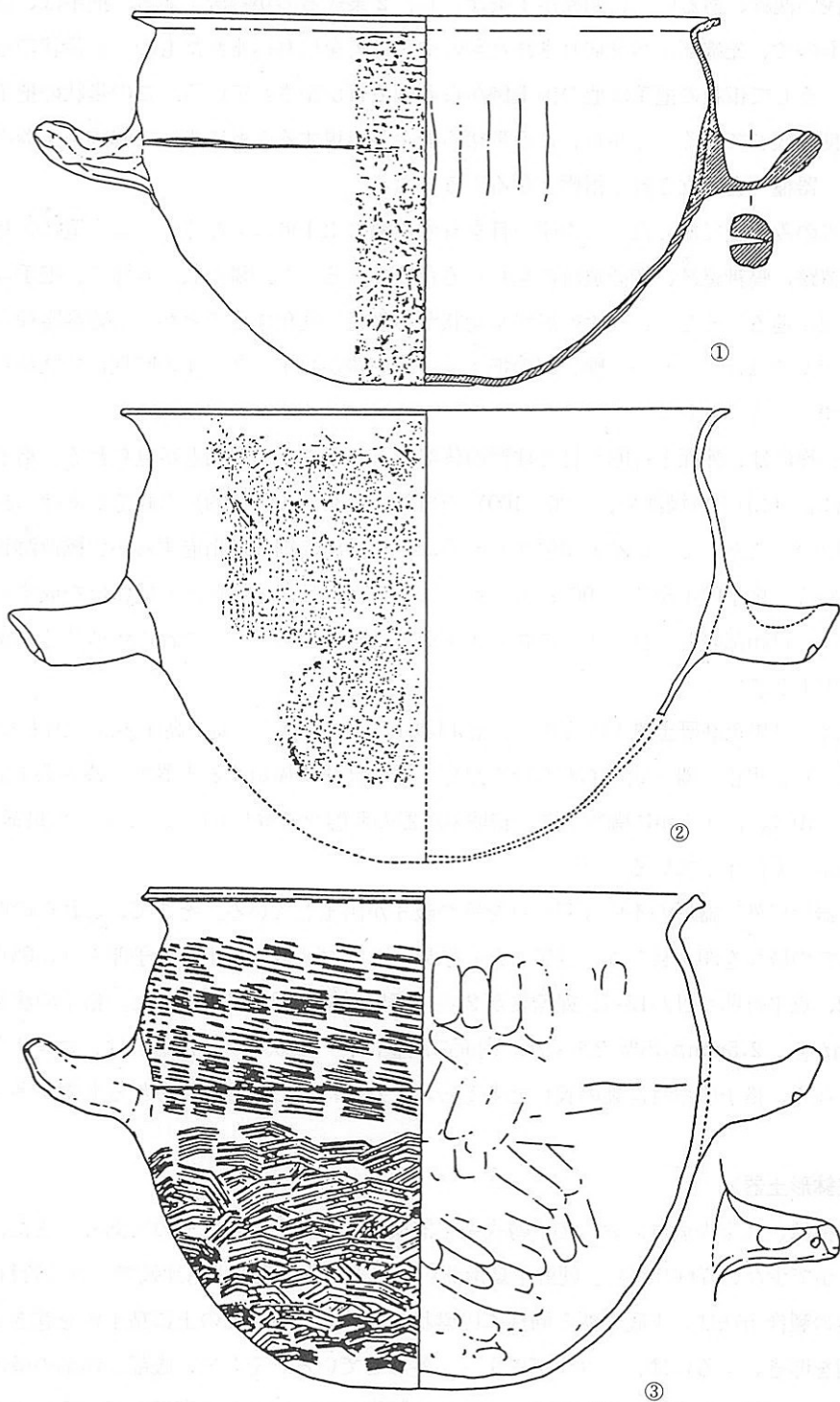
上記以外では黒色磨研土器と仮称する、第4図34のような壺、坏蓋、高坏坏部が出土している。これらは一見、黒色土器と見まちがうほど黒色土器の技法に極似する土器で、韓式系土器と供伴している。10は、あきらかに陶質土器、初期須恵器の形態を模倣している。この黒色磨研土器は、長原遺跡からも出土している。

以上の器形以外に器形の不明な叩キ目を持つ破片が出土している。そこで、これらの叩キ目を有する全ての破片を叩キ目ごとに分類した。結果、サンプル数78点中、格子叩キ目が63点、内斜格子が12、点平行叩キ目が13点、縄蓆文が2点で85%が格子叩キ目であった。格子の法量は、内法1.5mmから、2.5mmが75%であった。内面の調整は、ヘラ状ナデ、あるいは、ヨコナデであった。おそらく、格子叩キ目は甕の破片と考えられ、外面に煤の付着が見られるものが多かった。

〈平底鉢形土器〉

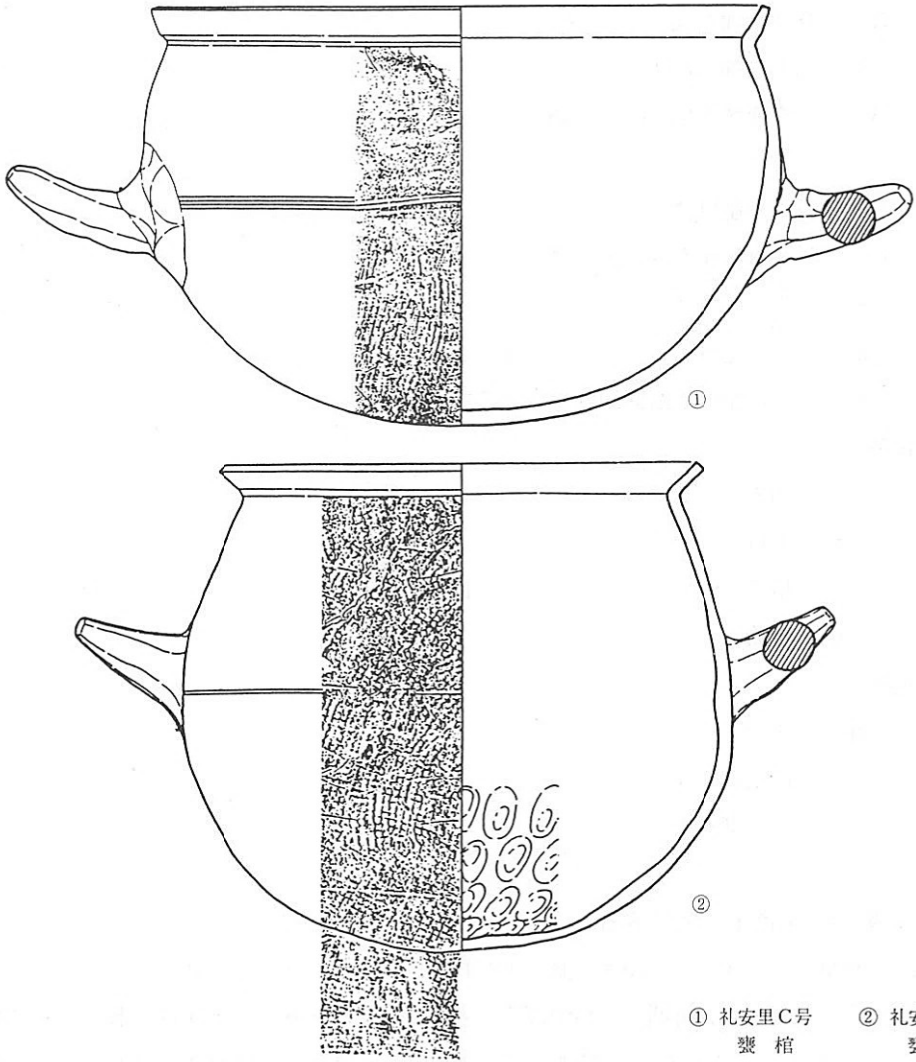
この器種は、久宝寺遺跡において、韓式系土器検出の端緒となったものである。また、韓式系土器のなかで少ない資料ながら、朝鮮半島南部から出土する平底鉢とも比較できうる資料である。この土器の製作方法は、平底の甑と同様に円盤状の底部を作り、その上に粘土紐を巻き上げてゆき、外面を叩き、あるいは、ヨコナデによって整形している。そして、底部と体部の境の接合部の部分を、ヘラ削りによって調整している。この製作には、ロクロを利用しているものもある。

(いわゆる、ゲタの跡を残すものがある。)しかし、久宝寺遺跡出土のゲタの圧痕の位置が、中心からずれていることは回転速度が遅く、回転台程度の利用に止まるものと考えられる。



- ① 布留遺跡
 ② 長原遺跡13号墳 ③ 鳴神遺跡J地区SK 271

第19圖 各地域出土韓式系土器実測圖(1)



① 礼安里C号 甕 棺 ② 礼安里L号 甕 棺

第20図 各地域出土韓式系土器実測図(2) - 把手付鍋 -

1. 国内出土の資料

まず、国内、半島南部の平底鉢を比較するにあたり、口縁部の形状、体部外面、内面の調整を以下のとおり分類してみた。

- 口縁部 A 端部がそのまま終わるもので細かく3分類できる。
- A1 丸味をもちながら終わる。
 - A2 内面を強くなで、丸味をもちながら終わる。
 - A3 鋭く終わる。
- B 端部が面を成すもの

- B₁ 端部が面を成す。
- B₂ 内面を強くなでる。
- B₃ 面を成す端部に凹線がめぐる。

- C 端部が肥厚するもの
- C₁ やや丸味をもって肥厚する。
- C₂ 下方に肥厚する。
- C₃ 上方に肥厚する。
- C₄ 上下に肥厚し断面M状を呈する。

外面の調整

- | | |
|-------------------|--------|
| I 叩き目を有する。 | II 刷毛目 |
| I ₁ 平行 | |
| I ₂ 格子 | III ナデ |
| I ₃ 縄蓆 | |

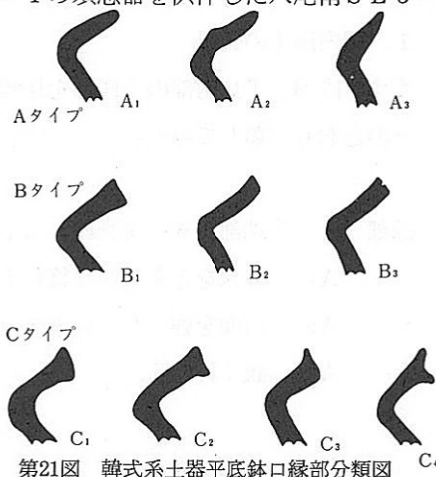
内面の調整

- a ナデ
- b 刷毛目
- c へら削り

これに基づき国内資料をみてる。

口縁部の分類では、Aタイプ18点、Bタイプ13点、Cタイプ4点で、AタイプとBタイプで占められている。このうち、時期がさかのぼると考えられている古池、八尾南S E 21、鳴神S K 21 7が、Aタイプである。これらの体部は、最大径が上位に位置し、肩部は、ほとんど張らない。また、口径と底径の比が2 : 1をなしている。また、I - 1の須恵器を供伴した八尾南S E 5 - 1、陶邑T K 73号窯出土の平底鉢を模したと考えられる須恵器の口縁部は、Bタイプを成している。また、時期がさがると思われる一須賀12号墳は、Cタイプを成している。そして、口径と底径の比では、底径がひろくなってきている。

時期を性格に把握できるものは少なかったが、口縁部のタイプは、A - B - Cの変化が予想できるのではなかろうか。外面調整では、そのほとんどが叩き目を有し、平行叩き目17点、格子叩き目11点、縄蓆文3点、無文が2点で、無文の2点は、Aタイプの八尾南S E



第21図 韓式系土器平底鉢口縁部分類図

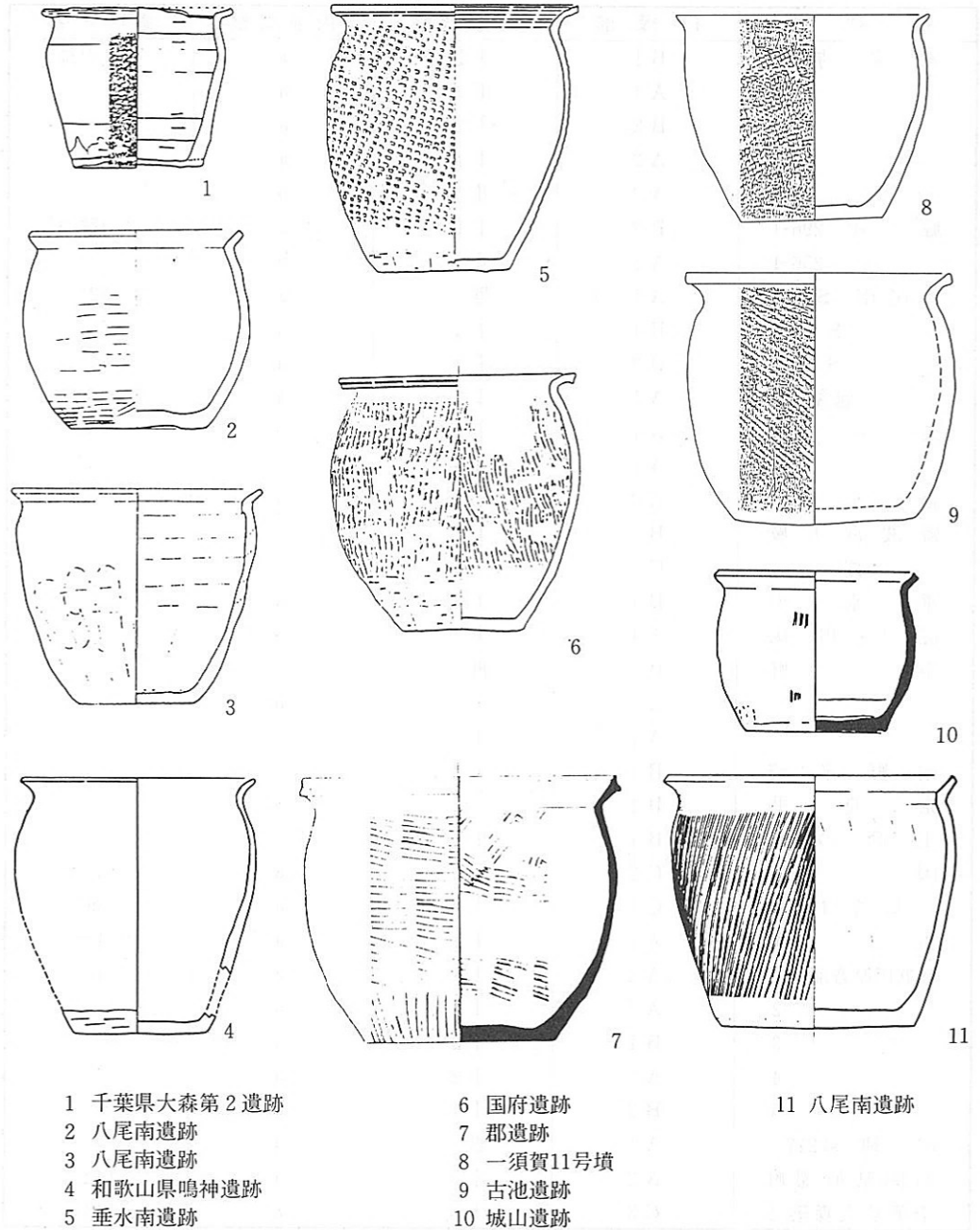
遺跡名	口縁部	外面調整	内面調整	備考
久宝寺 82	B 1	I 1	a	ゲタの跡
83	A 1	I 2	a	
84	B 2	I 2	a	
85	A 2	I 1	a	
	A 3	Ⅱ	b	
城山 296-1	B 2	I 1	a	ゲタの跡(31)
256-1	A 1	Ⅱ	b	
八尾南 SE21	A 1	Ⅲ	a	(32)
SE5-5	B 1	I 2	a	
SE5-6	B 2	I 2	a	
包含層 4	A 1	I 2	a	
長原 16次	A 1	I 2	a	(33)
	A 1	Ⅱ	b	
森小路	A 2	I 2	a	
難波宮下層	B 2	I 2	a	
郡	C 4	I 2	a	(34)
垂水南	B 1	I 2	a	(35)
淀川川床	A 1	I 2	a	(36)
中野	B 1	Ⅲ	a	
	A 1	I 3	a	
	A 1	I 3	a	
南野米崎	B 1	I 2	a	
奈良井	B 1	I 2	a	
土師の里	B 1	I 1	a	(37)
国府	C 2	I 2	a	(38)
一須賀 11号墳	C 1	I 2	a	(39)
古池	A 1	I 1	a	(40)
和歌山県音浦 1	A 2	I 1	a	(41)
2	A 2	I 1	a	
3	B 1	I 2	a	
4	A 2	I 2	a	
5	B 2	I 2	b	
鳴神 sk217	A 1	Ⅲ	a	
福岡県原深町	A 2	I 2	a	(42)
千葉県大森第 2	C 3	I 3	a	(43)

第1表 国内出土平底鉢分類表

5、鳴神SK217であった。

2. 半島中、南部の資料

半島中、南部の平底鉢形土器の出土例を旧百済地域と、旧伽耶・新羅地域に分けて見てゆきたい。しかし、まず、念頭におかなければならないのは、現在の韓国考古学では、われわれの求め



第22図 国内出土平底鉢実測図

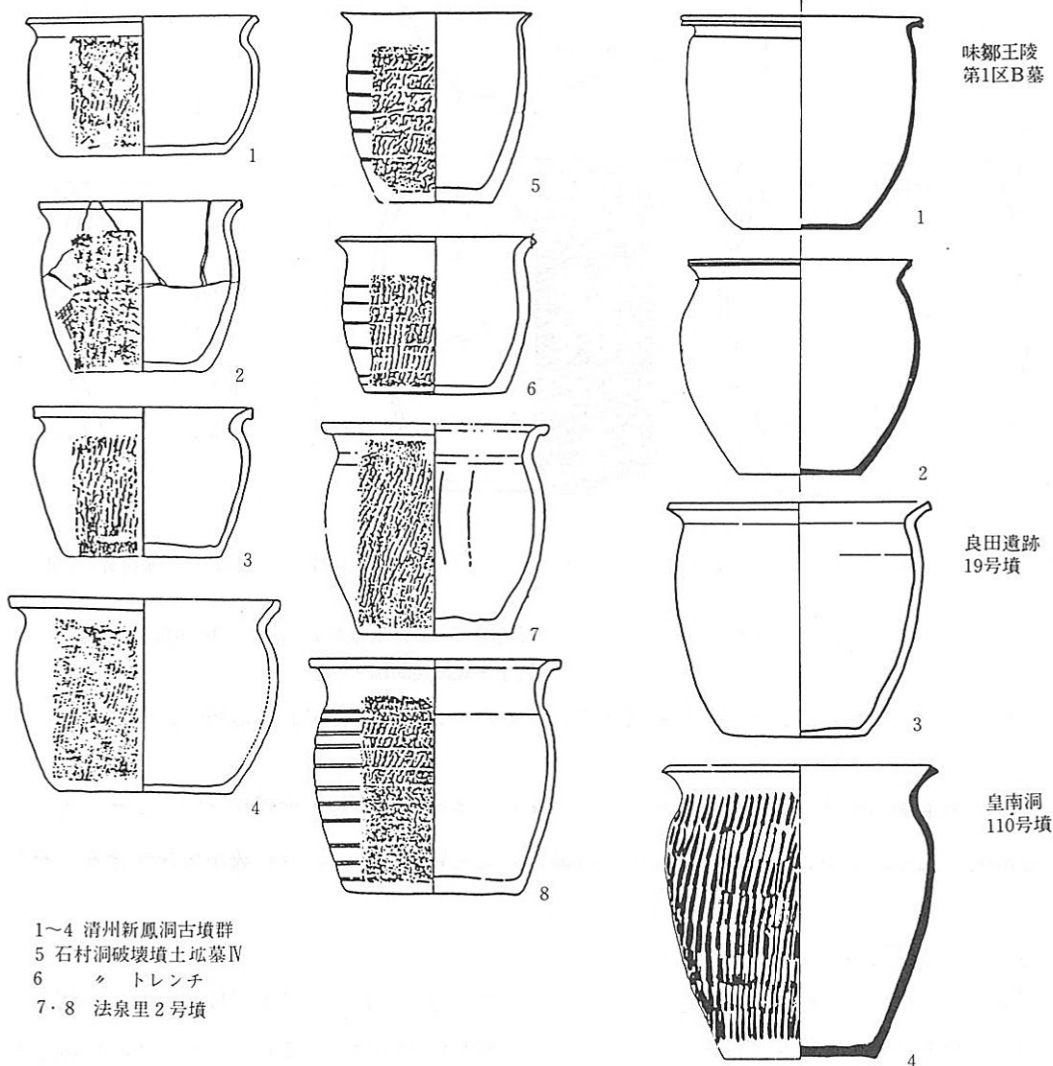
ている軟質土器の研究が陶質土器の研究ほど進んでおらず、また、調査対象も古墳が主であり、最も望んでいる集落の調査は少ない。加えて報告書等でも古墳の場合、軟質土器の詳細が不明なものも多い。

・百済地域

百済地域は従来から法泉里2号墳⁽⁴⁴⁾、石村洞破壊墳⁽⁴⁵⁾、新鳳洞古墳群⁽⁴⁶⁾、風納里土城下層からの出土が⁽⁴⁷⁾

遺跡名	口縁部	外面調整	内面調整	備考
中島	B 1	I 3	a	
石村洞破壊墳		I 3	a	
4号土城墓	A 1	I 3	a	
トレンチ	B 1	I 3	a	
法泉里2号墳	C 3	I 3	a	
新鳳洞4号墳	B 1	I 2	a	
9号墳	A 1	I 2	a	
13号墳	B 1	I 1	a	
433	C 2	I	a	
461	A 1	I 3	a	

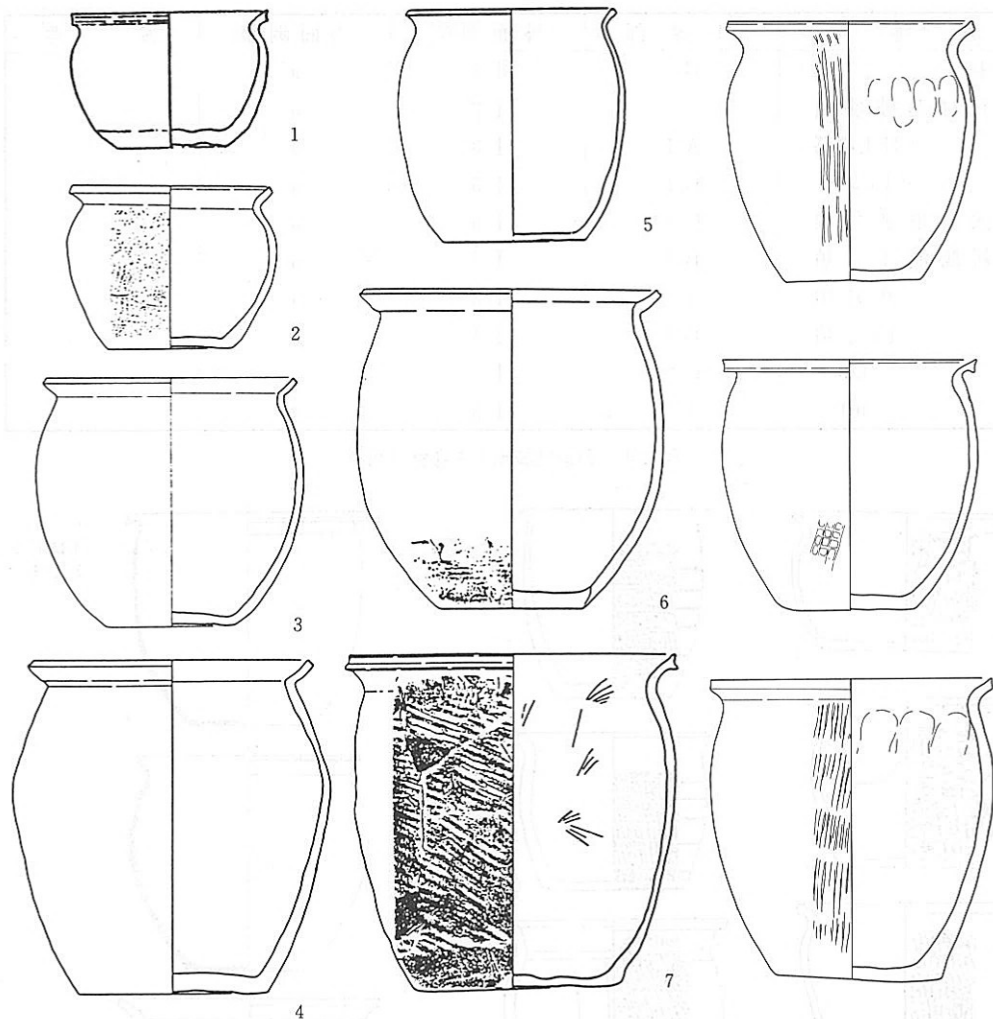
第2表 百濟地域出土平底鉢分類表



1~4 清州新鳳洞古墳群
 5 石村洞破壊墳土址墓Ⅳ
 6 トレンチ
 7・8 法泉里2号墳

第23図 百濟地域出土平底鉢実測図

第24図 新羅地域出土平底鉢実測図



1 槐亭洞6号墳 2 福泉洞11号墳 3 礼安里148号墳 4 礼安里2号墳 5 華明洞7号墳

6 府院洞貝塚 7 堂甘洞27号墳 8 五倫台29号墳 9 五倫台8号墳 10 五倫台7号墳

第25図 伽耶地域出土平底鉢実測図

知られている。これらは、4世紀代と考えられている。いずれも百済北部地域で、南部地域では知られていない。

上記の出土例からは、縄蓆文の叩キを有し、また、その上に沈線を螺旋状に巡らしているものが特徴的に見られるが、それが百済地域の特徴としてとらえるには、資料数が少なすぎる。そして、口縁部はどのタイプもばらつきがある。

・新羅、伽耶地域

最も出土数が多い地域で特に、伽耶地域に集中している。これは、各大学校、博物館が精力的に調査を行ってきた結果であろうが、しかし、それだけではなく、やはり分布の中心地域と考えた方が妥当ではなかろうか。

出土する遺跡は、貝塚と墳墓で、貝塚では金海会蜆里⁽⁴⁸⁾、府院洞⁽⁴⁹⁾、熊川⁽⁵⁰⁾、城山等⁽⁵¹⁾があり、墳墓では、礼安里⁽⁵²⁾、福泉洞⁽⁵³⁾、槐亭洞⁽⁵⁴⁾、五倫台⁽⁵⁵⁾、華明洞⁽⁵⁶⁾、甘堂洞⁽⁵⁷⁾、徳川洞等⁽⁵⁸⁾の各古墳がある。新羅地域では、慶州皇南洞110号墳⁽⁵⁹⁾、味鄒王陵⁽⁶⁰⁾、尉州良東古墳群等から出土している。

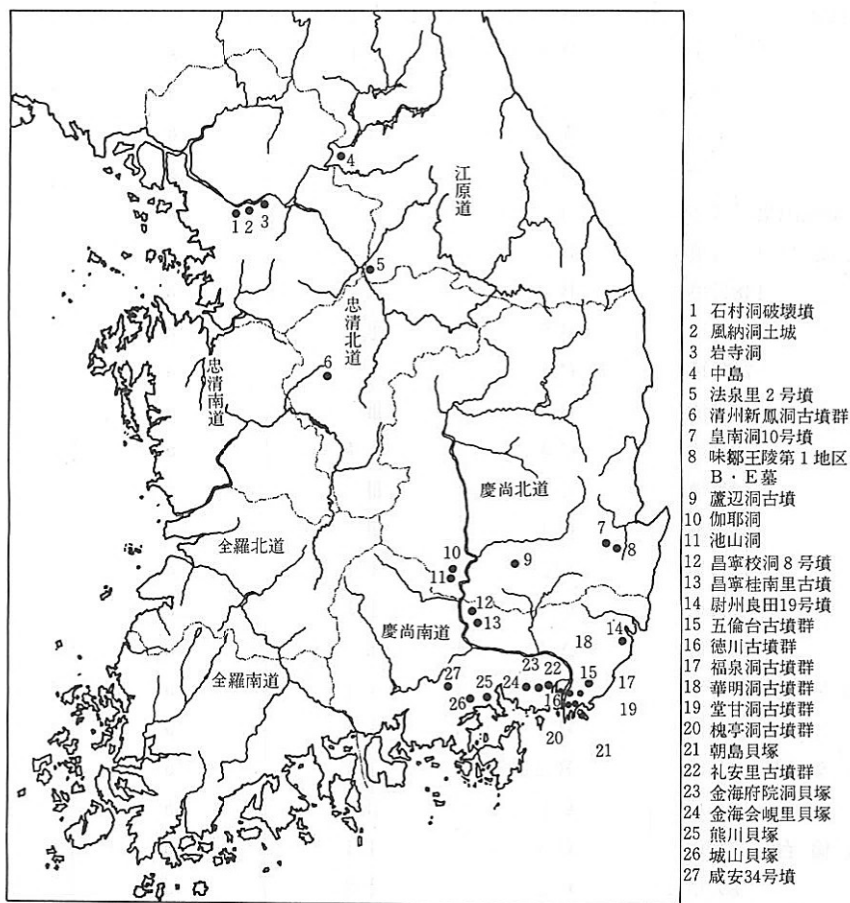
口縁部は、Aタイプが2点見られるだけである。Bタイプ18点、Cタイプが20点であった。4世紀代後半の礼安里古墳群138、148、76号墳、華明洞7号墳がBタイプ、5世紀代中葉の福泉洞、10、11号墳では、B、Cタイプ、5世紀後半から6世紀初頭の五倫台古墳群、および礼安里古墳群の5世紀後半以降の出土例では、Cタイプの占める割合が高い。口縁部の変化は、BタイプからCタイプへと変化するようである。特に、4世紀代では、B2タイプが主流のようである。体部の形状は、体部最大径が中位に位置しているものから、上位に位置し、やや、肩部が張り、やや、丸味を持つものへと変化するようである。また、礼安里76号墳出土例に代表される小型タイプは、口縁部の変化は同じであるが、体部の形状は肩の張るものから、丸味を持つものへと変化

遺跡名	口縁部	外面調整	内面調整	備考
金海会蜆里 8	B 2	Ⅲ		
9	C 4	I 3		
府院洞 A区47-5	B 2	I 1		
6	B 2	I 1	a	
48-3	B 2	Ⅲ	a	
C区109-2	A 1	Ⅲ	a	
3	B 1	I 1	a	
馬山城山東区 7-5	B 2	Ⅲ	a	
礼安里 138号墳	B 2	Ⅲ	a	
148号墳	B 2	Ⅲ	a	
76号墳	B 2	Ⅲ	a	
72号墳	C 4	I 1	a	5 C後半
2号墳	B 2	Ⅲ	a	
6号墳	C 4	I 1	a	
10号墳	C 2	Ⅲ	a	
51号墳	C 1	Ⅲ	a	
13号墳	B 2	I 1	a	
61号墳	C 4	I 1	a	
40号墳	A 1	Ⅲ	a	
福泉洞 10号墳	C 2	I 1	a	
11号墳	B 3	I 1	a	
槐亭洞 6号墳	B 3	I 1	a	
12号墳	C 2	Ⅱ	a	
五倫台 7号墳	C 3	I 1	a	
8号墳	C 2	I 2	a	

第3表 伽耶地域出土平底鉢分類表(1)

遺跡名	口縁部	外面調整	内面調整	備考
五倫台 10号墳	B 1	Ⅲ	a	
10号墳	C 1	I 1	a	
10号墳	B 1	I 1	a	
13号墳	C 1	Ⅲ	a	
15号墳	B 1	Ⅲ	a	
29号墳	C 3	Ⅲ	a	
29号墳	C 3	I 1	a	
華明洞 2号墳	B 3	I 1	a	
堂甘洞 27号墳	C 4	I 1	a	
皇南洞 110号墳	B 1	I 1	a	
味鄒王陵 B 墓	C 4	Ⅲ	a	
E 墓	C 4	Ⅲ	a	
良東 19号墳	B 1	Ⅲ	a	

第4表 伽耶地域出土平底鉢分類表(2)



第26図 朝鮮半島中・南部地域出土遺跡分布図

するようだ。体部外面の調整は4世紀代では無文が占め、5世紀代になると叩キ目を有するものが多くなる。多くは、平行叩キ目である。

3. 国内資料との比較

半島南部の状況から国内資料とを比較しようとするれば、やはり、出土状況から伽耶・新羅地域の出土例との比較が、妥当なようである。

口縁部のタイプから、国内ではAタイプ、Bタイプが主流で、半島ではBタイプ、Cタイプが主流である。AタイプとBタイプは、端部の形状が単純なもので、口縁部内面の処理は共通するものがある(A2、B2タイプ)。Cタイプになると、端部を肥厚する実質的な変化となる。このような各タイプを時期的に見れば、前述のように国内では、A、Bタイプが5世紀代の範疇にはいり、Cタイプが6世紀代、半島ではBタイプが4世紀代から5世紀代、そして、Cタイプが5世紀後半から6世紀代となる。この事から、口縁部の変化は、A、BタイプからCタイプへと変化すると考えても大過ないであろう。そして、半島では、BからCタイプへの変化が、5世紀中葉以降であろう。国内でB、Cタイプがより半島の影響を受けているものである。

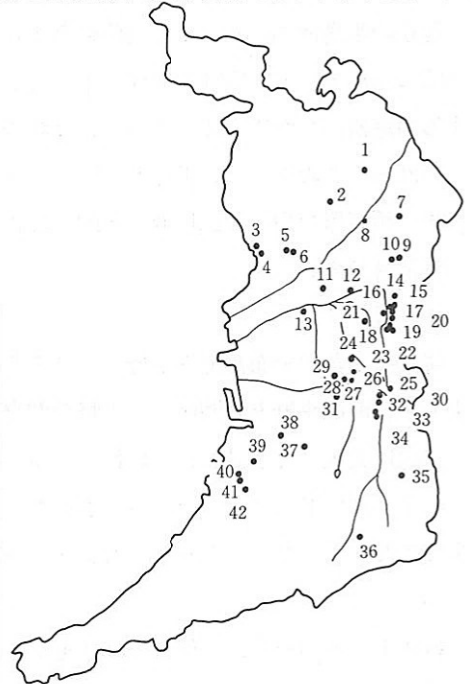
まとめ

1. 府下における韓式系土器の出土する遺跡の分布から、淀川流域、生駒山西麓、旧大和川流域、石川下流域、泉北地域、上町台地の雑多な各グループに分類できる。淀川流域では、高槻市郡家川西遺跡、生駒山西麓では、四条畷市中野、奈良井遺跡など四条畷地域の遺跡、旧大和川流域では、長原遺跡、久宝寺遺跡、石川流域では、土師の里遺跡、泉北地域では、大園遺跡の出土量が多く拠点の遺跡であろう。また、古墳では、長原13号墳、城山4号墳、一須賀11、12号墳の各古墳から出土している。

韓式系土器が渡来人、あるいは、渡来人と直接的に関係の有る人々によって製作されているならば、府下におけるこのような分布は、半島系の渡来人の

1	郡家川西	15	芝ヶ丘	29	瓜	破
2	郡	16	鬼虎川	30	船	橋
3	上津島	17	鬼塚	31	三	宅
4	利倉西	18	北鳥池	32	国	府
5	垂水南	19	縄	33	土	師
6	五反島	20	稲葉	34	高	屋
7	茄子作	21	友井東	35	一	須
8	淀川川床	22	西代	36	三	日
9	大良井・四条畷小学校	23	池島	37	太	平
10	中野・南野米崎	24	久宝寺	38	四	ツ
11	森小路	25	大泉・大泉南	39	大	園
12	茨田安田	26	木の本	40	七	ノ
13	難波宮下層	27	八尾南	41	古	池
14	日下	28	長原	42	府	中

第5表 大阪府下韓式系土器出土遺跡地名表



第27図 大阪府下韓式系土器出土遺跡分布図

様相を如実に現していると考えられる。

2. 生産と使用

韓式系土器の製作、使用は、渡来人の生活用品の一部として製作、使用されたもので、陶質土器製作集団の渡来による須恵器の製作、使用とは背景が相違する。新しい土器技術の意図的な生産ではなく、渡来人の生活用品として副次的に製作、使用された結果の所産と考えられる。この副次的に渡来した一群の土器、すなわち甗、鍋、長胴甕などの新しい器種は、新しい炊飯方法を国内に持ち込み、これらの土器とともに同化する。この結果、これらの器種は、新しい土師器の器種として確立してゆく。

韓式系土器の生産は、その技法、形態が従来の土師器とは相違し、須恵器の技法と共通するものが多い。この事がただちに韓式系土器の成立が須恵器の影響で製作されていると断定することは早計である。韓式系土器の出土が須恵器出現前の例もあり、韓式系土器が半島の軟質土器の影響下で製作されていることは明白であり、赤褐色軟質土器の技術が陶質土器の技術に影響されている部分もあることから、韓式系土器の技術の渡来時点で陶質土器技術をすでに包括していたのであろう。これらの韓式系土器の生産地については、当遺跡出土の土器について胎土分析（表面砂礫構成ならびにX線回折、電子顕微鏡解析）を行なった。詳細については、第3・4節に報告されるが、両結果の共通する所は、サンプル数は少なかったが、半島内部の資料と当遺跡出土の土器の一部とが組成状近似するようである。この事は、一部の赤褐色軟質土器が運ばれている可能性を示している。

3. 久宝寺遺跡出土の韓式系土器の系譜について

現在の半島南部における赤褐色軟質土器の出土分布を見ると、やはり洛東江流域伽耶地域が圧倒的に占めている。器種の構成も平底鉢、鍋、長胴甕など伽耶地域に近似している。また、供伴する須恵器のなかに、器台透かし、高坏の一部に直接的に伽耶地域（特に威安、金海地域）に求められる。このことは、根拠としては不十分ではあるが、やはり、久宝寺遺跡は伽耶地域の影響のある須恵器を用い、伽耶地域と関係のある韓式系土器を使用する渡来系の人々と深く関わっている遺跡である。

4. 最後に

韓式系土器の分布が河内平野における5世紀中頃の渡来人の一端を示していると考えれば、渡来人と、河内平野との関係は、平野の開発との関係を想起させる。この時期、久宝寺遺跡や、亀井遺跡に大規模な水制が行なわれている。従来、小流路に対して行なわれていた水制が、旧大和川の支流域に対して行なわれるようになってきている。この事は、渡来人による新しい技術による結果ではなからうか。この様な事も、河内平野における渡来人の様相の一端を示すものではなからうか。

韓式系土器の研究は、種々の問題をはらんでおり、今後の研究の進展を期待するものである。小稿においては、筆者の未熟からまとまりもなく、また誤信をおかしている点が多いと思われる

が、諸先輩、諸学兄の御叱正を請うものである。

小稿を纏めるにあたり、下記の方々に御指導、御教示いただき、記して謝意を表したい。

申敬徹、崔鍾圭、釜山大学校博物館研究員の方々、北野耕平、福岡澄明、田中清美、野島稔、米田敏幸、杉本二郎、高正龍、脱稿後、釜山大学校から「金海礼安里古墳群Ⅰ」が発行され、更に1987年2月には埋蔵文化財研究会により「弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題」のテーマで研究会が開催され、資料が飛躍的に増加した。これらの新資料を用いて再検討を加えたいが別稿に譲る。

註

- (1) 堅田 直 「畿内出土の漢韓式系土器について」 (『日本考古学協会第29回総会研究発表』) 1953
藤沢 一夫 「上津島弥生式遺跡出土の漢韓式系土器について」 (『豊中市史』史料編第1巻) 1960
堅田 直 「枚岡市日下遺跡出土の漢韓式系土器について」 (『大阪私立短期大学協議会研究報告集』) 1964
- 阿部 嗣治 「東大阪市出土の漢韓式系土器について」 (『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度) 1980
堅田 直 「韓半島伝来の印キ目文土器(韓式系土器)について」 (『日・韓古代文化の流れ』帝塚山考古学研究所) 1982
- 竹谷 俊夫 「布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土師器」 (『考古学調査研究中間報告』8 埋蔵文化財天理教調査団) 1983
- 植野 浩三 「韓式系土器についての子察」 (『奈良大学紀要』第12号)
- (2) 最近、武末 純一氏がこの用語について反論されている(慶尚道の「瓦質土器」と「古式陶質土器」『古文化談叢』第15集 1985)
- (3) 中村 浩編『陶器Ⅲ』大阪府教育委員会 1976
- (4) 田辺 昭三「須恵器大成」角川書店 1982
- (5) 山崎 純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式土師器」『古文化談叢』6
- (6) 橋口 達也他「池の上墳墓群」甘木市教育委員会 1979
- (7) 村上 幸雄「法蓮古墳群」岡山県総社市教育委員会 1985
- (8) 檜崎 彰一監「日本陶磁の源流」1984
- (9) (8)に同じ
- (10) (8)に同じ
- (11) 北野 耕平「河内野中古墳の研究」大阪大学文学部国史研究室研究報告2 1976
- (12) 韓 炳三、李 健茂「朝島貝塚」国立博物館古蹟調査報告 1976
- (13) 藺田 香融「和歌山市における古墳文化」関西大学考古学研究紀要4 1971
- (14) (8)に同じ
- (15) 坂田 邦洋、永留 史彦「恵比須山遺跡発掘調査報告」長崎県峰村教育委員会
- (16) 橋口 達也他「古寺墳墓群」甘木市教育委員会 1982
- (17) 野島 稔氏に御教示いただいた。
- (18) 坪之内 徹氏に御教示いただいた。
- (19) (15)に同じ
- (20) (15)に同じ
- (21) 竹谷 俊夫「布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土師器」考古学調査研究中間報告8 埋蔵文化財天理教調査団 1983

- (22) 今西 龍「威安第34号墳調査記」大正6年度古蹟調査報告、朝鮮総督府 1920
- (23) 申 敬澈氏の御厚意による実見する。
- (24) 沈奉謹「金海府院洞遺跡」東亜大学校博物館 1981
- (25) 土師 春樹氏に御教示
- (26) 中西 靖人他「長原」大阪文化財センター 1978
- (27) (21)に同じ
- (28) 吉田 宣夫他「鳴神地区遺跡発掘調査報告書」和歌山県教育委員会 1984
- (29) (28)に同じ
- (30) 原口 正三「船橋Ⅰ・Ⅱ」平安学園考古学クラブ1962
- (31) 杉本 二郎氏御教示
- (32) 米田 敏幸氏御教示
- (33) 田中 清美氏御教示
- (34) 「茨木市郡遺跡発掘調査概報－上穂積畑地区」1977
- (35) 米田 文孝「所謂漢韓式慶土器の1例」『千陵』関西大学博物館学課程創設20周年記念特集関西大学 1982
- (36) 野島 稔氏御教示
- (37) (36)に同じ
- (38) (35)に同じ
- (39) 福岡 澄男「一須賀古墳群の外來系土器」
- (40) 石神 怡氏御教示
- (41) (28)に同じ
- (42) 飛高 憲雄「原深町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 1981、1982
- (43) 酒井 清治「千葉市大森第2遺跡出土の百濟土器」古文化談叢15 1985
- (44) 金 元龍「原城法泉里石柳墓 出土遺物」考古美術 120 1973
- (45) 金 元龍「石村洞積石塚発掘調査報告」ソウル大学校 1975
- (46) 「清岫鳳洞百濟古墳群」忠北大学校 1982
- (47) 金 元龍「風納里包含層調査報告」ソウル大学校 1967
- (48) 梅原末治・浜田耕作「金海貝塚発掘調査報告書」大正9年度古蹟調査報告朝鮮総督府 1923
- (49) (23)に同じ。
- (50) 金 延鶴「熊川貝塚研究」亜細亜研究28 高麗大学校 亜細亜問題研究所 1967
- (51) 韓 炳三・鄭 澄元「東區貝塚発掘調査報告書」文化公報部文化財管理局 1976
- (52) (23)に同じ。
- (53) 鄭 澄元・申 敬澈「東來福泉洞古墳群1」釜山大学校博物館 1983
- (54) 鄭 澄元「釜山愧亭洞古墳発掘調査報告書」釜山市立博物館 1984
- (55) 金 延鶴・鄭 澄元「五倫台古墳群発掘調査報告書」釜山大学校博物館 1973
- (56) 金 延鶴・鄭 澄元「華明洞古墳群」釜山大学校博物館 1979
- (57) 鄭 澄元・申 敬澈「釜山堂甘洞古墳群」釜山大学校博物館 1983
- (58) 「釜山徳川洞古墳群」釜山市立博物館 1983
- (59) 金 宅圭・李 殷昌「皇南洞古墳群発掘調査概報」嶺南大学校博物館 1975
- (60) 鄭 澄元・申 敬澈「蔚州良東遺跡調査概報」釜山大学校博物館 1985

第3節 久宝寺遺跡出土韓式土器胎土の砂礫構成

奥田 尚

1. はじめに

縄文式土器、弥生式土器、埴輪等には、砂礫が多く含まれる。これらの砂礫粒は裸眼や実体鏡（倍率30倍）下で観察でき、種類、形、大きさ等が識別できる場合が多い。須恵質になれば、含まれる砂礫が少なく、溶融している場合も認められる。今回観察した試料には含まれる砂礫が少ない場合もあるが、砂礫が溶融している場合は認められなかった。発掘地付近の砂礫構成と土器中の砂礫構成を比較することを目的に、胎土中の砂礫観察を行なった。

観察方法としては、まず、裸眼で土器表面に見られる砂礫を観察した。次に、観察条件が良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察時、砂礫粒の色、粒形、粒径、量に注意した。粒形は、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径は、裸眼で、2mm以上をL、0.5mm以上2mm未満をM、0.5mm以下をSとした。実体鏡下では1mm以上をL、0.5mm以上1mm未満をM、0.1mm以上0.5mm未満をS、0.1mm未満をSSとした。量は、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅かの5段階とした。

土器の表面に付着物があり、観察不良の場合もあった。

大韓民国の東南部、梁山、府民洞、楽民洞、金海等の土器、18試料の観察結果も比較のため、付載する。

2. 砂礫の特徴

土器の胎土中に含まれる構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラス、珪岩（正珪岩？）、結晶片岩、石英、長石、雲母、角閃石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：ほとんど全ての試料に認められる。色は灰白色、灰色である。粒径は1mm～3mmで、稀に6mmに及ぶ。粒形は角礫が多く、試料によっては亜角礫の場合がある。角礫は角が鋭い場合は少なく、やや円みを帯びている場合が多い。造岩鉱物は、石英・長石・黒雲母、石英・長石からなり、かみ合っている。黒雲母は細粒板状である。石英・長石からなる粒は閃緑岩に属する可能性も僅かにあるが、便宜上、花崗岩とした。

閃緑岩：閃緑岩が認められる試料は僅かで、含まれる砂礫量もごく僅かである。色は灰白色、暗灰色である。粒径は1.5mm～1.0mmである。粒径は角礫であるが、角にやや円みを帯びている。造岩鉱物は、石英・角閃石、長石・角閃石からなり、かみ合っている。石英・角閃石の鉱物構成は花崗岩にも見られるが、便宜上、閃緑岩とした。

流紋岩：僅かの試料に認められる。色は白色、暗灰色、赤褐色、淡茶褐色である。粒径は、0.5mm～1mmである。粒形は角礫、亜円礫、円礫である。細粒の石英が認められる粒もあるが、

大半はガラス質である。

砂岩：認められる試料は僅か5試料である。色は暗灰色で、粒形が亜角礫である。粒径は0.5mm～1mmの場合が多く、ごく稀に2mmに及ぶ。量はごく僅かである。構成砂粒は細粒で、亜円礫の場合が多い。

チャート：約半数の試料に認められる。色は灰色の場合もあるが、大半は暗灰色である。粒形は、主として亜角礫であるが、僅かに角礫、亜角礫がある。粒径は0.5mm～3mmの場合が多く、稀に、5mmに及ぶ。量は試料によって差があり、ごく僅かの場合から中程度の場合までである。

火山ガラス：認められる試料は僅かである。色は無色透明の場合が多く、黒色透明の場合もごく稀である。粒形は貝殻状のものが多く、割筒状、フジツボ状のものが僅かである。粒径は実体鏡下で、細粒の場合もあるが、主として中粒である。量は僅かである場合が多く、多い場合は僅か2試料である。

珪岩（正珪岩？）：認められる試料は20試料である。色は暗灰色である。粒形は角が僅かに円くなった角礫、亜角礫である。粒径は実体鏡下で、粗粒、中粒である。量はごく僅かの場合が多く、僅かの場合もごく稀である。一見、暗灰色のチャート様に見えるが、砂粒の粒と粒の間に僅かに薄い色の部分が認められ、石英質砂岩である。砂粒形は円礫である。このような砂粒からなる岩石としては正珪岩が相当するが、粒が小さいことと、肉眼による判断のため、正珪岩の可能性が非常に高いとする。

結晶片岩：僅か3試料に認められる。色は灰色が多く、ごく稀に淡赤褐色である。粒形は亜円礫、円礫である。粒径は実体鏡下で中粒である。量はごく僅かで絹雲母片岩が多く、石英片岩が僅かである。

石英：ほとんど全ての試料に認められる。色は無色の場合が多く、灰色の場合もあり、透明である。粒形は僅かに角が円くなった角礫、亜角礫である。角礫の場合が多い。粒径は0.5mm～1.5mmで、稀に4mmに及ぶ。量は、試料によって差があり、非常に多い場合からごく僅かの場合までである。

長石：ほとんど全ての試料に認められる。色は白色の場合が多く、灰白色の場合は僅かである。粒径は0.5mm～1mmで、稀に2mmに及ぶ。量は僅かの場合が多く、稀に、多い場合がある。

雲母：多くの試料に認められる。ほとんど全てが黒雲母で、3試料に白雲母が認められる。黒雲母は黒色板状、金色板状で、金属光沢がある。粒径は2mmに及ぶ場合もあるが、実体鏡下で認められる場合が多く、細粒、微粒である。量はごく僅かの場合が多く、極稀に、中程度の場合がある。白雲母は無色透明板状である。実体鏡下で認められ、粒径は中粒である。量はごく僅かである。

角閃石：多くの試料に認められる。色は黒色である。粒径は1.5mmに及ぶ場合があるが、大半は実体鏡下で認められ、細粒である。粒形は僅かに角が円くなった角礫である。粒状、柱状である場合が非常に多く、8試料には結晶面が認められる。量はごく僅かの場合が多く、ごく稀に

中程度の場合がある。

3. 類型区分

胎土中には、花崗岩、石英、長石がほとんど全ての試料に含有量に差があるが含まれるため、類型区分の基準とはしがたい。久宝寺付近の沖積地の構成砂礫種は、主として、石英、長石、花崗岩からなり、角閃石、チャート、砂岩等が僅かかごく僅かである。また、角閃石、チャート、砂岩が認められない場合もある。類型区分は久宝寺付近の砂礫と比較するため、当付近では認められない珪岩（正珪岩？）が認められる試料をI類型、当地域の砂層中に含まれるチャート粒の量より比較的が多い試料をII類型、結晶面がある角閃石が認められる試料をIII類型、当地域の砂礫構成と酷似する砂礫構成を示す試料をIV類型に、I類型からIV類型に含まれない試料をV類型とした。各類型は含まれる砂礫種から更に細分される。

I a 類型：珪岩（正珪岩？）、チャート、角閃石が含まれる。

I b 類型：珪岩（正珪岩？）、チャートが含まれる。

I c 類型：珪岩（正珪岩？）が含まれ、I a 類型、I b 類型のいずれにも属さない類型である。

II a 類型：流紋岩、チャート、角閃石が含まれる。

II b 類型：砂岩、チャート、角閃石が含まれる。

II c 類型：チャート、角閃石が含まれる。

II e 類型：流紋岩、角閃石が含まれる。

III a 類型：チャート、結晶面がある角閃石が含まれる。

III b 類型：結晶面がある角閃石が含まれる。

IV 類型：角閃石が含まれる。

V 類型：I 類型からIV 類型までのいずれにも含まれない類型である。

類 型	岩 石				鉱 物		試 料 数
	流 紋 岩	砂 岩	砂 岩 Q	チャート	角セン石	角セン石E	
I a			+	+	+		9
I b			+	+			4
I c	+		+	+	+		7
II a	+			+	+		7
II b		+		+	+		3
II c				+	+		24
II e	+				+		3
III a				+		+	4
III b						+	3
IV					+		21
V	I a 類型～IV 類型に含まれない類型						7
観察条件不良、含有砂礫数が少ないため類型区分不能							9

第1表 類型区分表

4. 各類型の特徴

各類型に含まれる砂礫種の特徴について述べる。

I a 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、珩岩（正珩岩？）、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、閃緑岩、火山ガラス、黒雲母が認められない試料もある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒形は1 mm～4 mmで、量が僅かである。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母からなり、稀に、赤褐色偏菱二十四面体のザクロ石が含まれる。閃緑岩は灰白色で、角礫である。粒径は1 mmで、量がごく僅かである。造岩鉱物は長石・角閃石である。珩岩（正珩岩？）は、灰白色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は1 mmで、量がごく僅かである。チャートは、白色、無色透明、暗灰色であり、亜角礫、亜円礫である。粒径は1 mm～3 mmであるが、ごく稀に、7 mmに及ぶ。量はごく僅か～中程度である。火山ガラスは、黒色、無色透明で、貝殻状、板状である。粒径は0.5 mm～1 mmで、量がごく僅かである。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.1 mm～2 mmで、量が中程度～非常に多いである。長石は白色、無色透明で、角礫である。粒径は0.1 mm～2 mmで、量が僅かである。黒雲母は金色板状、黒色板状の場合がある。粒径0.5 mm以下で、量がごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.1 mm～0.5 mmで、量がごく僅かである。

I b 類型：構成砂礫種は、花崗岩、珩岩（正珩岩？）、チャート、石英、長石、黒雲母である。花崗岩、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径は1 mm～3 mmで、量がごく僅かである。造岩鉱物は石英・長石である。珩岩（正珩岩？）は暗灰色で、亜角礫である。粒径は1 mm～1.5 mmで、量がごく僅かである。チャートは暗灰色で、亜角礫である。粒径は1 mm～2 mmで、量が中程度～多いである。長石は白色で、角礫である。粒径は0.1 mm～0.5 mmで、量がごく僅か～僅かである。黒雲母は黒色板状である。粒径は0.1 mmで、量がごく僅かである。

I c 類型：構成砂礫種は、花崗岩、閃緑岩、流紋岩、結晶片岩、珩岩（正珩岩？）、砂岩、チャート、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、閃緑岩、流紋岩、結晶片岩、チャート、黒雲母、角閃石のいずれかが認められない試料である。花崗岩は暗灰色、灰白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5 mm～4 mmで、量がごく僅か～僅かである。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母、石英・長石からなる。閃緑岩は灰白色で、亜角礫である。粒径は1 mmで、量が僅かである。造岩鉱物は長石・角閃石である。流紋岩は暗灰色、赤褐色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は0.5 mm～3 mmで、量がごく僅かである。結晶片岩は赤褐色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は0.5 mm～1 mmで、量がごく僅かである。絹雲母片岩である。珩岩（正珩岩？）は暗灰色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は0.5 mm～2 mmで、量がごく僅か～中程度である。砂岩は淡赤褐色で、亜円礫である。粒径は0.5 mm～2 mmで、量がごく僅か～僅かである。砂岩の構成粒は細粒である。チャートは灰黒色、暗灰色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5 mm～1.5 mmで、量がごく僅か～中程度である。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.5 mm～5 mmで、量が中程度～

多いである。結晶面が認められる場合、高温型石英の形態である場合がある。長石は白色で、角礫である。粒径は0.5mm～1.5mmで、量のごく僅か～僅かである。黒雲母は黒色板状、金色板状である。粒径は1.5mm以下で、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.1mm～0.5mmで、量のごく僅か～僅かである。柱状で結晶が認められる場合もある。

II a 類型：構成砂礫種は花崗岩、流紋岩、チャート、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径は0.5mm～3mmで、量のごく僅か～中程度である。造岩鉱物は石英・長石である。流紋岩は灰黒色、白色で、角礫、亜角礫、亜円礫である。白色の場合は円磨度が高い。チャートは赤褐色、淡赤褐色、暗灰色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量のごく僅か～僅かである。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.5mm～4mmで、量が中程度～非常に多いである。結晶面がある石英、高温型の形態を示す石英がある。長石は白色で、角礫である。粒径は0.1mm～2mmで、量のごく僅か～中程度である。黒雲母は金色板状、赤褐色板状である。粒径は0.5mm～1.5mmで、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.5mm以下で、量のごく僅か～僅かである。

II b 類型：構成砂礫種は花崗岩、砂岩、チャート、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径は1mm～4mmで、量のごく僅か～僅かである。砂岩は暗灰色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量のごく僅かである。構成砂粒は淘汰良好な円礫の細粒砂である。チャートは赤褐色、暗灰色で、角礫、亜角礫である。粒径は1mm～5mmで、量のごく僅かである。石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は1mm～2mmで、量が中程度～多いである。長石は白色、無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量のごく僅か～僅かである。黒雲母は黒色板状、金色板上である。粒径は0.1mm～1mmで、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は1mm以下で、量のごく僅かである。

II c 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、雲母、角閃石である。花崗岩、閃緑岩、火山ガラス、雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径は1mm～6mmで、量のごく僅か～中程度である。造岩鉱物は石英・長石である。閃緑岩は暗灰色で、角礫である。粒径は1mmで、量のごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石である。チャートは茶褐色、暗灰色で、角礫である。粒径は1mm～3mmで、量のごく僅か～僅かである。火山ガラスは無色透明で、貝殻状である。粒径は0.5mm～1mmで、量のごく僅か、多いである。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.5mm～3mmで、量のごく僅か～非常に多いである。長石は白色で、角礫である。粒径は0.5mm～1.5mmで、量のごく僅か～中程度である。雲母は黒雲母と白雲母である。黒雲母は黒色板状、金色板状である。粒径は3mmに及ぶ場合もあるが、1mm以下で、量はごく僅か～中程度である。白雲母は無色透明板状である。粒径は0.1mm～1mmで、量はごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は

1 mm以下で、量のごく僅か～僅かである。

II e 類型：構成砂礫種は花崗岩、流紋岩、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は灰白色で、角礫、亜角礫である。粒径は1 mm～4 mmで、量のごく僅かである。造岩鉱物は石英・長石である。流紋岩は白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.1mm～1 mmで、量のごく僅かである。石英は無色透明、灰白色透明で、亜角礫である。粒径は2 mm以下で、量が僅か～中程度である。長石は白色で、角礫である。粒径は0.5mm～3 mmで、量のごく僅か～中程度である。黒雲母は金色板状、黒色板状である。粒径は0.1mm～1.5mmで、量が僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.1mm～0.5mmで、量のごく僅かである。

III a 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。閃緑岩、火山ガラス、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫、亜角礫である。粒径は1 mm～6 mmで、量のごく僅か～中程度である。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母である。閃緑岩は暗灰色で、角礫である。粒径は1 mmで、量のごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石である。チャートは灰白色、黒色、暗灰色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～1 mmで、量のごく僅か～僅かである。火山ガラスは黒色透明で、貝殻状である。粒径は1 mmで、量のごく僅かである。石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～3 mmで、量が僅か～多いである。粒径は0.5mm～3 mmで、量が僅か～多いである。長石は白色で、角礫である。粒径は0.1mm～1 mmで、量のごく僅か～僅かである。黒雲母は金色板状、金色粒状である。粒径は0.1mm～3 mmで、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.1mm～1 mmで、量のごく僅か～中程度である。柱状で結晶面がある角閃石、自形の角閃石が認められる。

III b 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。閃緑岩、火山ガラス、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径は0.5mm～2 mmで、量のごく僅か～僅かである。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母である。閃緑岩は灰白色で、角礫である。粒径は1 mmで、量のごく僅かである。火山ガラスは無色透明で、貝殻状、束状である。粒径は0.5mm～1 mmで、量のごく僅かである。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.5mm～2 mmで、量が僅かである。結晶面がある石英が認められる。長石は白色で、角礫である。粒径は0.5mm～2 mmで、量のごく僅か～僅かである。黒雲母は黒色板状、金色板状である。粒径は0.1mm～2 mmで、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.1mm～1 mmで、量のごく僅か～僅かである。柱状で結晶面がある、自形である角閃石が認められる。

IV 類型：構成砂礫種は、花崗岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。火山ガラス、黒雲母が認められない試料がある。花崗岩は灰色、灰白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～5 mmで、量のごく僅か～中程度である。造岩鉱物は石英・長石である。火山ガラスは無色透明で、割筒状、貝殻状である。粒径は0.5mm～1 mmで、量のごく僅か～中程度である。

石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は0.1mm～3mmで、量が僅か～非常に多いである。結晶面が認められる場合がある。長石は白色で、角礫である。粒径は0.1mm～2mmで、量がごく僅か～中程度である。黒雲母は金色板状である。粒径は1.5mm以下で、量がごく僅かである。角閃石は黒色で角礫である。粒径は0.1mm以下で、量がごく僅か～僅かである。

V類型：I類型からIV類型のいずれにも属さないものを集めたのみであるから、記載は省略する。

5. 各類型の砂礫採取地

各類型の砂礫構成から推定される砂礫の採取地について述べる。

I類型：I類型には全て珪岩（正珪岩？）が含まれる。正珪岩は近年になってようやく日本国内にも分布することが報告されるようになってきた。分布地は和歌山県串本の西方和深付近、京都府宇治の丘陵、大阪府枚方市の大阪層群中、福井県手取川流域等である。地層中や川砂・海岸砂中にはいずれの地域でも認められるが、量が非常に少なく、全て円礫である。土器中の砂礫量と比べてみれば、比率的に非常に少なく、円磨度に於いても異なる。以上のことから、日本国内で砂礫が採取された土器ではないと推定される。正珪岩は朝鮮半島の北部から満州にかけて分布する岩石である。参考資料に示した韓国の土器には正珪岩が一点も含まれていない。

II類型：II a類型、II b類型、II c類型は、久宝寺付近の遺跡面の砂礫と比較すれば、チャートが比較的多く含まれることから、遺跡付近の砂を利用して製作された土器ではない。II e類型は白色の流紋岩粒が含まれ、韓国試料の3点と砂礫種構成、砂礫種が酷似する。

III類型：III類型には結晶面がある・自形である角閃石が含まれていることから、久宝寺付近の砂礫ではない。

IV類型：砂礫構成は久宝寺付近の砂礫に似るが、韓国の土器の砂礫構成にも酷似する。よって、韓国で砂礫が採取されたのか、久宝寺付近で砂礫が採取されたのか決定しがたい。

6. おわりに

韓式土器の砂礫観察の結果は次のようである。

- ①. 出土土器は胎土中の砂礫構成から4類型に区分される。
- ②. 出土地付近の砂礫と土器中の砂礫とを比較することから、約6割の土器は久宝寺付近の砂礫ではなく、約2割は当付近の砂礫の可能性もある。
- ③. 韓国の僅かの試料と比較すれば、約2割は韓国出土の土器の砂礫構成と酷似し、久宝寺付近の砂礫構成とも酷似する。しかし、II e類型は韓国の試料に酷似するのみである。

試料	岩 石												
	花コウ岩		セ ン 緑 岩		流 紋 岩		結 晶 片 岩		砂 岩		チャ ー ト		
	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	
金海 104	M △	L-△			L-×	M-△							
金海 105	M △	M-□											
府院洞 106	L-△	L-△		L ×		L-△							
府院洞 107	L-△	L ×				M ×							
梁山 108	M ×	M △		M △									
民洞 109	M ×	M-×		M-×									
楽民洞 110		M-△		M-×									
金海 111	L-△	L-△											
金海 112	L-×	M-×											S ×
金海 113	L-×	L-△											
114	L-×	L-□											
楽民洞 115		L-×				M ×							
梁山 116	L-△	L-△											
梁山 117	L-×	L-×							L ×	M ×			M ×
梁山 118		S ×											
梁山 119	L-×	M-△				M-×							
府院洞 120	L-△	L-□											
金海 121		M ×											M ×

第2表 砂礫の観察表(1)

火山ガラス		鉍物										類型
石 英		長 石		雲 母		角セ ン石		輝 石		類 型		
裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍	裸 眼	30 倍		裸 眼	30 倍
		M △	M-□	M-△	M-△		SS△					V
		M □	S □	S-△	S △		SS×					V
		L-□	L-○	M □	M-△				S ×			II e
		M □	L-□	M △	M-△							V
		M ×	M ×	M □	M △				S-×			IV
		M ×	M △	S-×	M-×				S-△			IV
			S-□		S △				S ×			IV
		L-□	L-○	S-△	M-△				S ×			IV
		L-×	M-△	S-△	S △							V
		L-△	L □	M △	M-○							V
		M ×	M-△	M △	M-□		M ×		S ×			IV
		M ×	L-□	S-×	S △				S △			II e
		M △	M-△	M-△	M-△		S ×					V
	M △	M ×	M-×									V
			S-□		S-×		SS×					V
		L-×	M-△	S-×	M-×				S-×			II e
		M △	M-□	M-×	S △							V
			M-△		S ×		SS×		S ×			II c

試料	岩										石	
	花コウ岩		セシ緑岩		流紋岩		結晶片岩		砂岩		チャート	
	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍
P 14	M ×	L ×				M ×						M ×
P 86	L ×					M ×						
P 96	L-×	L ×			L ×					L-□	L-□	L-□
P 107	L-×											
P 108								M ×	L-□	L-□Q		
P 109	L-×											
P 110	L-△	L △									M △	L △
P 112		L-×										M ×
P 113	L-△										M-△	L-△
P 114	L-△	L △									M △	L △
P 115	L-×	L-×										M ×
P 118	L-△	L △									L-□	M-△
P 119					L-△	L-△					L-△	L-△
P 120										L-×	M ×	M ×
P 121		S ×				M-×						
P 122	L ×	M ×										
P 123	L-×	L-×									L-×	M-×
P 124	L ×	L ×										
P 125	L-×									L ×	M ×	M-×
P 127	L-△	L ×									L-△	
P 128	L △	L ×									L ×	
P 129	L-×	L ×										
P 130	L-×	L ×										
P 132	L ×	L ×										
P 134	L-×	L ×				M-×						
P 135	L-△	M ×										
P 157	L-×	L-△		L ×						L × Q	M ×	L △
P 158	L-×	M ×									L-×	L ×
P 159		L ×										
P 160					M ×	L ×						
P 161	L-×	M ×										
P 165	L-×	M ×				M ×					L-△	M △
P 166	L-×	L ×										
P 212	L-△									L-×	L-△	L-×

第3表 砂礫の観察表(2)

火山ガラス		鉱物										類型
		石英		長石		雲母		角セン石		輝石		
裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
		M △	L-□	M ×	M △		M-×		S ×			II a
					M ×							不良
		L-□	L-×	M △	L △	L-×						V
		L-△	L-○	M △	L-△	M △	S ×		S △			IV
		M-△	S ×	L ×				M △	M-△E			I c
			M ×		M ×							不良
		L-△	L-□	M △	M-△				S △			II c
		L-△	M-△	M-△	M-×	S-×			S ×			II c
		M □	L-○	M X	M-□		S ×					V
		M ○	L-◎	M-△	M △		S ×W		S ×			II c
		L-×	M-△	M △	M-×	S-×	M-×					V
		L-□	L-□	M △	S △	S ×	L-×		S □			II c
		M ×	M-○E	S ×	M-×				M-△			II a
		L-△	L-△	M △	L ×		M □					V
		M ×	S-□	M ×	S-△	M △	L-△		S ×			II e
		L-△	M-○	L-△	M-△				S-×			IV
		M-×	L-○		M-△		S ×	S-×	S ×			II c
		M ×	M-○E	S ×	S □				S △			IV
		L-△	L-○	M ×	M ×	M-×	M-×		SS×			II b
		M-△	M-○	M △	M-△				S ×			II c
		M-△	M-△	L-△	M △		S-×					V
		L-×	L-×	S ×	S △							不良
	M ×	M ×	M-○	M ×	M □		S ×		SS×			IV
		L-△	M-□	M ×	S △		SS×		S △			IV
		L-△	L-□	L-△	M-□				S ×			II e
		L-□	L-□	L-□	L △	L-△	L ×		S ×			IV
	M ×	L-□	L-○	M △	M-△	M ×			M-△			I a
		L-△	L-○E	M ×	M △				S ×			II c
		L-△	L-◎	M △	S ×		S ×		S ×			IV
			M-△	L-×	M ×				S ×			II e
		S-×	M-○	S-×	S ×				S ×			IV
		L-△	L-○	L-△	S □				SS×			II a
		M ×	M-△	L-×	M ×	M ×	L ×		S△E			III b
		L-○	L-○	L-□	M-○				S △			I a

試料	岩								石			
	花コウ岩		セン緑岩		流紋岩		結晶片岩		砂岩		チャート	
	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍
P 214										L × Q	L □	M △
P 215	L-△	M ×				M ×				M × Q	M □	L-△
P 226	L-△	L-×								L-△Q	M ×	L ×
P 227		S ×								L-×		L-×
P 265	L-△	L ×				M ×					L-×	L ×
P 272		L-×				M ×						L ×
P 278	M △									L-△Q	L-△	M ×
P 282	L-△	L △										
P 286									M △	L-△Q		M ×
P 287												
P 289	L-△	L △		L ×							L ×	
P 292	L ×	L-×								M × Q	L-×	M-△
P 293	L-□	L ×		L ×								L ×
P 294	L-□										L-×	L-△
P 296		L ×				L ×			L ×		L ×	M ×
P 298						M ×					L-×	
P 299	L-△	L ×		L ×								
P 419	L-×										M ×	M ×
P 422	L ×										L ×	M-×
P 487	L-△									L × Q	L-△	L-△
P 489	L-×	L ×										
P 583	L-△	L ×			L ×	M ×				L-×		
P 584	L-×									L-△Q	L-△	L-×
P 587	M △	M ×										
P 589		M ×							L ×	M × Q		
P 592	L ×	L-×						M ×				L-×
P 604	L-×	L ×										
P 605		L-×									M ×	L-△
P 608	M ×	M ×										
P 609												
P 610	L-△	L-△									L-△	L △
P 612	L-△	L △										
P 615	L ×	L ×										M ×
P 618	L-×	M-×										
P 619	L-×	M ×										L ×
P 620									M ×	L-△Q		M ×

第4表 砂礫の観察表(3)

火山ガラス		鉱物										類型
		石英		長石		雲母		角セシ石		輝石		
裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
		L-□	L-○E	L-×	M-△	S ×			S ×			I a
		L-○	L-○	M △	S △				S ×			I c
		M □	L-○	S-△	M △		S ×		S ×			I a
		M □	L-○		M-×		SS×		S ×			I a
		L-□	M-○	M △	M △				S ×E			II a ?
		M △	M-○	S △	M △		S-×		S-×			II a
		L-○	L-○	M △	M △				S ×			I a
			L △	M ×	L-×		SS×		SS×			IV
		L-△	L-○	M ×	M ×							I b
	S ×		M-×		S ×				S ×			不能
	M ×	L-△	L-○	M △	M △	L-×	S ×		S ×			II c
		L-□	L-○	M ×	M ×				S ×			I a
		L-□	L-□	M △	M △		S △		S □E			III a
		L-△	L-□	L-△	M △				S △			II c
		M △	L-△	M △	M ×	M ×	L-×					V
		L ×	M-□		S ×				SS×			II a
		L-×	L-△	M ×	M △	L-×	M-×	M ×	S △E			III b
		L-□	M-◎	M ×	S ×				S ×			II c
		L-×	L-×		S △	L-□	M △		S ×			II c
		L-○	M-◎	M ×	M-△				S ×			I a
			L-×		S ×		S ×		S ×			不能
		M ○	L-○	M ×	M-△							I c
		M-△	M-○	S-×	M-△							I b
	S ×	M △	M-△E	M △	L-△				S-△E			III b
			M-○E		S △		SS△					I c
		L-□	L-○	S-×	M ×				S-×			V
	M ×	M ×	M-○	M ×	S △				S ×			IV
		L-○	L-○	L-×	M △				S ×			II c
		M-×	L-△	M-△	M □	M △			S ×			IV
				M ×								不良
	M ×	L-□	L-○	L-△	M-△				S ×			II c
		L-△	L-○	M-△	S △	M-×	S ×		S ×			IV
		M △	M-△	M △	M □		M-×		S ×			II c
			M-△	M-×	M-○	S-×	L-×		S ×			IV
		L-×	M-○	L-×	S △	M ×	SS×		S ×			II c
		M △	M-□	S-△	S △		SS×					I b

試料	岩						石					
	花コウ岩		セン緑岩		流紋岩		結晶片岩		砂岩		チャート	
	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍
P 658	L-×										L-×	L ×
P 660	L-×	L △		L △						L-×Q		
P 661	L-×	L ×									L-×	L ×
P 668	L-△	L-△							L ×		L ×	L ×
P 670	L-×										L-△	L-△
P 670	L-×	L ×									L-△	L-△
P 671	L-×											
P 677	M ×	L ×									M-×	L-△
P 692		L-×										
P 694	L-△										L-△	S △
P 695	L-×	L ×								L ×	L-×	
P 700		L △										
P 702	L ×										L ×	
P 705	L-×	M ×										M ×
P 707												
P 708	L-□	L △										
P 710	L-△	L △										
P 711												
P 712	L-□	L ×									L ×	
P 718	L-△	L-×										M-×
P 723	L-△	L △									L ×	L-□
P 724						M-△				M × Q		
P 726	L-△											
P 730		L ×				L ×						M-×
P 733		L-△							L-×	L × Q	L-△	
P 735									L-×	L-△Q	L-×	
P 738	L-□	L ○									M ×	L ×
P 742		L-×									M ×	
P 748	L-×	L-×				M ×		M ×		L-△Q		L-×
P 749	L-△											
1001	L-△											

第5表 砂礫の観察表(4)

火山ガラス		鉍物										類型
		石英		長石		雲母		角セシ石		輝石		
裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
		M □	L-□	M ×	M ×		L-×		S ×			Ⅱc
		L-△	L-□	M ×	M ×	M ×	S-×		S ×			Ic
	M ×	L-□	L-□	M ×	M ×				S ×			Ⅱc
		L-△	L △	L-△	M ×		L ×		L-×			Ⅱb
	M-○	L-□	L-○	M △	M △	S-△	L-△		S ×			Ⅱc
	M-○	L-○	L-□	L-△	M △	L-△	L-△		SS×			Ⅱc
			M-△	M ×			S-○		S-△			Ⅳ
	L ×	M ○	L-○	M △	M △	L-△	L-△	M ×	S ×E			Ⅲa
		L-△	M-○	M △	M □				S △			Ⅳ
		L-□	M-○	M △	M △				S △			Ⅱc
		L-×	L-○	L ×	M-△		S ×		S ×			Ⅱb
	M ×	M ×	M ○	M ×	M △	L-×	L ×		S ×			Ⅳ
		L-△	L-□		M ×				S ×			Ⅱc
	M ×	M ×	M-○	M □	M-△	M ×			S △			Ⅱc
			S ×		S △							不能
	M-×	L-×	L-○	M ×	M △		M-△		S ×			Ⅳ
		L-△	M-□	L-×	M-△		S △		S ×			Ⅳ
			S ×				S-△W		S △			不能
		L-△	L-◎	M △	M △				S ×			Ⅱc
		M △	L-○	M △	M △	M ×	M-×		M-×E			Ⅲa
		L-□	L-○	M △	M △	L-×	L-×		S ×			Ⅱc
		L-△	L-○	L-△	S □				S ×			Ic
		L-×	S ○	S-△	S ×		SS×		S △			Ⅳ
		L-×	S ◎E	M ×	S ×	M ×	M-×		S △			Ⅱa
	M ×	L-△	L-□	M △	M-△		S ×		S △			Ia
		M △	L-◎	M ×	M △		SS×					Ib
		L-△	L-△	L-△	S ×				S ×E			Ⅲa
		L-×	L-○	M ×	M-△	M ×	L-×W		S ×			Ⅱc
		L-□	M-○	S-×	S △		SS×		SS×			Ic
		M △	L-△	L-×	L-△	L-△	L △		S ×			Ⅳ
			M ×		S ×							不能

第4節 久宝寺遺跡出土の韓式土器の胎土分析

第四紀地質研究所 井上 巖

1. はじめに

本報告書は(財)大阪文化財センターの依頼により、久宝寺遺跡出土の韓式土器100点のX線回折試験、電子顕微鏡解析の結果を取りまとめたものである。出土した韓式土器が何処で製作されたものであるか判別するために、前記の出土土器とは別に久宝寺遺跡発掘現場の露頭より9点の原土を採取し、さらに、韓国釜山周辺の遺跡より出土した土器片21点をともに分析した。

また、分析した土器片のうち27点については蛍光X線分析を実施し、土器胎土の鉱物組成に基づく有意な差と対比できるかを試みた。

2. X線回折分析および電子顕微鏡観察

1. 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1・2表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流、30KV—15mA、スリット系、 $1^\circ-0.15\text{mm}-1^\circ$ の条件で行なった。

走時速度は、 $2^\circ/\text{min}$ 、フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先立って、原土と思われる碎屑性粘土の分析を行なった。X線回折試験は原土、電気炉において700℃、900℃で各々1時間焼成した試料(同一試料を石英ガラスに定着し、原土、700℃、900℃と順次実験を行なう)の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行なった。ただ、900℃以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行なった。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は $\times 45$ 、300、700、1500、4500の5段階で行ない、写真撮影をした。

45～300倍は胎土の組織、700～4500倍は鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2. 実験結果の取り扱い

実験結果は第1・2表胎土性状表に示すとおりである。

第1・2表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行なった結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大概 $2\theta = 10^\circ \sim 20^\circ$ の範囲にあって、チャート全体に腫れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラスとを比較対比し、さらにムライト（Mu）、クリストバーライト（Cr）などの組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

第1図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土について行ない、各胎土の位置を数字で表わした。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト（Mo）、雲母類（Mi）、角閃石（Hb）のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率（%）で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表わしている。

位置分類についての基本原則は第1図に示すとおりである。

II) Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～⑲に分類し、位置分類を数字で記した。記載不能は⑳として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト（Mo）、雲母類（Mi）、緑泥石（Ch）、角閃石（Hb）の内、③成分以上含まれない。⑤Mo、Ch2成分が含まれない。⑥Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMo-Ch、Mi-Hbの組み合わせを表示するものである。Mo-Ch、Mi-Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) \times 100$ と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

菱形ダイアグラム内にある①～⑦はMo、Mi、Ch、Hbの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①-1と①-2は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。

しかし、現在は①として一括して取り扱った。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行なった。

ムライト (Mu) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cr) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- ㉑ 焼成ランクI・・・高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。
- ㉒ 焼成ランクII・・・ムライトとクリストバーライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。
- ㉓ 焼成ランクIII・・・ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。
- ㉔ 焼成ランクIV・・・ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。
- ㉕ 焼成ランクV・・・原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

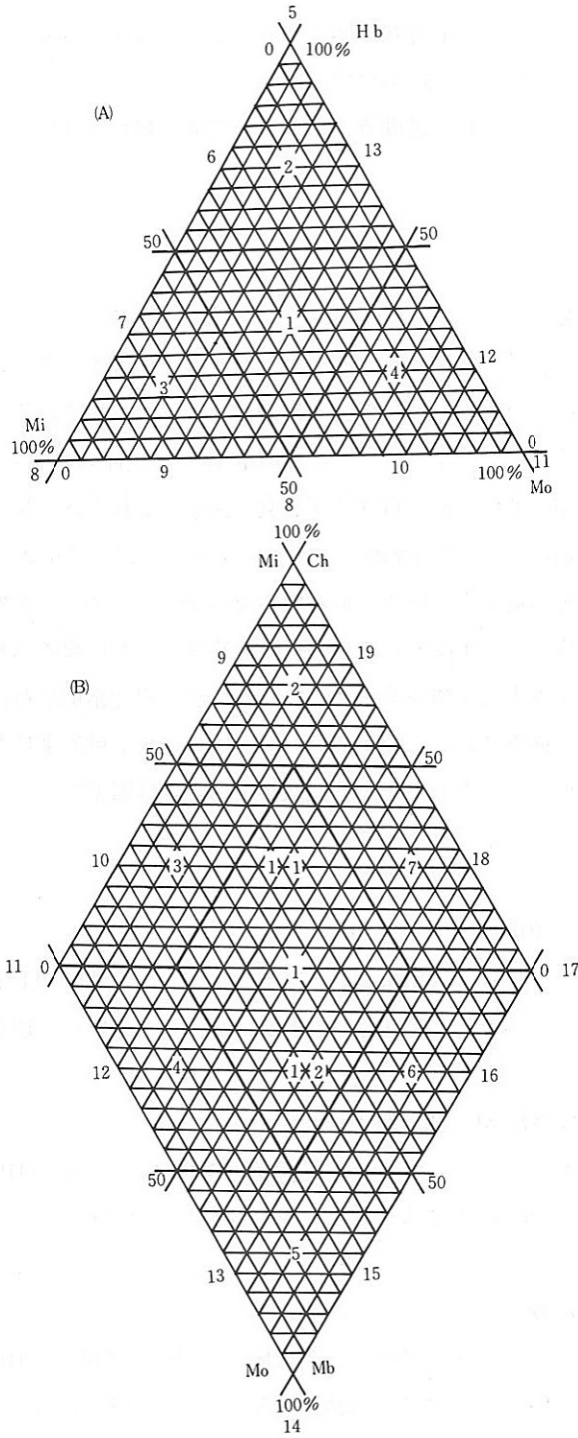
以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重をしめる。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1・2表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組み合わせによって行なった。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大きい文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し表現した。

例えば三角ダイアグラムの①と菱形ダイアグラムの①-1の組み合わせはA、三角ダイアグラムの②と菱形ダイアグラムの②はB、という具合にである。



第1図 三角ダイヤグラム・菱形ダイヤグラム位置分類図

各文字の後の（ ）内の数字は、三角、菱形ダイアグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などとダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3. 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1・2表胎土性状表に示すように、第2図三角ダイアグラム、第3図菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Mの13タイプに分類される。

土器胎土中で最も多いタイプはJタイプで、68個に達し、全体の約半分（124個中）である。次いでKタイプ23個、Mタイプ9個、Gタイプ9個である。これらJ、K、M、Gの4タイプで合計109個に達し、80%がこれらに含まれる。これら4タイプ以外は少数派であり、個々の集中度、あるいは全体の中での集中度が悪く、生産地の違いを暗示していると推察される。焼成ランクは全体に低く、微小ガラスを生成し、原土の組織を残すものが圧倒的に多い。土器の断面写真および土器表面を観察すると”おしろい状”の非常に均質な胎土で構成されるものと、淘汰の悪い胎土で構成されるものがあり、前者は後述する朝鮮半島系と推察されるものであり、後者は畿内系と推定されるものである。朝鮮半島系とは器型による分類で、産地同定するものではない。

Aタイプ……Ku-1、101、原土-5、6、7

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)の4成分よりなる。久宝寺遺跡の原土5、6、7と組成が一致する。

Bタイプ……Ku-14、39、81、92、原土-4

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)の3成分を含み、緑泥石 (Ch)に欠ける。原土-4の組成と一致する。

Cタイプ……Ku-35、65

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)の3成分を含み、緑泥石 (Ch)に欠ける。組成的にはBタイプと同じであるが強度比が異なり、位置分類で異なるためタイプが違っているが、両者は非常に近いものである。

Dタイプ……Ku-13

角閃石 (Hb) の1成分を含み、モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、緑泥石 (Ch) の3成分に欠ける。

Eタイプ……Ku-2、9

雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の3成分よりなり、モンモリロナイト (Mont) の1成分に欠ける。

Fタイプ……Ku-75

雲母類 (Mica) 1成分を含み、モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の3成分に欠ける。

Gタイプ……Ku-27、41、52、63、64、66、67、95、98

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica) の2成分を含み、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の2成分に欠ける。個体数は比較的多いが、砂の混合比および砂の組成においてばらつきがあり、同一集団の製作した土器であるかについては疑問である。

Hタイプ……Ku-91

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、緑泥石 (Ch) の3成分を含み、角閃石 (Hb) に欠ける。

Iタイプ……Ku-21、23

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica) の2成分を含み、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の2成分に欠ける。組成的にはGタイプに類似するが強度比が若干異なるため、タイプ分類は相違するが非常に近い関係にある。

Iタイプ……Ku-3、5、9、10、11、17、18、22、25、26、28、29、30、31'、32、34'、37、38、40、43、44、45、46、48、49、50'、51、54、56、57、58、60、61、62、69、70、71、72、78、80'、82、84、87、88、89、90、93'、97、100、102、103、104、105、106、107'、108、109、112、113、114、115、116、117、119、120、121、122、124、原土-8

モンモリロナイト (Mont) 1成分を含み、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の3成分に欠ける。原土-8と組成は一致する。

これらの胎土はモンモリロナイト (Mont) と $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ よりなる良質な粘土と判断される。朝鮮半島出土土器の大半もこの組成であり、また、久宝寺遺跡の原土とも組成が一致することから判断して、Jタイプ中には朝鮮半島系と久宝寺周辺の畿内系が含まれているものであろう。個体数は62個に達し、全試料の約半分にあたる。Jタイプの中でKu-31、34、50、80、93、107のようにダッシュをうってあるものはJ'タイプとする。(これはモンモリロナイトと緑泥石の組み合わせも記載不能②⑩に含まれるために生じた現象であり、組成的には分ける必要があり、J'タイプとするものである。

Kタイプ……Ku-4、6、7、8、12、15、16、20、24、53、59、73、74、76、77、79、83、86、94、96、118、123

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb) の2成分をふくみ、雲母類 (Mica)、緑泥石 (Ch) の2成分に欠ける。Kタイプは22個あり、Jタイプに次いで多いタイプであるが、石英 (Qt) - 斜長石 (Pl)、斜長石 (Pl) - カリ長石 (K-fels) の関係において明確な集中化は認められず、むしろ、分散傾向にあり、異なる何種類かの集団によって製作されたものが含まれていると判断される。

Lタイプ……Ku-42

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の3成分を含み、雲母類 (Mica) 成分に欠ける。

Mタイプ……Ku-33、36、47、55、68、85、99、110、111

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の4成分に欠ける。この胎土は $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ を主体とするものであろう。

以上A～Mの13タイプについての鉱物組成に基づくタイプ分類上の特徴を述べてきた。

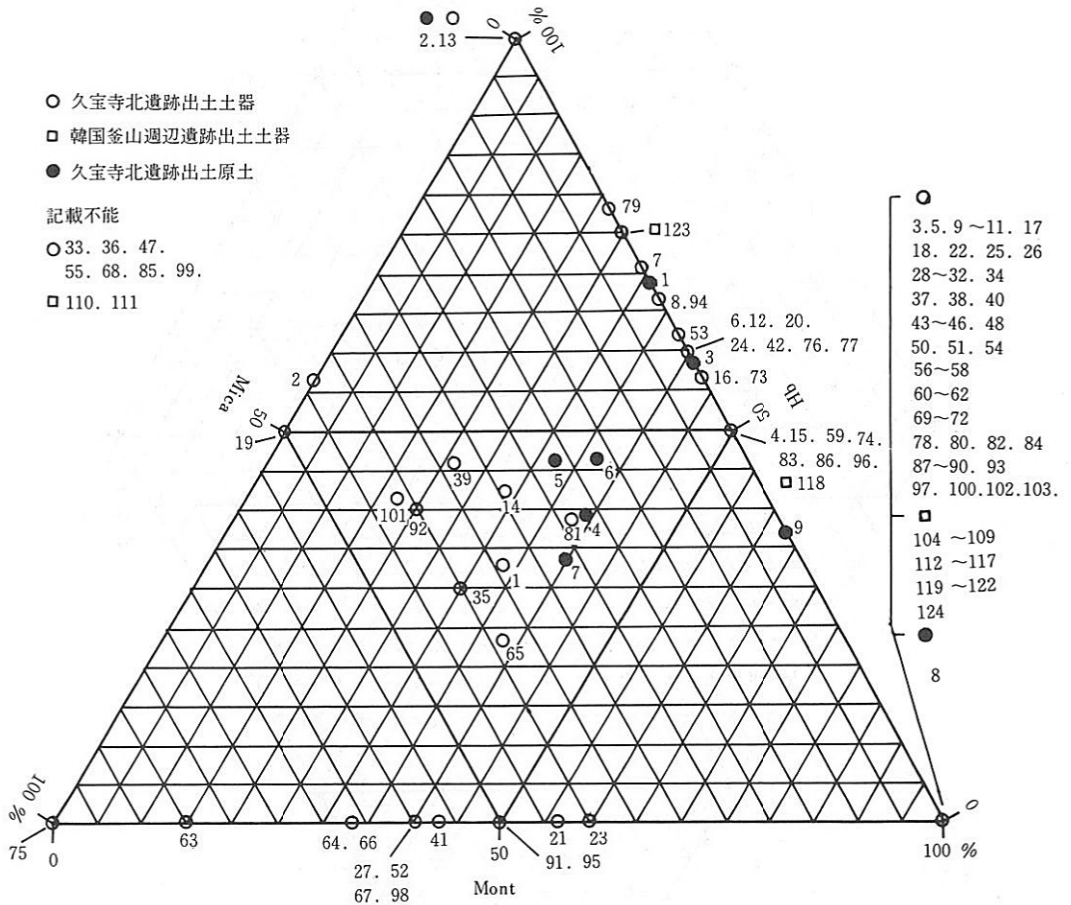
全体的にはこれらのタイプ分類された土器と石英 (Qt) - 斜長石 (Pl)、斜長石 (Pl) - カリ長石 (K-fels) との関連については後の項で述べるが、ここでは各タイプに共通する粘土鉱物上の組成についてふれておく。

土器胎土全体を通じていえることは圧倒的にモンモリロナイト (Mont) を含む原土を利用していることである。

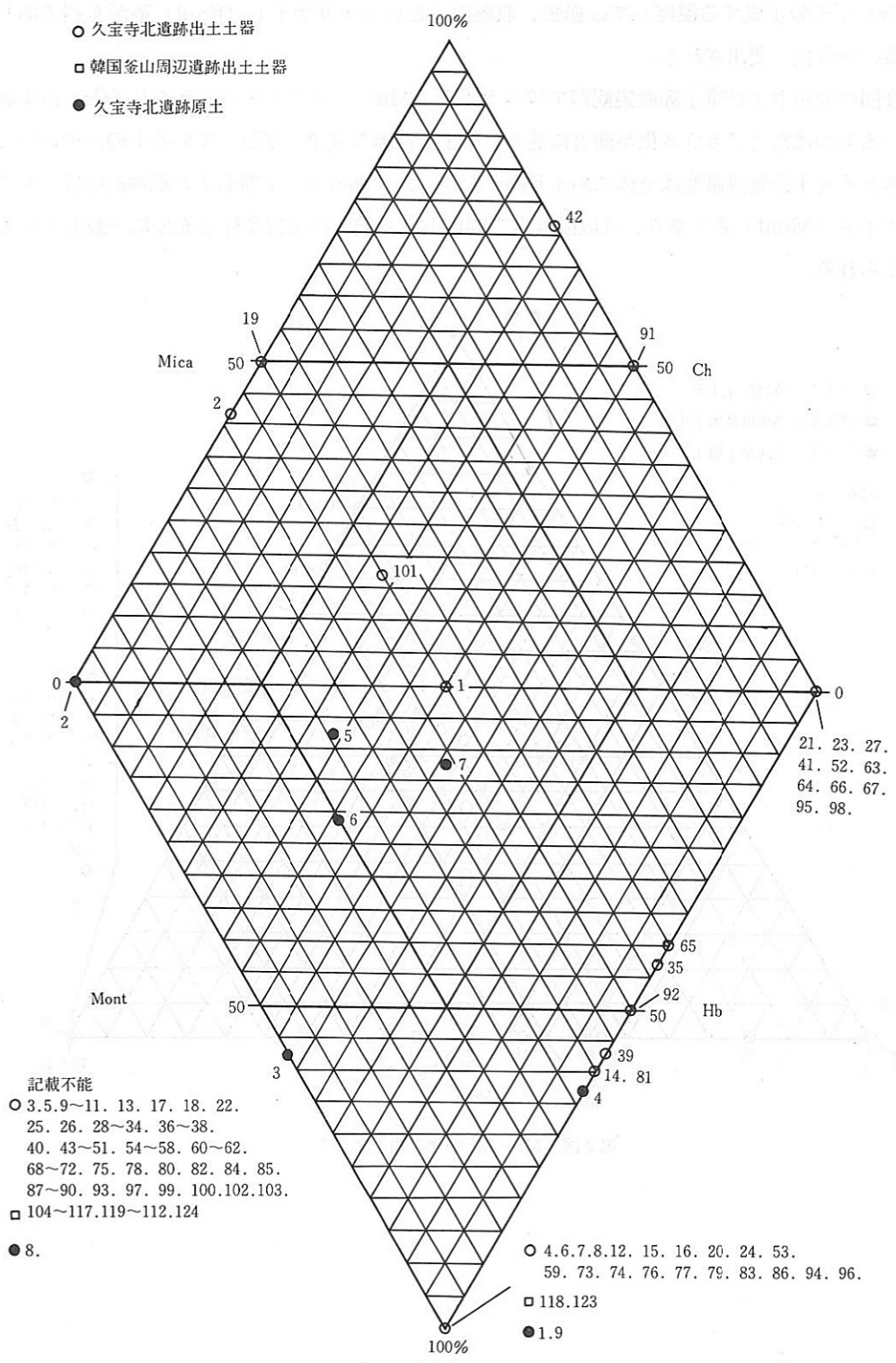
このことは土器焼成温度と深い関わりがあると推察される。土器焼成温度が低い状態 [ムライト (Mu) - クリスタバーライト (Cr) が生成しない温度] では粘土の粘性に依存する部分が大きかったものと考えられる。土器焼成温度が高い状態 [ムライト (Mu) - クリスタバーライト

(Cr) が充分生成する温度] では膨張、収縮の少ないカオリナイト (Kaol) 系が有利であり、材質の均質化が要求される。

今回の分析および電子顕微鏡観察ではムライト (Mu) - クリソトバーライト (Cr) が生成しているものはなく、ガラス化が顕著に進み、原土の組織を完全に變形しているものが少ないことを考えると土器焼成温度は全体にあまり高くなかったであろう。土器胎土の鉱物組成はモンモリロナイト (Mont) 系であり、焼成温度との間における前記の前提条件と充分に一致していると考えられる。



第2図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム



第3図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (nm)											ガラス	備考				
			Mo-Mi-Hb	Mo-ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	K-fels							
焼成ランク Mu I	Ku-1	A	Ⅲ	①	①	3	3	3	3								107	31	18	細粒	粗粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性の粘土
Mu-cr II	2	E	Ⅳ	⑥	⑨			3	4	2				4			120	39	17	微小	中粒、Qt、Pl
Cr-glass III	3	J	Ⅲ	⑪	⑫	3											134	32	13	細粒	〃
glass IV	4	K	Ⅳ	⑬	⑭	4		4									135	14	13	微小	細粒、Qt、Pl
原土 V	5	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											127	7	7	〃	〃
Mo-モンモリロナイト	6	K	Ⅳ	⑬	⑭	2		3						3			147	13	8	〃	〃
Mi-雲母類	7	K	Ⅲ	⑬	⑭	2		5									106	18	10	細粒	〃
Hb-角閃石	8	K	Ⅲ	⑬	⑭	2		4									131	16	23	〃	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
ch-緑泥石	9	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											112	18	8	微小	粗粒、Qt、Pl
Ka-カオリナイト	10	J	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑫	3											115	5	3	葉片状	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった均質な砕屑性粘土
Ha-ハロサイト	11	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											121	36	20	微小	中～細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
Au-普通輝石	12	K	Ⅲ	⑬	⑭	2		3			4						120	13	11	細粒	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性粘土
Hy-紫蘇輝石	13	D	Ⅳ	⑮	⑯			7									50	35	15	微小	〃 砕屑性粘土
Qt-石英	14	B	Ⅳ	⑰	⑱	2		2	3								143	12	7	〃	中粒、Qt、Pl、
Pl-斜長石	15	K	Ⅳ	⑬	⑭	2		2									124	25	15	〃	粗粒、Qt、Pl、粒径のそろった均質な砕屑性粘土
Cr-クリストバライト	16	K	Ⅳ	⑬	⑭	3		4									114	15	8	〃	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
Mu-ムライト	17	J	Ⅲ	⑪	⑫	3											99	18	11	細粒	〃
Ve-バーミュクライト	18	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											110	22	9	微小	〃 淘汰の悪い砕屑性粘土
	19	E	Ⅲ	⑥	⑨			3	3	4	(3)						110	13	8	細粒	〃 砕屑性粘土
	20	K	Ⅳ	⑬	⑭	2		3									111	20	9	微小	〃
組成分類	21	I	Ⅲ～Ⅳ	⑩	⑬	4		3									124	13	20	細粒～葉片	〃
(Mo-Mi-Hb)	22	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											127	11	12	微小	〃
三角ダイヤグラム	23	I	Ⅲ～Ⅳ	⑩	⑬	3		2									107	15	10	細粒～葉片	〃
(Mo-ch)	24	K	Ⅳ	⑬	⑭	2		3									144	8	12	微小	中～粗粒、Qt、Pl、
(Mi-Hb)	25	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											109	17	11	〃	粗粒、Qt、Pl、淘汰の悪い砕屑性粘土
菱型ダイヤグラム	26	J	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑫	2											127	13	10	葉状	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性粘土
	27	G	Ⅳ	⑨	⑬	5		7									103	7	0	微小	中～細粒、Qt、Pl、淘汰の悪い砕屑性粘土
	28	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											134	12	12	〃	粒径のそろった均質な砕屑性粘土
	29	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											100	20	11	〃	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	30	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											96	18	10	〃	〃
	31	J'	Ⅳ	⑪	⑫	2			3								117	13	11	〃	粗粒、Qt、Pl
	32	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											154	0	6	〃	細粒、Qt、Pl
	33	M	Ⅳ	⑬	⑭												110	12	7	〃	〃
	34	J'	Ⅳ	⑪	⑫	2			2								109	9	5	〃	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	35	C	Ⅳ	⑰	⑱	3		4	3								99	20	12	〃	細粒、Qt、Pl
	36	M	Ⅳ	⑬	⑭												131	22	11	〃	〃
	37	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											159	23	22	〃	粗粒、Qt、Pl
	38	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											126	30	16	〃	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
	39	B	Ⅳ	⑰	⑱	2		3	4								123	31	12	〃	〃
	40	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											126	10	9	〃	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	41	G	Ⅳ	⑨	⑬	3		4									107	13	7	〃	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった均質な砕屑性粘土
	42	L	Ⅳ	⑬	⑭	2		3	5								97	17	8	〃	〃 砕屑性粘土
	43	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											107	19	9	〃	粗粒、Qt、Pl、
	44	J	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑫	3											94	12	11	〃	中～細粒、Qt、Pl
	45	J	Ⅲ～Ⅳ	⑪	⑫	2											133	18	11	細粒	細粒、Qt、Pl
	46	J	Ⅱ～Ⅲ	⑪	⑫	2											111	8	7	〃	葉状
	47	M	Ⅲ	⑬	⑭												120	9	27	細粒	中～細粒、Qt、Pl
	48	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											125	20	13	微小	細粒、Qt、Pl、淘汰の悪い砕屑性粘土
	49	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											123	17	11	〃	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	50	J'	Ⅲ	⑪	⑫	3			3								105	26	8	細粒	〃
	51	J''	Ⅲ～Ⅳ	⑪	⑫	2											95	16	8	〃	〃
	52	G	Ⅲ～Ⅳ	⑨	⑬	2		3						4			131	9	8	〃	中～細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
	53	K	Ⅳ	⑬	⑭	3		5									91	24	18	微小	〃 淘汰の悪い砕屑性粘土
	54	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											112	0	5	〃	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
	55	M	Ⅳ	⑬	⑭												102	6	6	〃	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	56	J	Ⅲ	⑪	⑫	3											66	27	9	細粒	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性粘土
	57	J	Ⅳ	⑪	⑫	4											84	12	12	微小	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	58	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											66	19	14	〃	〃
	59	K	Ⅳ	⑬	⑭	3		3									60	15	6	〃	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性凝灰質粘土
	60	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											126	0	0	〃	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	61	J	Ⅳ	⑪	⑫	2											125	5	11	〃	〃
	62	J	Ⅳ	⑪	⑫	3											128	21	17	〃	〃
	63	G	Ⅳ	⑨	⑬	2		11									50	15	14	〃	細粒、Qt、Pl、淘汰の悪い砕屑性粘土
	64	G	Ⅳ	⑨	⑬	2		4									116	19	13	〃	中～細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
	65	C	Ⅲ～Ⅳ	①	⑬	3		3	2								139	18	15	細粒	〃 均質な砕屑性粘土
	66	G	Ⅱ～Ⅲ	⑨	⑬	2		4									119	14	11	葉状	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土

第1表 胎土性状表(1)

試 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)										ガラス	備 考				
			Mo-Mi-Hb	Mo-ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	K-fels						
Ku-67	G	IV	⑨	⑬	2	3										80	12	12	微小	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
68	M	II~III	⑬	⑳												143	12	11	葉状	中~細粒、Qt、Pl
69	J	IV	⑪	⑳	2											117	8	8	微小	粒径のそろった均質な砕屑性粘土
70	J	II~III	⑪	⑳	2											92	8	6	葉状	砕屑性粘土
71	J	II~III	⑪	⑳	2											122	13	8	*	細粒、Qt、Pl
72	J	II~III	⑪	⑳	2											118	10	6	*	中~細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
73	K	III~IV	⑬	⑲	3		4									109	8	7	細粒	中粒、Qt、Pl、粒径のそろった均質な砕屑性粘土
74	K	II~III	⑬	⑲	2		2									127	0	9	葉状	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
75	F	IV	⑧	⑳		4										117	12	10	微小	粗粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
76	K	III	⑬	⑲	2		3									88	9	6	葉片状	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
77	K	II~III	⑬	⑲	2		3		(5)							107	6	6	葉状	粗粒、Qt、Pl
78	J	II~III	⑪	⑲	3											116	10	13	*	中粒、Qt、Pl
79	K	III	⑬	⑲	2		7									38	16	10	葉片状	細粒、Qt、Pl
80	J	IV	⑪	⑲	2			3								108	12	10	微小	中~細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性粘土
81	B	IV	①	⑲	3	2	3									117	22	10	*	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
82	J	III	⑪	⑲	3											110	19	12	葉片状	*
83	K	IV	⑬	⑲	3		3									113	9	6	微小	粗粒、Qt、Pl、淘汰の悪い砕屑性粘土
84	J	IV	⑪	⑲	3											115	14	13	*	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
85	M	IV	⑬	⑲						3						103	11	14	*	粗粒、Qt、Pl、砕屑性凝灰質粘土
86	K	IV	⑬	⑲	3		3									80	6	6	*	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
87	J	IV	⑪	⑲	2											116	17	16	*	*
88	J	II~III	⑪	⑲	3											119	3	13	葉~葉片状	中~細粒、Qt、Pl
89	J	IV	⑪	⑲	2											144	14	12	微小	均質な砕屑性粘土
90	J	IV	⑪	⑲	2											115	20	12	*	細粒、Qt、Pl、砕屑性凝灰質粘土
91	H	IV	⑨	⑲	3	3		3			3					100	18	9	*	*
92	B	IV	①	⑲	2	4	4									90	23	0	*	中~細粒、Qt、Pl
93	J	IV	⑪	⑲	2			2								62	13	14	*	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
94	K	IV	⑬	⑲	2		4									75	15	48	*	砕屑性粘土
95	G	IV	⑨	⑲	3	3					3					109	7	7	*	中~細粒、Qt、Pl
96	K	III~IV	⑬	⑲	3		3									118	5	7	細粒	粗粒、Qt、Pl
97	J	IV	⑪	⑲	4						4					154	30	13	微小	*
98	G	IV	⑨	⑲	2	3										87	12	8	*	中~細粒、Qt、Pl
99	M	IV	⑬	⑲												138	6	7	*	*
100	J	IV	⑪	⑲	3											123	19	10	*	細粒、Qt、Pl
101	A	IV	①	⑲	2	5	5	4								113	17	12	*	淘汰の悪い砕屑性粘土
102	J	IV	⑪	⑲	3											94	19	10	*	砕屑性凝灰質粘土
103	J	IV	⑪	⑲	3											97	11	6	*	淘汰の悪い砕屑性粘土
平島-104	J	II~III	⑪	⑲	2											70	6	10	葉状	中粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
105	J	II~III	⑪	⑲	3						4					150	9	19	*	細粒、Qt、Pl
106	J	III~IV	⑬	⑲	2					3						138	13	14	細粒	中~細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土
107	J	III~IV	⑬	⑲	2			2			3					126	7	9	*	細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土
108	J	IV	⑪	⑲	3											82	8	12	微小	淘汰の悪い砕屑性粘土
109	J	IV	⑪	⑲	2						3	96	4	5	*	*	*	*	*	
110	M	III	⑬	⑲								84	3	0	葉片状	*	*	*	均質な砕屑性粘土	
111	M	III~IV	⑬	⑲						3		87	10	12	細粒	*	*	*	中~細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土	
112	J	III~IV	⑬	⑲	2							67	13	8	*	*	*	*	細粒、Qt、Pl	
113	J	III~IV	⑬	⑲	2							77	15	15	*	*	*	*	中~細粒、Qt、Pl、均質な砕屑性粘土	
114	J	II~III	⑪	⑲	2							91	3	4	葉状	*	*	*	細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土	
115	J	III	⑬	⑲	2							109	4	5	細粒	*	*	*	*	
116	J	IV	⑪	⑲	2						3	105	4	6	微小	*	*	*	均質な砕屑性粘土	
117	J	IV	⑪	⑲	2							61	0	7	*	*	*	*	*	
118	K	III~IV	⑬	⑲	2		2					104	11	0	細粒	*	*	*	*	
119	J	III~IV	⑬	⑲	3							100	6	9	*	*	*	*	*	
120	J	III	⑬	⑲	2							114	10	16	葉片状	*	*	*	粗粒、Qt、Pl、砕屑性粘土	
121	J	IV	⑪	⑲	3							113	5	8	微小	*	*	*	細粒、Qt、Pl、粒径のそろった砕屑性粘土	
122	J	III	⑬	⑲	2							130	4	9	細粒	*	*	*	中~細粒、Qt、Pl、砕屑性粘土	
123	K	III~IV	⑬	⑲	2		6					58	23	24	*	*	*	*	*	
124	J	IV	⑪	⑲	2							134	10	15	微小	*	*	*	均質な砕屑性粘土	
原土-1	K		⑬	⑲	6		13		7			71	51	9						
2			⑤	⑩			15	10				66	51	18						
3			⑬	⑲	11			20	8			94	65	42						
4	B		①	⑲	7	4	7		7			48	12	0						
5	A		①	⑲	8	5	11	13				40	11	0						
6	A		①	⑲	7	3	9	8			4	45	26	0						
7	A		①	⑲	6	4	5	5				87	19	4						
8	J		⑪	⑲	2							26	9	0						
9			⑬	⑲	7		4		5			30	12	0						

第2表 胎土性状表(2)

3-2 斜長石 (Pl) - カリ長石 (K-fels) の相関について

斜長石 (Pl) とカリ長石 (K-fels) の相関は第4図に示すようにA~Dの4つの領域にわたっている。

B領域は主に韓国釜山周辺の遺跡より出土した土器が分布し、C及びD領域には久宝寺遺跡出土の土器が分布している。B領域に分布するものは斜長石 (Pl) の強度がカリ長石 (K-fels) の強度よりも低く、しかも一定の勾配 ($y = x$ に平行する) を有している。一般的に韓国の花崗岩類は日本の花崗岩類に比してカリ長石が多いことはよく知られている。B領域はこの地質的な背景をよく反映していると考えられる。

同様の傾向はC領域においても認められる。

C領域はB領域と同じように一定の勾配 ($y = x$ に平行する) を有しており、非常にB領域に類似しているのが特徴である。これと比較してD領域のものは集塊状を呈し、一定の勾配を有する傾向はうかがわれぬ。すなわち、B、C領域のものは全体に類似する傾向にあるが、D領域のものは全く異なった傾向にある。このことは何を意味するのであろうか。

例えばB領域における勾配が常に一定であるということは斜長石とカリ長石の比が一定な砂を入れていることを物語っている。すなわち、座標軸に近いものは混入された同質の砂の量が少なく、座標軸より遠ざかるに従って砂の量が増加していることを意味している。同様のことがC領域についてもいえる。このような砂における斜長石とカリ長石の比率は純然たる後背地の地質に由来するものである。同じ勾配を有するBとCは類似した地質条件のもとでの砂を意味すると考えられ、C領域のものは朝鮮半島において製作された土器と材質的に類似性が高い。また、A領域に属するものはカリ長石が斜長石に比して充分に多く、朝鮮半島産の可能性が高い。

D領域の土器に見られる傾向は集塊状であり、斜長石の強度がカリ長石の強度に比して高く、一定の勾配を有さないことから判断して、畿内産の可能性が高い。

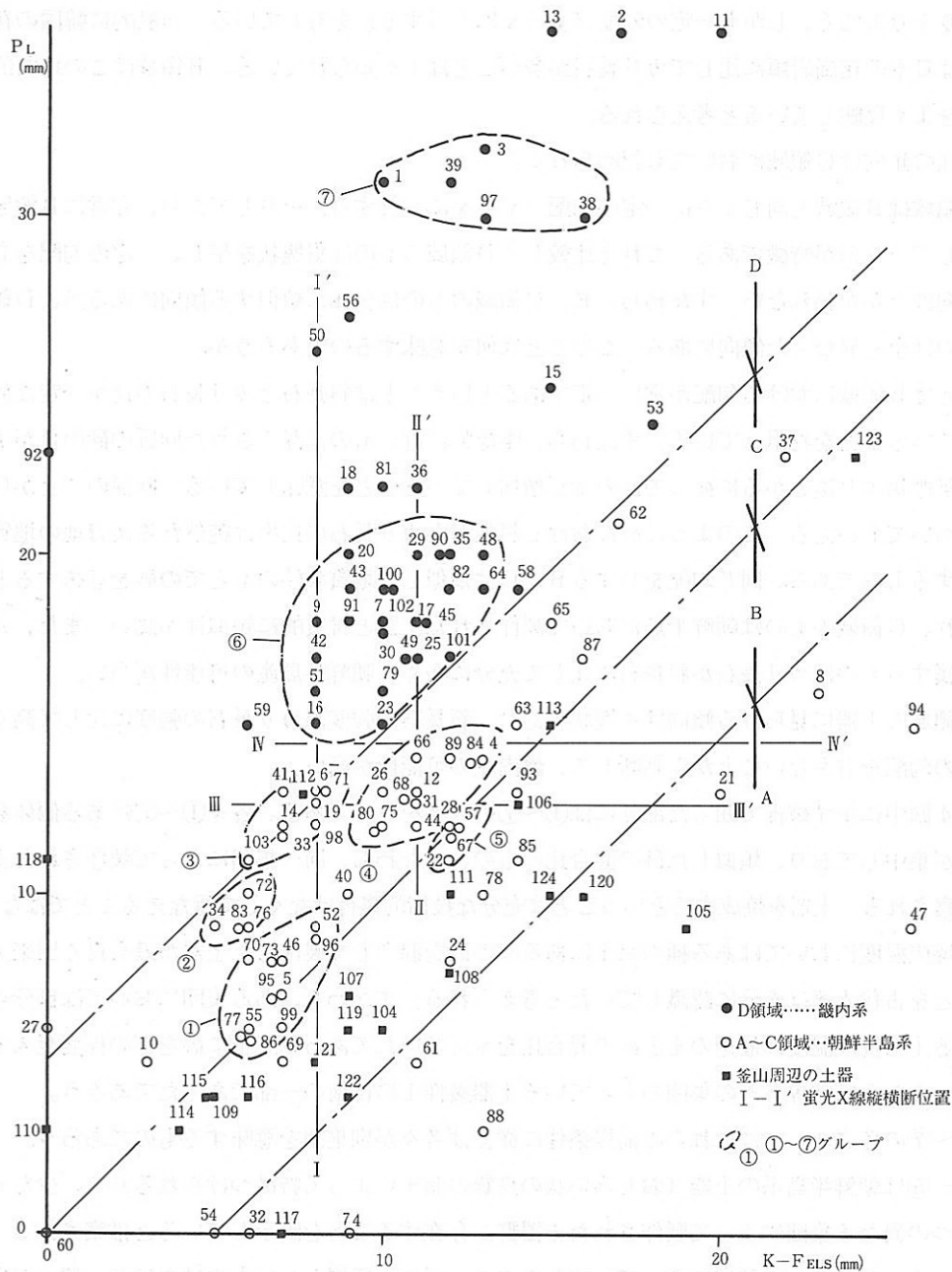
第4図中に示す破線で囲った部分には①~⑦の数字をうってある。各々①~⑦はある個体数のものが集中しており、類似した砂の混合比のもの、すなわち、同一集団によって製作された土器と推察される。土器を焼成するということが十分な技術的裏付けなくして行なえることではなく、ある焼成温度においてはある種の原土にある率の砂を混合して製作した土器が最も良く出来上がることを古代人達は充分に認識していたと考えられる。すなわち、ある集団においては自分達の有する土器焼成温度に最適の土と砂の混合比をもっていたであろう。土に砂をどの程度混入するかということは彼等各々の集団のもっている土器製作上の技術の一部であったであろう。

①~⑦の各グループはこれらの前提条件に従えば各々が別集団を意味するものであろう。

①~⑤は朝鮮半島系の土器 (おしろい状の良質の胎土によって特徴づけられる) で、少なくとも5つの異なる集団によって製作された土器群が存在することを暗示していると推察される。さらに、A~Cの3つの領域にあっていずれのグループにも所属しないものはやはり、個々が別集団を各々代表しているものであろう。

D領域のものは大きく⑥と⑦の2つのグループに分かれる。⑥グループは第4図中最も個体数が多く、同一集団（同一技術系にある）によって製作された可能性が最も高く、原土-8の組成と一致することから推察して、久宝寺遺跡周辺で製作された可能性は十分に考えられる。

同様に⑦グループも類似した砂を使用しており、同一集団によって製作されたものであろう。



第4図 Pl-K-fels相関図

3-3 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

第5図は石英 (Qt) と斜長石 (Pl) の相関を示したものである。

砂における石英と斜長石の比も前項の斜長石とカリ長石の相関で述べたように後背地の地質条件を反映して、各流域においてある類似した比率を示す地域が存在すると考えられる。これら類似した比率を有する砂をある一定の量比をもって原土に混合せしめるのは一つの集団の持つ技術の1つであることは前項で述べた通りである。

第5図で明らかなように第4図でD領域としたものとCおよびB、A領域としたものは明瞭に分かれる。このことは斜長石-カリ長石の相関と同じように石英-斜長石においても高い相関性があることを示している。すなわち、石英-斜長石-カリ長石の間で非常に高い相関性が存在することを示している。

砂における石英：斜長石：カリ長石の比は各地域あるいは各流域において独自の固有の比率を有することを物語っていると考えられる。

C領域以下B、A領域に含まれるものを朝鮮半島系とした根拠はカリ長石を多く含むことであったが、この基準によって区分された朝鮮半島系と畿内系の関係は第5図においても十分に反映され、その境界は全く一致するものである。

また、第4図中に示した①～⑦のグループ分けも同様に第5図に示してある。第5図中の⑥と⑦グループは第4図中の⑥と⑦とほとんど同じである。C領域にある①～⑤のグループも同様の集中度を示すが、第5図に記載するように、各グループのうちいくつかは別の小グループを形成し、第4図の同一グループ内に少なくとも2つあるいはそれ以上のグループが存在しているようである。すなわち、石英と斜長石の間での分類では若干その比率の異なる砂を使用していることであり、近接する異なる集団によって作られたものが含まれていることを暗示しているようである。これら各グループに所属しないD領域のものは第5図でもD領域にあり、CおよびB、A領域のものも同様に第5図のC領域に入っている。この分散した各々の土器は現在①～⑦のグループ以外で製作されたものであり、各々がそれぞれ別の集団を代表しているものとすれば、D領域のものでは久宝寺遺跡周辺のいくつかの別集団によって製作されたものが入っていることを意味する。

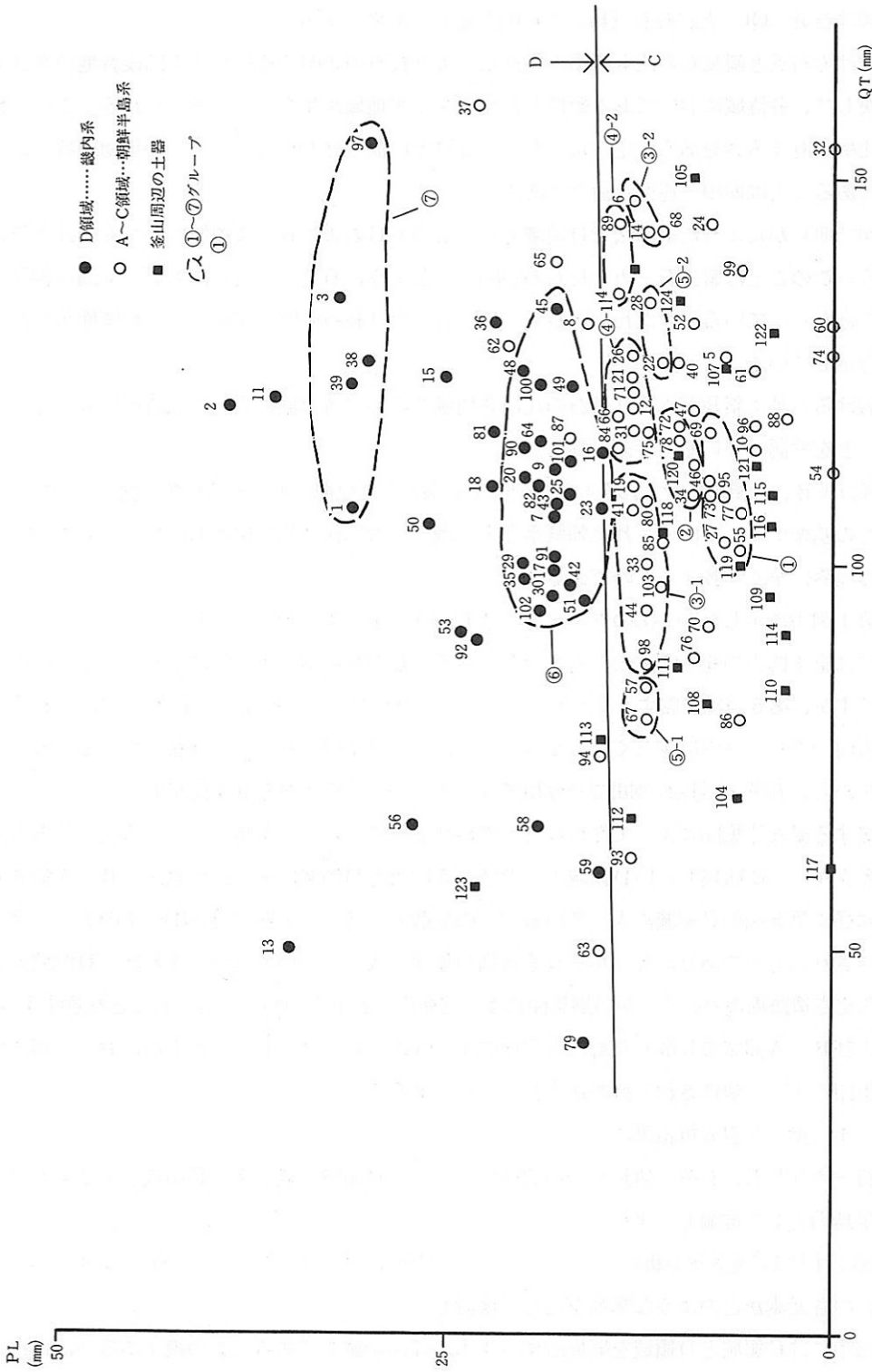
CおよびB、A領域の分散したものは同様に①～⑤のグループが存在した土地において周辺地域の別集団によって製作され、持ち込まれたものであろう。

3-4 蛍光X線分析結果について

斜長石-カリ長石、石英-斜長石の相関性に基づいてD領域は畿内系、C領域およびそれ以下は朝鮮半島系として推論してきた。

この仮説に対して蛍光X線分析によるルビヂウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、ジルコニウム (Zr) の各元素がどのような挙動をとるか検討した。

第4図中にはC領域とD領域を縦横断する4本の線が記載してある。この線上あるいは線に近いところに位置する土器胎土27個に対して蛍光X線分析を行なった。各胎土のルビヂウム、ス



第5図 Qt-P1 相関図

トロンチウム、ジルコニウムの強度は第3表に示す通りである。

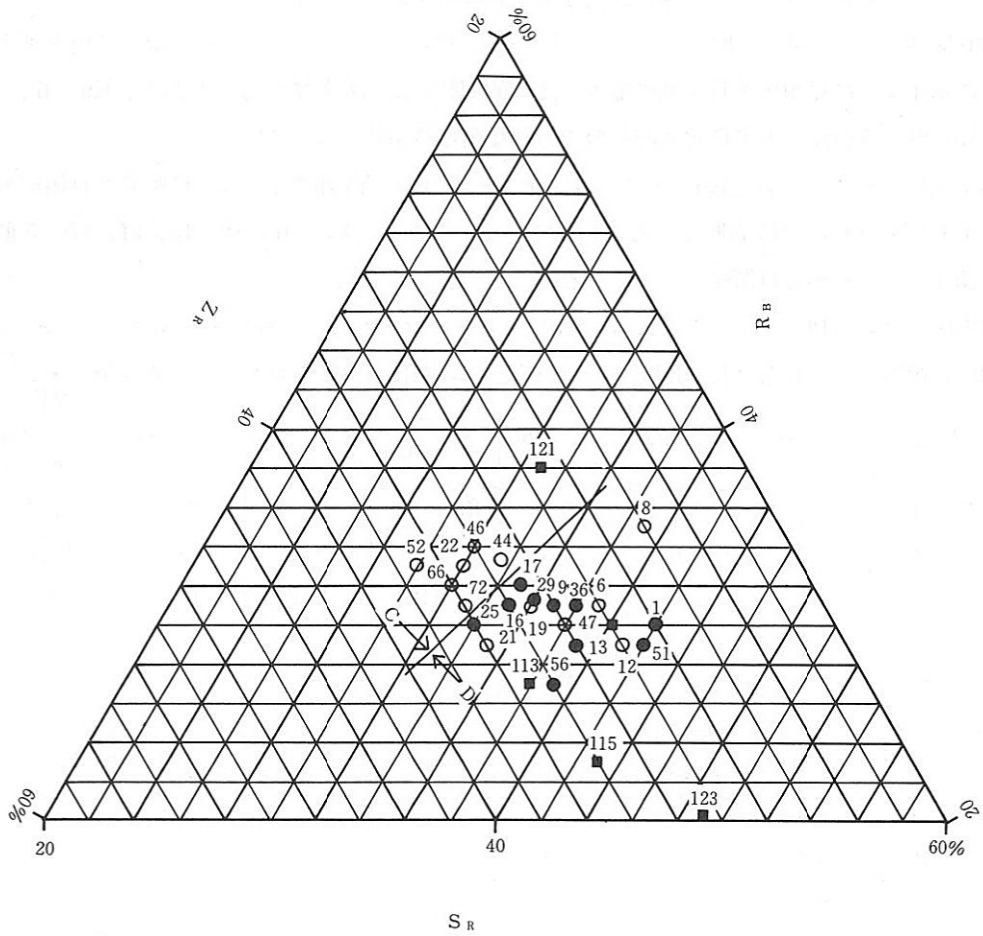
第6図ルビヂウム (Rb) - ストロンチウム (Sr) - ジルコニウム (Zr) 三角ダイアグラムに示すようにC領域とD領域の境界は比較的明瞭にあらわれている。しかし、Ku-6、8、12、19、21の5個体は本来C領域のものでありながらD領域に入っている。

第7図はルビヂウム (Rb) - ストロンチウム (Sr) 相関図である。C領域とD領域の境界は第6図と同様に比較的明瞭にあらわれている。しかし、Ku-6、12、19、21、47の5個体はC領域でありながらD領域に入っている。

第9図斜長石 (Pl) - ルビヂウム (Rb) ・ストロンチウム (Sr) ・ジルコニウム (Zr) 相関図、第8図カリ長石 (K-fels) - ルビヂウム (Rb) ・ストロンチウム (Sr) ・ジルコニウム (単位 mm)

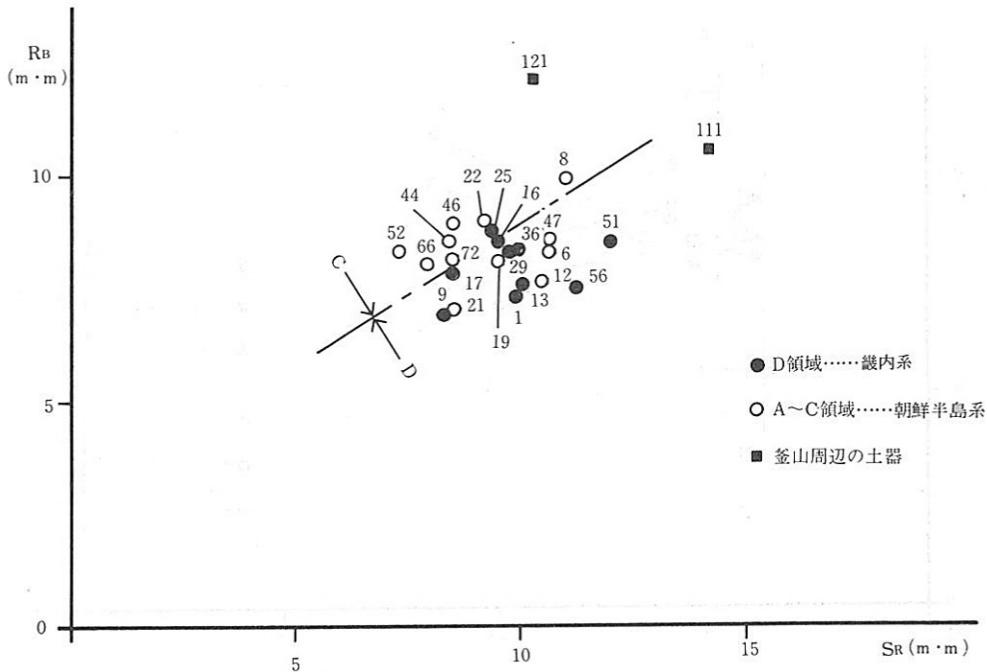
サンプル番号	(Zr) ジルコニウム	(Sr) ストロンチウム	(Rb) ルビヂウム	サンプル番号	(Zr) ジルコニウム	(Sr) ストロンチウム	(Rb) ルビヂウム
Ku- 1	6.6	9.9	7.3	Ku-(115)	(2.6)	(3.3)	(1.8)
6	8.1	10.6	8.3	121	9.2	10.3	12.1
8	7.4	11.0	9.9	(123)	(3.0)	(4.8)	(2.0)
9	7.1	8.3	6.9				
12	7.8	10.5	7.6				
13	8.0	10.0	7.4				
16	9.4	9.5	8.6				
17	8.0	8.5	7.0				
19	8.6	9.5	8.1				
21	8.6	8.5	7.0				
22	10.3	9.2	9.0				
25	10.0	9.4	8.6				
29	9.0	9.7	8.3				
36	8.3	9.9	8.3				
44	8.3	8.4	8.5				
46	9.0	8.5	8.9				
47	8.9	10.6	8.6				
51	8.5	12.0	8.5				
52	9.1	7.3	8.3				
56	9.8	11.2	7.5				
66	8.5	7.9	8.0				
72	9.4	8.5	8.1				
111	10.5	14.2	10.5				
(112)	(4.2)	(4.6)	(3.2)				

第3表 蛍光X線結果表 () はフルスケールの値が異なる。



- D領域……畿内系
- A～C領域…朝鮮半島系
- 釜山周辺の土器

第6図 Rb-Sr-Zr 三角ダイヤグラム



第7図 Rb-Sr相関図

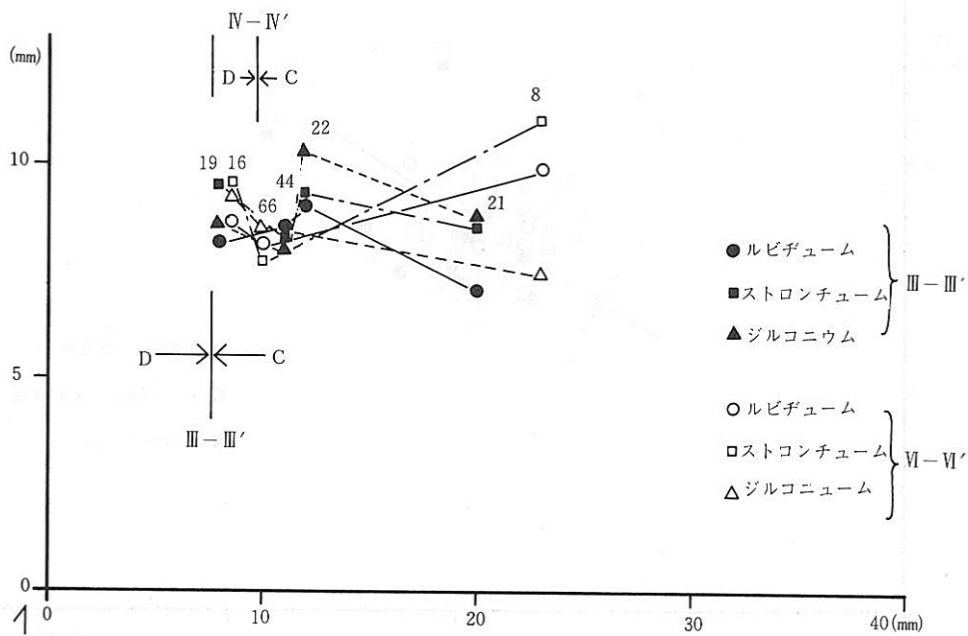
ニウム (Zr) の相関図は第4図中の4本の縦断、横断の中のC領域とD領域の境界を挟んで各元素ごとに検討を加えたものである。

第9図は縦断I-I'、II-II'の各元素に記載してある。図でも明らかなようにC領域とD領域の境界を挟んでI-I'、II-II'縦断ともに各元素で有意な差は認められない。

第8図は横断III-III'、IV-IV'の各元素ごとに記載してある。この図も第9図と同様に境界線を挟んで有意な差は認められない。

以上で各元素ごと、2元素、3元素の組み合わせの検討を行ない、C領域とD領域の境界および各領域に属する土器胎土に有意差があるかを検討した。その結果2元素、3元素の組み合わせでは境界が比較的明瞭であり、有意な差が存在することが予想された。この中でKu-6、8、12、19、21、47の6個はC領域にあるものでありながらD領域に入るとい現象が認められた。

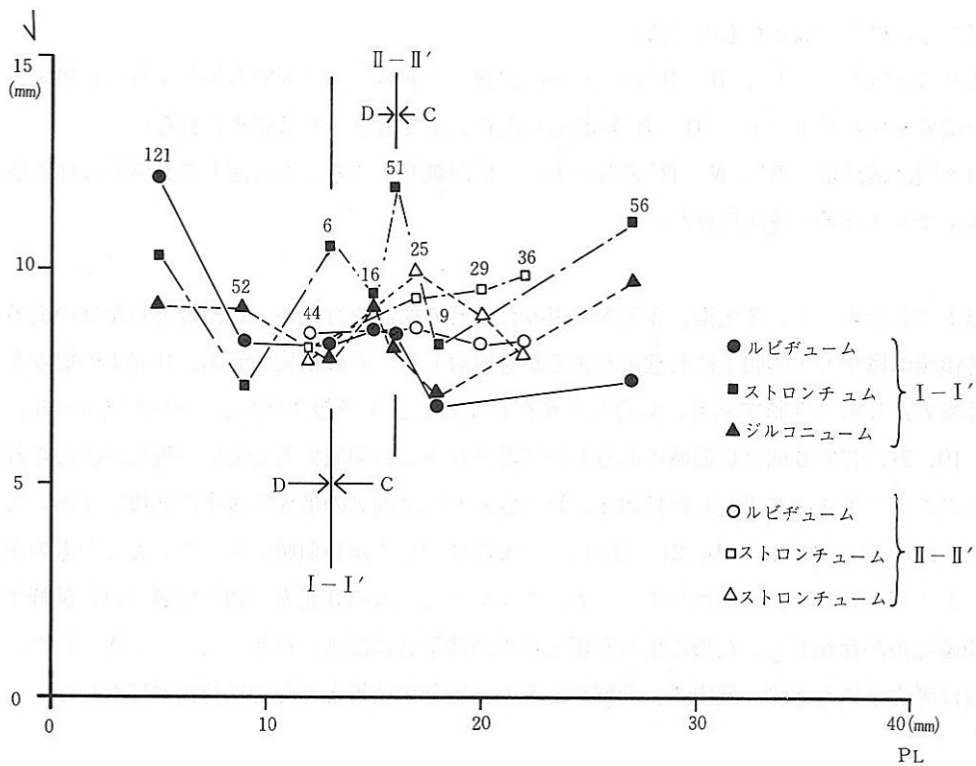
このことは第4図で設定したC領域、D領域あるいは両者の境界の設定に間違いがあって、そのためKu-6、8、12、19、21、47のようにC領域のものがD領域に入ってしまったものか、それともルビヂウム、ストロンチウム、ジルコニウムの3元素の間では畿内系と朝鮮半島系で明確な差が存在しないために生じた現象なのかは筆者にはよくわからない。この点についての検討は考古学にもとづく畿内系、朝鮮半島系の土器分類結果との照合に待たねばならない。



第8図 K-fels-Zr · Sr · Rb 相関図

K-FELS

RB
SR
ZR



第9図 Pl-Rb · Sr · Zr 相関図

PL

4. まとめ

久宝寺遺跡出土土器のうち韓式土器について分析を行ない、畿内系、朝鮮半島系のいずれに属するものであるのかの検討を行ない各土器を分類した。

- ① 斜長石—カリ長石、石英—斜長石の相関よりA～Dの4つの領域に分け、韓国釜山周辺遺跡出土土器片を基準として、C領域以下のものは朝鮮半島系、D領域のものは畿内系と仮定した。
- ② この仮定に基づいて土器の断面写真を検討すると“おしろい”状の均質な断面を有するものは朝鮮半島系に多く、淘汰の悪い不均質な感じの断面は畿内系に多い傾向が伺われた。
- ③ 電子顕微鏡観察では久宝寺遺跡出土土器の大半は焼成ランクⅣである。すなわちガラスは微小で、原土（素地土）の組織を完全に残すものが多いということである。ガラスが葉状～葉片状を呈する焼成ランクⅡあるいはⅡ～Ⅲのものは少ない。釜山周辺の土器はこれに比較して細粒ガラスが生成する焼成ランクⅢ～Ⅳのものが多く、久宝寺遺跡出土土器よりは若干焼成温度が高いようである。
- ④ 久宝寺遺跡出土土器103点と釜山周辺遺跡土器21点の胎土の鉱物組成を見るとモンモリロナイト（Mont）をふくむ粘土を使用し、カオリナイト（Kaol）を含む粘土は非常に稀である。このことは土器焼成温度と深い関係があるものと推察される。すなわち、土器焼成温度が低い状態ではモンモリロナイトの有する粘性が土器を良質に焼くには有利であることを物語っているものであろう。カオリナイト系の粘土の場合は焼成温度が低い状態では粘性がなく、全体に脆弱となると予想され、このためモンモリロナイト系を利用しているのであろう。土器焼成温度の上昇（窯などの発明による）によって大量のガラスが生成する条件ができた時、膨張、収縮の少ないカオリナイト系が有利となり、モンモリロナイト系から漸次カオリナイト系に移っていったものであろう。
- ⑤ 分析した土器のうちモンモリロナイトを含まないものは12個と非常に少なく、モンモリロナイトを含むものはJタイプ（モンモリロナイト1成分）に代表され（68個）、その他モンモリロナイトと雲母類、角閃石の組み合わせを含めると90%以上に達し、④の現象を裏付けている。
- ⑥ 蛍光X線分析によるルビヂウム、ストロンチウム、ジルコニウムの各元素によるC領域とD領域および両者の境界についての検討では2元素、3元素の関連性において有意

な差が得られたが、各元素ごとでは有意な差は得られなかった。また、2元素、3元素の検討の中でもKu-6、8、12、19、21、47の6個は斜長石-カリ長石相関図ではC領域にあるものがD領域に入っており、若干疑問が残った。

- ⑦ 今回の分析結果に基づいて畿内系はD領域、朝鮮半島系はC領域およびそれ以下と分類したのは全体の鉱物組成の傾向によるものであり、少数派としてD領域にありながら朝鮮半島系、C領域およびそれ以下にありながら畿内系のもが存在する可能性は十分に考えられる。これら少数派については考古学的手法による分類との照合によらねばならないであろう。
- ⑧ 久宝寺南遺跡出土土器のうちⅣ式に属するもの（胎土が良質で“おしろい”状のもの）の中に朝鮮半島系の土器胎土と鉱物組成、砂の混合化で非常に類似性の高いものがあり、CおよびB領域のものの中には久宝寺遺跡周辺で製作された可能性の高いものが含まれているのではなかろうか。

第5節 久宝寺北遺跡出土植物遺体の同定 (特に種子同定について)

山口 誠治

1. はじめに

今回の発掘調査で古墳時代前期に位置する土層および同時期に形成された溝や土坑などの遺構から植物遺体同定のために土壌が採取された。その土壌を0.5mmのふるいで水洗篩別して植物遺体を取り出し同定したのでここに報告する。これらの遺体は、古墳時代前期の微小地域の植生を示すものとして重要である。

なお同定方法としては、現在の植物の果実や種子の標本との比較により、分類形態的生態的性質に一致することにより行なった。

2. 同定結果

同定結果については、遺構別、出土地点別にまとめ、第1表に掲げた。今回同定した種子は、次の13科15属16種である。

被子植物 (単子葉植物)

イネ科	Gramineae	イネ	<i>Oryza sativa</i>
-----	-----------	----	---------------------

被子植物 (双子葉植物)

クルミ科	Juglandaceae	クルミ属	<i>Juglans</i> Linn.
ブナ科	Fagaceae	コナラ属	<i>Quercus</i> sp.
ニレ科	Ulmaceae	エノキ属	<i>Celtis sinensis</i>
クワ科	Moraceae	カナムグラ	<i>Humulus scandens</i>
タデ科	Polygonaceae	タデ属	<i>Polygonum</i> sp.
バラ科	Rosaceae	スモモ	<i>Prunus salicina</i>
		モモ	<i>Prunus persica</i>
ミカン科	Rutaceae	サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i>
ブドウ科	Vitidaceae	ブドウ属	<i>Vitis</i> sp.
		ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>
セリ科	Umbelliferae	セリ	<i>Oenanthe javania</i>
エゴノキ科	Styracaceae	エゴノキ	<i>Styrax japonica</i>
ウリ科	Cucurbitaceae	マクワウリの仲間	<i>Cucumis melo</i>
		ヒョウタンの仲間	<i>Lagenaria</i> sp.
キク科	Compositae	オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i>

トレンチ名	遺構層位	時期	同定結果
C-1	SD4002	古墳時代前期	ヒョウタンの仲間98個、炭化米1804個、カナムグラ種子52個、エコツキ種子1個、ノブドウ種子2個、サンショウの核3個、スモモの核1個、マクワウリの仲間1個、モモ核9個、モモ核の半分に割れたもの4個、コナラ属果皮片2個、ブドウ種子1個
C-1	SK4002	古墳時代前期	ヒョウタンの仲間42個、炭化米681個、カナムグラ種子849個、サンショウ種子2回、ノブドウ種子3個、オナモミ種子1個、モモ核5個、モモ核の半分に割れたもの1個、マクワウリの仲間2個
C-1	SD4002	古墳時代前期	ノブドウ種子4個、炭化米21個、カナムグラ種子1個
C-2	SK4007	古墳時代前期	炭化米90個、モモ核2個
C-4	SK4009	古墳時代前期	カナムグラ種子2個、タデ属種子1個
C-13	SD4003	古墳時代前期	ブドウ属種子2個、昆虫の翅1個、カナムグラ種子2個、モモ核2個
C-13	SD4003	古墳時代前期	炭化米110個、ノブドウ種子3個、カナムグラ種子1個、オナモミ種子1個
C-13	SD4004 (第1炭相当層) であるが北層 部粘質砂	古墳時代前期	炭化米3個、カナムグラ種子4個、エノキ果皮片1個
C-13	SD4004 (第1炭相当層)	古墳時代前期	炭化米149個、モモ核1個
C-13	SD4004 (最下層砂)	古墳時代前期	炭化米13個、セリ種子1個
C-13	SK4010 炭・灰層	古墳時代前期	炭化米618個、ノブドウ種子5個、ブドウ属種子2個、クルミ属核1個、マクワウリの仲間2個

第1表 久宝寺遺跡出土植物遺体同定結果一覧表

この中で木本は、クルミ属、コナラ属、エノキ、スモモ、モモ、サンショウ、ブドウ属、ノブドウ、エゴノキである。草本は、イネ、カナムグラ、タデ属、セリ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間、オナモミである。

木本の中で食用になる植物は、クルミ属、コナラ属、エノキ、スモモ、モモ、サンショウ、ブドウ属、ノブドウであり、草本の中ではイネ、セリ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間である。栽培植物は、イネ、モモ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間である。

人里植物は、オナモミ、カナムグラである。カナムグラは史前帰化植物のひとつで、人里の雑草として知られる。水性植物及び好湿性植物はイネ、タデ属、セリである。

なお分類に関しては、大井次三郎著の「日本植物誌」を参考にした。

3. まとめ

同定結果から種子の総個体数は、4606個でその内訳はイネ3489個(炭化米である。)、クルミ属1個、コナラ属(果皮破片を数えているがそれを1個とみなした。)2個、エノキ1個、カナムグラ911個、タデ属1個、スモモ1個、モモ(核の破片も総数に入れた。)24個、サンショウ5個、ブドウ属5個、ノブドウ17個、セリ1個、エゴノキ1個、マクワウリの仲間5個、ヒョウタンの仲間140個、オナモミ2個である。同定総個体数で木本と草本の比率を出してみると木本が1%と少なく、大半が草本で99%であった。

草本の総個体数のうち栽培植物と人里植物の比率を見てみると栽培植物が80%で人里植物が残りの20%である。この数値からわかるように古墳時代前期には、人間活動がさかんであったことが判明する。特に炭化米が3489個と非常に多量に検出されたことは、稲作がさかんに行なわれていたことを実証している。また、人里植物の種子の存在は近くに住居が存在しているであろうことを物語っている。なお、炭化米については、炭化しているために生態学的な検討を加えることは困難であり、佐藤敏也氏が古代米について形態的比較を行なわれていることを参考として、炭化米の形態の計測だけを行なった。その結果、平均として炭化米の長さ4.9mm、幅2.7mm、比率(長/幅)1.81であった。これは、炭化米のうちで完全な米粒97個体の平均であり、総平均ではなく今後全体を精査していくつもりである。この平均から出土米に現れるパターンは、佐藤敏也氏の分類のIBパターン(粒長3.7~5.3mm未満、粒幅2.1~2.8mm未満)に位置する。いわゆる栽培稲(*Oryza sativa* L.)の一亜種の日本型(*Oryza sativa japonica* KATO)に分類される。

又、栽培植物として知られるモモ核も形態的变化については小清水卓二氏によって調べられている。その調査によると、出土するモモを4変種、栽培モモ(*Prunus persica* var. *vulgaris* Maxim.)、ノモモ(*Prunus persica* var. *subspontanea* Makino)、コダイモモ(*P.p.* var. *antiqua* Koshimizu)、スパイモモ? (*P.p.* var. *nucipersica* Dipp.)に分類している。これらの変種の長さ、幅、厚さの平均はコダイモモは長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ1.3cmで小型で球形

に近く、ノモモは長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ1.5cmほどで中型でやや丸い。栽培モモは長さ2.9cm、幅2.1cm、厚さ1.6cmで大型で長く扁平であると調べられ、ズバイモモ?については出土例も少なく(藤原宮跡・武蔵江古田・奈良高校等で出土している3個体)その平均の長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ1.4cmと中型でやや扁平で無毛の椿桃の類らしいと記録されている。

さて、今回出土したモモ核で完全な形態で残存していた3個体について計測した結果、小清水氏の分類によるとS D4002出土のものは、長さ2.44cm、幅1.92cm、厚さ1.53cmでノモモに分類でき、S D4004出土のものは、長さ2.17cm、幅1.27cm、厚さ1.32cmとこれもノモモに分類できる。S K4011出土のものは、長さ1.9cm、幅1.73cm、厚さ1.37cmでコダイモモに分類できる。

以上のように形態の特徴から分類が可能と考えられるが、個体差がはげしくすなりと種名を決定するのはむずかしく、今後全体を把握できるように調査していくつもりである。

[参考文献]

- (1) 大井次三郎 著 1983 「新日本植物叢誌 顕花篇」 至文堂
- (2) 小清水卓二 1963 「古代日本の住居から出土する桃核について」 p559~568
『近畿古文化論攷』 榎原考古学研究所編 吉川弘文館
- (3) 佐藤敏也 著 1971 「日本の古代米」 雄山閣

第6節 久宝寺北遺跡出土木製品の樹種鑑定について

山口 誠治

1. はじめに

今回の発掘調査で出土した木製品について樹種鑑定を試みたので、ここに報告する。出土した木製品の保存状態が良好なものについてのみ鑑定を行なったので、出土した数量よりは、わずかな鑑定報告になった。また、鑑定した木製品の時期は弥生時代から奈良時代までで特に古墳時代の護岸の杭が大半をしめている。

この鑑定は一部にすぎず、今後全体を把握していくつもりである。

2. 鑑定結果

鑑定結果については、表1に掲げる。今回の結果は、以下に示す6科10属10種を鑑定した。

裸子植物（針葉樹）

マツ科	Pinaceae	マツ属	<i>Pinus</i> sp.
スギ科	Taxodiaceae	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i>
		スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>
ヒノキ科	Cupressaceae	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>

被子植物（広葉樹）

ブナ科	Fagaceae	コナラ亜種	<i>Quercus (Lepidobalanus) sp.</i>
		アカガン亜属	<i>Quercus (Cyclobalanopsis) sp.</i>
ニレ科	Ulmaceae	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>
		ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i>
ツバキ科	Theaceae	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>
		モッコク	<i>Ternstroemia Gymnanthera</i>

鑑定方法としては、木製品の木口・柾目・板目方向の徒手切片を作製して生物顕微鏡によって観察し、樹種の識別を行なった。このとき注意した点は、加工痕の部分を傷つけずに徒手切片を作製したことである。なお、その観察結果は、写真にとって記録した。又、代表的なものについて写真図版1、2に載せている。

木製品の腐朽の状況によっては、徒手切片を作製できない場合もあった。そのものについては保存化学処理を行なったのちに鑑定するつもりである。

さて、鑑定したコナラ亜種は、早材部導管の大きな環孔材で、広放射組織が認められるコナラおよびクヌギの可能性があるが、両者を区別する点が不明確なために属の段階までとした。

トレンチ名	遺構層位	時期	器種	遺物番号	樹種
E-3	SS5003	古墳時代中期	縦杭	248-W6	アカガシ亜属
E-3	SS5003	古墳時代中期	縦杭	248-W5	スギ
E-3	SS5003	古墳時代中期	杭	(W-16)	アカガシ亜属
E-3	SS5003	古墳時代中期	縦杭	248-W4	ヤブツバキ
F	SD4031	古墳時代前期		(W-19)	スギ
F	SD4031	古墳時代前期		(W-20)	コナラ亜属
F	弥生時代最終面	弥生時代中期	杭	(W-22)	ケヤキ
F	SS5002	古墳時代中期	横木	244-W5	コウヤマキ
F	SS5002	古墳時代中期	横木	243-W1	スギ
F	SS5002	古墳時代中期	縦杭	246-W12	ヒノキ
E-1	SS5002	古墳時代中期	横木	243-W3	スギ
C	SD4004	古墳時代前期	火鑽板	2004 106-W1	スギ
C	SD4004	古墳時代前期	砧	2012 107-W6	コナラ属
C	NR4002	古墳時代前期	梯子	166-W11	アカガシ亜属
C	SD4007	古墳時代前期	編錘	2042 111-W8	ヤブツバキ?
C	SD4007	古墳時代前期	編錘	2043 111-W7	ヤブツバキ?
C-12	NR4001	古墳時代前期	長方形槽	164-W7	スギ
C	SD4006	古墳時代前期	用途不明品	108-W1	スギ
C-8	SB6001	奈良時代	柱根	(2082)	コウヤマキ
C-8	SB6001	奈良時代	柱根	(2083)	コウヤマキ
C-12	NR4001	古墳時代前期	舟形木製品	163-W1	スギ
C-13	SD4004	古墳時代前期	木球(?)	107-W7	ヤブツバキ?
C-13	SD4004	古墳時代前期	用途不明品	2099 107-W5	ヒノキ
C-13	NR4001	古墳時代前期	木剣?	164-W4	スギ
C-13	SD4009	古墳時代前期	堅杵	115-W1	アカガシ亜属
C	SE6003	奈良時代	木棒材	2067 273-W1	ムクノキ
C-4	SB4001	古墳時代前期	柱根	(2086)	アカガシ亜属
C-4	SB4001	古墳時代前期	柱根	(2087)	アカガシ亜属

第1表 久宝寺遺跡出土樹種鑑定結果一覧表1

トレンチ名	遺構層位	時期	器種	遺物番号	樹種
F	S S 5002	古墳時代中期	縦杭	246-W14	スギ
E-2	S S 5002	古墳時代中期	横木	244-W 6	スギ
E-2	S S 5002	古墳時代中期	杭	246-W11	モッコク
F	S S 5002	古墳時代中期	杭	245-W 7	スギ
F	S S 5002	古墳時代中期	杭	(W-36)	アカガシ亜属
F	S S 5002	古墳時代中期	杭	246-W13	スギ
E	S S 5003	古墳時代中期	横木	247-W 2	アカガシ亜属
E-2	S S 5002	古墳時代中期	杭	244-W 4	マツ
ONランプ-1	S S 5001	古墳時代中期		241-W 2	アカガシ亜属
ONランプ-1	S S 5001	古墳時代中期		241-W 3	アカガシ亜属
F	S S 5002	古墳時代中期	縦杭	(W-24)	スギ

() は遺物とよろく番号

第2表 久宝寺遺跡出土樹種鑑定結果一覧表2

同じくアカガシ亜属の場合にも、放射孔材で広放射組織が認められる一般にカシヤカシ類と呼ばれるものであり、その種は多く属の段階までの鑑定とした。もう一点マツの場合にも属の段階までとした。なお、腐朽のために各特徴が不鮮明で鑑定不明確なものについてはクエッションマークを種名の末尾に付けた。

鑑定した木製品は、39点でそのうち針葉樹は19点、広葉樹は20点を数える。その内訳は、マツ1点、コウヤマキ3点、スギ14点、ヒノキ2点の針葉樹とコナラ亜属2点、アカガシ亜属10点、ケヤキ1点、ヤブツバキ4点、モッコク1点の広葉樹である。このなかで常緑広葉樹はアカガシ亜属、ヤブツバキ、モッコクで落葉広葉樹は、コナラ亜属、ケヤキ、ムクノキである。針葉樹については常緑である。

以上の鑑定結果を得たわけであるが、鑑定数が少ないために古環境についての復原はむずかしく、単に各時代及び器種における傾向を示すことによってまとめてみる。

3. まとめ

弥生時代のものとしては、ケヤキの杭1点を数えている。古墳時代に関しては護岸の杭が多く、スギが14点と杭のほとんどをしめている。

スギ製の器種は、火鑽板、木槽、舟形木製品である。護岸の杭については、発掘調査の結果、建築材の転用として用いられたものと考えられている。そこで、古くから一般建築用材として最もふつうに用いられる樹種はスギであることと一致する。このように護岸の杭にスギが用いられたのは、手近に入手しやすかったものであろう。また、他の杭の樹種に関しては、建築材のスギだけでは足りず、近くに存在するコナラ亜属、アカガシ亜属、ヤブツバキなどの樹木を利用したと考えられる。

柱根の鑑定の結果、時代の差異が表われ古墳時代の樹種はアカガシ亜属であり、奈良時代のものはコウヤマキであった。

今回の鑑定で火鑽板がスギであったのは、よくヒノキを使用することが知られていることからすると興味深い結果であった。又、豎杵が出土しているが、重硬で弾力性のあるアカガシ亜属を使用している。

以上のように性能に適した材を選定したということはあらためて言うことでもないが、非常に合理的に選定して材を使用したことを窺うことができる。護岸の杭などは、合理的に考えられた木材の利用ではないだろうか。低湿地における水との戦いから生まれてきた建築部材の利用は天然木の利用よりは手近なものをすぐに使えるという点で有益な所産と思われる。

この鑑定に関して終止ご教示下さった奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏に感謝の意を表する。

[参考文献]

- (1) 大井次三郎 著 1983 「新日本植物誌 顕花篇」 至文堂
- (2) 島地謙 著 1964 「木材解剖図説」 地球社
- (3) 島地謙・須藤彰司・原田浩 共著 1976 「木材の組織」 森北出版
- (4) 貴島恒夫・岡本省吾・林昭三 共著 1983 「原色木材大図鑑〈改定版〉」 保育社
- (5) 奈良国立文化財研究所史料27冊 1985 木器集成図録 近畿古代篇

第Ⅶ章 まとめ

久宝寺遺跡における最初の本格的な発掘調査であった今回の調査では、縄文時代晩期包含層、自然河川、弥生時代中・後期、奈良・平安時代の各遺構面の存在を確認するなどの成果を得る事ができ、事前の試掘調査で与えられた当面の課題はほぼ達成できたものとする。ここでは、その成果と各遺構面の内容が明らかになるにつれて新たに提起された課題について各時代ごとに整理して、まとめにかえる事とする。なお、各時代ごとの自然環境の復元を試みる為に、各地点、各層位ごとに土壌をサンプリングし花粉分析を行なったが、今回の概報では割愛した。その成果は、充分整理して本報告に譲る事とする。

1. 縄文時代：晩期包含層とその下で同じく晩期の幅約100mに及ぶ自然河川が検出された。当時の人々の活動の痕跡を示す遺構は未検出であったが、包含層は比較的プライマリーな状態で、調査区周辺に集落の存在が充分考えられる。出土遺物のなかには靱の圧痕を認めるものがあり、またこれら土器群は弥生時代前期中段階の土器を伴っていた。こうした時例は、近年河内平野諸遺跡でも知られるようになり、河内平野での農耕の開始期の様相を考える上で貴重な資料を提供できたものと考えられる。河内平野の縄文時代の調査例は、近年増えつつあるが具体的様相はなお明らかとは言えない。今回、包含層出土遺物はその一部を抽出したのみである。今後の詳細な遺物整理の進展に伴って縄文時代と弥生時代の接点の状況などが徐々に明らかにされるものと考えられる。包含層は、弥生時代中期包含層より僅かに高位で検出された。沖積地における地形変化の複雑さを示すものであった。

2. 弥生時代：中期と後期の遺構面が検出された。いずれも遺物の出土量は少なく、また遺構の密度も希薄であった。中期包含層は、決して良好ではないがプライマリーな堆積を示し、縄文時代同様近辺に集落の中心域を想定する事ができる。また、周辺地域で同時期の水田が検出されているのは、北に隣接する佐堂遺跡Aトレンチと南に隣接する久宝寺南地区・Bトレンチであり、いずれも300～350mの距離があり、ともに、深いバックマーシュを隔てて位置している。後期遺構面は、幅20mの自然堤防末端にあると考えられ、検出された遺構も不明瞭なもので集落の一端とするには疑問を有する内容であった。弥生時代にあつては、今回調査区内は集落の中心からはずれた所で、その中心は久宝寺跡南地区に求められる。

3. 古墳時代：前期と中期の遺構面が検出された。試掘調査では、石釧片・ガラス玉、多量の布留式土器などが出土し、当該期が久宝寺遺跡の中心時期と考えられると共に古墳の存在も示唆され、注目された。調査の結果、古墳は検出されなかったが石釧を出土した地点（No.7トレンチ、

今回調査区Fトレンチ)では、掘立柱建物・井戸などの集落跡が検出された。集落は更に調査区西北方向に広がると考えられる。S Q5001では、形象埴輪と思われる細片が数点見られ、調査区周辺に古墳の存在が想定される。各遺構からは、初期須恵器に伴なって韓式系土器が多数検出された。この韓式系土器は、府下でも近年出土例が多く知られるようになり、その研究もようやく諸についたばかりで精力的に進められ、第VI章でも詳細な検討が加えられている。当該期長瀬川の本流と考えられるNR5001で検出された杭列が、これまでに検出されているもの(古墳時代前期：大阪府利倉遺跡・同中田遺跡、愛媛県小照遺跡例など)とは技術的な系譜が見られない複雑な構造を有するもので、こうした杭列の構築に際して、韓式系土器をもたらした人々或いはこうした集団と交流を持った集団が関与した事は充分考えられ、今回検出された集落の構造を考える際にもこの点を充分考慮する必要があると考える。

Cトレンチ・Fトレンチで検出された前期遺構面は、遺物の検討から時期の異なる2つの集落である事が明らかとなった。その間には幅約150mに及ぶ自然河川NR4002とNR4001が存在する。第1居住域としたCトレンチの集落は北接する佐堂遺跡とほぼ同時期で、水田ST4001を隔てて位置しており、これら集団との関係が窺える。また、第2居住域としたFトレンチ集落は、幅約20mの自然河川を挟んで当遺跡南地区A～Bトレンチではほぼ同時期の集落・水田・墓などの集団との関係で考慮されるべきと考える。

3. 奈良・平安時代：調査区のほぼ全域で水田・掘立柱建物・井戸などの遺構が検出された。河内地域では、当該期の様相はなお明らかでなく、当遺跡検出の遺構もなお検討を有するものである。水田面畦畔は、現地表面で観察される条里地割にほぼ一致され、長瀬川左岸における条里制施行の一時期を知る事ができた。長瀬川右岸美園遺跡では、条里制施行が7世紀代にたどり得るデータも提起されており、長瀬川周辺地域の条里制施行の時期及び変遷を明らかにしていく事は今後の重要な課題の一つと考える。これに対してC～Fトレンチで検出された建物群には、特に規範は認める事はできなかった。奈良・平安時代の遺物は、その一部を抽出したのみで、今後の遺物整理の進展に伴なって当集落の性格についても明らかにされるものと考えられる。

財団法人
大阪府埋蔵文化財協会蔵書
第 02706号
()

久宝寺北
(その1~3)

近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和62年3月31日発行

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

	入 出 區 情
	大 興 區 農 業 局 編 制
	()

北 京 市 政 府

京 政 發 〔 八 五 〕 第 一 〇 九 號

為 批 准 大 興 區 農 業 局 編 制 事 務 規 定 事

查 大 興 區 農 業 局 編 制 事 務 規 定 業 經 本 局 會 同 有 關 部 門 研 究 擬 定 報 請 批 准 在 案 茲 准 予 批 准 該 局 編 制 事 務 規 定 自 八 五 年 十 一 月 一 日 起 實 施 此 令

大 興 區 農 業 局 編 制 事 務 規 定

第 一 條 本 局 編 制 事 務 規 定 依 據 中 華 人 民 共 和 國 編 制 法 及 有 關 規 定 擬 定 之

第 二 條 本 局 編 制 事 務 規 定 之 編 制 原 則 如 下

一 實 事 求 是 精 簡 實 效 二 統 一 規 範 三 權 責 相 稱 四 協 調 配 合 五 服 務 大 局

第 三 條 本 局 編 制 事 務 規 定 之 編 制 方 案 如 下

一 局 長 一 人 二 局 副 局 長 二 人 三 局 處 長 十 人 四 局 處 副 處 長 十 人 五 局 處 科 長 十 人 六 局 處 科 副 科 長 十 人 七 局 處 科 員 十 人 八 局 處 科 助 理 十 人 九 局 處 科 秘 書 十 人 十 局 處 科 文 書 十 人 十一 局 處 科 保 潔 十 人 十二 局 處 科 勤 務 十 人 十三 局 處 科 醫 務 十 人 十四 局 處 科 法 律 十 人 十五 局 處 科 計 算 機 十 人 十六 局 處 科 電 信 十 人 十七 局 處 科 電 視 十 人 十八 局 處 科 音 像 十 人 十九 局 處 科 圖 書 十 人 二十 局 處 科 報 刊 十 人 二十一 局 處 科 廣 告 十 人 二十二 局 處 科 公 關 十 人 二十三 局 處 科 禮 儀 十 人 二十四 局 處 科 體 育 十 人 二十五 局 處 科 文 化 十 人 二十六 局 處 科 廣 播 十 人 二十七 局 處 科 電 台 十 人 二十八 局 處 科 電 訊 十 人 二十九 局 處 科 電 視 十 人 三十 局 處 科 音 像 十 人 三十一 局 處 科 圖 書 十 人 三十二 局 處 科 報 刊 十 人 三十三 局 處 科 廣 告 十 人 三十四 局 處 科 公 關 十 人 三十五 局 處 科 禮 儀 十 人 三十六 局 處 科 體 育 十 人 三十七 局 處 科 文 化 十 人 三十八 局 處 科 廣 播 十 人 三十九 局 處 科 電 台 十 人 四十 局 處 科 電 訊 十 人 四十一 局 處 科 電 視 十 人 四十二 局 處 科 音 像 十 人 四十三 局 處 科 圖 書 十 人 四十四 局 處 科 報 刊 十 人 四十五 局 處 科 廣 告 十 人 四十六 局 處 科 公 關 十 人 四十七 局 處 科 禮 儀 十 人 四十八 局 處 科 體 育 十 人 四十九 局 處 科 文 化 十 人 五十 局 處 科 廣 播 十 人 五十一 局 處 科 電 台 十 人 五十二 局 處 科 電 訊 十 人 五十三 局 處 科 電 視 十 人 五十四 局 處 科 音 像 十 人 五十五 局 處 科 圖 書 十 人 五十六 局 處 科 報 刊 十 人 五十七 局 處 科 廣 告 十 人 五十八 局 處 科 公 關 十 人 五十九 局 處 科 禮 儀 十 人 六十 局 處 科 體 育 十 人 六十一 局 處 科 文 化 十 人 六十二 局 處 科 廣 播 十 人 六十三 局 處 科 電 台 十 人 六十四 局 處 科 電 訊 十 人 六十五 局 處 科 電 視 十 人 六十六 局 處 科 音 像 十 人 六十七 局 處 科 圖 書 十 人 六十八 局 處 科 報 刊 十 人 六十九 局 處 科 廣 告 十 人 七十 局 處 科 公 關 十 人 七十一 局 處 科 禮 儀 十 人 七十二 局 處 科 體 育 十 人 七十三 局 處 科 文 化 十 人 七十四 局 處 科 廣 播 十 人 七十五 局 處 科 電 台 十 人 七十六 局 處 科 電 訊 十 人 七十七 局 處 科 電 視 十 人 七十八 局 處 科 音 像 十 人 七十九 局 處 科 圖 書 十 人 八十 局 處 科 報 刊 十 人 八十一 局 處 科 廣 告 十 人 八十二 局 處 科 公 關 十 人 八十三 局 處 科 禮 儀 十 人 八十四 局 處 科 體 育 十 人 八十五 局 處 科 文 化 十 人 八十六 局 處 科 廣 播 十 人 八十七 局 處 科 電 台 十 人 八十八 局 處 科 電 訊 十 人 八十九 局 處 科 電 視 十 人 九十 局 處 科 音 像 十 人 九十一 局 處 科 圖 書 十 人 九十二 局 處 科 報 刊 十 人 九十三 局 處 科 廣 告 十 人 九十四 局 處 科 公 關 十 人 九十五 局 處 科 禮 儀 十 人 九十六 局 處 科 體 育 十 人 九十七 局 處 科 文 化 十 人 九十八 局 處 科 廣 播 十 人 九十九 局 處 科 電 台 十 人 一百 局 處 科 電 訊 十 人